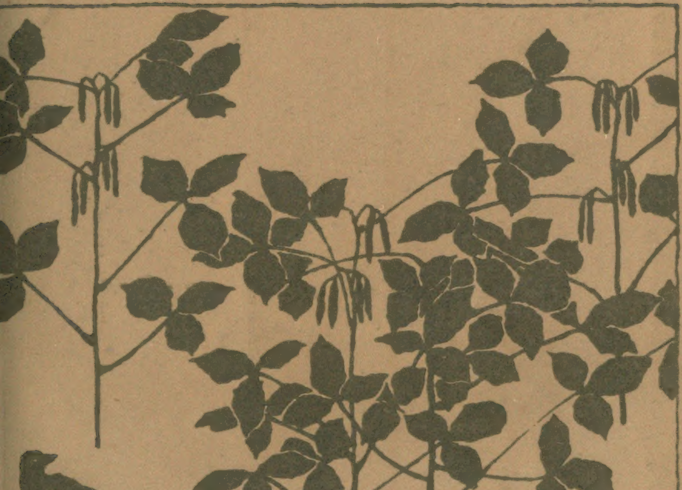




大正三年五月十七日印刷
大正三年五月二十日發行

有朋堂文庫
狂言記　下
（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

狂言記 內容細目 終

八

二

ト

ナ

チ

ウ

エ

狂言記內容細目

（上下二冊を通じ、題名を五十音順に排列し、簡單なる解題を附す）

ア

聟と舅の許に行く、一つの袴に二人の足を入れてはく、舅と冠者も亦その如くし、遂に相舞す。

大名茶の湯にとて冠者を連れ行く、川を渡るに冠者皸にて越されずといふ、大名冠者を負うて渡り、深き所にてわざと落す。

酒ずきの惡太郎、醉ひ臥したる間にをぢに坊主にされ、折から來りし僧の弟子となる。

僧と惡坊と出逢ひ、惡坊まづ僧を苦しむ、後僧惡坊の寢入たるに乘じ其持物を取替へ、惡坊發心す。

朝比奈の三郎冥土へ行きて閻魔大王にあひ、和田合戰の物語をなし、閻魔大王に武器を持たせて淨土へ急ぐ。

都より宇治邊へ慰に行く五人の男と、宇治より都へ出る柿賣と、澁柿につきて爭ふ。

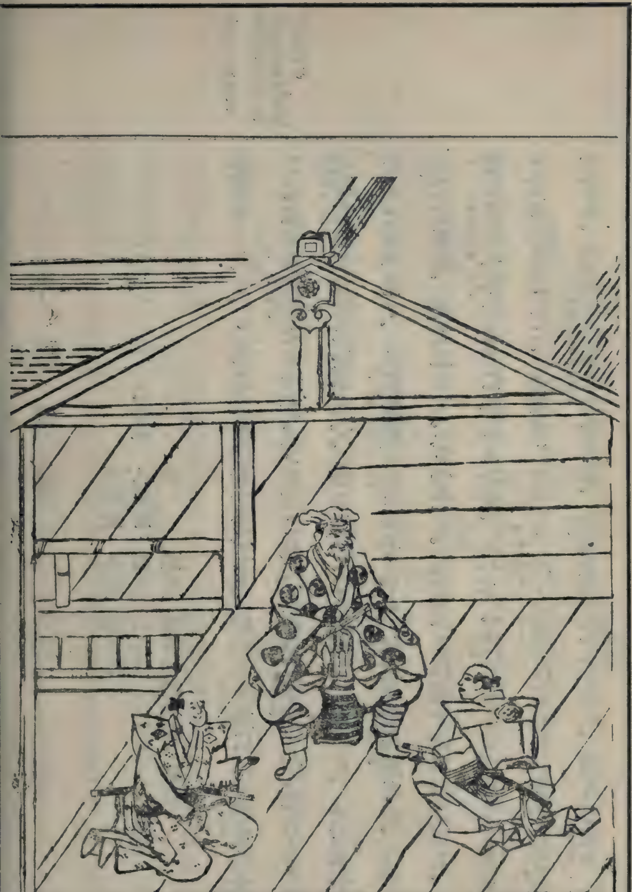
寶競に出さんとて、大名粟田口の刀を冠者して都にもとめしむ、すり出でて自分が粟田口なりとて冠者と倶に大名方に趣く。

イ 井

狂言記終

松尾大明神—大山咋神を祭る

せ。南無福の神〳〵。▲利兵衛 豆をはやしまう。▲八兵衛 心得ました。▲利兵衛 福は内。▲八兵衛 鬼は外。▲利兵衛 福はうち。▲八兵衛 鬼はそと。▲福の神 福はこゝに〳〵。▲兩人 はあ。これはどなたでござるぞ。▲福の神 このところの福の神。御酒を上げませ。▲兩人 畏つてござる。御酒でござる。▲福の神 南無日本の大小の神祇、別しては松尾大明神、これは福の神がたべるです。さて、汝等富貴になりたいと云ふ事か。▲兩人 はあ。▲福の神 富貴になるは、持たいでかなはぬ物がある。それを持つたか。▲兩人 何でござりますぞ。▲福の神 いや、金銀の持たねばならぬ。▲兩人 いや、それがござりますれば、斯様には申し上げませぬ。▲福の神 それならば、富貴になるやう、語つて聞かせん、謡 いで〳〵、このついでに、たのしうなるやう、語つて聞かせん。朝起をして慈悲あるべし。夫婦のなかに腹たつべからず。人の來るをもいとふまじ。われ等がやうなる福傳に、いかにもおぶくをけつかうして、さて中酒には古酒を、いやといふほど盛るならば、〳〵、たのしうなさではかなしふまじ。



大歳─大晦日
出雲の大社─杵築にあり大國主神を祀る

十福の神

三人　利兵衛　長袴、小さ刀
八兵衛　同
神　頭巾、厚板、括り袴、腰帯

▲利兵衛 これは、このあたりの者でござる。いつも大歳には 出雲の大社へ參る。またここには八兵衛殿と申すがござる。これへまゐり、同心致して參らうと存ずる。やあさて、何卒富貴になりたい事ぢや。參るほどにこれぢや。ものも。▲八兵衛 や、案内がある。たそ。▲利兵衛 えゝ、八兵衛殿、内にござるよ、▲八兵衛 利兵衛どの。さて〳〵めづらしいお出でござる。何と思うてござつたぞ。▲利兵衛 さればその事でござる。いつもの通り、出雲の大社へ年をとりに參るまいか。▲八兵衛 一段とようござらう。▲利兵衛 さあ〳〵ござれ。▲八兵衛 心得ました。▲利兵衛 こなたも 某 も富貴になりたい事でござる。參る程にこれでござる。▲兩人 只今兩人の參る事、別の事ではござらぬ。何とぞ富貴になして下されま

をたかく〱といふ。何かと云ふ内にふるまひが出來た。給仕は、たれを使うたものであらう。▲冠者 私をお使ひなされませ。▲主 今差合うて使ふ者がない。おのれなりとも使はう程に、身共が云ふやう、爲るやうにせい。▲冠者 あの、こなたのまねをや。▲主 まだぬかす。座敷へうせをれ。只今は無調法な者を使ひまして、面目もござらぬ。太郎冠者、さかづきを出せ。▲冠者 只今は。右の通りくり返し、太郎冠者いふ。▲主 さかづき出せとは、おのれが事ぢや。また主のいふやうに太郎冠者いふ。▲主 おのれは何をぬかす。冠者またいふ。▲主 や、さいぜん某が云ふ樣、爲るやうにせいと申してござるほどに、それで身共がまねをする。冠者またいふ。▲主 さて〱氣の毒な事かな。冠者またいふ。▲主 えゝ、腹の立つ事ではある。太郎冠者うつ。▲冠者またいふ。さつくわをうつ。▲主 あゝ痛みませう。こちへござれ。▲さつくわ いや、苦しうござらぬ。冠者またいふ。▲主 はなし居れいの。冠者またいふ。▲主 や、ものを云はすによつてぢや。冠者をふみこかし。それにゆるりとござれ。おふるまひ申し付けう。冠者さつくわをふみこかす▲さつくわ や、これは何とする。▲冠者 なんとするとは。おのれが樣な奴は、かうして置いたがよい。それにゆるりとござれ。御ふるまひを申し付けう。

がお好ぢや。▲さつくわ 小鳥の内にも、何がおすきぞ。▲冠者 物ぢやわ。▲さつくわ 物とはなんでをりやる。▲冠者 これほどな鳥ぢや。藪のうちをちらり〳〵とする鳥、えゝ、ぐひすでをりやる。▲さつくわ これはいかな事。ぐひすと云ふ鳥はつひに聞いた事がない。（また呼ぶ。）▲主 しい〳〵。▲冠者 や、呼ばるゝ。なんでござる。▲主 おのれ、ぐひすと云ふ鳥があるものか。鶯ぢやわいやい。▲冠者 いやなう、鶯でをりやる。▲さつくわ さうでをりやらう。（また呼ぶ。）▲主 しい〳〵。▲冠者 又呼ばるゝ。いて參らう。▲主 また何かすきぢやと云はゞ、鷹がすきぢやと云へ。▲冠者 畏つてござる。まだすきがあるわ。▲さつくわ 何でをりやる。▲冠者 鷹がすきぢやわ。▲さつくわ まことに、たかはお大名の好かれいでかなはぬ物でをりやる。何と、よう取るか。▲冠者 取るとも〳〵。昨日も肴町へ行て、鯣二連と鰹十節とつて來たわ。▲さつくわ あの鷹がや。▲冠者 なか〳〵。▲さつくわ これはいかな事。（またよぶ。）▲主 しい〳〵。▲冠者 や、呼ばるゝ。行て參らう。何でござる。▲主 おのれ、鷹が鯣や鰹を取るものか。▲冠者 でも、さて昨日お臺所の鷹之介がとつて參りました。▲主 やい、あれはせいが高いによつて、異名

ろくにござれ—平に居よ

樣なこと云やる。もはやこれから歸る。▲冠者や。なう、そのやうな人を暴立つれば、あたをしやるげな。頼うだ人のあしらうてかへさうと仰せらるゝ。かうお通りやれ。▲さつくわいや、不首尾な所へは、いやでをりやる、▲冠者まづお通りやれ、▲さつくわそれなら通るほどに、首尾を頼む。▲冠者心得た、さつくわ。▲主しいく。さて、はるぐの所ようこそお出なされた。まづ、ろくにござれ。▲さつくわはあ。私も田舍に、甥を持つてござるによつて、もし、彼が所から呼びにまゐつたかと存じ、ふと下りて、面目もござらぬ。▲主總じて人達へと申す事は、ある事でござる。某これに居ませうけれども、太郎冠者をこれに置きまする。ゆるりとお話しなされ。お料理申しつけませう。▲さつくわそれは忝う存じます。▲主やい太郎冠者、お伽致せ。▲冠者畏つてござる。さあく、ろくにお居やれ。▲さつくわ心得た。前からよぶ。はやしかたの▲主しいく。▲予者や、呼ばるゝ。いて參らう。はあ、なんでござる。▲主若し、何が好きぞと問はば、鶯がすきぢやと云へ。▲冠者畏つてござる。さあ、さあ、ろくにおゐやれ。▲さつくわ心得た。さて、頼うだ人の、何ぞお好があるか。▲冠者小鳥

おんでもない——勿論の意

は連れておいでぢやに。身すがらは合點がゆかぬ。まづ物の蔭からをお姿見せい。▲冠者 さらば御覽ぜられい、▲主 さればこそ。おのれ、まづあれを連れて來るものか。あれは都にかくれもない、みごひのさつくわと云うて、大の盜人ぢや。汝は、みごひと云ふいはれ知るまい。總じて世の盜人は、人の目顏を忍うで取る。あれは人の物を、盜みても取る。乞うても取る。それ故見乞と云ふ。さつくわとはぬす人の唐名ぢや。▲冠者 でも、伯父御樣ぢやと申したによつて、つれて參りました。▲主 まだぬかす。あれはぬす人ぢや。▲冠者 盜人にきはまりましたか。▲主 おんでもないこと。▲冠者 さて〳〵、憎いやつぢや。私をだましました。行て搦めて參りませう。▲主 やい〳〵、總じて、あの樣な者を、暴立つれば、却つてあたをする。こちへ通せ。某があしらうて返さう。▲冠者 えい。いらぬもの。おかれいで。や。なう、わごりよは、都にかくれもない見乞のさつくわとやら云ふ盜人ぢやげな。面恥ない。よう伯父御ぢやと云うてわせた。▲さつくわ え。こゝな。それがしがかう有らうと思うて、行くまいと云ふに、是非ともと云うて連れて來て、その

御身すがら―自身一人

連歌を興行致してござる。近日それがしが、當にあたつてござる。又こなたは連歌を好うなさるゝ程に、此度の宗匠になされたいとあつて、私おこされました。▲さつくわ いかにも、行きたいものなれども、某はちと暇入りがある程に、えまゐるまい。▲冠者 いやいや、少々のお暇入ならば、どうぞお出なされませいと、くれ〴〵申されました。▲さつくわ それなら、成程下らう。▲冠者 いざ、お出なされませい。▲さつくわ まづ行く。▲冠者 それは慮外でござる。▲さつくわ さて、頼うだ人は、連歌を好うするか。▲冠者 ようせらるゝと見えまして、あの邊の衆が氣に入りませぬ。▲さつくわ さて、程は遠いか。▲冠者 いや、何かと申す内にこれでござる。これにお待ちなされませ。▲さつくわ 心得た。▲冠者 申し、頼うだ人ござりますか。▲主 やあ、太郎冠者が戻つたさうな。戻つたか〳〵。▲冠者 たゞ今歸りました。▲主 やれ〳〵骨折や。何と伯父御はお出なさるゝか。▲冠者 私が御供致して參りました。▲主 これは〳〵、でかいた。おともは幾人程あるぞ。▲冠者 いや、御身すがらお出なされました。▲主 これはいかな事。あのをぢごは、かりそめに出さつしやるにも、人の二三十人

あさて、某は未だ都を見物致さぬ。此度、幸に見物致さう。さればこそ都ぢや。いや、某は、はたと失念仕つた。をぢご樣が、いづくにござるやら存ぜぬ。よう問うて參れば、ようござつたものを。やあ、さすが都ぢやわ。問う事も答ふる事も、呼ばはれば事が調ふと見えた。さらば、身共も呼ばはらう。なう〳〵、そこもとに頼うだ人の、伯父御はござらぬかなう〳〵。▲さつくわ これは都に隱れもない、みごひのさつくわと申して、心の直に無い者でござる。あれへ田舍者と見えて、何やらわつぱと申す。ちとたづさはつて見やうと存ずる。なう〳〵、これ〳〵。▲冠者 はあ。こちの事か。▲さつくわ いかにも、わごりよの事ぢや。この廣い都を、何をわつぱとおしやる。▲冠者 私は田舍者でござる。頼うだ人の、伯父御樣を尋ぬる事でござる。▲さつくわ さて、その伯父御を見知つてゐやるか。▲冠者 いや、存ぜぬによつて、斯樣に申します。▲さつくわ さて〳〵、其方は仕合人ぢや。都に人多いとはいへども、そちが尋ぬる伯父はそれがしぢや。▲冠者 さては、こなたがをぢ樣でござるか。▲さつくわ 其通ぢや。▲冠者 さて、頼うだ人申されまする。此間、あの邊の御方々、



さつくわ－察化或は咲嘩など書く本書の校訂者嘗て狂言二百番案内を撰せし時假に擦週の字を當てたれど尙明かならず

九　さつくわ

三人　主　長袴、小さ刀
冠者　半袴、腰帶
さつくわ　長袴、小さ刀

▲主　これは、このあたりの者でござる。某此邊の人々と申合せ、連歌を興行仕つてござる。近日それがしに當つてござる。この邊の人々、このあたりの人を、宗匠にお賴みなさるれども、某の氣に入らぬ。又ことに、都に伯父を一人持つてござるが、これは、殊の外連歌が上手でござるほどに、呼びに遣し、宗匠に賴まうと存ずる。太郎冠者あるか。▲冠者　おまへに。▲主　念無うはやかつた。近日、某が連歌の當にあたつた。それについて、都に伯父を一人もつたが、殊の外連歌が上手ぢや。これ、このたびの宗匠に、賴まうと思ふ。その方は都へ上つて、伯父御を御同道申して來い。▲冠者　畏つてござる。▲主　やがて戻れ。▲冠者　はあ。さて〱、火急な事を仰せ付けられた、まづ急いで參らう。や

六波羅—腹を言掛く

事があるものか、二つ残りた柑子を渡せ。▲冠者 それから、ふところへ入れました。いつもおしかりなさるれども、角鍔をさいて參つてござる。大勢のおともの中で、ふところが、ひつやりと致しだによつて、手を入れて見てござれば、角鍔に押されて、一つ潰れてござる。とてもつぶれた物は、役にたつまいと存じて、この度は、啜り食ひに致しました。▲大名 一つのかうじを急いで渡せ。▲冠者 それについて、哀な物語がござる。御聞きなされ。▲大名 急いで語れ。▲冠者 語 さても平判官入道康頼、俊寛僧都、かの硫黄が島へ流さるゝ。二人な赦免あつて、俊寛一人鬼界が島に殘しおかるゝ。謡 その如く、三つありし柑子が、一つはほぞおち、一つはつぶれ、はや太郎冠者が、六波羅にをさまりぬ。人と柑子はかはれども、思は同じ涙なり。泣く。▲大名 あはれな事を思ひ出した。俊寛のお心が思ひやられて、おいたはしいな。▲冠者 さやうでござる。▲大名 やい太郎冠者。一つの柑子を渡せ。▲冠者 それはものと致してござる。▲大名 何と。▲冠者 是も太郎冠者が、下されてござる。▲大名 あの、やくたいもない。しさり居らう。▲冠者 はあ。▲大名 えい。▲冠者 はあ。



かうじ門の出でず―北夢瑣言に「好事不出門悪事行千里」とあり柑子と好事とを掛詞とせり

下されて―戴く意

八　柑子

二人　殿　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴、腰帯

▲大名　これは、このあたりの大名でござる。太郎冠者あるか。▲冠者　おまへに。▲大名　念なう早かつた。汝を呼び出すは、別の事でない。夜前の柑子を、此方へわたせ。▲冠者　二つなりさへ珍しいに、まして三つなりは、なほ珍しいと存じて、槍のしをくびもとに結う附けてござる。何と致したやら、一つ臍落が致して、ころ〳〵とこけてござるによつて、そこで、柑子に詞をかけました。▲大名　何と。▲冠者　かうじ門の出でずと、云ふ事がある程に、とゞまれ〳〵と申してござれば、草木心なしとは申せども、かうじには心があるやら、この葉の一葉を、楯について、きつと止つてござる。もつとも、止つたところは、やさしけれど、つれなう落ちたところが、にくいと存じて、かのかうじをおつ取つて、皮をさりまして、下されてござる。▲大名　これはいかな事。それを食ふと云ふ



お竈の祓―十二月下旬に竈神を祭る巫女その祈禱をなす

七　大般若

三人　旦那　長袴、小さ刀
　　　僧　衣、頭巾、珠數
　　　神子　びなん、箔、舞衣、半袴

▲出家　このあたりの出家でをりやる。御檀那へ祈禱にまゐらうと存ずる。そろ〳〵參らう。お案内。▲だんな　案内は誰ぢや。えい御坊樣。▲出家　御祈禱にまゐつた。▲だんな　さらば、お經をよましられい。▲出家　心得た。よみまうせう。▲だんな　頼みまする。▲出家　大般若波羅みた〳〵（經よむ。）▲神子　これは、このあたりに住居する神子でござる。いつものお旦那方へ、お竈の祓にまゐらう。申し〳〵、ござるか。▲だんな　やあ。みこ殿おいでか。▲神子　神樂を進じませう。▲だんな　頼みまする。▲神子　お神樂こそめでたう候へ。（かぐらあり。住持經よむ。かぐらにうつりて、あと、しやぎりどめなり。）

切りはじめに切つて捨てう。▲川だちあゝ悲しや。助けてくだされ〳〵。▲女どこへ。やるまいぞ〳〵。

のするぞ—薙ぐこと

ぬ。▲山だち 某には山だちを御免ぢや。おこしをれ。▲女 おゆるしの、仔細があるか。▲山だち なか〱。苦しうない書物がある。▲女 書物があらば、讀うで聞かせい。▲山だち 讀うできかせう。ようきけ。くもの上の金藤左衛門山だちの事、とりよい物をば取るべし。むづかしいものは通せ〱。▲女 やれ〱わがまゝな事云ふ。これは妾が物ぢや。やることはならぬ。▲山だち おこさずは長刀で切つて捨てう。▲女 なるまい〱。▲山だち しかとおこさぬか。▲女 おんでもないこと。ならぬ。▲山だち おのれ〱、打殺してやらう。▲女 これは何事をしをるぞ。なう、かなしや。▲山だち どこへ。おのれ。（おひまはして、女にげて、そのまゝすつぱにとりつき、ねぢあひて長刀とる。）▲女 妾を女と思ふとも、おのれ、男にまさらうぞ。▲山だち あゝ、ゆるせ〱。▲女 その刀もこちへおこせい。▲山だち これはやることはならぬ。▲女 刀をおこさずは、長刀にのするぞ〱。▲山だち あゝかなしや。助けい〱。やるぞ〱。▲女 まづ、わらはがさいて。おのれ、上著も脱いでおこしをれ。▲山だち もはや堪忍してくれ。▲女 ていど、おこさぬか。▲山だち いや〱、やる〱。これ〱、その長刀かやせ。▲女 どこへ。おのれ、人の



せつぱ―すつぱに同じ

六　女山賊

二人　山賊　頭巾、括り袴、腰帯、刀
　　　女　びなん、縚、さげ帯

▲山だち　このあたりに隠れも無いせつぱでござる。この頃は仕合がわるい。今日は山だちを致いて、仕合を直しまうせう。山賊の習で、取りよい物を取つたがよい。むづかしい物をば、取らぬやうにするが習でござる。まづこの所にゐまして、よいとりものが通らば取らう。▲女　わらはは、このあたりの者でござる。山ひとつあちらに、親を持つた。久しう見舞ひませぬ。今日は見舞に参らう。久々たよりもなし、案じてござらう。▲山だち　いや、女が何やら包を持つて通る。これを取りまうせう。やい〳〵、がつきめ。▲女　おそろしや、何者ぢや。▲山だち　何者ぢや。おのれが持つた物、こちへおこせい。▲女　わらはが物をおこせい。遣ることはならぬ。▲山だち　憎いやつの。おこさずは仕様がある。はやう言葉のあまい内におこせい。▲女　御政道の正しい御代に、あのすつぱめ、やる事はなら

なござつそ—行き給ふ勿れの意

らしい事でござる。▲との そちが行たときは、何と云うたぞ。▲冠者 とつて食はう〳〵、あ
あと申してござる。▲との おれは合點の行かぬ事がある。今一度行て見て來う。▲冠者 平に
なござつそ。▲との いや、行て見ねばならぬ。はなせ〳〵。▲冠者 また鬼になつて參らう。
▲との 合點がゆかぬ。鬼の聲とくわじやめの聲と、同じ事かと思ふ。▲冠者 とつてかまう、
とつてかまう。▲との やい冠者め。どこへ。▲冠者 あゝ。ゆるさせられませい〳〵。▲との やる
まいぞ〳〵。

み破り申した。▲との はあ、大事の手桶ぢや。取りに行かう。▲冠者 おかしられい。鬼が出ませう。▲との いや／＼、行て碎けた手桶なりとも取つて來る。▲冠者 これは鬼の事はおいて、鼠もあるまい。某が鬼になつて參らう。▲との 清水に鬼のあつた事は聞及ばぬが。▲冠者 取つて嚙まう／＼。▲との 悲しや／＼、助けて下されい。▲冠者 おのれ、冠者を疑うて來た。頭からとつてかまう／＼。▲との 助けて下されい。▲冠者 冠者に、酒を飲まうと云ふほど、飲ませうか。▲との なか／＼。飲ましませう、／＼。▲冠者 女房を呼うでやらうか。▲との すきな、よい女房をようでやりませう。▲冠者 女房をようでやらずは、とつてかまう／＼。▲との 呼うでやりませう。助けて下されい。▲冠者 其義ならば助くる。某のいぬる方を見るな。▲との 見ませぬ。▲冠者 それ／＼、見るわ。▲との 見ませぬ。さて／＼こはい事や。急いで歸らう。▲冠者 さらば迎にまゐらう。▲との これはどこへ行くぞ。▲冠者 おむかひに參りました。鬼が出ましたか。▲との やい／＼、こはい事よ。鬼が出たが、不審な。冠者が贔屓をして、酒を飲ませいことの、女房を呼うでやれのと云うた。▲冠者 それはめづ



鬼清水—一名清水

七つ—今の午後四時

五　鬼清水

二人　殿　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴、腰帯

▲との　このあたりの者。冠者あるか。▲冠者　お前に。▲との　某も近日茶の湯をする。清水を汲んでこい。▲冠者　野中の清水には、鬼が居ると申す程に、ゆるして下されい。▲との　子供かなんぞのやうなる事ばかり云ふ。急いで水を汲んで來い。この手桶をやる。大事の手桶ぢや。念の入れい。▲冠者　畏つてござる。▲との　えい。▲冠者　はあ。にが〳〵しや。清水汲んで來いと申さるゝ。さい〳〵、夜も晝も、清水くみに行け〳〵と云はれう。參るまい。あゝかなしや、助けい〳〵。▲との　冠者、なんとしたぞ。▲冠者　清水を汲みにかゝりますると、鬼が出まして、にくいやつの、七つ過ぎて人のこぬ所へ、おのれめが來た、一口に取つて嚙まう、わん〳〵と申すほどに、足をはかりに逃げてかへりました。▲との　清水に鬼のある事を聞かぬが、やい、手桶はなにとした。▲冠者　あとではり〳〵と腹を立てて嚙

るか。▲つれ こゝに居まする。（二三人出る。）▲參衆 上の山へ二王が天よりお降りなされて、おびただしい參りぢや。ござれ。參りまうせう。▲つれ なか〱。いづれもお供申しませう ▲參衆 まことにこれぢや。（皆々拜む）この二王は生きてござるやうな。（いらうて見る。）いや、身動きを二王のめされた。いざ、こそぐつで見まうせう。こそ〱や、〱、こそ〱。いや、これはすつぱぢや。▲男 いや二王ぢや。▲參衆 盜人よ。▲男 二王ぢや〱。▲參衆 やるまいぞ〱〱。

二王—佛法の守護神也左を密迹右を那羅延と云ふ

い二王がお降りなされた。何事も能うかなふと、ふれをまはしてやらう程に、二王になつて居る才覺をめされい。▲男 これは忝うござる。▲甚兵衛 參りがあらう所で、賽錢をとつて、もとでにして稼がしめ。▲男 さらば、二王になる拵をして參らう。萬事たのみまする。▲甚兵衛 心得た。早うゆかしめ。申し〳〵、上の山へ、天から貴い二王が降り給うたと申す。皆々參られいや〳〵。▲在所者 在所の者でござる。上の山へ、二王が降りなされたと申す。參りまうせう。申し〳〵、ござるか。▲つれ 何事ぞ。▲在所者 山へ二王が天からおふりなされたと申す。ござれ。參りまうせう。▲つれ なか〳〵、お供申しませう。▲在所者 珍しい事でござる。これ〳〵、拜みませう。▲つれ 某も拜みませう。▲在所者 この刀を進じまする。相撲に勝つやうに頼みまする。▲つれ 身共も刀を進じまする。力が無いほどに、力をつけて下されい。▲在所者 さらば下向致さう。▲つれ 心得ました。▲男 やれうれしや。この刀を見せませう。申し〳〵。▲甚兵衛 何と〳〵。▲男 參りがあつて、この刀ども貰ひました。▲甚兵衛 それ〳〵めでたい。又早う行ておちやれ。▲男 畏つてござる。▲參衆 皆々ござ



笑止—氣の毒、

四二王

六人

男	半袴、腰帶
甚兵衛	長袴、小さ刀
在所者二人	同
參り衆二人	同

▲男 罷出でたる者は、この在所の者でござる。此中は、さん〴〵の仕合で、もはや所のすまひもならぬ。山一つあちらに、甚兵衛殿と申して、御懇の御方がある。參つて妻子の事を頼うで、田舍へ參らばやと存ずる。そろ〳〵參りませう。仕合がなほつたならば、又やがて戻りませう。まゐる程にこれぢや。ものも。案内も。▲甚兵衛 やら、案内もがある。誰そ。▲男 某でござる。▲甚兵衛 何と思うてござりたぞ。▲男 此中仕合がわるうて、もはや在所のすまひもなりませぬ所で、田舍へ參りまする。妻子のことを頼みまする。▲甚兵衛 それは笑止な事ぢや。何とぞ田舍へやらぬ樣にしたい事ぢやが。▲男 それがしも是非に及ばぬ所で、田舍へまゐる。▲甚兵衛 身共が思ひよりた事がある。上の山へ、天から、貴

まさる—増す猿に猿を掛く
ひんだ—飛驒也
めん〱—米をめゝと云ふより面々と續く

こなたのお庭をけさ見れば、〱、黄金の桝で米をはかる、〱。三日月なりの鎌はしや、〱。妻もろともに草を苅らう、〱。舟の中には何とおよるぞ、〱。苫を敷寝に、楫を枕に、〱。（歌一つゞつて、刀、上下、扇、皆猿引にやる。）一のへいだて〱、二のへいだて、三の黒駒、しなのをどり。俵を重ねて、めん〱に、〱〱〱、たのしくなるこそめでたき。

打つて—殺すこと

猿は山王—猿は日吉神社の使はしめと云ふ

まつき—牧也

ぎて返さう。▲猿引 猿引づれと思うて、我儘をおしやる。ならぬ。▲大名 やい〳〵、名字をもくびにかけた者が、禮まで云うた。貸さずは、猿もおのれも射殺してやらう。▲猿引 まづ冠者殿、とりさへて下され。猿を進上致しませいでは。▲大名 はやう皮をおこせい。▲猿引 私が打つて、皮に傷のないやうにして、進上仕らう。▲大名 早う〳〵。▲猿引 猿よ、よう聞け。ちひさい時から飼うて、今殺すは迷惑なれども、あのお大名の、皮をかると御意ぢや。いま殺す。それがし恨みな。えい。▲大名 皮はおこさずに、なぜ泣くぞ。▲猿引 冠者殿、死ぬる事は知らいで、艪を押すまねかと思うて、艪を押しまする。畜生でも不憫や。▲大名 合點した。泣くが道理〳〵。ゆるす、殺すなと云へ。▲冠者 ゆるさしらるゝ。▲猿引 忝うござる。猿、お大名様へ御禮〳〵。冠者殿へもお禮。▲大名 冠者にまで禮をした。▲猿引 死をたすけ下されましたお禮に、猿をまはしませう。▲大名 まはせ〳〵。▲冠者 まはさしめ。▲猿引 畏つた。ふし 猿は山王眞猿めでたい。まつきおろしの春の駒が、鼻をつるべて參りたるぞや。白銀黄金御知行まさる。めでたきまょよ、ひんだのをどりは、一をどり〳〵。



靫—矢を盛る器
ゆひたい—云ひたいの訛

三 靫猿

四人
大名　立烏帽子、素襖、袴、小さ刀
冠者　半袴、腰帯
猿引　羽織、括り袴、腰帯
猿

▲大名 八幡大名。冠者ゐるか。▲冠者 これにつめてござる。▲大名 今日は遊山に出う。供をせい。▲冠者 よい日和にて面白いな。▲猿引 これはこの邊に住む猿引でござる。町へ猿を引いて出まうせう。▲大名 冠者、よい猿の。▲冠者 見事な猿を引いてまゐる。▲大名 やい〳〵、その猿はどこへつれてゆくぞ。▲猿引 某は猿引でござる。町へ猿まはしに參りまする。▲大名 猿引ぢや。冠者、この靫にかけう。これ〳〵猿引、無心ゆひたいが聽かうか ▲猿引 何なりとも承りませう。▲大名 過分におぢやる。お禮申さう。▲猿引 迷惑な。▲大名 その猿の皮を貸せ。この靫にかけう。▲猿引 ざれごと御意なされまする。▲大名 いや〳〵、眞實ぢや。▲猿引 生きてゐる猿の皮が、からるゝものでござるか。冠者殿頼みまする。▲大名 四五年す

かだき―刊本かくあれどかづきなるべし

想のおつまのやどはこれでござるか。則ち迎にまゐつた。乗物とも馬とも思召して、身共に負はれて下されい。おうて行く。すなはち、是が某の宿でござる。下りさせられい。さらばめでたう盃事を致さう。さらば身共たべてさしませう。四五杯飲む。もはや納めませう。さらばそのかだきを取らせられい。いや〳〵、五百八十年添ひまするもの。平に取られい。申し〳〵、どこへござる。▲女ちと談合してまゐらう。▲男いや〳〵、何の談合がいらうぞ。どちへもやらぬ。▲女いや、用がある。▲男どこへ。やるまいぞ〳〵。



二二九十八

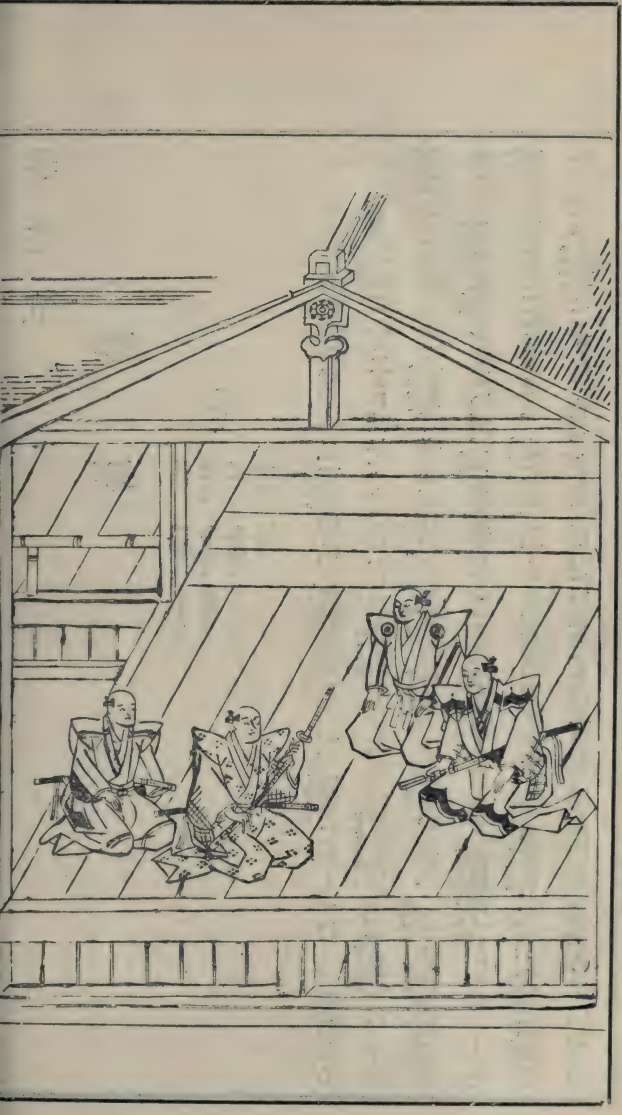
二人　男　長袴、小さ刀
　　　女衆　びなん、箔、さげ帯

▲男 罷出でたる者は、このあたりに住居する者でござる。この年まで定つた妻がござらぬ。清水の観世音はつまぐわんおんぢやと申すほどに、まゐつて、妻の事を祈請致さうと存ずる。そろり〳〵と参らう。程無うお前でござる。拝みまうせう。今宵はこれに通夜を致さう。はあ〳〵。さても〳〵かたじけない事かな。あらたな御夢想がござりました。急いで西門へ参らう。さればこそこれにござる。まづ問ひまうせう。これはごむさうのお妻でござるか。お宿は何方でござるぞ。お迎にまゐらう。▲女 わが宿は春の日ならぬ町のうち、風のあたらぬ里とたづねよ。▲男 春日なる里とはきけど室町の、かどよりしてはいくつめぞ。▲女 あゝ二九。▲男 申し〳〵、これははやお帰りやつた。あゝ二九。さては十八軒目ぢや。まづまゐつて迎へませう。参るほどにこれぢや。十八軒目、こゝぢや。御夢

うて通せ。▲冠者畏つた。申し〳〵、平にお通りなされい。▲清六いや〳〵。▲冠者まづござれ〳〵。▲しうと内々待ちました。御出忝うござる。▲清六はあ、早々参りませうを、おそなはりました。おみやげでござる。▲しうと云はれぬ事をなされました。▲清六祝儀ばかりでござる。▲しうと冠者、さかづき。▲冠者心得ました。▲しうとさらばたべて申さう。さしまする。▲清六いたゞきまする。のむふりして、そと聟に飲ませる。わきからもらうて聟のむ。三ばいのむ。▲しうと冠者、引出物進ぜい。▲冠者畏つた。▲しうと祝うて進ずる。▲清六かたじけなうござる。戴きまする。杯を戻しませう。▲しうとめでたう納めませう。▲清六舅殿も一つまゐりませい。▲しうとをさめに一つたべまする。もはや取りませう。▲清六さらば戻りまする。▲しうとようござつた。▲清六一段の仕合ぢや。▲むこなう〳〵、その刀はおのれがぢや。こちへおこせい。▲清六某の貰うた物。ならぬ。▲むこそれがしにくれらるゝ引出物ぢや。こちへおこせ。▲清六いや〳〵、ならぬ。つかみあひ、婿をうちこかしてはいる。▲むこさて〳〵、さん〴〵の仕合ぢや。せめて樽なりとも持つて歸らう。ふえんのあまつた聟は入らぬか〳〵。

引出物―進上物

があらばおしやれ。▲むこ 樽を持つてまゐる人を雇ひたうござる。▲清六 やすい事ぢやが、一人も内にゐぬ。▲むこ 何としたものでござらう。▲清六 はじめて行く事ぢや程に、門までおれが持つて參らう。▲むこ それは恐れがましい事でござる。▲清六 苦しうない。持つて行きまうせう。▲むこ さらばさきへござれ。▲清六 そなたござれ。▲むこ さあ／＼おいでなされませい。▲清六 參る／＼。▲むこ 引出物貰うたらば、お目にかけまうせう。▲清六 持て來て見しやれ。▲むこ これでござる。▲清六 樽をやりまうせう。お案内。▲冠者 誰ぢや。▲清六 聟殿の御出でござる。この樽肴は、みやげでござる。▲冠者 その通しうとへ申さう。申し／＼、聟殿お出でござる。この樽肴は、みやげでござる。▲しうと こちへ通せ。▲冠者 申し／＼、お通りなされませい。▲むこ 心得た。疾うから參らうを、何かとしておそなはりました。▲しうと ようござつた。▲冠者 申し／＼、表に聟殿はござりまする。▲しうと こちへ通せ。▲むこ いや、あれは内の者でござる。▲冠者 申し／＼、こちへお通りなされい。▲清六 某は通る者ではござらぬ。▲冠者 通るまいと仰せらるゝ。▲しうと 某が迎ひに參らうか。平にござれと云



卷之五

一 樽聟

四人

舅　長袴、小さ刀
冠者　半袴、腰帯
聟　半袴、小さ刀
清六　同

▲しうと　このあたりの者。今日吉日ゆゑ、聟殿のお出ぢや。冠者に申しつけう。冠者ゐるか。▲冠者　お前にゐまする。▲しうと　今日吉日で聟入がある。その分心得。▲冠者　畏つた。▲むこ　舅にいとしがらるゝ花聟。今日吉日で乃ち聟入仕る。人が無い所で、某の樽を持つて行く。後々は苦しうないが、初めて参る。こゝに清六殿と申して、御懇の方がある。人を雇うて持たしてまゐらう。内におぢやらうか知らぬ。ものも。お案内。▲清六　案内は誰ぢや。▲むこ　某でござる。▲清六　ようござつた。▲むこ　今日吉日で聟入仕る。▲清六　めでたい。用

が〱手車と云はゞ、兩人は、鈍太郎殿の手車と云うて囃さしめ。▲二人 心得てござる。▲どん太郎 こりや誰が手車〱〱。▲二人 鈍太郎殿の手ぐるま〱。▲どん太郎 是は誰が手車〱〱〱〱〱。▲二人 鈍太郎殿の手車〱。

大小の違ー暦の大小のこと

ちませう。▲どん太郎　さても〳〵、なり果てたことかな。南無阿彌陀佛〳〵。南無阿彌陀佛〳〵。▲下京女　さらば止めさしられい。▲上京女　心得ました。申し〳〵鈍太郎殿、何としたなりぞ。戻らしませ。▲どん太郎　某は棒遣男に持つて、おそろしい事はをりない。なむあみだぶつ〳〵。▲下京女　これ〳〵、まづ戻つて下されい。▲どん太郎　若い女房の、出家の袖にとりつくと云ふ事があるものか。▲上京女　平に戻らしられい。▲どん太郎　某は長刀遣男にもつて、天下におそろしい事はをりない。南無阿彌陀。▲上京女　二人して止めませう。▲下京女　兩人中をよくして、迎ひに來ました。もはやこらへて、戻らしられませい。▲上京女　その通ぢや。左右から、女のとりついて賴みまする。今より後は、氣に入るやうにしませう。歸つて下されい。▲どん太郎　その通ならば、物事をきはめて、上十五日下京、下十五日上京にゐまうせう。▲上京女　大小の違がある。上十五日おれ方へござれ。▲下京女　おしらるゝやうにさしられい。▲上京女　心得ました。▲どん太郎　此分では歸ることもあるまい。手車に載せて、囃物して、連れてかへれ。▲二人　何と、はやしものは。▲どん太郎　某が、これはたれ

のせらるゝな―のすは薙ぎ倒す
菩提縁―菩提の縁なるべし
かくや―刊本にかくあれど或はかうや（高野）か高野に上らんとの意なるべし

らぬ。▲どん太郎 仕合よくして、のぼりまうした。早うあけい〳〵。▲下京女 妾長刀遣を男にもつた。長刀にのせらるゝな。▲どん太郎 某の合點せぬ、男持つことはなるまい。早くあけい〳〵。▲下京女 なう腹だちや。又なぶるわ。長刀でのせさしめ〳〵。▲どん太郎 南無三寳。兩方ともに男を持つた。女といふ者はたのみにならぬ。これを菩提縁にして、髮を切つて、かくやに出でうと存ずる。（中入）▲上京女 鈍太郎殿の、ゆうべ上り、門あけよと仰せられたれども、そでないかと思うて、さん〴〵しかつた。下京になじみの人があると聞き及うだ。下京にござらう。參りあひませう。ものも。▲下京女 誰そ。▲上京女 妾鈍太郎殿女房でござる。ゆうべ上つて、門あけいとおしやつたれども、そでないと思うて、しかりました。こゝにござらう。會はして下されい。▲下京女 さては上京のでござるか。此所へもゆうべおいでなれども、いろ〳〵しかつてかへしました。▲上京女 さてはさやうでござるか。道で聽けば、髮を剃つて、かくやに出られたと申すほどに、兩人參つて止めませう。▲下京女 それはようござらう。▲上京女 二人して無理にとめませう。▲下京女 こゝに待



十手車

三人　鈍太郎　始め、括り袴、腰帶。後、頭巾、十德、括り袴、腰帶、鉦
上京の女　びなん、縮、さげ帶
下京の女　同じく

▲どん太郎　これは、都に住む者。久々田舍へ行て、只今上る。某は上京と下京に、宿をもつた。どちへまゐらうぞ　上京が本の女房ぢや。まづまゐらう。やい〳〵女ども、上つた。あけい〳〵。▲上京女　これの人は三年さきから、田舍下りして、たよりもない。あくる事はならぬ。▲どん太郎　尤ぢや。さりながら、仕合よく上つた。あけい。▲上京女　あまりおとづれもないによつて、棒遣を男に持つた。▲どん太郎　某のゆるさぬに、男持つことはなるまい。▲上京女　なう〳〵、人がなぶる。棒を持つて、腰の骨打折らしめ、〳〵。▲どん太郎　よい〳〵、下京に若い馴染がある。參らう。これ〳〵、鈍太郎が歸りまうした。あけい〳〵。▲下京女　又なぶり來た。鈍太郎殿は、三年さきから田舍へ下り、便もない。あける事はな

手車—一名鈍太郎

これの人—内の人也夫のこと

なぶり來た—なぶりに來たなるべし

ても、見さしられねば、是非もござらぬ。▲主 相舞にせう。▲冠者 如何様とも御意次第。▲主 それ〳〵、狸ではないか〳〵。▲冠者 いや〳〵、狸ではござない〳〵。▲主 やるまいぞ〳〵。

切物―品切

おかしられい―止めになされ

えまうせぬ。賣りませう。狸は〱。狸は〱。大狸は〱。▲主 冠者めが遲い。何してゐるぞ。さて〱、いかい市の立ちやうかな。▲冠者 はあ、賴うだ者がわせた。まづ狸をかくしまうせう。▲主 冠者、たぬきは。▲冠者 今日の切物で、狸はござらぬ。▲主 まことに見えぬ。市酒飮まう。酒を買ひに行て取つて來い。▲冠者 お宿でまゐりませい。▲主 市で飮むが慰ぢや。買ひに行け。▲冠者 おかしられい。▲主 苦しうない。買うてうせい。▲冠者 あゝ、酒買うて來ました。まゐれ。▲主 飮まう。冠者も飮め。▲冠者 いや〱。▲主 ゆるり〱飮うでなぐさむ。一つ舞へ。▲冠者 お宿で舞ひませう。御免しられい。▲主 いやいや、市の中で、見るが面白い。舞ひをれ。▲冠者 あゝ。▲主 左右へまはれ。▲冠者 此中も、御前がかりには、左右へ廻らぬものぢやと申しまする。▲主 いや〱、おれがゆるす。左右へまはれ。▲冠者 慮外ぢやと申すほどに、なりますまい。▲主 苦しうない。免す。まはれ〱。▲冠者 どうでも、廻ることは知らぬうちこそ。知つてはなりませぬ。▲主 にくいやつの。廻つて舞はぬか。▲冠者 舞ひまする。▲主 なぜにまはらぬぞ。▲冠者 まはりまし



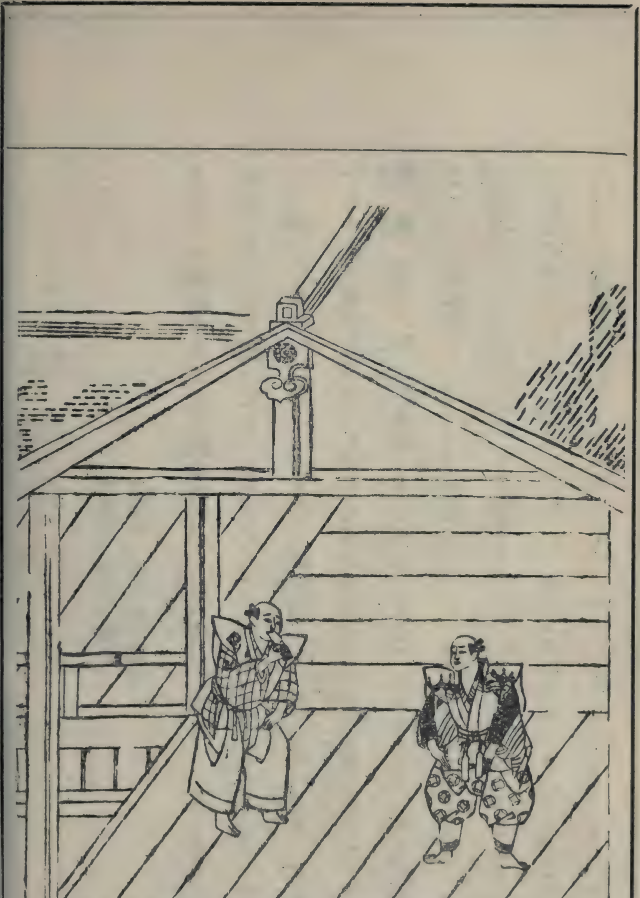
九　隠し狸

二人　主　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴、腰帯

▲主　このあたりの者。冠者ゐるか。▲冠者　お前に。▲主　そちはよい犬を持つて、狸をさいさい取ると云ふ。ちと某にもくれい。▲冠者　犬はござれども、用心のためばかりに、飼ひまする。狸の事は存じも寄りませぬ。▲主　皆々のよく知つて、いかな夜も／＼、毎夜狸とる。ふるまひに狸一色で、御出なさるゝ約束ぢや。ゆうべ取つたをくれい。▲冠者　あれば進じませうが、いかな／＼、狸見たこともござない。▲主　明日御出の約束ぢや。市にあるか。見て調へてこい。▲冠者　畏つてござる、▲主　やがて來い。▲冠者　はあ。せつかく隠したに、人の口と申すものは、戸が立てられぬとやらん云ふが、頼うだお方の耳に入つた。ゆうべも、大狸二つまでとつた。さい／＼、狸くれい／＼。夫が厭ぢや。おれが狸賣りにまゐらう。この様な見事な狸は稀な。賣りまうせう。今日は一つも狸は見

推參—無禮

食ひませう。▲ゐなか者 ふるまふ。食て見せい。そちが食うたらば、おれもくふことがあらう。▲まんぢう賣 おふるまひか。▲ゐなか者 なか〳〵。▲まんぢう賣 かたじけなうござる。食ひませう。▲ゐなか者 なにと旨いか。▲まんぢう賣 旨い事かな。▲ゐなか者 まだ食へ〳〵。▲まんぢう賣 いか程も食うて見せませう。▲ゐなか者 さあ〳〵、食へ〳〵。▲まんぢう賣 たべまする〳〵。皆くひました。▲ゐなか者 おれも食はうもの。▲まんぢう賣 こしらへて進じませう。▲ゐなか者 無ければよい。▲まんぢう賣 申し〳〵、今の代物を下されい。▲ゐなか者 代りとは。そちが食た。おれは知らぬ。▲まんぢう賣 ふるまふほどに、食へと仰せられた。代物取らねばなりませぬ、▲ゐなか者 憎いやつの。田舎者と思うてねだりごと云ふか。▲まんぢう賣 いやでもおうでも、代物おこさしめ。▲ゐなか者 まだ推參な。刀に手をかけおどす。▲まんぢう賣 申し〳〵、もはや取りますまい、▲ゐなか者 にくいやつめの。▲まんぢう賣 これはいかな事。だまされた。せめてこの入物でも、持つて去にまうせう。



八 饅頭食

二人 饅頭賣 半袴、腰帶
田舍者 括り袴、腰帶

▲まんぢう賣 都にすまひする饅頭賣ぢや。町へ賣りに參らう。某も奉公人の果ぢやが、落ちぶれてまんぢう賣いたす。まんぢうはく。▲ゐなか者 遠國方の者。久々訴訟の事があつて、都にゐました。思ひのまゝに、訴訟調うて、近日國へ下る。町へ買物しに參らう。いろくの物があるわ。どれから買ひませうぞ。茶の湯道具ぢや。子どものもてあそび物、雛、張子、起上小法師、土で作つた犬までをりやるわ。何を買ひまうせうも、おれまゝ。これは何ぞ。▲まんぢう賣 饅頭でござる。▲ゐなか者 まんぢうぢや。▲まんぢう賣 なかく。上つがたの、お菓子にあがり申するまんぢうはく。▲ゐなか者 まんぢうぢや。▲まんぢう賣 ずんど旨い物でござる。買はせられい。▲ゐなか者 旨いか。▲まんぢう賣 なかく。めして下されい。▲ゐなか者 まづ食うて見せたらば、買ひもせう。▲まんぢう賣 ふるまはせらるゝなら、

〳〵〳〵〴〵と云うて、
ざとうがくやへはいるなり。

> あり〳〵—鞠を蹴る時の掛聲

にござるか。▲きく一 おいでてござる。その通申さう。▲山岡 急いで皆々同道で參つたと云へ。▲きく一 畏つた。いづれも樣お出なされました。▲檢校 通しませい。▲きく一 心得てござる。お通りなされい。▲山岡 心得た。皆々通りませう。▲檢校 御出かたじけなうござる。追付まりを始めまうせう。▲山岡 ようござらう。▲檢校 きく一、まり持つてこい。▲きく一 畏つた。▲山岡 さらば、きく一から蹴て出せ。▲きく一 けまする。▲檢校 あり〳〵。▲ざとう ありあり。▲きく一 あり〳〵。▲檢校 これではあたりが知れぬ。思ひだし申した。鞠に鈴をつけて蹴ませう。▲山岡 それはようござらう。▲檢校 きく一、まりに鈴をつけい。▲きく一 畏つた。鈴つけてござる。▲檢校 またきく一から蹴てだせ。▲きく一 心得ました。けまする。▲檢校 あり〳〵。▲ざとう あり〳〵。▲きく一 あり〳〵。▲使の者 使の者でござる。急いでまゐらう。これはいかな事。座頭どもが、目も見えぬに鞠を蹴まする。見物仕らう。▲檢校 ありあり。▲ざとう あり〳〵。▲使の者 かしこいものぢや。まりに鈴をつけた。ちとなぶつて遊びまうせう。（まりとつて、あちらこちらへ行き、鈴ならす。）▲ざとうども あり〳〵〳〵〳〵。（かくやのかたへ、まりの鈴ならして、はいる。鈴について、皆々あり〳〵）



七　鞠蹴座頭

五人
検校　衣、下袴、角帽子
菊一　頭巾、下袴
山岡検校　衣、下袴、角帽子
座頭　頭巾、下袴
使の者　半袴、腰帯

▲検校 このあたりの検校。みな検校たち、座頭ども寄り合ひ、鞠をなぐさみに蹴ます。今日は某が所へ皆々おいでぢや。きく一。▲きく一 お前に▲検校 いづれも様、おいでならば、こちへ云へ。▲きく一 畏つた。▲検校 かよりの掃除をも云ひつけい。▲きく一 はあ。▲山岡検校 このあたりに住む山岡検校ぢや。皆座頭衆おぢやるか。▲ざとう 皆々ゐまする。▲山岡 内々の通、鞠を蹴に参るまいか。▲ざとう 一段ようござらう。▲山岡 さあ〳〵、ござれ〳〵。▲ざとう まゐる〳〵。▲山岡 よい慰ぢやの。▲ざとう その通ぢや。▲山岡 まゐる程にこれぢや。案内乞ひまうせう。▲ざとう よからう。▲山岡 お案内も。▲きく一 どなたでござる。▲山岡 内

槍で突く—注の文なるべし

合點がいかぬ。いや〳〵、人さうな。あゝこはや。まづ此槍で突かう。くつさり〳〵。あかなしや〳〵。助けて下され〳〵。命さへ御助けなされうなら、寳物どものあり所を教へませう〳〵。▲主 寳物のありどころ、ねんごろに教へ。命を助けう。▲冠者 なか〳〵、教へませう。▲主 眞實か。▲冠者 何しに隠しませうぞ。▲主 定か。▲冠者 誠でござる。▲主 冠者々々。おれぢや。▲冠者 おれぢやとは。▲主 おのれ、臆病者。▲冠者 おまへは、何としてこゝへは御出なされたぞ。▲主 臆病なやつ。内々のてがらだてとは違うて、寳を皆々やらう。▲冠者 こなたは、おれが心をためして見やうと思うて、なされたか。▲主 常に、てがらだて云ふによつて試みた。臆病者め。▲冠者 何事もない時は、いふたいこと、いふませいでわ。▲主 そのつれなこと云ふ居るか。憎いやつの。あちへうせひ〳〵。槍で突く。▲冠者 あゝかなしや。助けて下され〳〵。▲主 やるまひぞ〳〵。

五つ—今の午後八時

奇特—神妙

手元へ寄する事でもござらぬ。▲主 一騎當千ぢや所で、一人留守に置く。乃ち鎗があるほどに側におけ。▲冠者 鎗もいる事ではござない。▲主 やがて四五日してかへらう。▲冠者 ゆるりとあそばしられい。▲主 よう留守せい。▲冠者 畏つてござる。南無三寶、旦那殿ははや行かれたが、迷惑な事ぢや。いらぬことを云うて、にが〱しや。ひろ〲とした屋敷に、一人留守はいやぢや。はや日も暮るゝ。槍をかたげて屋敷を廻らう。もはや五つ過ぎぢや。あゝ暗や〱。御用心々々々。何者ぞゐぬか。あゝこそ〱と云うた。暮れて暗い。何が居るも見えぬ。されば〱、何者やらゐるぞ〱。あゝこはい事や。胴がふるうて物が云はれぬ。よく〱見れば、槌ぢやもの。びつくりした。迷惑な。廻りまうせう。▲主 冠者めに留守をいうつけた。様子見にまゐらう。はあ、夜廻しで獨言を云ふ。臆病者ぢやが、奇特に夜廻してゐる。▲冠者 南無三寶、何やらあるぞ。おそろしい。どうしたものであらうぞ。内へはいることもならず。いや、よく〱見れば、杌か知らぬ。やい〱、そこなは人か杌か〱。▲主 杌ぢや。▲冠者 杌なら、物を言はぬ筈ぢやが、



六　杌か人か

二人　主　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴、腰帯

▲主 この邊の者。冠者めが方々へ參りて、てがらだて云うて、皆々樣をだますと、いづれものお話ぢや。づつと臆病なやつぢや。致しやうがある。冠者ゐるか。▲冠者 お前に。▲主 身共四五日、さる方へ參る程に、そちは一人留守におく。その分心得。▲冠者 いや、お供にまゐりませう。▲主 供に連れいでも大事ない。用心して留守せい。▲冠者 先で御用もあればいかゞな。めしつれられい。▲主 いらぬ。留守せいと云ふに。▲冠者 でも、この屋敷に、一人留守はなりますまい。▲主 汝を一人おけば、百人おいたより、よい留守ぢや。おぬしが常常てがらした事を、何れも樣へ話すと、皆々の仰せらるゝが、うそか。臆病者ぢや。▲冠者 まづさやうには申したものでこそござれ。百人留守したよりましぢやと、思召すは嬉しうござる。▲主 さあ〳〵、その通よう留守をせい。▲冠者 五十人百人いか樣の者が來ても、

せびらかした―強請すること

は。おれせびらかしたがよいか。汝が面へはらわたを投げつけて死ぬる。のけ〳〵。放せ〳〵。▲女房 離すことはならぬ。今度からわごりよの云ふ樣にせう程に、こらへて戻らしめ。▲男 いや〳〵、おぬしが云ふ事聞きはせまい。腹を切る。はなせ〳〵。▲女房 いかやうとも、おしやる樣にしませう。こらへてたもれ。▲男 何事もおれが云ふやうにするか。▲女房 なか〳〵。仰しやる如くに致さう。▲男 それならば、もはや腹切るまい。▲女房 やれ〳〵うれしや。いとしの人や。おぢやれ。負うていなう。

さへて―止めて也

くと云ふ。棒や鎌をこちへおこさしめ。▲女房早うやらしられて下されい。▲隣の者心得た。急いで山へゆけ。▲男参る。まづ〱、おかげで命助かりました。忝い。急いで山へ行かう。さて〱、女どもが、またも〱追ひ走らかす。足ばやに逃げて、たゝかれぬがましぢや。山へ來たが、よく〱案ずるに、女房にまたも〱たゝかれ、逃げまはるも口惜しい。腹を切つて、山で死にまうせう。この鎌で切らうが、これはどぎ〱として痛さうな。あいた〱。いや〱向な木に結ひつけて、走りかゝつて切りまうせう。側へ參れば、腹へあの鎌がはいると、痛からうと思うて切られはせぬ。目で見る所でわるい。目をふさいでとびかゝり、くわらりと切つて死にませう。やい〱女ども、只今おれは腹を切るが、おのれ後に悔みをらうぞ。なう〱女どもに、只今腹を切ると云うてたもれ。▲女房何と、妾が所の人が、山で腹を切つて死ぬると云ふか。やれ〱、かなしや〱。誰ぞさへてくだされ。頼みまする。▲男とびかゝつて、くわら〱と腹を切つて、女が面へ投げつけてのけまうせう。▲女房なう〱、これは何事をするぞ。▲男何事と



とりさへてし仲裁して也

五　鎌腹

三人　男　半袴、腰帯
　　　女房　びなん、箱さげ帯
　　　隣の者　長袴、小さ刀

▲男　あゝかなしや〳〵。助けい〳〵。ゆるせ〳〵。▲女房　おのれ打殺してくれう。▲隣の者　これこれ、女の何とした事ぞ。▲女房　あいつめに、山へ行けと申せば、いかずして、三十日を三日とも内に居ずに、遊び歩きまする。退かしられい、打殺しまする。▲男　とりさへて下されい。▲隣の者　某が山へ行くやうに云はう。これ〳〵、再々女にその様に追はれて、逃げあるく事は見苦しい。なぜに三十日を三日も内にゐず、山へも行かぬぞ。山へも行かしめ。▲男　まづ、命の親ぢや。忝い。山へまゐる。よそへ参るも、だんなさま方へ、某の稼でまゐる。慰ではござらぬ。▲隣の者　尤ぢや。早う山へ行かしめ。▲男　あの鎌や棒を取つて下されい。▲隣の者　心得た。なう〳〵、内に居ぬも稼のため也。山へも行

か。▲弟 ないことぢや。また牛を盗んだことがあるぞ。▲兄 あらば聞かう。▲弟 ついでに申さう。斑牛を盗んで、白いところを墨で染めて賣つた。おれらが方では、てんもくしやていの、まだらじやていと申す。▲兄 おのれ、何とがなせうぞ。腹だちや。▲弟 兄でもすまふに負けうか。お手つ。兄でもなるまいぞ〳〵。

盗人の唐名を舎弟―出鱈目を数へてなぶる也

天目―茶の湯の茶碗

物の本に書いてある。見て教へまうせう。▲弟 かたじけなうござる。頼みまする。▲與兵衛 しばらくそこに待ちておぢやれ。▲弟 心得ました。▲與兵衛 なか〱の事ぢや。ちとなぶつて、いさかはしまうせう。なう〱。▲弟 何と、よいことか、悪い事でござるか。▲與兵衛 その方が腹を立てまいならば、云うてきかしまうせう。▲弟 いや〱、腹立てる事ではござらぬ。さては悪い事でござりまするか。▲與兵衛 盗人の唐名を舎弟と申す。▲弟 兄めがにくい事を申す。某はぬす人をしたことはござらぬ。もはや参る。▲與兵衛 これ〱、必ずおれが教へたと云ふな。諍せまいぞ。▲弟 いや〱、いさかひは、つかまつるまい。さらばさらば。さても〱にくい。すぐに行て、兄に恥かゝせませう。申し〱、兄御内にか〱。▲兄 舎弟來たか。▲弟 しやていぢや。▲兄 何と、喧嘩でもしたか。機嫌がわるい。▲弟 知らぬと思ふか。おれはしやていした事はない。そなたこそ、さい〱しやていしたれ。▲兄 おれがしやていしたとは。▲弟 云うて恥かゝせ申さう。いつぞや、天目を盗んで來た。こちのかたでは、てんもくしやていと申す。▲兄 おのれ兄のこと、その樣な、無いこと云ふ



兄弟諍——一名舍弟

四 兄弟諍

三人
兄 長袴、小さ刀
弟 同
與兵衞 同

▲弟 このあたりの者、某兄を一人持つてござるが、參るたびに、舍弟か、よく來た〳〵と申さるゝ。この事を知らぬところで、不審な。この近所に與兵衞殿と申して、御懇になされて、萬事に心得てござる。これへ參り、よい事か、わるい事か、習うて參らう。宿にござらうか。今日は一段よい天氣ぢや。まゐる程にこれぢや。ものも。與兵衞殿ござるか。▲與兵衞 案内とは誰ぢや。▲弟 某でござる。▲與兵衞 何と思うておぢやつた。▲弟 只今お見まひ申すは、別なる事でござない。こなた樣も知られた如く、兄を一人持ちました。見舞に行けば、私を見ると、舍弟々々と、申さるゝ。これはいかやうの事ぞ、習ひませうと存じて、お見舞申してござる。教へて下されい。▲與兵衞 わごりよは知るまい。

▲ゐなか者 かなづの地藏の立たしました。見まいな〱。▲子 立ちたくはおぢやらねど、檀那の願ならば、さらばちとつつ立つた。▲ゐなか者 金津の地藏の踊らしました。見さいな〱。▲子 をどりたくもなけれども、さらばちと踊ろよ〱。ほつぱい、ひうろ、ひい。

有德―仕合よきこと

金津―加賀國

い。▲在所の者 さて〳〵、殊勝にござる。▲ゐなか者 さらば香花を進ぜう。▲在所の者 よからう。

▲ゐなか者 香花をお地藏へ進ずる。▲子 香花はいやで候。饅頭が食ひたい。▲ゐなか者 まんぢう食はうと、お地藏の、物言はしらるゝ。▲在所の者 さあ〳〵、饅頭早う進じませう。▲ゐなか者 お望のまんぢうこそ進ずれ。▲子 ようくれた〳〵。よい酒が飲みたいわ。▲ゐなか者 よい酒を飲まうと仰せらるゝ。▲在所の者 早う進ぜられい。▲ゐなか者 おのぞみに任せて、よき酒を參らする。▲子 よい酒をくれて滿足した。皆々有德にして取らせうぞ〳〵。▲ゐなか者 やれやれ、うれしや〳〵。皆々有德にしてくれうと、お地藏樣の仰せらるゝ。めでたく皆々酒を飲まう。▲在所の者 さあ〳〵、よからう。飲まう。ざゝんざ、はま松の音はざゝんざ。

▲ゐなか者 めでたい〳〵。▲在所の者 いかい事飲うで醉ひ申した。▲ゐなか者 目がちらつくやら、地藏の動かるゝ。▲在所の者 まことに生地藏ぢや。ちとをどらしませう。▲ゐなか者 よからう。

▲在所の者 さあ〳〵、はやさしめ。▲ゐなか者 心得た。金津の地藏の〳〵、お搖ぎやつた。見まいなく〳〵。▲子 ゆるぎたくもなけれども、檀那衆の望ならば、ちとまたゆるごよ。

り仕合がわるい所で、田舍の者が、地藏を買ひたいと云ふによつて、うけとり、汝を地藏にこしらへてやらうと思ふ。行てくれい。▲子 いや〱、戻ることがなるまい。▲すつぱ それは、見あはせて、そつと逃げて來い。▲子 まことに、よい隙を見て、ぬけて參らう。▲すつぱ やう〱昨日約束の時分ぢや。來い〱。▲子 參る〱。▲すつぱ これ〱、腰かけて錫杖を持つて居よ。▲子 心得ました。▲ゐなか者 何と地藏が出來たか。きのふ約束の時分ぢや。因幡堂へまゐらう。▲すつぱ 田舍の人はおそいが、異なことの。▲ゐなか者 佛師どの。▲すつぱ 待ちかねてゐた。▲ゐなか者 地藏は出來申したか。▲すつぱ ござれ〱、これ〱。▲ゐなか者 結構に出來ました。乃ち佛を負うて下りませう。代物も渡しまする。▲すつぱ 代物受取つてござる。▲ゐなか者 かたじけなうござる。さらば〱。やれ〱嬉しや。皆々待ちかねてゐられう。この地藏を見せたらば、喜ぶであらう。都は物の自由な所でござる。戻つた。地藏樣を庵へすゑませう。皆々ござるか。▲在所の者ども四五人 何と歸られたか。▲ゐなか者 歸り申した。卽ち地藏菩薩を買ひ取つて來ました。庵にすゑおいた。拜ましられ

▲ゐなか者 某は田舍から上つたが、佛を買ひたい所で、呼ばはり申する。▲すつぱ その方、仕合人ぢやよ。▲ゐなか者 それは何としたことぞ。▲すつぱ 卽ち佛つくりは某ぢや。佛がいるならば賣りまうせう。それがしに會うたが仕合よ。▲ゐなか者 まことに／＼、其方が佛師なれば、よい所で會ひました。仕合でござる。▲すつぱ いか樣の佛が買ひたいぞ。▲ゐなか者 在所中として、小庵を作り、未だ佛が無いところで、何なりともよい佛がほしい。▲すつぱ 尤ぢや。佛もいろ／＼あれども、地藏ほどよい佛はまれな。地藏の作つたがある。賣りませう。▲ゐをか者 嬉しや／＼、地藏を買ひませう。▲すつぱ もはや仕立するばかりぢや。明日五條の因幡堂までたづねておぢやれ。渡しませう。▲ゐなか者 とりにまゐらう。値段は何程ぞ。▲すつぱ 五百疋にして進ぜう。▲ゐなか者 代物どこで渡さうぞ。▲すつぱ 卽ち佛わたす所で受取りまうせう。▲ゐなか者 明日かならずでかいて下されいや。▲すつぱ 心得申した。▲ゐなか者 さらば／＼。▲すつぱ 佛を受取り、明日わたす筈ぢやが、悴を地藏にこしらへやらうと思うて、受取り申した。かな法師ゐるか。▲子 なんでござるぞ。▲すつぱ 某は、あま



金津地藏—一名
金津

三　金津地藏

五人

田舍者　半袴、腰帶
すつぱ　長袴、小さ刀
子　頭巾、水衣、括り袴
在所者　二人、長袴、小さ刀

▲ゐなか者　これはこのあたりの者。いづれも在所中寄合ひて、草庵を結び申した。都へ上り、何ぞよき佛を求めて參らうと存じ、只今我等の上り申する。都へさへ上り申したらば、何佛なりとも無いことはあるまい。程なう都ぢや。佛師がいづくに居らるゝも知らぬ。何としたものであらうぞ。さて〳〵、都ではあるぞ。知らぬ事、賣り買ふ物をば、呼ばはつて通る。さらば某もこゝから呼ばはりまうせう。佛買はう〳〵。佛師の宿はござらぬか〳〵。▲すつぱ　佛買ひたいの。都に隱れもないすつぱぢや。この中、さん〴〵仕合がわるい。田舍の者が何事やら云うてありき申する。此者にあひまして、仕合を致さう。▲ゐなか者　こちの事か。▲すつぱ　その方の事ぢや。廣い都を何を云うてあるくぞ。

やい〳〵、おのれそのつれ云ふものか。▲しんぼち　そなたぢやと云うて、だぐるひした事もあらうぞ。▲住持　憎いやつの。愚僧がだぐるひした事があるとは。▲しんぼち　それ〳〵、いつやら門前の嬶が來たれば、そなた、奥へつれていて。知つたぞや。▲住持　やい、それは物を縫うて貰うた。腹だちや。▲しんぼち　物を縫ふに、鳩のうめくやうに、ふよう〳〵と云うて、ふたりながら、あせをかいて出た事を、よう知つてゐるぞ、〳〵。▲住持　おのれ、にくいやつぢや。腹だちや。▲しんぼち　老僧ぢやと云うて、たゞかれ負けてゐるものか。（來いと云うてねぢあひ、老僧うちこかし、）お手つ。なるまいぞ〳〵。▲住持　やい〳〵、おのれ。やるまいぞ〳〵。

心ざしの日―佛事を營む日

齋―食事

やに繫ぎおきまして、御用に立たぬと云ふものぢや。▲しんぼち あゝ、さやうに申さう。▲旦那三郎兵衛 明日は心ざしの日ぢや。寺の坊主衆を呼びに參らう。おあんないも。▲しんぼち また人が來た。誰ぢや。▲三郎兵衛 某でござる。明日心ざしの日ぢや。老僧もこなたも、齋に來て下されい。▲しんぼち 私は參らうが、老僧はならぬ。▲三郎兵衛 なぜに。▲しんぼち 此中、青草につけておいたれば、だぐるひをして、腰がぬけて、厩につないでおいてござる。▲三郎兵衛 老僧のだぐるひを。▲しんぼち なか〱。某ばかり參らう。▲三郎兵衛 こなたばかりなりとも、おいで待ちまする。▲しんぼち 心得ました。▲三郎兵衛 さらば〱。▲しんぼち この由申さう。三郎兵衛殿の、明日心ざしをする程に、老僧も某も、齋に來いと云うて、呼びにわせてござる。▲住持 一段ぢや。行かうと云うたか。▲しんぼち なか〱。某ばかり參らう。老僧は此中、青草につけてござれば、だぐるひして、腰がぬけて、うまやに繫いでおいた。なるまいと申した。▲住持 そなたは、その樣なことを云ふものか。おれがだぐるひしたと云ふことがあるものか。▲しんぼち でも、云へとおしやつた所で、申した。▲住持

そら―天井裏などのこと

おしらるゝ―もつしやらるゝの約

だぐるひ―女馬を見て狂ふこと

申し〳〵。▲住持何と。▲しんぼち只今市兵衛殿の、傘を借りにお出でござる。乃ち貸してござる。▲住持其方は、坊主の一本からかさは貸さぬものぢや。此中、外に干しましたれば、風が吹いて、骨は骨、紙は紙となつて、縄で紮げて、そらへあげて、置いたと云うて貸さぬものぢや。▲しんぼち畏つた。▲旦那次郎兵衛このあたりに住居する者。さる方へまゐる。寺の馬をかりに參り、乘つて行かう。お案内。▲しんぼち誰そ。▲次郎兵衛某でござる。山一つあなたへ行く、馬を貸して下されい。▲しんぼちされば、外に干して置き申したれば、風が吹いて、骨は骨、皮は皮となつて、縄で紮げて、そらへうちあげておきました。なりますまい。▲次郎兵衛あゝ馬をや。▲しんぼちなか〳〵。▲次郎兵衛是非もない。歸りまうせう。さらば〳〵。▲しんぼち今の通、師匠へ申さう。申し〳〵、次郎兵衛殿の馬を借りにわせた所で、最前の如く申して、貸しませなんだ。▲住持わごりよは、馬を傘の如くに云うて、よいものか。▲しんぼちこなたの云へとおしらるゝ如く申した。▲住持馬など借りに來たらば、此中、青草につけましたれば、だぐるひをして、腰がたゝぬ所で、うま



骨皮新發意—一名骨皮

新發意—新に發心せる人小僧などのこと

檀那—施主也檀家の人

二　骨皮新發意

五人
住持　頭巾、衣、珠數
新發意　頭巾、衣、腰帶
旦那三人　長刀、小さ刀

▲住持 この寺の出家ぢや。隱居して、新發意に寺遣らう。しんぼち〳〵。▲しんぼち 何事でござる。▲住持 もはや愚僧は隱居する。この寺そなたへやる。好う、檀那のお參りに機嫌とつて、寺をよう持たしめ。▲しんぼち 忝うござる。▲住持 奥に隱居してゐる。問ひたき事は、問はしませ。▲しんぼち 畏つてござる。▲旦那市兵衛 このあたりの者、俄に雨が降りさうな。寺へ行き、からかさを借りまうせう。案内も。▲しんぼち 誰そ。▲市兵衛 某ぢやが、俄に雨が降りさうな。からかさを貸して下されい。▲しんぼち やすい事、貸しませう。これ〳〵申し、某もこの寺を貰ひました。▲市兵衛 めでたい事でござる。▲しんぼち 今までの通、參つて下されい。▲市兵衛 御用があらば承りませう、さらば〳〵。▲しんぼち この由隱居へ申さう。

様へ鳥はあげませう。ゆるさしられい。▲大名 聴くことでない。▲とりや 雁さへ上げますれば、おゆるしなされい。▲大名 ゆるす〳〵。▲とりや 鳥をぬすまれたわ。▲大名 冠者は何と。▲冠者 申し〳〵。▲大名 取つたか〳〵 ▲冠者 取り申した〳〵。▲大名 早うこしらへい。▲冠者 お前様、早いことをなされた。▲大名 刀の柄に手をかけて、喧嘩の次第がはやかつたか。▲冠者 いや、棚の端へ手をやつて、はやいお事でござる。▲大名 そちは見附けたか。▲冠者 見附けました。▲大名 國への土産にせう物がないによつて、これ〳〵、これを取つたわ〳〵。▲冠者 それがし、鳥を盗み申した。▲大名 さあ〳〵、笑へ〳〵。▲冠者 心得ました。

せんさき—先の音訓を重ねて云ふ

うなる程に、店へ鳥を出しまうせう。そこへ某のまゐり、代物持て來た、鳥をとつて歸らうと申すと、お前に高う賣つたところで、もはや賣つたと申しまうせう。約束ぢや。わきへは賣らせぬと申す時に、お前のしからしられませうず。某も腹をたてて、喧嘩に致しまうして、お前に取付きましてゐるうちに、鳥をとり申して退きませう。▲大名　これはよい分別が出た。魚棚の何軒目ぞ。▲冠者　角屋から四五軒目かと存ずる。▲大名　もはや行く。そちもよい時分に來てくれい。▲冠者　畏つた。▲大名　分別のよい冠者ぢや。さかな町の角屋から、四五軒の内ぢや。これにある。▲とりや　雁は〳〵。▲大名　さかな屋、雁買ひ申さう。▲とりや　上げませう。▲大名　ねだんは。▲とりや　五百疋でござりまする。▲大名　買ひ申さう〳〵。▲冠者　肴屋殿、代物持つて來た。鳥を取つて參らう。▲とりや　遲いによつて、お大名樣に上げた。ならぬ。▲冠者　それがしがせんさきぢや。買はねばならぬ。▲大名　やい〳〵、にくいやつの。身が買ひ取つた鳥を、なぜ手をかくる。▲冠者　某が先ぢや。取つて行く。▲大名　横著なやつの。ひとうちにしてのけう。▲冠者　某も主持ぢや。なるまい。▲とりや　お前

分別―工夫の意

や。▲冠者 新しい鳥ならば、それに買ひまうせう。▲とりや 賣りまうせう。これ〳〵、代物は。▲冠者 代物とは。▲とりや 鳥をこちへおこしやれ。▲冠者 冠者を知らぬか。▲とりや 何として知らうぞ。▲冠者 代物持つて取りに參らう。その鳥まづ、棚を引いてたもれ。▲とりや 心得た。▲冠者 おこさぬが、尤ぢや。歸つて代物取つて參らう。ござるか〳〵。▲大名 冠者、さかながあるか。▲冠者 雁がござる。▲大名 よい物がある。早う毛をひいて。▲冠者 まをし、肴だなにござる。▲大名 それが役にたつか。▲冠者 代物やらねば、鳥をおこしませぬ。▲大名 身が內の冠者と云はぬぞ。▲冠者 見知らぬと申して、なか〳〵おこしませぬ。代物下され。▲大名 もはや手前にない。そちがところに有らばやれ。▲冠者 某の方にもござらぬ。▲大名 やがて客衆のお出ぢや。▲冠者 やあ、延べるやうになされいで。▲大名 どうぞ賴む。鳥をまづ取る分別してくれい。▲冠者 それは迷惑な事でござる。思ひ出しました。御前の、さかなだなへお出あそばして、雁をいか程にも、肴屋が云ふ程に、お買ひなされまうせい。▲大名 でも代物が無い。▲冠者 某の、代物持つてまゐらう、たなをひけと約束申した。もはや久し



雁大名―一名雁盗人

新知―新に拜領せる知行

さかなだな―棚は店のこと

卷之四

一　雁大名

三人　大名　立烏帽子、素襖、小さ刀
　　　冠者　半袴、腰帶
　　　鳥屋　長袴、小さ刀

▲大名 八幡大名。永々在京した所に、新知を大分くだされ、やがて國へ下る。冠者あるか。▲冠者 お前に。▲大名 やい〳〵、やがて國へ下る。皆々樣をふるまひたいが、肴どもがあるか。▲冠者 いや、お肴物は、只今何もござりませぬ。▲大名 それならばさかなだなへ行て、よい肴物を買うてまゐれ。▲冠者 畏つてござる。▲大名 やがて來い。▲冠者 心得ました。人をふるまふに、今さかな棚へ行て買うて來いとおしやる。まづ行て見まうせう。さかな棚ぢや。何も無いよ。▲とりや 雁は〳〵。▲冠者 よい物がある。雁買ひまうせう。▲とりや 賣りまうせう。▲冠者 好い鳥か。▲とりや 新しい鳥でおぢやる ▲冠者 値段は何程ぞ。▲とりや 二百疋ぢ

肴―こゝは舞のことを云ふ

▲つれ さやうでござる。又うたひうたふ。 ▲花見 御坊も御酒まゐらぬか、 ▲しんぼち なるほどようござらう。なう〳〵、一つ受持つたほどに、肴が望でござる。 ▲つれ 心得ました。小舞あり。 ▲しんぼち 戻しませう。 ▲花見 いたゞきませう。御新發意ひとつうけてござる。何ぞまはせられい。 ▲しんぼち 心得ました。しんぼちまひ。 ▲花見 えいや。 ▲しんぼち さて〳〵、殊の外醉ひました。 ▲花見 もはやおいとま申します。 ▲しんぼち それならば、花を進上いたしませう。 ▲花見 かたじけなうござる。しんぼち、酒に醉ひてねてゐる。 ▲住持 只今罷歸りてござる。これはいかなこと。みどもが大事の花を折りをつた。これはいかな事。やい、そこなやつ〳〵。 ▲しんぼち まだ、花がほしいか。これ〳〵。 ▲住持 あの、横著者め。やるまいぞ〳〵。 ▲しんぼち ゆるさつしやれ〳〵。



十　花折

五人　住持　頭巾、衣、珠數
　　　新發意　頭巾、十德、半袴
　　　花見　三人、長袴、小さ刀

▲住持　これは、當庵の住持でござる。新發意あるか。▲しんぼち　お前に。▲住持　やい、けふはさる方へ行くほどに、留守をせい。又、花を見物にござらうとも、禁制ぢやと云うて見せな。やがて戻らう。▲しんぼち　はあ。▲花見の者　これはこのあたりの者でござる。昨日は、東山の花を見物致したほどに、今日は、西山へ參らうと存ずる。さあ〳〵ござれ。▲つれ　心得ました。▲花見　いつも、このやうに參るは、うれしい事ではござらぬか。▲つれ　さやうでござる。▲花見　いや、これでござる。いざ、辨當をひらきませう。小うたひうたふ。▲しんぼち　いや、なう〳〵、そこで花を見たより、これでは何とござらう。▲花見　さて〳〵、それはかたじけなうござる。▲しんぼち　さあ〳〵ござれ。▲花見　心得ました。はあ、見事なことでござる。

皿程―大なる形容
耳せゝ―完骨也耳の後に高く出でたる骨

ますれば、お内儀樣によく似せてござる。▲(との)目の皿程に見ゆる。よく似た。▲(冠者)口の耳せゝまで、大きなも御内儀さまぢや。▲(との)いつの間に女房どもを、何者がうつして、あそこには置いたぞ。▲(冠者)不思議な事でござる。▲(との)冠者、よい仕合で國へ歸る。めでたい。泣く所ではない。めでたう笑うて下向いたさう。▲(冠者)それは一段めでたう。ようござりませう。▲(との)笑へ〳〵。



御利生―利益と同じおかげ也

九　鬼瓦

二人　殿　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴、腰帯

▲との　人の御存じの者。久々都に詰め申して、御訴訟もかなひ、國へお暇で罷下る。冠者あるか。▲冠者　お前に。▲との　久々在京してある。則ち、御訴訟申す事どもかなうた。おいとまで國へ下る。常々因幡堂を信じてあるにより、御利生と存ずる。お暇乞に、參詣してから下らうと思ふ。供いたせ。▲冠者　畏つてござる。▲との　國へ下ると、因幡堂を建てうと思ふ。▲冠者　ようござりまうせう。▲との　まゐりついた。拜みませう。▲冠者　御尤でござる。▲との　この堂の樣に、國にも建てう。よく見て來い。▲冠者　心得てござる。▲との　飛驒の匠が建てたと聞いたが、見事な堂ぢや。▲冠者　よい恰好な堂でござる。▲との　あの屋根の角にある物は何ぢや。▲冠者　鬼瓦と申す物でござる。見事にいたしてござる。殿樣はなぜ泣かしらるゝぞ。▲との　おにがはらは、そのまゝ女房どもの顔ぢや。それで泣く。▲冠者　見

にたりうたにもりうた、もりうたにたりうた、ばい〳〵にばいやれ、ぎんばゝいにばいやれ。三つ四つ間ふしやぎりにてとめるなり。

よそへて―寄することと準じてに同じ
かきまして―書くに柿をきかす
よろこぶ―喜ぶに昆布をきかす

に持つて參ること、御滿足に思召す。お歌の會に參り合うた。兩人して御年貢によそへて、歌を一首詠めとの御事ぢや。▲淡路 百姓の、歌よみ申した事はござない。御免なれ。▲丹波 迷惑でござる。▲奏者 いや〱、詠まねばならぬ。早うよめ〱。▲淡路 今年より所領の日記かきまして。▲丹波 よろこぶまゝに所繁昌。▲奏者 一段でかいた。かくの如く。▲二人 はあ〱。▲奏者 時の笑と思召して、歌をよめと仰せ出されたれば、兩人ながら、よう歌をよみました。二人の名を申し上げいとのおんことぢや。▲淡路 問うてなにせう〱。▲奏者 名を申し上げ。▲淡路 とうて何しよが、名でござる。▲奏者 丹波は何と。▲丹波 栗の木のくせいに、たりうたにもりうた、もりうたにたりうたに、ばい〱にぎんばばい、ぎんばばいにばいやれ。▲奏者 名を申し上げ。▲丹波 今のが私の名でござる。▲奏者 さて〱珍しい名どもぢや、某はえおぼえぬ。直に申し上げい。▲二人 それならば、御奏者、問うて下されい。▲奏者 迷惑なれども問はう。淡路の國のお百姓の名をば何と申すぞ。▲淡路 とうてなにしよ〱。▲奏者 丹波の國のお百姓の名をば、何と申すぞ。▲丹波 くりの木の、くせい

はこゝぢや。▲丹波 さてはさうか。おれが參る所は、ずんと上ぢや。▲淡路 それならば、道にてお茶でも申しまうせうもの。▲丹波 殘多う。さらば〳〵と申したくはあれども、身共が參るも、こゝぢや。▲淡路 そなたの御奏者は、定つてあるか。時の御奏者か。▲丹波 時の奏者で、上げつけた。▲淡路 おれがは、定めてある。まづ、上げませう。▲丹波 上げさしめ。▲淡路 今日の御奏者。お案内も〳〵。▲奏者 何者ぢや。▲淡路 淡路の國のお百姓。いつも御年貢を持つてまゐる。御奏者のお心得で、納めて下されまうせい。▲奏者 御藏の前へをさめい。▲淡路 畏つてござる。丹波、ゐさしますか。▲丹波 何と、御奏者は。▲淡路 ずんど奥にござる。▲丹波 それならば奥へ參らう。お案内も〳〵。▲奏者 何者ぢや。▲丹波 これはどなたでござるぞ。▲奏者 今日の奏者よ。▲丹波 御免なれ。丹波の國のお百姓、毎年の通御年貢を持つて參つてござる。お藏へ納めて下されい。▲奏者 お藏の前へ納めい。▲丹波 畏つた。▲奏者 兩國のお百姓、かくの如く。▲二人 はあ〳〵。▲奏者 兩人ともにお百姓、これへ參れ。▲二人 はあ〳〵。▲奏者 上堂より、仰せ出ださるゝは、兩國隔てたる所に、同じ日の同じ時



八　昆布柹

三人　淡路の百姓　上素襖、下半袴、腰帯
丹波の百姓　同じく
奏者　長袴、小さ刀

▲淡路百姓 淡路の國のお百姓。毎年上堂へ、御年貢に柹を持つて上る。そろ〳〵參りませう。まづ、こゝに休みまうせう。▲丹波百姓 丹波の國のお百姓。毎年御年貢に、昆布を持ちてのぼる。そろ〳〵まゐらう。▲淡路 何者やら參る。申し〳〵。▲丹波 何事ぞ。▲淡路 そなたは何所へ行く人ぢや。▲丹波 おれは都へ上る、▲淡路 おれも都へ上る。お供申さう。▲丹波 一段の事ぢや。▲淡路 お供申さう。さきへおぢやれ。▲丹波 さらばおぢやれ。互に百姓でよいつれぢや。そなたはどこのお百姓ぢや。▲淡路 淡路の國のお百姓ぢや。御年貢を持つて上る。そなたはどこの人ぞ。▲丹波 おれは丹波の國のお百姓ぢや。毎年御年貢持つて上る。▲淡路 また下りにも連れだちませう。▲丹波 申合せてつれにならう。▲淡路 參るほどに、身共のまゐる所

貰ひかゝつてから、是非とも貰はねばならぬ。▲山の者 無理な事云ふ人ぢや。ならぬ。▲冠者 どうでも貰はねばならぬ。▲山の者 やる事はならぬ。▲冠者 申し〳〵、取つてござる〳〵 ▲との でかいた〳〵。▲冠者 好い心でござる。▲との 今の刀は。▲冠者 やあ、刀はあちへ取つたと見えました。▲との 心を取つても、刀を取られて、役にたつものか。▲冠者 あまり遠くはまゐるまい。これに待つて、刀の事は云ふにおよばず、丸裸にしてとりませう。▲との 見知つたか。▲冠者 よく存じた。▲山の者 一段よい仕合ぢや。かへりませう。▲冠者 あれ〳〵、つかまへさしられい。▲との がつきめ。やるまいぞ。▲山の者 何事をするぞ。▲冠者 繩を綯ひまする。ようつかまへてござれ。▲との 心得た。▲山の者 はなせ〳〵。▲との おのれ、こゝへはいれ。ふみこかす。▲山の者 きついやつぢや。▲との 早う繩をかけい〳〵。▲冠者 心得ました。かけました〳〵。▲との やい逃ぐるわ。どこへ。やるまいぞ〳〵



七　心奪

三人　殿　長袴、小さ刀
冠者　半袴、腰帯
山の者　括り袴、腰帯

▲との　このあたりの者。今日は東山あたりへ、花の心を取りに參らう。冠者あるか。▲冠者　お前に。▲との　今日は、東山へ花の心を取りにゆかう程に、汝來い。▲冠者　畏つた。▲との　好い心を取りたいな。▲冠者　隨分見繕ひませう。▲山の者　これは東山の者でござる。花の心を約束致いてござる。持つて參らうと存ずる。▲冠者　申し、見事な心を持つてまゐる。▲との　あの心程見事な心は稀な。▲冠者　某貰ひませう。▲との　人の持つてゐるを、聊爾に貰はれはせまい。▲冠者　まづ、貰うて見ませう。▲との　それなら貰うて見よ。▲冠者　丸腰では、いかゞでござる。お腰の物を貸さしられい。▲との　心得た。▲冠者　なう〱、見事な心を持つてござる。▲山の者　人に約束して持つて參る。▲冠者　その心を下されい。▲山の者　これはなりませぬ。▲冠者

花の心—生花の心にする草木
聊爾—ぶしつけの意
丸腰—刀を帶びざること

くまねをする。何ぞ、まねをせぬ事が申したいが。や、思ひだした。最前から何かと云へども、皆某が目ちがひぢや。よう見れば鯛ぢやぞ。▲源藏 また鯛ぢやと云ふわ。▲權兵衛 鯛ならば、鰭を立てさうなものぢやが。▲源藏 これも立てずはなるまい。▲權兵衛 ありや立てたわ。鯛はひれをたてて後は、必ずなくものぢや。なかうぞよ。▲源藏 これはいかな事。鯛のないたを、つひに聞いたことがない。なんとしたものであらうぞ。▲權兵衛 なかずは鐵砲で打殺すが。▲源藏 これは啼かずはなるまい。たひ〳〵。▲權兵衛 あの、横著者。やるまいぞ〳〵。

見えまい事は―反語也見ゆること

これにある。さても見事な盆山ぢや。これにせう。さても〳〵見事なことではあるぞ。▲権兵衛なんぢや。ぬす人がはいつたと云ふか。表へも裏へも人をまはせ。一人もやる事ではないぞ。▲源藏これはなんとしたものであらうぞ。▲権兵衛がつきめ、やるまいぞ。あのちひさい盆山のそとへ隠れたとあつて、見えまい事は。や、月夜かげにすかして見れば、たしかに源藏ぢや。餘の盗人とは違うて、心の優しいところがござる。なぶつて返さうと存ずる。盆山のかげへ隠れたを、人かと思へば、まづ、人ではないぞ。犬ぢや。犬ならば、なきさうなものぢやが。▲源藏これは、なかずはなるまい。びやう〳〵。▲権兵衛びやう〳〵。さても〳〵、ないたり〳〵。犬かと思へば、また犬でもないわ。烏ぢやわ。からすならばなきさうなものぢや。▲源藏これもないてよろこばせう。こかあ〳〵。▲権兵衛あはゝはゝ。▲源藏さても喜ぶわ。▲権兵衛烏かと思へば、又烏でもないわ。猿ぢや。さるならば、身ぜせりをしなてかう事ぢやが。▲源藏これも啼いてよろこばせう。▲権兵衛なかうぞよ。▲源藏きや〳〵〳〵。▲権兵衛あはゝはゝ。最前から、何かと云へども、皆こと〴〵



六　盆山

二人　源藏　半袴、腰帶
　　　樵兵　長袴、小さ刀、太刀持

▲源藏　是は、このあたりに住居致す者でござる。某存じた方に、盆山をあまた持つてゐらるゝ。一つ所望致せども、しわい人でくれられぬ。あまりほしうござる程に、今晩忍び入つて、案內無しに取つて參らうと存ずる。やあさて、しわい人でござる。あの澤山な盆山の內を、一つなどくれられたとあつて、別の事もござるまいに、さても〳〵、しわい人でござる。や、參る程にこれぢや。これはいかなこと。此中作事を致されたと見えて、中々嚴しうて、はいられぬ。裏へ廻つて見やうと存ずる。はあゝ、表の屋作とは違うて、粗相な事でござる。この葦垣をさへ破れば、あなたは壺の內ぢや。まづ、葦垣を破らう。ざく〳〵、めり〳〵〳〵。さても〳〵鳴つたり〳〵。何と、人は聞かなんだかぢやまで。いや〳〵、人音もせぬ。さらばはいらう。さて、盆山はどこにある事ぢやぞ。や、

盆山—箱庭の類
しわい人—吝嗇なる人
作事—造作
壺の內—庭のこと

そら目―うその目

はあ、又目がつぶるゝ。かなしや〳〵。▲女房 おのれ、つぶれもせぬ目をつぶしたと云うて、だまさるゝ事ではないぞ。▲目くら だまさう事ではない。かなしや、眞實つぶれたわ。▲女房 そら目をつぶすか。腹の立つことや〳〵。何がつぶれうぞ。▲目くら いや〳〵、どこがどことも見えぬぞ。ゆるせ〳〵。▲女房 どこへ。やるまいぞ〳〵。▲目くら ゆるせ〳〵。

空誓文―僞の誓約

お見やれ。目があいて、昔よりよい目になつたわ。▲女房やれ〳〵、嬉しや〳〵、めでたい事や。▲目くら されば〳〵、お地藏様の、あらたな御夢想で、そのまゝ目が明かになつておぢやる。▲女房 そなたは五六日も斷食をしておぢやると聞いたによつて、いとしやいとしや、瘠せ衰へて、ひだるからうと思うたが、殊の外色もよし、つや〳〵して戻つたが、合點が參らぬ。▲目くら 目のこの如くに、明かになる程の事ぢやところで、ひだるうも少しもなし。なるほど、ひふもよいと思はしませ。▲女房 いや〳〵、只事ではない。がてんが參らぬ。▲目くら 神佛のおかげぢやところで、たゞ事ではない筈ぢや。▲女房 おのれ、知らぬと思ふか。わ男め、内々聞き及うだ。誰そ、酒や肴、色々の物を持つて行て馳走してがあらう。▲目くら そなたより外に、誰が見舞ひまうせうぞ。わけもない事いはしますな。▲女房 腹だちや〳〵。おれに隱し居つて、さい〳〵寄合うて、知つた〳〵。にくいやつの。はらだちや〳〵。▲目くら さても〳〵無理な事いふ女房ぢや。弓矢八幡、わき心はないぞ。▲女房 いやの空誓文や。ありのまゝに、隱さずとも、云ひ居るまいか〳〵。▲目くら はあ

わせたれ―わせは來るの意ゐはすの略也

うやうがない。留守してたもれ、▲女房まことに、子供の爲ぢや。留守致さう。▲目くら追付まゐる。やがて下向いたさうぞ。▲女房めでたく目があいて、戻らせられい。待ちまするぞ。さらば〱。▲目くら女房どもは、殊の外悋氣深い者で、一日も手ばなれしはせまいと思うたが、嬉しや、合點して、籠れと云ふ。急いで參り、祈誓かけて見まうせう。おれが因果なれば、是非もなし。わづらひならば、お地藏のおかげで、目のあく事もあらう。夥しい參りさうな。これぢや。拜みませう。さらば籠りませう。はあ〱、あら尊や。あらたに御靈夢がござつた。はや目があきました。かたじけない。うれしや、うれしや。内々聞き及うだより、あらたなお地藏樣ぢや。南無地藏〱。かたじけない。女房共も、滿足に思ひまうせう。子供もさぞ〱喜ぶであらう。▲女房こちの人は目が見えぬところで、川上のお地藏樣へ、一七日こもると申して、參られた。心もとなう存ずる。見舞ひませう。何と、目がお地藏樣のお蔭であけかし。これは〱、はや下向さしらるゝ。▲目くらそなたはどこへ。▲女房きづかひに思うて見舞に參る。▲目くらようこそわせたれ。



五　川上地藏

二人　盲　半袴、腰帶
　　　女房　びなん、箔、さげ帶

▲目くら これは、このあたりに住む者ぢや。ふと目をわづらうて、盲になつた。迷惑な事ぢや。川上の地藏へ、いかやうの事も祈請をかくるに、かなはぬ事はないと申す。目の願に參らう。女ども、ゐるか〳〵。▲女房 何事でおぢやるぞ。▲目くら もはや、目の養生、色々とすれども、よくならぬ。この上は、神佛を賴うで見うと思ふが、何と思ふぞ。▲女房 いかにも、神佛次第が、好うおぢやらう。▲目くら 川上の地藏へ、いかやうの願をかけてもかなふと、人々のおしやる程に、七日籠つて、目のあくやうに致さう。▲女房 いかにも〳〵、尤でござる。こなたの目の見えぬ事が、朝夕、妾も苦になりまする。▲目くら 目が見えねば、死んだがましぢや。▲女房 まづ、お地藏樣へ七日籠らせられい。おれもつれだつて籠りまして、湯茶でも進ぜう。▲目くら いや〳〵、そなたが籠つては、子供をしや

たさよ。なんぼう。▲大名やい、そこなやつ。▲次郎はあ。▲太郎これは何としたものであらう。▲大名まだ、おのれはそれに居る。▲二人ゆるさつしやれ〳〵。▲大名やるまいぞ、〳〵。

わごれ—わごり 上に同じ汝也

下されたれども—戴きたれども の意

一口食へども云云—曲にかゝる

をかける。そちらを持て。▲次郎 心得た。▲太郎 ぐわらり。▲次郎 ちん。▲太郎 さて、おかへりなされたらば、泣いて居よ。▲次郎 泣けばよいか。▲大名 只今罷帰る。やい〳〵、もどつたぞ。▲二人 泣け〳〵。▲大名 心許ないが、何事ぢや。▲太郎 次郎冠者申し上げ。▲次郎 わごれ、申し上げさしませ。▲太郎 お留守を大事と存じて、次郎冠者と相撲をとりましてござれば、次郎冠者は手とりでござり、私が小股をとつてこかしますを、こけまいと存じて、掛物に取付いたれば、あのやうになりました。▲大名 これはいかな事。あれは、みどもが秘藏の觀音を、あのやうにし居つた。▲次郎 かへしさに、天日の上へ投げられまして、あのやうに微塵になりました。▲大名 これはいかな事。おのれをなんとしたものであらうぞ。▲太郎 かやうに大事の御道具を損ひまして、生けてはおかせられまいと存じて、附子を食べて死なうと存じて、下されたれども、まだ死にませぬ。▲大名 おのれ等、今のまに滅却せうぞ。▲太郎 一口食へども、まだ死なず。▲次郎 二口食へども、死なれもせず。▲太郎 三口四口。▲次郎 五口六くち。▲二人 十口あまり、皆になるまで食うたれども、死なれぬ命、めで

牧溪和尚—宋人範無準の弟子

大天目—茶の湯の茶碗

砂糖ぢや。▲太郎 なか〳〵。▲次郎 どれ〳〵。▲太郎 まづ食うてみよ。▲次郎 心得た。むゝ、まことに砂糖ぢや。▲太郎 これを食はすまいと思うて、ぶすぢやの、毒ぢやのとおしやつた。▲次郎 汝ばかり食てよいものか。▲太郎 それならば、ちとやらう。▲次郎 そのやうに取らずとも、ちつと取れ。▲二人 さて〳〵うまい事かな。▲太郎 ほゝう、よい事めさつた。頼うだお方の、ぶすぢやの、毒ぢやのとおしやつたに、皆おくやつたと、頼うだお方のお歸りなされたらば申し上ぐる。▲次郎 みどもが、おけと云うたに開けた。某がまつすぐに、申し上ぐる。▲太郎 やい〳〵、これはじやれ事ぢや。この言ひわけは、あの掛物をやぶればよい。▲次郎 心得た。さらり〳〵。▲太郎 よい事めさつた。あれは頼うだお方の、牧溪和尚の墨繪の觀音で、御祕藏なされたものを、あの樣にめさつた。お歸りなされたら、きつと申し上ぐる。▲次郎 破れと云うたによつて、やぶつた。みどもが申し上ぐる。▲太郎 やいやい、これもじやれ事ぢや。▲次郎 さて、この言ひわけどもは、何とするぞ。▲太郎 この大天目を破れば、いひわけが立つ。▲次郎 いかな〳〵、また迷惑をさせうで。▲太郎 身共も、手

どつみりとして—どろ〳〵として也

領じられたか—取付かれたかして

名殘の云々—曲にかゝる

いぞ。▲次郎をよく〳〵、そなたが供に行けば、みどもが留守をする。身共が供に行けば、そなたが留守をする。今日のやうな云ひあはせた留守はあるまいぞ。そりやあ。▲太郎何事ぢや。▲次郎ぶすの方から、風が來た。こゝにてはなせ。▲太郎みどもは、あのぶすを見やうと思ふ。▲次郎やくたいもないことを。おけ。▲太郎あの方から吹く風が、あたらねば苦しうない。扇いでくれ。▲次郎心得た。▲太郎扇げ〳〵。▲次郎心得た。ぬかるな。▲太郎ぬかる事ではない。さあ、紐は解いたぞ。さて、蓋をあけうほどに、扇げ。▲次郎心得た。▲太郎さて、蓋をあけたぞ。身共はあの附子を見て來う。▲次郎一段とよからう。▲太郎やいやい、見て來たわ。▲次郎いか樣なものぢや。▲太郎なんぢやは知らぬが、黒い物がどつみりとしてある。旨さうな物ぢやほどに、みどもは食うて見やう。▲次郎やくたいもない事を。おけ。▲太郎みどもは、ぶすに領じられたか、食ひたうてならぬ。行て食て來う。▲次郎みどもが居るからは、やる事はならぬ。▲太郎名殘の袖をふりきりて、附子の側へぞあゆみ行く。太郎ぶすを食ふ。むゝ。▲次郎やい太郎冠者、なんとした。▲太郎砂糖ぢや。▲次郎なんぢや。



附子ー毒物也、ぶしとも云ひとりかぶとの根に生ず

四　附子

三人
　大名　長袴、小さ刀
　太郎冠者　半袴、腰帯
　次郎冠者　同じく

▲大名　このあたりの大名でござる。今日はさる方へ参る。太郎冠者を呼び出し、申し付ける事がある。太郎冠者あるか。▲太郎冠者　はあ。▲大名　ゐたか。▲太郎　お前に。▲大名　念なう早かつた。次郎冠者も呼べ。▲太郎　畏つてござる。次郎冠者召すわ。▲次郎冠者　心得た。お前に。▲大名　汝等を呼び出すは別の事でない。今日はさる方へ行く。兩人共に留守をせい。▲冠者二人　畏つてござる。▲大名　それに待て。▲二人　はあ。▲大名　やい、このあなたに、附子がある程に、さう心得。▲二人　それならば、兩人共にお供致しませう。▲大名　さうではない。このあなたに、ぶすと云うて、毒がある。この方から吹く風にあたつてさへ滅却する程に、さう心得。▲二人　畏つてござる。▲太郎　やい〳〵、次郎冠者、今日のやうなおるすはあるま

▲商人 このめでたい市に、女は一のたなにつけられますまい。某をつけて下されい。▲目代 いや〳〵、勝負でなければならぬ。▲商人 某は腕押をしませう。▲目代 やい〳〵、腕押をせうと云ふわ。▲女 女ぢやと思うて、うで押しを申すか。妾もいたしませう。▲目代 さあ〳〵、うでおし。兩人ながら、出てせい。▲二人 心得ました。▲女 勝つたぞ〳〵。▲目代 やい〳〵、あまりぢや。何ぞ、ま一度勝負せい。▲商人 脛押をいたしませう。▲目代 さあ〳〵、すねおしを今一度せい。▲女 心得ました。▲商人 かつたぞ〳〵。▲女 今のでは知れぬ。相撲をとりませう。▲目代 一段よからう。さあ、すまふを取れ。▲商人 畏つた。▲女 お手つ。勝つたぞ〳〵。▲商人 やい〳〵、今一番とれ〳〵。（追ひかけてはいる。）

ぬ。これはさて、女が早う來て、一の棚についてゐる。致しやうがある。まづ、ちとねいりませう。▲女やい〳〵。▲商人はあ。▲女おぬしは、おれが棚のさきになぜ居るぞ。▲商人目代殿かと思うて肝つぶした。おれが一のたなについてゐる。▲女おぬし退かぬか。引きたてうぞ。▲商人これは何事をするぞ。▲女女ぢやと思うて、にくいやつの。▲目代やい〳〵、兩人は何事を云ふぞ。▲女妾がとうから參つて、一のたなについてゐまする。あの男めが、わたくしの棚先にあとから參り、居るほどに、のけと申せば、のかぬ所で、かやうにやかましう申す。目代殿、きつと仰せつけられて下されませい。▲目代あれが口をも、きいてからの事にせう。やい〳〵、汝は何と。▲商人私が夜のうちから參り、一のたなについてゐますれば、のけと、あの女が云ふによつて、のくまいと申す事でござる。▲目代證據のない事ぢや。この上は、勝負をさして、勝つた者を一のたなに云ひ付けう。▲女申し、女は門開きと申して、めでたいものでござる、わらはをつけて下されい。▲目代いや、おれがまゝにもならぬ。勝負をせい。やい〳〵、何ぞ勝負、かちの方を、一のたなにつけう。



連尺―荷物を附けて負ふ具

一の棚―先頭の店

三　連尺

三人　目代　長袴、小さ刀
　　　女　びなん、繒、さげ帯
　　　商人　半袴、腰帯

▲目代　この所の目代。この所御富貴につき、新市を立ていとの御事故、高札を上ぐる。これに打ちまうせう。▲女　わらはは此邊にひとりずまひして、酒を賣る者ぢや。この所御富貴ゆゑ、新市が立ち申する。一の棚を領じたらば、するゑ〳〵まで、つけて下されうとおほせらるゝ。妾一の棚を持ちませうと思うて、まだ夜の中に出た。參る程に市場ぢや、これが一の棚ぢや。これに居ませう。夜があけぬ。ちとゐねむりませう　▲商人　これはこの邊にすむ商人でござる。この所御富貴について新市が立つ。高札に、何なりとも一の棚についた者を、するゑ〳〵までおつけなされませうとの事ぢや。早う參り、一の棚についておきまうせう。今こそこの體なりとも、子どもの代には、綾錦を賣りませうも知ら

▲しうと　いかばかり神(かみ)もうれしとおぼすらん。▲むこ　やはちがはらで。▲しうと　何(なん)と〳〵。▲むこ　やはたのまへに。▲しうと　出來(でき)てござる。これ〳〵、今(いま)のあとは。▲むこ　今のあとは、やはたのまへに。▲しうと　出來(でき)てござる。これ〳〵今(いま)のあとは。▲むこ　今のあとは、やはたのまへに。▲しうと　それは合點(がてん)ぢや。そのあとは。（むこ二三度も同じこといふ。をさめに、）▲しうと　八幡(やはた)の前(まへ)に〳〵。▲むこ　胴(どう)龜(がめ)こた〳〵。▲しうと　とつとと去(い)なしめ。

放生川―石清水八幡宮の下を流る

石―一首を間違ふ

それならば、ようござつて下されい。某は早参る。▲男 心得た。▲むこ やれ〳〵うれしや、一藝習うた。早う参り聟にならう。これぢや。お案内も〳〵。▲冠者 誰そ。どなたでござる。▲むこ 高札のおもてについて参つた。▲冠者 聟殿か。▲むこ なか〳〵。▲冠者 申し、むこどののお出でござる。▲しうと 高札の通一藝ござるか、問へ、▲冠者 畏つた。申し、一藝ござるかと申さるゝ。▲むこ 弓を仕つる。▲冠者 弓を射ると仰せらるゝ。▲しうと お手際を見たうござる。あたり近い放生川へ参れば、水鳥も翔鳥もある。お供申したいと云へ。くわじのやそ通いふ。▲むこ なか〳〵、おとも申しまゐりて、手元を見せませう。▲冠者 なか〳〵、おともなされませうと仰せらるゝ。▲しうと 放生川へおいでなされうと仰せらるゝ。満足に存ずる。▲むこ 何がさて、参りまうせう。▲しうと これ〳〵、あの三つまるる眞中を射さしられい。▲むこ 心得ました。射て見せませう。射る。しろと笑ふ。▲むこ 申し〳〵、笑ふまい〳〵。石が浮みました。▲しうと やあ〳〵、何と〳〵。▲むこ 一首うかみました。▲しうと 何と。▲むこ いかばかり。▲しうと 面白い。▲むこ 神けにおしやる。▲しうと 何ぢや。▲むこ 神もうれしとおぼすらん。

はちこ弓ー雀小弓の類か

手元ー手際

藝習ひに參つた。教へて下されい。▲男 そのやうに、通りがけに一藝は、習はるゝものではない。▲むこ それならば、高札を立てて參らうか。▲男 引いた物を、立てに行くも面倒な事ぢや。何ぞ、ちと前かどに知つた事があればよいが。鼓は。▲むこ いや〳〵。▲男 鞠は。▲むこ いかな〳〵。▲男 鐵砲は。▲むこ 人のをきいてさへ、胸が躍りまする。▲男 弓は。▲むこ 弓こそちひさい時からはちこ弓の射手にて、好きでござる。▲男 いや、夫ではない。本弓の事ぢや。▲むこ 夫は手につかまへた事もござらぬ。▲男 思ひよつた。弓も貸してやらう。弓の射手になつて行かしませ。▲むこ まづ忝うござる。▲男 手元を見せうと云うて、水鳥か、翔鳥を所望せう所で、射ても中りはせぬであらう。▲むこ 側あたりまで矢が參るまい。▲男 その時皆々笑はう。その方が、まづ〳〵笑はしますな。一首詠みまうせうと云うて、いかばかり神もうれしとおぼすらん、八幡の前に鳥居立つたりと、よましませ。▲むこ いかな〳〵、詠む事はなりませぬ。▲男 頭字を一つ宛いうてはなるまいか。▲むこ それ、なりませう。▲男 それがしも、見物の内にまじり居て、そばから、頭字を云うてやらう。▲むこ



八幡聟―一名八幡の前

八幡―山城

引いて―募に應ずるため札を引取る也

二　八幡聟

四人

聟　烏帽子、素襖、袴、小さ刀、弓持
男　長袴、小さ刀
舅　同じく
冠者　半袴、腰帶

▲しうと　八幡の在所の者。美人の一人娘を持つた。一藝ある人を、聟にとりまうせうと、高札をあげた。▲冠者　冠者ゐるか。▲冠者　お前に。▲しうと　高札について、聟のわせたらば、こちへ云へ。▲冠者　畏つてござる。▲むこ　このあたりの者。やはたの里に、美人のひとり娘をもつた人がある。一藝ある者を聟に取らうと云うて、高札を打たれた。まづ某が引いてござる。このあたりに萬能足らうた人がある。參り、一藝習うて、聟入いたさう。何と敎へてたもればよいが。これぢや。お案内も。▲男　誰そ。どなたぞ。▲むこ　某でござる。▲男　何と思うて來たぞ。▲むこ　只今參ること、別の事でもござらぬ。八幡に、一藝ある者を聟にとらうと申して、高札がありました。某の、則ち高札を引いてござる所で、何ぞ一

物とー曖昧に詞を濁らす也
やくたいもないー埒もない

なりまして、鎌首をもつたてまして、各これにござれども、私は夜話に参るによつて、このお座敷をいぬるですと申してござる。▲主 いぬるです。くちなはが秀句に、いぬる。いぬ。これは犬の秀句ぢや。くちなはの秀句を、早う云へ。▲冠者 くちなはのしうくは、物と。▲主 何と。▲冠者 石藏の中へ、ぬら〳〵ですと申してござる。▲主 あの、やくたいもない。しさり居ろ。▲冠者 はつ。▲主 えい。▲冠者 はつ。

ぬるです。犬が秀句に、いぬるですは、でかいたな。さて何が云うた。▲冠者 猿が申しますは、各これにござれども、私は内容を得ましたによつて、この御座敷をさるですと申してござる。▲主 さるです。きやつは云はうやつぢやわ。人間半分の智恵を持つたと云ふ程に、秀句ほどの事を、云ひかねはせまいが、きやつが所への内容はたれぢや。主このところわちふ。▲冠者 それが、しれものでござる。▲主 さて、何が云うた。▲冠者 かいるが申しますは、おのおのもお立ちなされた程に、私もこのお座敷をかいるですと申してござる。▲主 かいるです。きやつが小いなりをして、大きな者にも負けじ劣らじと、目をしよぼくとして、かいるですは、でかいたな。さて、何が云うた。▲冠者 いえ、もはやござりませぬ。▲主 まだ、何やらあつたやうなが。それく、くちなは。▲冠者 まことに、くちなは。▲主 くちなはが秀句は、さぞ、生長い秀句でがなござらう。▲冠者 これはいかなこと。人の話で承つたれば、くちなはの秀句を、はつたと忘れた。なんとしたものであらう。▲主 やいく、くちなはは何と云うた。▲冠者 くちなはもでかしましてござる。まづ、きりよくと輪に

親子てあらう事わ—反語也親子ならずの意
こびたもの—かはつた物
かいる—刋本のまゝ
くちなは—蛇のこと
秀句—口合也洒落也

か。▲冠者 まだめづらしい事がござりました。▲主 それ〳〵、それを聞かうと云ふことぢや。▲冠者 神前の傍に、大きな芝がござつた。これにこびたものが集りました。▲主 何が集つたぞ。▲冠者 まづ、龍。▲主 龍。▲冠者 犬。▲主 犬。▲冠者 猿。▲主 猿。▲冠者 かいる。▲主 蛙。▲冠者 くちなは。▲主 くちなは。▲冠者 この者共があつまりてござる。▲主 これは早速不審があるわ。世の世話に、中のわるいものを犬と猿とのやうなと云ふが、中のわるい體は見えなんだか。▲冠者 いや、別に中のわるい體も見えませんだが、この者どもが集つて、何ぞ談合を致すと見えまして、立ち様に、秀句を申して立ちましたが、これがなか〳〵面白い事でござりました。▲主 それは何と云うたぞ。▲冠者 まづ龍が申しますは、各 これにござれども、私は所用御座候によつて、この御座敷をたつですと申してござる。▲主 なんぢや、龍が秀句に、この御座敷をたつです。たつです〳〵。龍が秀句に、たつですはでかいたな。▲冠者 でかしましてござる。▲主 さて何が云うた。▲冠者 犬が申しますは、各 これにござれども、私は夜話に参るほどに、この御座敷をいぬるですと申してござる。▲主 い

いかい—大層なる意

ちゝ〳〵—啼聲を父々の意に取る

こかあ〳〵—啼聲を子かあの意に取る

むざとした事—取りとめ無き事

は、變らせられてござるによつて、すはお手打にもあひますかと存じて、身の毛をつめて居りました。▲主 さうあらう。身もいつもよりも腹が立つた。以來をたしなめ。▲冠者 畏つてござる。▲主 さて身共は、つひに竹生島へ參らぬが、いかい參りか。▲冠者 されば、まゐり下向の人、峰から谷、谷から峰へ、おしも分けられた事ではござりませぬ。▲主 何が天女の御事ぢやもの、さうあらうとも。さてめづらしい事はなかつたか。▲冠者 別に珍しい事もござりませなんだが。申し、私は只今まで、雀と烏とは別の鳥かと存じて居りましたが、親子でござる。▲主 それはどうした事ぢや。▲冠者 まづ參りまする道に、大木がござつた。片枝には雀がとまります、片枝には烏がとまつて居りましたが、雀が烏の側へまゐりて、ちゝ〳〵と申してござれば、烏が雀をきつと見まして、こかあ〳〵と申してござる。すれば、疑ふ所もない親子でござる。▲主 さて〳〵汝はむざとした事をいふ。雀のちよと囀り、烏のこかあと鳴くは、皆面々の囀りやうぢや。それが、自然同じ木にとまり合はせたとあつて、親子であらう事わ。そのやうな事でなしに、珍しい事はなかつた

竹生島—琵琶湖中に在り景行天皇の時湧出せりと云ふ

天女—竹生島には辨財天を祀る女神也

なたやら御存じあつて、表に案内がある。案内は誰そ。▲主 ものも。▲冠者 どなたでござる。▲主 しさり居ろ。▲冠者 はつ。▲主 や、俄の慇懃迷惑いたす。お手あげられい。▲冠者 これは何とも迷惑に存じます。▲主 おのれは此中誰に暇を乞うて、いづかたへ行てあるぞ。▲冠者 さればその義でござる。御暇の義を申さうとは存じてござれども、一人召使はるゝ下人の義でござれば、申上げたりとも、やはかお暇をくだされまじいと存じて、忍うで竹生島詣を致いてござる。▲主 やら珍しや。一人召使はるゝ下人が、竹生島詣をすれば、主に暇を乞はぬ法ですか。▲冠者 はつ。▲主 えい。▲冠者 はつ。▲主 憎いやつの。忽ち折檻の加へうと存じて、これまでは立越えてござれども、竹生島詣をしたと申せば、一つは天女へのおそれもあり、この度はゆるさうと存ずる。やい。▲冠者 はつ。▲主 忽ち折檻を加へうと思うて、これまでは來たれども、竹生島詣をしたとあれば、一つには天女へのおそれもあり、この度はゆるす。そこをたて。▲冠者 それはまことでござるか。▲主 弓矢八幡助くるぞ。▲冠者 やら心安や。▲主 さて今の間は、窮屈にあつたか。▲冠者 いつもの御氣色と



奇特―不思議

巻之三

一　竹生島詣

二人　大名　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴、腰帯

▲主　これは、このあたりに住居致す者でござる、某一人召使ふ下人が、此中暇も乞はいで、何方へやら参つてござる。聞けば、夜前罷帰つたとは申せども、未だ某に目見えを致さぬ。あまり腹の立つ事でござるほどに、今日きやつが私宅へ立越え、たばかり出いて、きつと折檻の加へうと存ずる。まづ急いで参らう。やあさて、憎い事でござる。某に暇の義を申してさへござらうならば、いか程なりとも取らせませうに、にくい仕合でござる。や、まゐる程にこれぢや。某が聲を聞き知つて、留守を使ふでござらう。作聲を致して呼び出さうと存ずる。ものも。案内も。▲冠者　やら奇特や。夜前罷り帰つたを、はやど

ぜひやな―是非無やか
乳切木―太く長き杖

くはたせく。▲太郎 文七樣は、内にござりまするか。ござるかく。▲女房 はらだちや、文七めはうちにゐるか、出よ、はたすと云へ。▲太郎 いやく、氣い短い人ぢや。▲文七 留守留守。▲太郎 又留守ぢや。おのれめ、内に居る事ならば、その儘刀で手も足も、切つてのけまうせうもの。▲女房 よう云はしました。▲太郎 もはやない。この有樣を、いざ謠にうたうて宿へ歸らう。▲女房 それがよからう。▲太郎 こゝやかしこ、訪へどもく、皆々留守にてぜひやな。諍果ての棒乳切木と云ふ事も、かゝる事にてあるやらむ。▲女房 いとほし人ぢや。負うて往なう。

はたせ—殺せの意

▲太郎かなしや〳〵。もはや參るまい。助けて下され〳〵。▲女房妾が來たわ〳〵。▲太郎女房ども、何と思うておぢやつたぞ。▲女房そのやうに蹈まるゝものか〳〵。▲太郎いや〳〵、ふまれはせぬ。雪駄の紋所をつけて下された。▲女房おのれ、はたせ〳〵。▲太郎女房どもは命をたくさんさうに、おれはならぬ。其方頼む。はたしてたもれ。▲女房はたしに行かぬか。もはや宿へよせぬぞ。女のはたしに行くと云ふことがあるか。▲太郎それならば、はたしに參らうが、一人はゆかれまい。▲女房おれもつれだち申する。▲太郎その方が行けば、きつぱりと、はたしに行くぞ〳〵。▲女房この刀をさいて棒を持つて、先へゆけ〳〵。▲太郎誰が所へ參らうぞ。市助が所はこゝぢや。▲女房押入つて、はたせ〳〵。▲太郎市助樣はお宿にか。▲女房めと云へ〳〵。樣と云ふ事があるか。▲太郎つつと氣のはやい人ぢや。まづ待たしめ。▲市助留守々々。▲太郎留守ぢやわいの。るすはしやうことがない。内にゐるならば、こみ入り、この棒で臑を薙ぎ折つて、腹へ上つて蹈み殺してやらうもの。腹だちや。▲女房よく云はしました。文七が所へ行け。▲太郎心得た。文七はこゝぢや。▲女房早

立花—生花

話がしまぬ—話が熟せぬ也

心得さしられい。あれがさし出るに迷惑つかまつる。▲太郎 このあたりに住む、太郎と申す者ぢや。誰が伊勢講の當人ぢや。使をおこさぬ。參らう。これ〳〵、おれが所へ使がまゐらぬ。忘れてか。冠者が失念か。掛物をいがめてかけておいた。▲主 冠者、太郎にふるまひをだす時、よびにやらう。あちへ行けと云へ。▲冠者 畏つた。▲太郎 太郎々々。▲太郎 何ぢや。▲冠者 ふるまひの時、呼びにやらう。あちへいておぢやれ。▲太郎 冠者知るまい。すつ込うで居よ。立花をしたが、誰が立てたぞ。つかみ込うでおいた。次第がわるい。おれにと云はせいで。▲主 太郎々々。▲太郎 何でござる。▲主 その方が座敷にゐれば、話がしまぬ。後に。ふるまひの時出よ。▲太郎 いつも出る。出ねばならぬ。▲客 いや〳〵、皆々のいやとおしやる。そちへいけ。どれ〳〵も太郎が參つたらば、寄つて蹈みまうせう。▲客 好うござらう。▲太郎 皆々はおれをなぜに嫌ふぞ。▲客 さあ〳〵。皆々太郎を蹈む。▲太郎 あゝかなしや。助けて下され。重ねて參るまい。▲客 おのれ〳〵。▲太郎 ゆるして下され〳〵、▲太郎が女房 妾が男を、寄つてふみ殺したと云ふか。腹だちや〳〵。男、このなりは〳〵。



伊勢講―伊勢參宮の講社

十乳切木

七人
太郎　上素襖、下半袴ハ腰帯
女房　びなん、箔、さげ帯
主　長袴、小さ刀
冠者　半袴、腰帯
客三人　長袴、小さ刀

▲主 この在所の者。伊勢講の當にあたつた。皆々呼びませう。冠者。▲冠者 お前に。▲主 伊勢講ぢや。皆々お出なされませいと、申して呼びに行け。▲冠者 心得ました。どれから參らうぞ。どなた樣へから參らう。申し、ござるか〳〵。▲客 誰ぢや。冠者か。▲冠者 もはや皆々樣にお出なされて下されいと申さるゝ。▲客 どれ〳〵もこゝ許へ來てぢや。早つれだちて參らうと云へ。▲冠者 やがて待ちまする。▲客 心得た。皆々樣呼びにまゐつた。ござれ〳〵。只今お使過分にござる。▲主 揃うて御出、滿足つかまつる。通らしられい。▲客 さあ〳〵、どれ〳〵もこちへ寄らしられい。▲主 今日は太郎めに知らせぬ。さやうに

ていどーきつと

そのつれー其樣な事

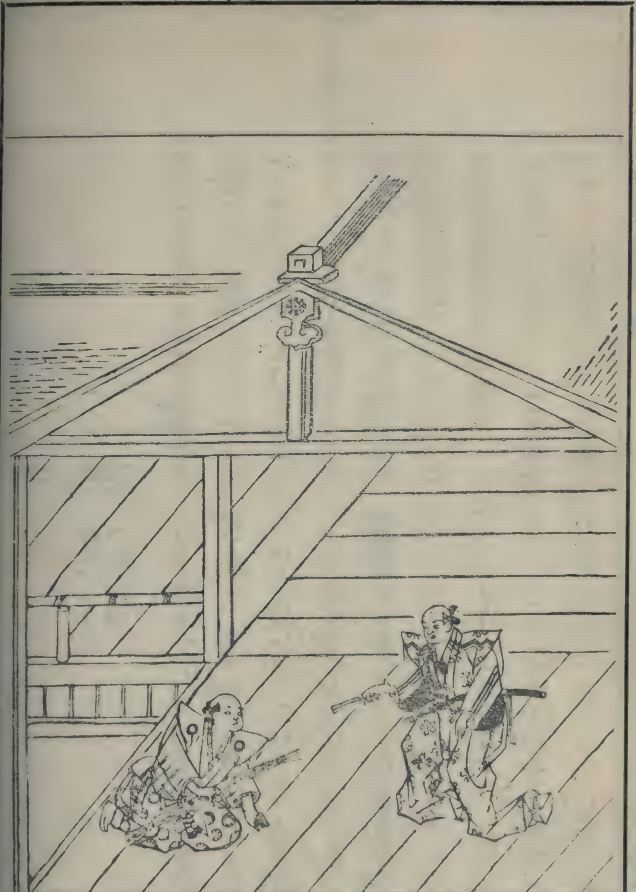
だしいめにあひました。その上ぢやところで、びつくりと仕つた。▲との　たしかに證據があるが、いつはりを云ふ。▲冠者　證據はござるまい。▲との　ていどか。▲冠者　なか〳〵。▲との　これ〳〵、これぢや。▲冠者　申し〳〵、富貴なお方ぢや所で、このやうな物を數を持つてござると存ずる。▲との　まだそのつれ云ふか。憎いやつの。▲冠者　あゝ免させられい〳〵。▲との　どこへ。やるまいぞ〳〵。

一文字―眞直のこと

まうせうと思うて、眞中へ取込められながら、おれをえ知らぬか、頼うだ者の御内に隱れもない冠者、一人ものがすまいと申してござれば、長刀の、槍のと申して、手に〳〵持つてかゝる。中にもとびがねに、近頃迷惑仕つて。▲との　とびがねとは。▲冠者　かう〳〵かまへて、つう〳〵とおこすものよ。▲との　それは弓であらう。▲冠者　されば、弓をおこしましてござる。槍も長刀も切り折つてござる。▲との　手柄をしたな。▲冠者　その持つた物は何ぞと申すところで、これは黄金作の太刀ではない、なまぐさ物ぢやと申したれば、それをおこすまいか、射殺せと申すところで、やるまいとは思へども、こゝで死すれば犬死ぢや、主の用にたゝねばならぬ、是非に及ばぬ、乞食に取らしたと思ふと申して、四五十人のなかへやつて一文字にかへりました。手柄を致いてござる。▲との　あの臆病者、その太刀を取つたは某ぢや。▲冠者　こなたはいつはりを仰せらるゝ。▲との　おのれめは、大佛よりおびたゞしいのなどと云うてこはがる。おれが、がつきめ。（こゝにて冠者びつくりする・）それ見よ、今もびつくりするわ。▲冠者　落武者と申すは、薄の穗にもおぢると申すが、定ぢや。おびた

冠者ひとり拾はせられたー殺さるべきもの助かりたれば然か云へる也

なか參る事はなるまい。太刀を人に取られぬ内に、後から參り見ませう。はあ、こゝに怖しがつて獨言を云うてゐる。嚇しませう。▲冠者 南無三寶々々〳〵々々、化物がある。あゝ大佛のせいより夥しい。▲との がつきめ〳〵。▲冠者 あゝ悲しや〳〵、助けて下され。▲との おのれが持つた物は何ぢやぞ。▲冠者 これは黃金作の太刀ではござらぬ。腥物でござりまする。▲との いや〳〵、腥物ではあるまい。僞いうたら仕樣があるぞ。▲冠者 あゝ、ありのまゝ申しませう。助けて下されい。黃金作の太刀でござる。▲との 其太刀そこに置いて行け。▲冠者 畏つてござる。則ちこなた樣へ進上申しまする。命の義をお助けなされませい。▲との 命助くる。早う去ね〳〵。見るな〳〵。▲冠者 あゝ、見ませぬ〳〵。やれ〳〵、こはや〳〵。急いでかへりまうせう。ござるか〳〵。▲との 冠者歸つたか〳〵。色が惡うをかしい顏ぢや。▲冠者 好いお目かな〳〵。なう〳〵、怖しいめに會ひました。冠者ひとり拾はせられた。▲との 何とした事に會うたぞ。▲冠者 大佛あたりへまゐると、四五十人して某をとりまはして、おひはぎどもが。▲との して、なんと。▲冠者 常〳〵の手柄のほどを見せ



九　腥物

なまぐさ物―魚類

二人　殿　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴、腰帯

▲との　このあたりの者。冠者をるか。▲冠者　おまへに。▲との　伯父ぢや者から、黄金作の太刀を借つた。返進を仕ると云うて、持てゆけ。▲冠者　道が不用心にござる。某はなりますまい。▲との　それで、太刀と見えぬやうにして置いた。これ〳〵。▲冠者　誠に太刀とは見えますまい。なまぐさ物の様にござる。▲との　人が問うたらばなまぐさ物ぢやと云へ。▲冠者　心得ました。あの道は不用心なが、迷惑ながら参らう。これから先が盗人のある所ぢや。はや日が暮れた。いかう暗うなつた。これ〳〵用心して通るものぢや。かまへて側へ寄るな。あゝ何者やら二三十人ゐる。やい〳〵、そこを退いて、通せ〳〵。物を云うてくれい。やい〳〵〳〵。これはいかな事。こはい〳〵と思ふところで、人かと思うたれば杌ぢや。肝つぶした。この先が悪い所ぢや。▲との　やれ〳〵、冠者めを使にやつた。なか

こくわつこ〱〱。やるまいぞ〱〱。心得(こゝろえ)た〱〱。



八　鶏聟

三人　舅　長袴、小さ刀
冠者　半袴、腰帯
聟　烏帽子、素襖、袴、小さ刀

▲しうと これはこのところの大名。けふは聟入がある。太郎冠者あるか。▲冠者 お前に。▲しうと 今日は聟殿のおいでぢやほどに、お出の時分、此方へ申せ。えい。▲冠者 はあ。▲むこ これは花聟でござる。今日聟入致さうと存ずる。舅はこれでござる。ものも。▲冠者 や、たそ。どなたでござる。▲むこ むこです。▲冠者 はあ。これへお通りなされませ。▲むこ 心得た。うたひ 聟は舅のうちに行き、〳〵、お座敷までは、歴々なりとて、かゝりのもとにぞ立つたりけり。くわつ〳〵〳〵。うたひ 舅はこれを見るよりも、廣縁より飛んで下り、羽だたきしてぞ立つたりけり。▲冠者 申し、何事でござりますぞ。▲しうと やい、總じて聟の恥は舅の恥、舅の恥は聟の恥、構へて笑ふな。▲冠者 はあ。また前のとほり、烏の蹴合ふまねする。にはこくわつこ

かゝりー蹴鞠の庭
構へてー必ず也

難波津に云々――この歌古今集序に見ゆ王仁が仁徳天皇をよそへて詠める歌といふ

事を笑ふ人ぢや。▲孫一 これはしやくやくが出たわ。▲平八 芍薬の花はみごとなれども、歌によみませぬの。▲孫一 歌によみましたとも〳〵。難波津にしやくやくの花ふゆごもり、今をはるべにしやくやくの花と、詠うでござる。▲平八 その歌某も知つた。咲くやこの花ふゆごもり、今を春べと咲くやこの花でこそあれ。しやくやくのはな〳〵。笑ふ。▲孫一 その方は笑ふか。▲平八 笑はいでなんとせうぞ。をかしや〳〵。▲孫一 そのやうに笑はゞ、相撲を一番まゐらう。▲平八 相撲取りには來ぬ。野遊山に參つた。▲孫一 でも、そのやうに笑ふからは、ぜひとも一番相撲を取りまうせう。▲平八 その方と取つても、あまり負くることでもあるまい。所望ならば一番まゐらう。▲孫一 さあ〳〵、一番取りまうせう。▲平八 お手つ。勝つたぞ〳〵。▲孫一 一番とつては知れぬ。今一番とれ〳〵。



歌相撲—一名土筆

眞葛が原に云々—騒ぐなりを撥音にて云へる也慈圓大僧正の歌にて新古今集に出づ上句は「我戀は松を時雨の染めかねて」

七　歌相撲

二人　平八　長袴、小さ刀
　　　孫一　同じく

▲平八 これは、このあたりの者。いつも春になれば、つれを誘ひ、方々へ遊山花見などに参る。好い日和ぢや。いつも孫一殿を誘うて参る。宿におぢやらうか知らぬ。こゝぢや。ものも。お案内。▲孫一 誰そ、たれぞ。▲平八 某ぢや。いつものごとく、野へゆさんにござるまいか。▲孫一 なか〳〵、毎年の如く、つれだちまうせう。▲平八 野邊へ遊山に出でては、草も青う見えて、春めいた事の。▲孫一 心がはれ〴〵として、ようござるぞ、▲平八 つく づくしが生えました。▲孫一 まことにおびたゞしい事ぢや。▲平八 某は一句思ひつけた。▲孫一 聞きませう。▲平八 つく〳〵の首萎れてぐんなり。▲孫一 ぐんなり〳〵。笑ふ。▲平八 何がをかしいぞ。▲孫一 ぐんなり〳〵。▲平八 ぐんなりは、昔もあつた事ぢや。眞葛が原に風さわぐんなりと云ふ名歌もあるぞ。▲孫一 風騒ぐなりとこそ云へ。ぐんなり〳〵。▲平八 異な

られい。▲つれ さあ〳〵塗つてたもれ。▲ぬしや 任さしられい。塗りまする。少しの内、風呂へ入れまうする。▲男 何と、手間がいるか、▲ぬしや 只今の内に干まする。▲男 いかう窮屈なことぢや。▲ぬしや 少しの内でござる。▲つれ 何と、まだか。▲ぬしや もはやようござる。はあ、漆は干ましたが、綴ぢ附き申した。▲男 これでは何ともならぬ。離してたもれ。▲ぬしや 囃し物で、離さずはなりますまい。▲つれ いかやうともして、早うはなしくれさしめ。▲ぬしや 追付はやしもので、はなしまうせう。▲男 早う〳〵離してたもれ。▲ぬしや 日本一のはや漆、塗ることは塗つたれども、はなすやうを知らいで、はやし物で、はないた。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。四五返もはやして、二人のなかへ棒をいれ、いろ〳〵しまひして、ほつぱいひろろひと云うて、三方へこくる。



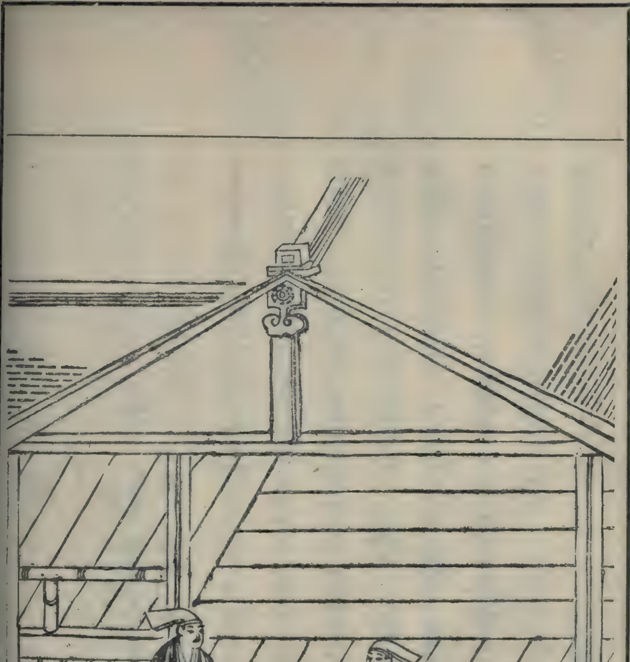
六　早漆

三人
　男　烏帽子、上素襖、下半袴、腰帯
　伴れ　同じく
　塗師屋　羽織、半袴、腰帯

▲男 人の御存じの者。年の暮ぢや。歳暮に參らう。申し、ござるか。▲つれ 何事でござるぞ。▲男 歳暮の禮に、いざござるまいか。▲つれ なか〳〵お供申さう。▲男 さあ〳〵、ござれござれ。▲つれ 參る〳〵。▲ぬしや このあたりに住む塗師屋ぢや。町へ參らう。早うるし、日本一の早漆々々。▲男 申し。ぬしやが參つた。こなたの烏帽子も某がゑぼしもはげた。いざ談合して塗らしませう。▲つれ 一段ようござらう。▲男 これ〳〵。▲ぬしや 何でござるぞ。▲男 この烏帽子をぬりたいが、何と、ならうか。▲ぬしや 某は日本一の早漆でござる。塗り直して進じまうせう。▲男 何と、早う出來申するか。▲ぬしや そのまゝ、著ながら塗り直して進じまうせう。▲男 さらば兩人ながら頼みたい。▲ぬしや 心得ました。これへ寄らし

阿彌陀佛—無量壽佛又は十二光佛など譯す

らう。▲僧 南無阿彌陀佛〳〵。▲太郎 さて〳〵、はやく某の名を知つて、何者やら呼ぶが。▲僧 なむあみだぶつ〳〵。▲太郎 やあ〳〵。僧いろ〳〵に念佛申、太郎返事いろ〳〵にする。▲僧 其方は何者なれば、某の名號を唱へれば、返事をめさるぞ。▲太郎 某は惡太郎と云ふ者ぢやが、酒に醉ひ寢たれば、この如くにしておいて、おれが名を南無阿彌陀佛と、付けるといふと思うたれば、目がさめた。其方が呼ぶによつて返事をする。▲僧 其方は何も知らぬ。西方十萬億の阿彌陀佛といふお佛がまします。名號を唱へてあれば、死してのち、極樂といふ所へ往生するによつて、愚僧も諸國修行して念佛を申しまうする。▲太郎 仔細あることぢや。某も其方の弟子となつて、お供して諸國へまゐりたい。連れて下されい。▲僧 やすいこと。つれだち申さう。▲太郎 この容態をうたうて參らう。ふし 今よりうき世の事を思ひきつて、只一すぢに阿彌陀を賴うで念佛申し、修行にいざや出でうよ〳〵。



酒に醉ひて云々—元來割注にすべき語なるべし

惡坊の如く云々—これも同上

五 惡太郎

三人

太郎 始め括り袴、頭巾、うちかけ、棒持、後、頭巾、十德
をぢ 長袴、小刀
僧 頭巾、衣、珠數、鉦

▲あく太郎 酒に醉ひて出るあく坊のごとく。をぢご内におぢやるか。▲をぢ また惡太郎がきた。▲太郎 お見舞申しまうする。▲をぢ そのやうに酒に醉ひて、氣の毒ぢや。酒をとまれ。▲太郎 御意見かたじけない。とまりませう。▲をぢ よい合點ぢや。すきととまれ。▲太郎 明日からとまりまうせう。酒の暇乞に、一盃下されい。▲をぢ 暇乞ぢや程に、ふるまひ申さう。いろいろ云うて五六ぱい飲む。▲太郎 もはや、さらば〱。また醉ひて寢る。▲をぢ さいぜん惡太郎が酒にゑうて去んだ。道にがな寢まうせう。見に參らう。されば餘念もなく寢てゐる。仕樣がある。坊主にしておきませう。惡坊の如く坊主にして、そちが名を南無阿彌陀佛とつける。さやうに心得〱。太郎目さまして肝つぶし。▲太郎 これはいかなこと。この樣に釋迦如來のしておかしられたものであ

いかにしびり云云―痺と云ふ抽象的の物を擬人したるが滑稽也
すきと―すつきりと

ば、某も召し伴れられて下されい。▲主 しびりがきれたらば、なるまいぞ。▲冠者 ことわりを申して聞かしますれば、ついなほりまする。▲主 さらばなほして見よ。▲冠者 畏つた。いかにしびり、よく聞け。だんな殿のお供して、をぢご様へ参れば、なる程結構なおふるまひを下さるゝ。よい酒も澤山に飲む。此度の事ぢや、なほれ〳〵。ほい。▲主 返事は誰がしたぞ。▲冠者 しびりでござらう。▲主 奇特な事の。しびりはなほるか。▲冠者 すきとようなり申した。▲主 名譽なしびりぢや。よくば追付行く。立て。▲冠者 手をひきたてて下されい。▲主 さあ〳〵立つて見よ。▲冠者 立ちましたが、ようござる。▲主 痺の氣はないか。▲冠者 おふるまひのお供しては、五里でも三里でも、しびりが起る事ではござない。▲主 さやうならば、いひつけて置いた魚を買うて來い。▲冠者 それではまた、はや、しびりが起りまする。あ痛〳〵。▲主 憎いやつの。しされ▲冠者 かしこまつた。



作病―假病に同じ

四　痺

二人　主　長袴、小さ刀
冠者　半袴、腰帯

▲主 あたりの者。冠者あるか。▲冠者 お前に居まする。▲主 やがて客がある。淀鯉を買ひに行け。▲冠者 畏つた。▲主 早う戻れ。▲冠者 心得ました。夜も曉も、鯉を買ひにまゐれ〳〵とおしやるは、定の事、たゞ作病をして參るまい。あ痛〳〵〳〵。▲主 冠者は何とした。▲冠者 親のゆづり置かれ申した痺がおこつて、あゝ痛や〳〵。かなしや〳〵。▲主 何と、しびりがきれたと云ふか。▲冠者 親の時より、よそへゆきともないと思へば、そのまま起ると云はれましたが、俄にしびれがきれてござる。▲主 よく休め。▲冠者 畏つた。▲主 思ひつけた。某の仕りやうがある。何とをぢご樣より、俄なれどもふるまひにまゐれ、乃ち冠者をも呼ぶと云うて使が來た。おれは參らうず。冠者はなるまいと云うて返事せい。▲冠者 なう、だんな樣。▲主 何ぞ用か。▲冠者 申し、をぢご樣へお ふるまひにお出なら

してやつた—取つたの意
希代—不思議
不祥—不吉
をゝ云々—以下曲にかゝる

坊と申すが、そなたのはりがへの名か。▲僧をゝ、それぞろよ名取殿。きたい坊にふしやう坊、〳〵。二つの名をば取り返し、本國さしてかへりけり。

洲股―墨俣川とも書く今は長良川の別名なれどもと木曾川の下流を云ふ
あじか―足近川とも阿志賀川とも書く木曾川の分流也
ぐんぜ川―郡上川か上之保川（長良川の上流）のこと
阿武隈川―磐城を流る逢ふ意につゞけたり
あひそめ川―筑前太宰府にある藍染川也逢初の意に用ゐる
衣川―陸中
非時―午後の食事
名取川―陸前
御假名―假名は通稱

ぢや。非時の汁にしたらばよからう。▲何某 これは何某でござる。これ〳〵御坊、この所は殺生禁斷の所ぢやに、なぜ殺生めさる。▲僧 殺生はいたさぬが、この川は何と申す。▲何某 名取川と申す。▲僧 向の在所は。▲何某 名取の在所。▲僧 こなたの御假名は。▲何某 名取の何某でおぢやる。▲僧 さては、最前の名をきやつがしてやつた。この方へ取らうと存ずる。私は田舍者でござる。はる〴〵上つて、付けて貰うた名でござる程に、最前の名を下されい。▲何某 そなたの名が何と云ふやら存ぜぬ。▲僧 さいぜん、この川の名は名取川、こなたの御假名は、名取の何某ぢやと仰せられぬか。▲何某 何某ぢやによつて云うたが、それが何と。▲僧 すれば、こなたが取らせられいで、誰が取らう。慈悲になりませう。下されい。▲何某 希代な事をおしやる。▲僧 そのきたい坊と申すが、私が名でござる。とてもの事に、はりがへの名をも下され。▲何某 さいぜんのは、ふと申し合せて仕合。はりがへの名は存ぜぬ。▲僧 この名を云はねば、どつちへもやらぬ。▲何某 さて〳〵、不祥な所へ來かゝつた。▲僧 そのふしやう坊と申すが、わたくしが名でござる。▲何某 ふしやう

權現—熊野三所權現とて本宮新宮那智也
光源氏の古云々—源氏物語賢木の巻に源氏の歌あり「ふりすててけふはゆくとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや」御息所の返歌もあり
安の川—野洲川のこと

らう。何やら落したやうにもあるが、何も落しはせぬが。珠數あり、笠あり、扇あり、身共が名を忘れた。あれはもの坊、え、思ひだすまい。さいぜんのやうに、拍子にかゝつて申して見やう。もの坊と申すは、なんとやら坊のことであつた。書付を見やう。南無三寶名を流した。遠うは參るまい。最前の所へ行て、抄はうと存ずる。こゝであつた。

謡 流ははてじ水の面〳〵、底なるおれを抄はう。われはまた、戀をする身にあらねども、うき名をながす腹たちや。地 川はさま〳〵多けれど、伊勢の國にては、天照大神の住みたまふ、御裳濯川もありやな。熊野なる音無川の瀬々には、權現御影をうつしたまへり。光源氏の古、八十瀬の川とながめ行く、すゞか川をうち渡り、近江路にかゝれば、幾瀬渡るも安の川、洲股、あじか、ぐんぜ川、側は淵なる片瀬川、思ふ人によそへて、阿武隈川もこひしや。つらきにつけてくやしきは、あひそめ川なりけり。墨染の衣川、衣の袖をひたして、岸かげの柳の眞菰の下を、おしまはし〳〵て抄ひあげ〳〵、見れば雜魚ばかり、わが名は更になかりけり。わが名はさらになかりけり。さてもことの外のざこ

ひたもの申して—専ら口に唱ふる意

ごんぎやうは—勤行なるべし

もの坊、あれは、き坊、え、きたい坊であつたものを、忘れうと致いた。さてはりがへの名がもの坊、あれはなんとやら坊であつたが、え、思ひだすまい。さいぜんの書付を見やう。え、ふしやう坊であつたものを、すでに忘れうとした。さてこれに氣の毒がある。若しそちが名を何とお尋ねの時、袖を見て、きたい坊でござるの、ふしやう坊で候のと云はれぬによつて、どうぞ、そらで覺えたいものぢやが、ひたもの申して參らう。きたい坊にふしやう坊、〱〱〱。これでは人が氣違のやうに申す。耳にたゝぬ様に申したいが、や、謠節に申さう。きたい坊と申すは、ふしやう坊の御事なり。きたいふしやうきたい坊ふしやう坊とぞ申しけり。これは重疊の謠になつた。今度は舞節に申さう。きたい坊にふしやう坊〱〱。今度は小歌節に申さう。きたい坊にふしやう坊〱〱。是では道捗が參らぬ。某に似合うたごんぎやう節に申さう。きたい坊にふしやう坊〱〱。是に大きな川がある。これは上にもあつた川かぢやまで。上が降つたか水が濁つた。まづ急いで渡らう。（川にてころぶ。）さて〱、にが〱しい事ぢや。まづ急いでまる



次第—謠ぶし

戒壇—僧侶に戒を授くる壇也古くは東大寺などあり後には專ら延暦寺也

はりがへ—かけがへ

三名取川

二人　僧　頭巾、衣、括り袴、腰帶、珠數、笠
何某　長袴、小さ刀

次第僧 戒壇踏んで受戒して、〳〵、わが古寺にかへらん。詞 これは遠國方の者でござる。某が國の習で、戒壇の踏まぬは、出家のやうに申さぬによつて、このたび戒壇の地をふみ、受戒まで致いてござる。名を付いて下らうと存じて、さるお寺へ參りてござれば、大兒と小兒と、手習をなされてござる。おそばへそろ〳〵參りて、私は田舍者でござる。未だ、定まる名がござらぬほどに、名をつけて下されいと、申してござれは、大兒のきたい坊とつけられてござる。はりがへの名も、つけて下されいと申してござれば、小ちごの、ふしやう坊とつけられた。その上御念が入つて、衣の袖にきたい坊、小兒のお手でふしやう坊と、書き付けて下された。急いで國許へ歸らう。や、さて年月の念願でござつたに、この度願成就いたし、このやうな嬉しい事はござらぬ。さて、最前の名は

云ふませう一刊本に從ふ

やすい事ぢや。こなたの教へらるゝやうに云ふませう。▲親いろはにほへとと云へ。▲子いろはにほへとと云へ。▲親さうではない。いろはにほへととばかり云へ。▲子さうではない。いろはにほへととばかり云へ。▲親まだ、走りぢゐなやつの。▲子まだ、はしりぢゐなやつの。▲親にくいやつの。口まねをしをるか。▲子憎いやつの、口まねをしをるか。▲親あゝ腹だちや。▲子あゝ腹だちや。▲親おのれを何とせう知らぬ。▲子おのれを何とせう知らぬ。▲親腹のたつ。まづかうしたがよい。▲子腹のたつ。まづかうしたがよい。お手つ。



走り智慧―先走り

二 伊呂波

二人　親　長袴、小さ刀
　　　子　半袴、腰帯

▲親 これはこのあたりの者。悴が成人した程に、手習をさせうと思ふ。居るか。▲子 なんでござるぞ。▲親 そちも成人したところで、手習をしたらばよからう。▲子 心得てござる。教へて下され。▲親 いろはにほへとちりぬるをわかと云へ。▲子 そのやうに、立板に水流すやうに教へられては、おぼえませぬ。そろ〳〵と教へて下され。▲親 心得た。い。▲子 とうしん。▲親 何事を云ふぞ。▲子 藺をひけば、燈心ができまする。▲親 ろ。▲子 かい。▲親 なにと云ふぞ。▲子 艪には櫂が添うたものぢや。▲親 走り智慧な。是は高野の弘法大師様のなされた、いろはと云ふ物ぢや。▲子 弘法様の四十八にならしられますか。▲親 たゞ何事も某が教へて云ふやうに云へ。▲子 親ぢや人の教へらるゝ様にさへ云へば、手習になりますするか。▲親 なか〳〵。何事も云ふやうに、教へる様にさへすればよいぞ。▲子 それは

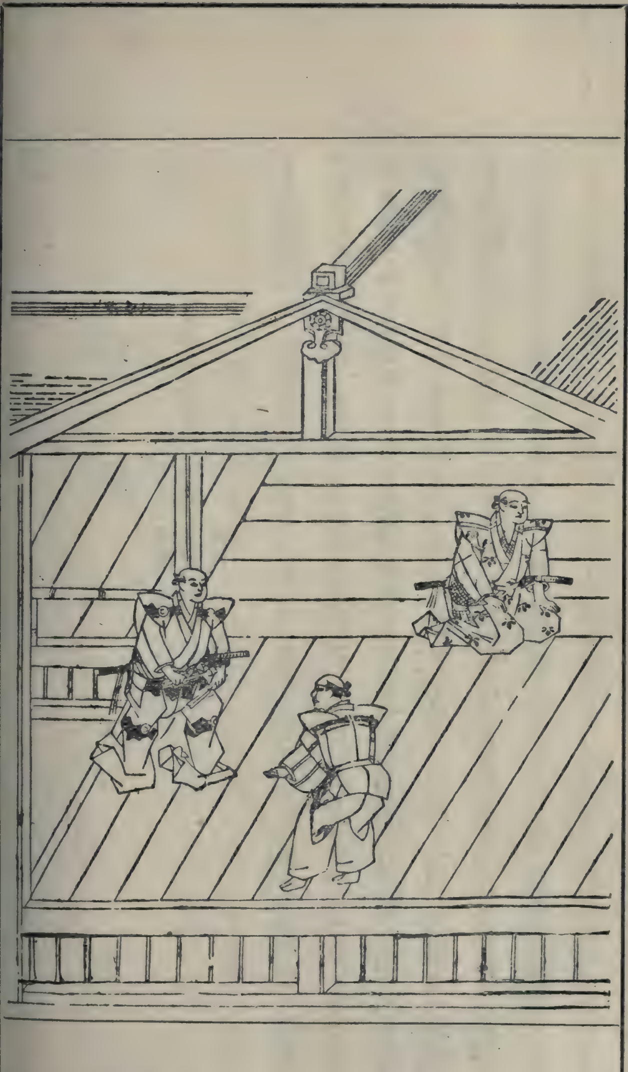
さい／＼─度々
こしらへて─支度して

せい。▲大名 これは入らぬ。寶見せい。▲冠者 寶とはこのこと。かくれみの、かくれ笠、この打出の小槌で、ほしい物を打出しまする。この脇差を打出して、證據に取つて來てござる。▲大名 打出の小槌とはこの事か。さらば、何ぞ打出せ。▲冠者 お望次第でござる。▲大名 さい／＼馬が入る。うちいだせ。▲冠者 心得てござる。蓬萊の島なる鬼の持つた寶は、かくれ簑、かくれがさ、うちでのこづち、諸量無量じよ／＼くわつしこくにくわつたり。▲大名 出たか。▲冠者 馬が出まするが、この馬には物を食はぬやうに、口をつけますまい。▲大名 出にくからう。口を付けて打ち出せ。▲冠者 前の如く云うて、打ち出すと云うて、馬が出ませうが、道の速いやうに、足をたんとつけませう。▲大名 つねの馬のやうにして打ち出せ。▲冠者 この馬に馬道具添へて、つい乘るやうにして、打ち出す程に、そのまゝ乘つてごらうじませい。▲大名 こしらへてゐるぞ。▲冠者 蓬萊の島なる鬼の持つた寶は、隱簑、隱笠、打出の小槌、諸量無量じよ／＼くわつしこくにくわつたり。▲大名 さあ乘つたぞ／＼。▲冠者 馬ではござらぬ。冠者でござる／＼。▲大名 憎いやつの。やるまいぞ／＼。

▲冠者 寶を買ひたい所で、呼ばはり申する。▲すり さて〳〵、其方は仕合のよい人の。某が寶屋の亭主〳〵。▲冠者 會ひ申したがよい仕合。寶買ひませう。▲すり 賣りませう。▲冠者 見せて下されい。▲すり 畏つた。田舎者ぢや。ぬいてやらう。これ〳〵寶見さしませ。

▲冠者 これに奇特があるか。▲すり この寶は、隱簑、隱笠、打出の小槌、三つの寶のうち、この槌をもつて打ち出せば、ほしいものが出申する。▲冠者 證據が見たいまで。▲すり やすい事。其方のほしい物打出してごらうぜ。▲冠者 脇差うちだしませう。▲すり 唱へる事がある、敎へ申せう。さゝやく。▲冠者 おぼえた。蓬來の島なる鬼の持つた寶は、隱簑、隱笠、打出の小槌、諸量無量、じよ〳〵くわつしきこくにくわつたり。▲すり 脇差が出たわ。▲冠者 出ました。證據のためぢや。これを某が貰ひませう。▲すり 進ずるぞ。▲冠者 代物は何程ぞ。

▲すり 萬疋ぢや。▲冠者 買ひませう。乃ち代物を三條の大黑屋にて進ぜう。▲すり 受取りませう。▲冠者 さらば〳〵。うれしや〳〵、よい寶を買ひ取つた。この由申さう。冠者が戻つてござる〳〵。▲大名 何と、寶とゝのへたか。早く見せてくれい。▲冠者 寶ごらんなされま



ぬいて——だまして也

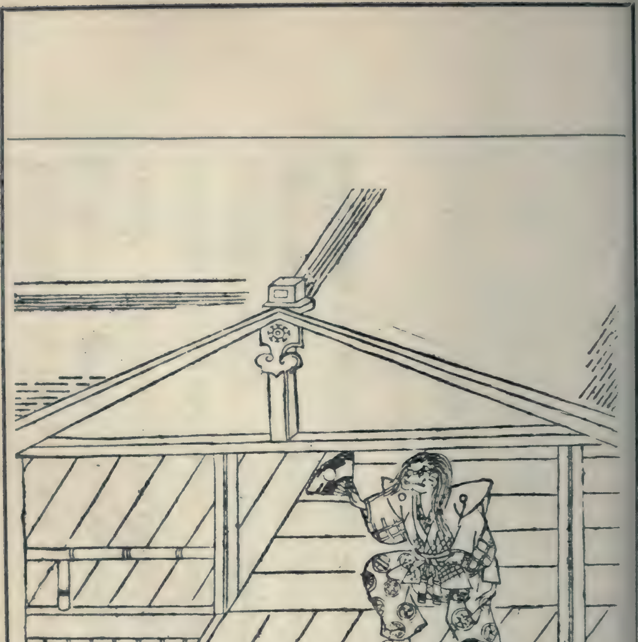
卷之二

一 寶の槌

三人
大名　長袴、小さ刀
冠者　半袴、腰帶
すり　長袴、小さ刀

▲大名 大果報の者、冠者ゐるか。▲冠者 これにゐまする。▲大名 やがて皆々打寄つて、眼前に奇特のある寶物を競べさしらるゝ筈ぢやが、おれが所に、何もそのやうな寶はあるまいぞ。▲冠者 さやうの寶はござりませぬ。聞きも及びませぬ。▲大名 そちは都へ上り、奇特のある寶を買うて參れ。▲冠者 畏つてござる。都へ上る。うれしや、ついでに都を一見仕らう。都へは著いたが、寶のありどころを知らぬ。賣り買ふもの、呼ばはつて通る。某もよばはらう。寶買はう〳〵。▲すり 都に住居致たすすつぱぢや。田舍者が寶買はうと云ふ。この者をぬいてやらう。なう〳〵。▲冠者 何事ぞ。▲すり 其方は何事を呼ばはるぞ。

▲八郎 腕押を致さう。▲鬼 さあ〳〵來い。▲八郎 いや〳〵、お姫様に食はるゝ程に、お姫と勝負しまうせう。▲鬼 尤ぢや〳〵。さあ〳〵お姫、腕押せい。▲姫 おれは腹押がしたい、▲鬼 親のそばで、入らぬこと云はずとも、腕押せい。▲姫 あ痛や〳〵。▲鬼 おのれは、姫が手をなぜにきつうしたぞ。そろ〳〵しはせいで、痛がるに。▲八郎 勝負に勝つた。寶物を取りませう。▲おに いや〳〵、まだ餘の勝負せい。▲八郎 今度は臑押致さう。▲鬼 姫、すねおしせい。▲姫 あ痛〳〵。▲八郎 勝つたぞ〳〵。▲鬼 いや〳〵、今一度首引をせい。▲八郎 心得た、▲鬼 姫、首引せい。▲姫 いやでござる。▲鬼 まづ、父次第にせい。そろ〳〵と引け。囃す程に、そろ〳〵ひけ。鬼どもみな〳〵出よ〳〵、姫がかたが弱いわ。えいさら〳〵。姫がかたがよわいわ。えいさら〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。



聞えた—分ったの意

十首引

八人

八郎　括り袴、太刀、腰帶
鬼　半姫、腰帶
姫　かつら、乙面、箔、さげ帶
鬼　五人、半袴、腰帶、赤頭、面

▲八郎 鎭西の八郎爲朝とは、某が事ぢや。おれ程の力は世にござない。鬼が島へわたり、鬼どもと力くらべして、寶物どもを取つて參らう。いかな鬼も、おそらく力は及ぶまい。▲鬼 人臭いが、異な事ぢや。おのれは何者ぢや。▲八郎 娑婆の者ぢや。▲鬼 よい所へ來た。姫取つて食はう。姫に生きた人を食はせぬ。連れて來て、食ひはじめをさせまうせう。姫姫。▲姫 なんぞ。▲鬼 來い〱。よい食物がある。あれ〱、食ひはじめに食へ。▲姫 わん〱。あゝ、こはや〱、嚇しをる。▲おに にくいやつの。なぜに食はれぬ。▲八郎 とがもない者を、食はうとおしやるは無理ぢや。勝負をして負けたらば、いかにも食はれまうせうず。勝つたらば寶物を取らう。▲おに 聞えた〱。いざ來い。勝負に何をするぞ。

合めて云ふ
水ます―増すに鯛を掛く
くもだこ―蜘に蜘蛛蛸を掛く
くらげ―暗げに海月をきかす
せいご―晴後に鱸を掛く
はむあみだ―南無を鱧と掛る
ふならくせかい―補陀落世界のふだをふな(鮒)にもぢる
こち―此方に鯒をもぢる
ざこして―雜居に雜魚を掛る
ひだいかいらいし―悲體戒雷震なり乾鯛貝をももぢれるならん
たことく―過去得を鮹と掛る
三百三文―三藐三菩提の捩り
ぶり菩薩―佛菩薩を鰤に捩る
かにし云々―願以斯功德皆俱成佛道の轉訛
名吉―なよしの昔頭にして鯔の事なり明日のもぢり
飛魚―逃ぐること

に生れ、こちへ〳〵と請ぜられしかば、佛とざこしてゐべし。されば觀音經の要文にも、ひだいかいらいし、心經には、たことく阿耨多羅三百三文に買うて、ぶり菩薩參らする。うたひ今日の說法はこれまでなり。かににしぎょうかいぐん成佛道。▲與平治 これはいかなこと。最前より何事を申すぞと存じてござれば、魚の事を申す。何としたものであらう。やい、そこな賣僧坊主。このやうなめでたい堂供養に、よう腥い事を云ふな。▲僧 たいもない事をおしやる。▲與平治 まだ云やるかいの。▲僧 こちの驚くやうにする人ぢや▲與平治 わごりよをなんとしたものであらうぞ。▲僧 うたば打たしませ。棒鱈か太刀魚でうたしませ。▲與平治 なんのぎせいでわ。▲僧 金頭もたまる事ではないぞ。▲與平治 さてもさても、にが〳〵しい事ぢや。▲僧 煎鰕の樣な顏をする人ぢや。▲與平治 そなたに物を云はすによつてぢや。其方の樣な人は、かうしておいたがよい。▲僧 あゝ、なまたこ〳〵。▲與平治 まだおしやるかいの。▲僧 名吉まゐらう。▲與平治 これはいかなこと。▲僧 こちやたゞ、飛魚したが、まゝしぢや。▲與平治 あの横著者。やるまいぞ〳〵。

しんはしやうごんより起る―信は莊嚴より起るにて信心は立派なる威儀を觀るより生ずとの意なるべし
導師―説教して衆生を佛道へ導く僧のこと
鮑―逢はずの意を掛く
すしやう―鮨に水晶をきかす
高麗鮫―高麗縁の疊の意也
のつしのし―熨斗鮑のことをのしのしと云ふ副詞にきかす
蟹―鉦の意
泥鰌―鉦の音の形容に用ゐる
するめ―鯣に爲るを掛く
さばせかい―娑婆世界の意を鯖にてきかす
六の衆生―六は六道也
あめのうをの後―雨の後に鯇を

う。やあさて、御住持樣のお留守で、氣の毒に存じましたに、おまへのお出なされて下されまして、御住持樣同前に存じます。▲僧 これは結構な御挨拶でござる。▲與平治 や、參る程にこれでござる。これが卽ち今度建立致した堂でござる。▲僧 しんはしやうごんより起ると申すが、これは結構なしやうごんでござる。▲與平治 これは痛み入つた御挨拶でござる。▲僧 いざ法談を始めませう。▲與平治 一段と好うござりませう。▲僧 ちいん〳〵ちいん。導師この事を打聞いて、かやうのめでたき御代には、よも鮑とぞ思ふ。すゝけに煤けたる、乾鮭色の袈裟をかけ、すししやうの珠數をつまぐり、高麗鮫の上に、のつしのしとはひ上り、ほつぐわんの蟹、泥鰌々々と打鳴し、まづ説法をするめなり。あひたしとよ、このさばせかいと申すに。佛と衆生とは、魚と水とのごとし。佛ましまさずして、六の衆生たすかる事あるべからず。又、水なくして魚の住むべき所なし。されば地藏のあめのうをの後、水ます惡業のくもだこおほへば、月またくらげなり。眞如のあらしふけば、月又せいごの如し。およはむあみだ佛と唱ふれば、こひねがふふならくせかい

ります事、別の事でもござりませぬ。私、親の追善のため、一間四面の堂を建立致いてござる。堂供養のため、一座の法談をも述べて貰ひたう存ずる。御内にござりませいで氣の毒に存じます。はや御布施の用意も致いてござる。▲僧 その様な事を聞かれたらば、一しほ殘り多う存ぜらるゝでござらう。▲與平治 さても〳〵、氣の毒な事でござる。え、たれかれと申さうより、お前おいでなされて下されませ。▲僧 なるほどまゐりませう。暫くそれにお待ちなされませ。▲與平治 心得ました。▲僧 なう〳〵うれしや。はや御布施の用意もしたと云はるゝ。このやうなうれしい事はござらぬ。さりながら某は、經陀羅尼は存ぜず、法談は知らず。御布施はほしゝ。これはまづ、なんとせう。や、某せがれの時分濱邊にすんで、魚の名をあまた存じてゐる。これをとりあつめ、法談のやうに申しなし、御布施をとつて歸らうと存ずる。▲與平治 これはおこしらへが出來ましてござりますか。▲僧 私が參れば、内に留守がござりませぬによつて、留守の義を申し付けてござる。▲與平治 これは御尤でござる。いざお出なされせ。▲僧 お前からござれ。▲與平治 參りませ

陀羅尼—呪文のこと



九　魚説法

二人　僧　　頭巾、衣、珠數
　　　旦那　長袴、小さ刀

▲與平治　これは、このあたりに住居いたす者でござる。某親の追善のために、一間四面の堂を建立致いてござる。堂供養のために、一座の法談をも、述べて貰ひたう存ずる。ここに、某にお目くださるゝ御住持様がござる。是へ參りて賴うで參らうと存ずる。やあさて、內にござればようござるが。日頃それがしにお目を下さるゝ程に、御內にさへござつたらば、定めてお出なされて下されうと存ずる。や、參る程にこれぢや。まづ案內をかはう。ものも。案內も。▲僧　や、おもてに案內がある。案內とは誰そ。え、與平治殿。此中は久しう見えませなんだ。▲與平治　此中は、ちと作事など致いて、それゆゑ參りませなんだ。▲僧　それは御尤でござる。▲與平治　して、お住持様は御內にござりますか。▲僧　住持は此中田舍へ行かれて留守でござる。▲與平治　それは氣の毒な事でござります。只今參

お目くださるゝ—目をかけらるゝ
かはう—乞はうの訛
作事—普請
氣の毒—迷惑の意

らねばならぬ。平(ひら)にお取りやれ〳〵。▲女房やい〳〵をとこ。わらはをさつて、因幡堂(いなはだう)へ、よう〳〵妻(つま)のこと、祈念(きねん)に籠(こも)つたな〳〵。▲男われは何しに來(き)たぞ。▲女房何しにきた。おのれ、いやでも御夢想ぢや。添(そ)はねばならぬ。▲男おれはおぬしがやうな者はいやぢや。▲女房どうでも、いごかす事でもない。▲男あゝかなしや。ゆるせ〳〵。▲女房どこへ。卑怯者(ひけふもの)。やるまいぞ〳〵。▲男まづ談合(だんかふ)してから。▲女房やるまいぞ〳〵。



去つて―離緣すること

因幡堂―京にあり平等寺と云ふ藥師如來を祀る

八 因幡堂

二人　男　長袴、小さ刀
　　　女　びなん、箔、さげ帶、かづき

▲男 これは、このあたりの者。某の女は大酒飲ゆゑ、去つてござる。因幡堂へ參り、女房の事を、通夜して、御夢想次第に持ちませう。參る程にこれぢや。拜みまして、通夜仕らう。▲女房 妾が男めが、妻の事を、因幡堂へ參り、御夢想次第に致さうと申すと聞いた。去られたは苦しうないが、心がにくい。さればよく寢た。やい〳〵、西門に立つたを女房に持てよ。▲男 はあ〳〵、忝や〳〵、まづ西門へ行て見やう。されば〳〵、これにござる。申し〳〵、御夢想のお妻か。女房つまぢやと云うてうなづく。▲男 もはや追付宿へお供申しませう。某が乃負うて參らう。負はれさしられませい。是でござる。おりて、そのかづき取らせられませい。▲女房 いやまづ、盃事しませう。男飲みて女にさす。ひきうけ〳〵五六盃のむ。男肝つぶして。▲男 また大酒飲ぢや。もはや納めませう。そのかづき取らせられう。いやでもおうでもかづきを取

いつがとらば、とりませう。▲びは主 さあ〳〵お手つ。▲勾當 伯養がにげる〳〵。▲はくやう 勾當が逃げらるゝ。▲びは主 身共が手をとり組ませうぞ。お手つ。▲はくやう どこへ。負くる事ではない。▲勾當 おのれに負けうか。▲はくやう なう〳〵、それがしぢや。やあ〳〵。▲勾當 やあ〳〵。▲はくやう お手つ。勝つたぞ〳〵。▲勾當 どこへ。おれをこかして。やるまいぞ〳〵。

推參―無禮

はくやう―履く様に伯養を掛く

らう。ものも〳〵。▲びは主 たれぢや知らぬ。誰そ。▲勾當 勾當の坊でござる。▲びは主 ようござつた。▲勾當 ちと御無心がござる。近日檢校たちのよりあひに、某も參るが、琵琶の絃がきれました。こなたの琵琶を貸して下されい。▲びは主 やすい事ぢやが、早、伯養に貸してござる。▲勾當 あいつめは琵琶は入るまい。それがしに貸して下されい。▲はくやう いや〳〵、わたくしが借つてござるぞ。▲勾當 やい〳〵伯養。おのれが借る。おのれ推參な。▲はくやう そなたはわがまゝな事を云ふ。▲勾當 憎いやつの。▲冠者 これ〳〵、その如く云うては、どちへも貸すことはならぬ。とかく何でも勝負をして、勝の方へ貸しまうせう。▲勾當 勝負には歌をよみませう。▲はくやう 申し〳〵、勾當の坊が歌をよまれたらば、某もよみませう。▲びは主 さあ〳〵よましられい。▲勾當 庭中に齒缺の足駄ぬぎすてて、はくやうなくて谷へほうかす。▲びは主 さあ〳〵よめ。▲はくやう 酒もりの座敷へ人の呼ばざれば、犬や勾當門にたゝずむ。▲勾當 おのれ、犬にたとへたか。にくいやつの。▲はくやう 足駄にたとへたか。▲びは主 このとほりでも埒あかぬ。▲はくやう 今度は相撲とりまうせう。▲勾當 あ



琵琶借座頭―一名伯養

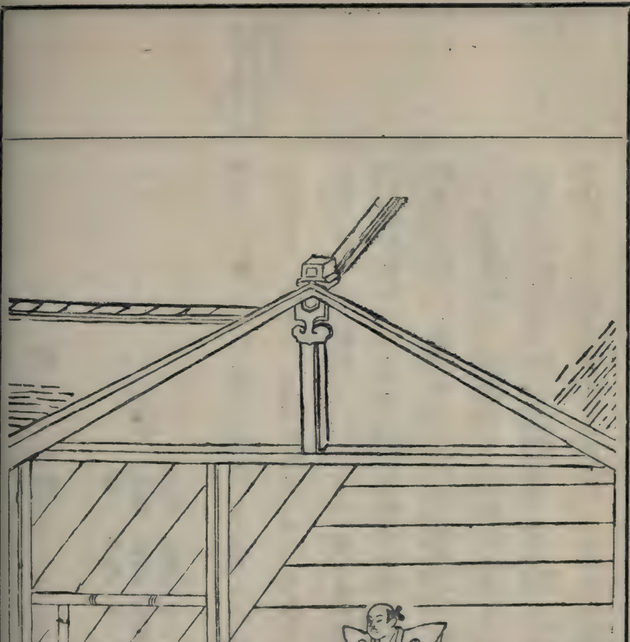
檢校―盲官也勾當座頭の上に位す

七　琵琶借座頭

三人　伯養　頭巾、下袴、水衣、腰帯
勾當　角帽子、衣、下長袴、腰帯
琵琶主　長袴、小さ刀

▲はくやう このあたりの座頭でござる。やがて、檢校樣たちの寄合がある。某の頼うだ者も出られまする。琵琶が損ねた、借りて來いと申さるゝ。參り、借りて參らう。貸して下さるればよいが、何とあらうぞ。これぢや。お案内も。ござりまするか。▲びは主 案内とは誰ぢや。▲はくやう 某でござる。▲びは主 何と思うて來たぞ。▲はくやう 某の師匠坊が、やがて檢校衆の寄合に出られまするが、琵琶が損ねましてござる。こなたのびはをお借しなされて下されいと申さるゝ。▲びは主 近頃やすい事。貸してやらう。▲はくやう 忝うござる。▲勾當 これは、このあたりの勾當の坊でござる。近日檢校たちの寄合に、某も出よとおしやる。琵琶の絃がきれた。こゝによい琶琵を持つた人がある。これを借りに參

にと申されまする。▲庄介 おれはつひに行た事がないほどに行かれまい。▲冠者 私にねごんごろを、よく知つてゐられまする。おいでなされて下されい。▲庄介 それなら參らうか。▲冠者 さらばござりませい。▲庄介 わごりよ案内に、さきへ行け。▲冠者 さらば、案内のため參りまする。ござれ。これにお待ちなされい。▲庄介 心得た。▲冠者 申し〳〵、歸りました。▲との 冠者戻つたか。誰樣を呼うで來た。▲冠者 庄介樣を呼びまして來ました。▲との あれは醉狂をする人ぢや。▲冠者 それならば、戻しまうせう。▲との いや〳〵、呼うで來て往なされはせまい。さりながら、そばへ使ふ者がない。▲冠者 某をつかはしられい。▲との おのれめは躾がないところで、使はれぬ。▲冠者 敎へてつかはしられい。▲との 何事も身共が云ふやうにせい。▲冠者 畏つてござる。こなた樣の敎へらるゝやうに致しまうせう。▲との こちへ通せ。▲冠者 畏つてござる。▲との なう、こちへ通らしられい。▲庄介 心得た。只今は御使忝うござる。▲との 早々おいで、過分にござる。冠者、さかづきを出せ。▲冠者 冠者さかづきを出せ。あとは何事も主の云ふごとく口まねをする。をさめにうちこかしてはいるなり。



柳樽―漆塗の細長き酒樽也祝事に使用す

六 柳樽

三人
殿 長袴、小さ刀
冠者 冠者、半袴、腰帯
庄介 長袴、小さ刀

▲との このあたりの者でござる。さる方より、柳樽を貰うた。まづ冠者をよび出し、談合しませう。あるか。▲冠者 お前に。▲との そちをよぶも、別の事ではない。さる方より柳樽を貰うた。一人飲むもいかゞぢや。誰ぞ呼びまして飲まうと思ふが、何と思ふぞ。▲冠者 御一人まゐるもいかゞにと思召す事ならば、おこゝろやすう私とまゐれ。▲との うちの者と飲うで、面白い事があるものか。誰ぞ心安い人を呼うでこい。▲冠者 畏つてござる。▲との えい。▲冠者 あゝ、誰殿をよびにまゐらうぞ。こゝに、身共へ御懇のお方がござる。これをよびに参らう。物も。案内も。▲庄介 誰ぢや知らぬ。誰そ。▲冠者 冠者でござる。▲庄介 ようおぢやつた。▲冠者 頼うだ人が、よそから柳樽を貰ひました。おいでなされますやう

にじかふむつた者―武士とて二字蒙つたる者の意か

よろこぶ―喜ぶに昆布を掛く

ば賣らう。前の如く小ろたぶしに賣る。▲こぶ賣やい。▲アドなんぢや。▲こぶ賣にじかふむつた者を、いつまでなぶらうぞ。某が行末繁昌と賣つたらば。この太刀や刀を返さうぞ。▲アドそれはまことか。▲こぶ賣まことぢや。▲アド眞實か。▲こぶ賣眞實ぢや。▲アド一定か。▲こぶ賣一定ぢや。▲アド謠やら〱、數知らずの君が御代のよろこぶや。▲こぶ賣何とよろこぶと。かへすまいぞ、この太刀。これがほしいか。▲アドあの横著者。やるまいぞ〱。

へ。こぶめされ候へ。若狹の小濱のめしのこぶを召し上げられ候へ〳〵と、かう賣れ。
▲アド 心得た。昆布めされ候へ〳〵。若狹の小濱のめしのこぶを召し上げられ候へ〳〵。
さあ〳〵返せ。▲こぶ賣 なんの返せ。この度はまた謠節に賣れ。▲アド 賣らでかなはずは、
賣つて聞かせ。▲こぶ賣 心得た。（うたひぶし）こぶめせ〳〵、おこぶめせ。わかさのをばまのめ
しの昆布、若狹の浦のめしのこぶと賣れ。▲アド 心得た。（前の如くうたひぶしに賣る。）さあ〳〵返せ。▲こぶ賣
なんの返せ。▲アド これはなんとする。▲こぶ賣 今度は淨瑠璃節にうれ。▲アド これも賣つて
きかせ。▲こぶ賣 心得た。つれてん〳〵、てれ〳〵てん。まづこれが三味線の心持ぢや。
こぶめせ〳〵、おこぶめせ。若狹の小濱のめしのこぶ。つれてん〳〵、てんと賣れ。▲アド
こゝろえた。（前の如く淨瑠璃ぶしにて賣る。）さあ〳〵、かへせ。▲こぶ賣 なんのかへせ。今度は小歌節にうれ。
これも賣つてきかせう。昆布めせ〳〵、おこぶめせ。わかさのをばまのめしのこぶ。め
しのこぶ。この、しやつき、しや〳〵、しやつき〳〵、しやつきしや、と賣れ。▲アド さや
うに賣つたらば、その太刀や刀を返すか。▲こぶ賣 その時の仕儀によらう。▲アド それなら

あゝあぶない—太刀を拔きて向へば也

仕儀—具合也都合也

▲アド あゝあぶない。これはなんとするぞいの。▲こぶ賣 なんと、これがよいか。最前の樣に云うたがよいか。たつた一打にするぞ。▲アド あゝ、あぶない。これはまづなんとするぞいの。▲こぶ賣 なんとするとは。そのさいて居る物をおくせ。▲アド これか。▲こぶ賣 なかなか。▲アド これはやりたうはあれども、侍の一腰をはなす事はならぬ。▲こぶ賣 おくしやるまいか。▲アド あゝ、やるてに。これ〳〵。▲こぶ賣 柄の方からおくせ、▲アド やりやうが氣に入らずは、おかうまで。▲こぶ賣 何、おくすまいか。▲アド あゝ、はてさて、やると云ふに。これ〳〵あぶない。▲こぶ賣 やい。▲アド なんぢや。▲こぶ賣 この昆布を賣れ。▲アド 侍の昆布を賣つた事はない。▲こぶ賣 何、賣るまい。▲アド はてさて賣ると云ふに。やい〳〵、昆布買へ〳〵。▲こぶ賣 やい。▲アド なんぢや。▲こぶ賣 そのやうに云うて、皆樣が召すものか。なるほど慇懃に賣れ。▲アド 慇懃に賣ると、その太刀や刀を返すか。▲こぶ賣 それはその時の仕儀によらう。▲アド それならば賣らうが、さりながら昆布の賣りやうを知らぬ。賣つて聞かせ。▲こぶ賣 いかにも賣つて聞かさう。よう聞け。▲アド 心得た。▲こぶ賣 昆布召され候

がつきめ—餓鬼めとて斬つてかかる也

は、眞實太刀の持ち樣を知らぬさうな。みどもが敎へておまうせうぞ。▲こぶ賣 それは忝うござる。▲アド 總じて、自身の太刀は、左にもち、主の太刀は、右に持つものぢや程に右に持つておくりやれ。▲こぶ賣 私はおまへの内の者ではござりませぬ。▲アド 内の人ではなけれども、頼む上からぢや程に、持つてくれさしませ。▲こぶ賣 なるほど心得ました。▲アド さて、この上でまだ無心が有るが、これも聞いておくりやらうか。▲こぶ賣 この上でござる。いかやうな事なりとも、仰せられませ。▲アド いや、別の事でもない。若し道で近附に逢うた時、そなたを内の者のやうに云はうが、答へておくりやらうか。▲こぶ賣 何がさて、うけたまはりませう。▲アド なんぢや、聞いてくれう。某がつかふ者を太郎冠者と云ふ。太郎冠者と云はゞ、答へておくりやれ。▲こぶ賣 畏つてござる。▲アド やい〱太郎冠者來るか。▲こぶ賣 はあつ。▲アド ひつついて來い。あはゝゝゝ。▲こぶ賣 さても〱、腹のたつ事でござる。がつきめ。遁さぬぞ。▲アド あゝ、ざれ事をするな。いや〱、そちにそれを持たしておくによつてぢや。さあ〱、その太刀をおくせ。▲こぶ賣 なんの、おくせ。

ていどーきつと
これはざれごと一刀に手をかけて嘲したるを冗談也といふ

▲アド いや、結構なとおしやれば、迷惑いたす。わるい太刀ぢや程に、持つておくりやれ。▲こぶ賣 是はどうござつても御免されませ。▲アド さては侍に一禮まで云はせて、ていどお持ちやるまいか。▲こぶ賣 いや、持ちませう。▲アド なんぢや、持たう。これはざれごと。氣にかけずとも、持つておくりやれ。▲こぶ賣 こなたのおざれごとは、いやなおざれごとでござる。▲アド さあ〳〵おぢやれ。▲こぶ賣 心得ました。▲アド これ〳〵、そのやうな太刀の持ち様があるものか。手に持つておくりやれ。▲こぶ賣 手があきませぬ。▲アド それ〳〵左の手があいてある。▲こぶ賣 これはかう、肩をかへる時いりまする。▲アド すれば、こちらの手が遊んである。▲こぶ賣 これもかう、肩をかへる時いりまする。▲アド これは昆布があるによつてぢや。どれ〳〵、そのこぶを買うておまうせうぞ。▲こぶ賣 それは忝なうござります。▲アド さあ〳〵おぢやれ。▲こぶ賣 參ります。▲アド 是はいかな事。それは進上太刀の持ちやうぢや。身にひつ添へてお持ちやれ。▲こぶ賣 心得ました。▲アド おぢやるか。▲こぶ賣 參ります。▲アド これはいかな事。それは子をだいたやうな持ちやうぢや。そなた

御仁體―身分ある人

某も都へ上る者ぢや。同道致さう。▲こぶ賣 いや〳〵、こなたは御仁體と見受けてござる。私がやうな者は、おつれには似合ひませぬ。かうお先へ參ります。▲アド いや、これ、總じて世には似合つたつれもあり、又似合はぬつれもある。是非とも同道申さう。▲こぶ賣 それならばお供致しませう。▲アド さあ〳〵おぢやれ。▲こぶ賣 畏つてござる。▲アド やあさて、ふと詞をかけたに、早速同心のしてくれられて、これ程嬉しい事はをりない。さて、わごりよに始めて會うて、頼みたい事があるが、聞いておくりやらうか。▲こぶ賣 いかにも、わたくしに似合ひました御用ならば、うけたまはりませう。▲アド 無心を云へば、早速聞いてくれうとあつて滿足いたす。まづ一禮を申す。▲こぶ賣 これは迷惑でござる。▲アド いや、別の事でもない。某は、人あまた使ふものなれども、今日は方々へつかはして、一人も人が無いゆゑ、見らるゝ通り、自身太刀を持つておぢやる。これが、わごりよに持つて貰ひたいと云ふ事でをりやる。▲こぶ賣 いかにも畏つてござるが、さやうの結構な太刀は、見た事もござらず、まして持つた事はなほござりませぬ。これは御免されませ。



北野の御手水の夜―雍州府志に七月七日松梅院主一人入ニ内々陣一獻ニ御手水一とある神事也

若狹の小濱の昆布賣―和漢三才圖會に昆布は松前津輕南部共に名有り並に若狹に傳送す小濱の市人之を調製して四方に送るとあり

嘉例―吉例

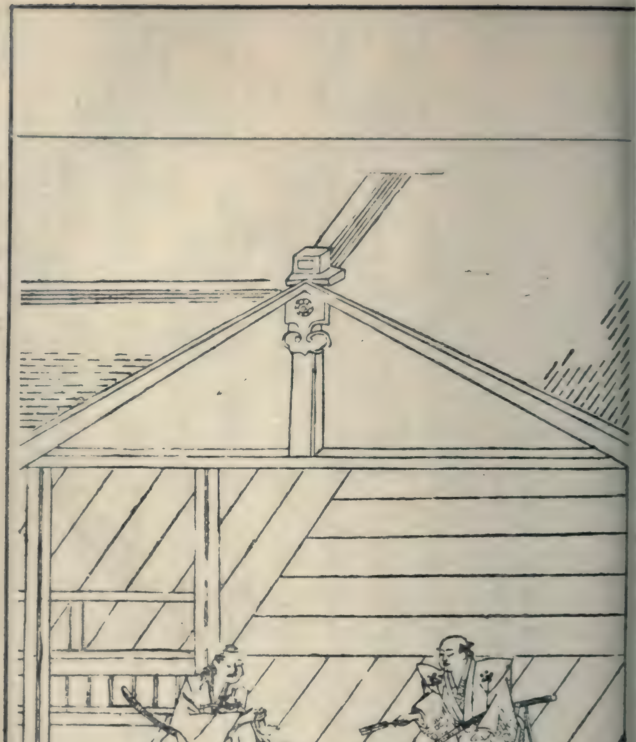
重疊の者―至極好き者

五　昆布賣

二人　昆布賣　半袴、腰帶、竹の先に烏帽子挾み擔げ出る
　　　アド　長袴、小さ刀、太刀持

▲アド これは、このあたりの者でござる。今夜は北野の御手水の夜でござる程に、參らうと存ずる。やあ、さて、某は、人あまた使ふ者でござれども、今夜は皆使に遣し、一人も内に居ぬによつて、この如く、自身太刀を持つてござる。しばらくこの所に休んでゐて、似合しい者も通らうならば、言葉をかけて、太刀を持たせて參らうと存ずる。▲こぶ賣 これは若狹の小濱の昆布賣でござる。毎年嘉例で、都へ昆布を商賣に參る。當年も相變らず、昆布を商賣に上らうと存ずる。まづ急いで參らう。▲アド や、重疊の者が參つた。詞をかけう。や、なう〳〵。▲こぶ賣 こちの事でござるか。▲アド いかにも、わごりよの事ぢやが、これはどれからどれへお通りやるぞ。▲こぶ賣 私は、若狹の小濱の昆布賣でござるが、毎年こぶを商賣に、都へ上る事でござる。▲アド さて〳〵、それこそ重疊の事よ、

きもつぶす。祈る程四つ五つ菌いづる。後山伏の耳ひく。鼻つまむ。山伏いやがり、逃げてはいる。



くさびら―茸の類

九識―靜坐思惟することと眼識耳識等九あり

十乘―坐床觀行の法に十種あり

瑜伽―一切諸法を云ふ水に譬ふ

三密―身語意の三密あり修行の道也月に譬ふ

ぐひん―天狗の事

四　菌山伏

二人　男　長袴、小さ刀
　　　山伏　兜巾、篠懸、括り袴、腰帶、太刀、珠數

▲男 このあたりの者。わたくしが庭に、くさびらが俄に生えた所で、取りて捨て申すれば、あとから生え〳〵仕る。あまり不審な。つねに御懇の山伏殿がある。頼うで見て貰ひまうせう。急いで參らう。ものも。お山伏殿は内にござるか。▲山伏 九識の窓の前、十乘の床のほとりに、瑜伽の法水を湛へ、三密の月を澄ます所に、案内申さんとは誰ぢや。▲男 それがしでござる。▲山伏 何と思うてお出ぞ。▲男 此中、某の庭にくさびらが生えまして、ござる。取りて捨てますれば、また生え〳〵致す。不審にござる。お出なされて、御祈禱をなされて下されい。▲山伏 心得た。他所へは參らぬが、そなたの事ぢや、參りてやらう。▲男 追付お出なされませい。▲山伏 心得た。▲男 これ〳〵、このくさびらでござる。▲山伏 これはぐひんのわざぢや。一祈してやらう。▲男 忝なうござる。（梟山伏の如く、いろ〳〵祈る。）▲山伏

かみ―烏帽子の中の髮と祠の中の神とを掛く
かきう眉―未詳
槍頤―長く突出てたるおとがひ也

▲くわじや　はあ。そなたは何事を云はしますぞ。▲今參　いや、お目の内がくる〳〵致しましたによつて、御威勢におそれて申しそこなうてござる。かさねては如何樣にも答へうと云はしませ。いや、なう〳〵、身共の國のならひで、問ふ事も答ふる事も、拍子にかゝつて申します。賴うだお方も、拍子にかゝつてお問ひなさるゝならば、忝うござらう。▲くわじや　心得た。申し、國の習で、問ふことも答ふることも、拍子にかゝつて申します。▲大名　やい、あの者が著た烏帽子のなりが面白い。烏帽子について問はうほどに、出といへ。▲くわじや　畏つてござる。さあ〳〵行かしませ。▲大名　今參々々、參が著たる烏帽子は、祠にも似てす。▲今參　それはさも候。中にかみの候へば。▲大名　くはへたりや。でかした。眉は何故に屈うだ。▲今參　かきう眉で候へば。▲大名　腰こそは細けれ。▲今參　蟻腰で候へば。▲大名　頤がさし出た。▲今參　槍頤で候もの。▲二人　槍頤で候もの〳〵。ほつぱい、ひうろ、ひ。

いつちぎり一言ひ契りか

が目でつかへば、あちへちろり、こちへちろり。さて〳〵こざかしい者ぢや。さて、何も藝はないか。▲くわじや 弓、鞠、庖丁、碁、雙六、馬のふせおこし、やつと參つたを致します。▲大名 さて〳〵萬能なものぢや。中にも得た物は何ぢや。▲くわじや 中にも秀句をえて居ります。▲大名 やい、ゆく〳〵は名をも付けうけれども、當分今參とつくる。これへ出と云へ。▲くわじや はあ。秀句を聞かうと仰せらるる程に、出さしませ。▲今參 心得ました。▲くわじや 今參。▲大名 今參々々、あれへをりそへ、これへをりそへ。▲今參 あれへこれへと御諚候へども、御座敷を見ればやぶれまど。▲大名 このこゝろはいかに。▲今參 居所が候はぬ。▲大名 今參々々、早うをりそへ〳〵。▲今參 早う〳〵と御諚候へども、判官殿の思ひ人。▲大名 この心はいかに。▲今參 武藏坊辨慶。▲大名 退り居ろ〳〵。▲くわじや 何となされました。▲大名 判官殿の思ひ人とぬかすによつて、しづか御前のことを云ひだすかと思うて 心がおもしろかつたに、判官殿と、辨慶のいつちぎりやつた。あのやうな者は去なせ。▲くわじや 畏つてござる。▲今參 やい〳〵、水でもくれたらば、とりかへせ

お目に参る—お気に入ること

かゝり—蹴鞠の場

こざかしい—利口ぶりたること

音でござりました程に、承りませう。▲大名 あれへ行て云はうは、大名の事なれば、御目に参つたらば、奉公がすむであらう。又、お目がまゐらずは、五日十日も逗留であらうと、汝が分でうかゞはせ。▲くわじや 畏つてござる。なう〳〵、只今御玄關へおいでなされた。大名の事なれば、目がまゐつたらば、奉公がすむであらうず、目がまゐらずは、五日も十日も逗留であらうほどに、心得さしませ。▲今參 奉公の習ひでござるによつて、苦しうござらぬ。▲くわじや あれへ行かしませ。▲今參 心得ました。▲大名 やい〳〵太郎冠者、此中の五十疋の馬を引き出して、湯洗をさせい。又、若黨たちには、矢の根を磨かれいと云へ。や、今日は暮が好さゝうな。各鞠をなされうほどに、かゝりの掃除して、水を打たせいと云ひ付け。▲くわじや 畏つてござる。しんざの者。▲大名 あれか。さて〳〵こざかしい者ぢや。あの者が心ばせを目でつかうて見よほどに、これへ出と云へ。▲くわじや 畏つてござる。さて、そなたの心ばせを、目でつかうて見やうと仰せられた。お前へ出さしませ。▲今參 心得ました。▲くわじや はあ、新座の者。（大名目でつかふ。）▲大名 やい〳〵太郎冠者、みども

今參ー新參の召使
をりそへーー居り候へ也
おいやれーー云ひなさい也
靜かにー靜御前の事を言掛く

か。▲くわじや それならば、あれへいたとも、今參と名がつくであらう。今參々々、あれへをりそへ。これへをりそへと仰せらるゝであらう。その時、あれへこれへと御諚候へども、御座敷を見れば、破れ窓とおいやれ。この心はと仰せられたらば、ゐどころが候はぬと云はしませ。又、今參々々、早うをりそへ、〳〵と仰せらるゝならば、判官殿の思ひ人。また、心はとお尋ねならば、靜かに參らうと云はしませ。▲今參 かやうに申せば、ようござるか。▲くわじや これでは、賴うだ者の氣に入る事でござる。いや、何かと云ふ内に、これでをりやる。それにまたしませ。▲今參 心得ました。▲くわじや 賴うだお方ござるか。▲大名 太郎冠者が戻つたさうな。▲くわじや ござるか。▲大名 もどつたか〳〵。▲くわじや えい。ござります。▲大名 さて〳〵骨をりや。新座者を抱へたか。▲くわじや 抱へました。▲大名 どれにゐる。▲くわじや 門外に居ります。▲大名 やい、始あることが、終まであると云ふほどに、ちとくわを云はう。汝あまたに答へ。▲くわじや 畏つてござる。▲大名 太郎冠者。▲くわじや はあ。▲大名 床几をくれい。▲くわじや はあ、御床几。▲大名 やい、今のは聞かうか。▲くわじや 大

同心—同意

庖丁—料理

やつと參つた—相撲劍術などの勝負事

秀句—口合謎などの類

しんく—秀句を辛苦と誤解するなり

都へ上り、奉公をいたし、その後、國許へ歸らうと存ずる。やあさて、若い時旅をせねば、老いての物語がないと申すによつて、思ひ立つてござる。▲くわじや なう〳〵。▲今參 は。こちの事でござるか。▲くわじや いかにも、そなたの事ぢやが、どちへ行くぞ。▲今參 某は、奉公の望で都へ上る。▲くわじや 身ども抱へうぞ。▲今參 それは忝うござる。▲くわじや さて、今でもおぢやるか。▲今參 參りませう。▲くわじや やあさて、ふと詞をかけたに、同心めされて、このやうな嬉しい事はない。さて、そなたの國はどこぞ。▲今參 坂東方でござる。▲くわじや 何も藝はないか。▲今參 いや、藝と申すほどの事ではござらぬが、このやうな事も、藝になりませうか。▲くわじや 何でござるぞ。▲今參 弓、鞠、庖丁、碁、雙六、馬のふせおこし、やつと參つたを致す。▲くわじや もし、秀句はならぬか。▲今參 いやもし、最早參るまい。▲くわじや それはなぜに。▲今參 參りもせぬ先から、しんくなどと仰せらるゝによつて、參るまいと云ふ事でござる。▲くわじや 夫は聞きやうが惡い、秀句でおぢやる。▲今參 いや、秀句はなりませぬ。▲くわじや 教へては。▲今參 習うてならぬと云ふ事が、あるものでござる



阪東方—關東
いたしからひて
—致し拵して即
しつくして拵の
義歟

三　今參

三人

大名　立烏帽子、素襖、袴、小さ刀
冠者　半袴、腰帶
參り　括り袴、腰帶、烏帽子

▲大名　隱れもない大名。かやうにくわは申せども、召使ふ者は一人、一人ではつかひ足らぬ。まづ太郎冠者を喚びいだし、まづ申しつけう。太郎冠者あるか。▲くわじや　はゝ。▲大名　ゐたか。▲くわじや　お前に。▲大名　念なう早かつた。汝よび出すは別の事ではない。汝一人ではつかひたらぬ。新座の者を抱へうと思ふが、何とあらう。▲くわじや　一段とようござりませう。▲大名　急いで上下の街道へ出て、抱へて來い。▲くわじや　はゝ。▲大名　えい。▲くわじや　まづ、急いで參らう。やあさて、新座者を抱へてござらうならば、すこし休息を致さうと存ずる。や、何かと云ふうちに、街道でござる。まづこの所にやすみ、抱へて參らうと存ずる。▲今參　これは阪東方の者でござる。某、國許の奉公をいたしからひてござる。この度

うちこかして、お手つて云うて入るなり、

らへました。聟入の辭儀がいろ〳〵あると申す。教へて下されませい。▲權六 やすい事ぢや。物の本に書き記してある。見て參らう。▲むこ 頼みまする。▲權六 あの樣なる者には、ちと、恥をかゝしたがよい。無い事を教へてやらう。なう〳〵。▲むこ 何事でござる。▲權六 聟入の辭儀いろ〳〵書き付けてある。中にも當世樣のむこいりは、何事も〳〵、皆、舅の云ふ如くにさへすれば、ようおぢやるぞ。▲むこ それは、心安い事でござる。舅の云ふやうにしまうせうか。▲權六 なか〳〵。引出物があらば、見せさしませ。▲むこ いろ〳〵こしらへてあると申す程に、持つてまゐつて見せませう。さらば〳〵。うれしや〳〵、急いで聟入致さう。待つて居られう。お案内も〳〵。▲くわじや 誰そ。どなたでございまする。▲むこ 花聟ぢや。舅殿へそのとほり云へ。▲くわじや 畏つてござる。申し聟樣の御出でござる。▲しうと この方へ通せ。▲くわじや 心得ました。申し、こちへお通りなされませい。▲むこ 汝は冠者か。▲くわじや 冠者でござる、▲しうと 内々待ちまする所、早々御出、忝うござる。むこ口まねする。▲しうと 冠者、さかづき出せ。聟口まねする。舅はらたつる。聟はらたつる。後つかみあひて、聟をうちこかし、舅はいる。むこ、冠者が耳をとり、ひきまはし、



わせる—來られるの意

二　口眞似聟

四人
男　長袴、小さ刀
冠者　半袴、腰帶
聟　烏帽子、素襖、袴、小さ刀
權六　長袴、小さ刀

▲しうと　このあたりの者。今日は最上吉日でござる所で、聟どののお出ぢや。冠者に申しつけまうせう。在るか。▲くわじや　お前に。▲しうと　今日吉日で、聟がわせる。その分を心得。▲くわじや　畏りました。▲むこ　人のいとしがる、かくれもない花聟。今日吉日で聟入仕る。あなたへ無心申し、こなたへ頼うで、かやうにこしらへを仕つた。聟入に、いろ〳〵辭儀作法があると申す程に、こゝに權六殿とて、お目かけらるゝ人がある。參つて、習うてまゐらう。まづそろ〳〵まゐらう。これぢや。案内も〳〵。▲權六　誰ぢや知らぬ。誰そ。▲むこ　某でござる。▲權六　何として來たぞ。▲むこ　今日吉日で、聟入しまする。▲權六　めでたい事ぢや。用があらばおしやれ。▲むこ　方々へ御無心申して、この如くにこし

諸白—酒の極上

白い。内に入りて、泥鰌の鮨をほつばつて。諸白を飲めやれ。▲くわじや 兩に皮をひつぱつて、まはりに疣のあるをこそ、はり太鼓と申すよ。▲大名 なにかの事もいるまいぞ。内に入りて餅食へ。▲くわじや けにもさあり。やよ、けにもさうよの〳〵。あとしやぎりどめ。

ぬかれて―だまされたること

冠者が歸りました、〳〵。▲大名 やれ〳〵、戻つたか、〳〵。はりだこ求めて來たか。早う見せい〳〵。▲くわじや 心得ました。これ〳〵。▲大名 そちは、子供へみやげに、太鼓を持つてきたか。まづ、はりだこ見せい。▲くわじや はりだこではござらぬ。張太鼓が本でござる。卽ちいぼも澤山にござる。▲大名 おのれめは、都の者にぬかれて來た。▲くわじや いやいや、ぬかれはしませぬ。▲大名 はり蛸と云ふ肴物ぢや。▲くわじや 肴ならば肴と、とうから云うたいものでござらぬか。▲大名 その樣にぬかれて、まだものを云ふか。あちへうせい〳〵。▲くわじや 賴うだ者が叱らるゝは尤ぢや。これが、高盛にはならぬ筈ぢや。都者ぢや。たゞもぬかずに、この如くに、主のきげんが惡うならうと思うて、きげんなほしの囃子ごとを敎へた。急いで囃しまうせう。囃子物 張太鼓と申すは〳〵、中に木を押し入れ、雨に皮を引つぱつて、まはりに疣の候へば、張太鼓と申すよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの〳〵〳〵〳〵。▲大名 某の機嫌直しに、囃子物をする。ことばをかけませう。いかにや〳〵太郎冠者、だまされたるはにくけれども、囃子物が面

疣があるわ―蛸の足の疣と太鼓の胴の鋲とを間違ふる也

きびのよい―氣味好く云ふがまゝにあつさりと買へる意

うせう。▲くわじや 早う〳〵見せて下され。▲盗人 心得た。田舎者で、何をも知らぬ。こゝに古い太鼓がある。はりだこぢやと云うて賣らう。これ〳〵。▲くわじや これがはりだこか。▲盗人 其方のいふは、はりたこ。左樣ではござらぬ。はりだいこと云ふ物ぢや。▲くわじや それなれば、おぼえぞこなうてござる。張太鼓でござるか。▲盗人 なか〳〵。この如く、皮を引張り申するによつて、張太鼓と申す。▲くわじや また、疣がたくさんにあると申されてござる。▲盗人 これ〳〵、疣こそあまたござれ。▲くわじや あゝ、疣があるわ〳〵。買ひませうが、代物はいか程ぞ。▲盗人 五百疋でござる。▲くわじや 則ち、五百疋に買ひまうせう。▲盗人 代物は、何方で受取らうぞ。▲くわじや 三條の大黒屋でわたしませう。▲盗人 めでたう、大黒屋でうけとりませう。そなた程、きびのよい買手もない。みやげに、主の機嫌直しする囃子物敎へまうせう。▲くわじや それは何より忝ない。何と。▲盗人 耳のはたにてさゝやく。▲盗人 これこれ、今の如くにおしやれ。▲くわじや おぼえました。忝なうござる。▲盗人 さらば〳〵。▲くわじや やれ〳〵、うれしい事かな。早う持つて下らう。まゐる程にこれぢや。申し〳〵、

仕合人とおぢやるぞ—刊本かくあり仕合人と仰（おしや）るぞか或は仕合人ておぢやるぞか

あるものぢや。買うて來い。▲くわじや 心得ました。▲大名 やがて戻れ。▲くわじや 畏つた。▲大名 えい。▲くわじや はあ、旦那のやうに、急に物をいひつけて、只今から都へのぼり、はりだこを買ひ取つて參れと申さるゝ。さりながら、上らずばなるまい。まづ、そろり〳〵上りまうせう。參る程に都さうな。まづ賑な事ぢや。さて〳〵、はつたと失念した。はりだこのあり所を問うて參らなんだ。何と致さうぞ。さても〳〵、都の者は、知らぬことは呼ばはつて通る。某も呼ばはつて歩きませう。張蛸買ひませう〳〵。▲盜人 都に隱れもないすつぱでござる。田舍者が、何事やら、呼ばはります。この者に、あたつて見ませう。これ〳〵。▲くわじや 何事ぞ。▲盜人 其方は、何を呼ばはつて通るぞ。▲くわじや 某は田舍者でおぢやるが、はりだこを買ひたい處で、呼ばはりまする。▲盜人 そなた仕合人ぢや。▲くわじや なぜに仕合人とおぢやるぞ。▲盜人 某がはりだこを賣る亭主ぢや。▲くわじや まことに、お目にかゝつた事は、仕合ぢや。はりだこ見せて下され。▲盜人 其方ははりだこ見知つたか。▲くわじや いや〳〵、見たことはをりない。▲盜人 追付お目にかけま



呼び入れ―招待
まろせろ―ませろ也
張蛸―干蛸のこと
隠れもない物―有名なる物

狂言記外編

巻之一

一　張蛸

三人　大名　立烏帽子、素襖、袴、小さ刀
　　　冠者　半袴、腰帯、
　　　盗人　長袴、小さ刀

▲大名　御存じの者。天下をさまり、めでたき折からでござる。毎年一門中を、呼び入れまする。太郎冠者を呼び出し、申しつけまうせうと存ずる。あるかやい。▲くわじや　お前に居まする。▲大名　そちを呼ぶも、別の事でもない。毎年一門振舞をする。いつもの如く、張蛸を高盛にせう。そちは、都へ上つて、張蛸を買うて來い。▲くわぢや　畏つてござる。さりながら、どのやうなる物でござる、存ぜぬ。▲大名　隠れもない物ぢや。疣がたくさんに

朱三云々ー以下曲にかゝる朱三、五六、三六などすべて賽の目の名

四の二ー死にの意に言掛く

五二ー鬼と言掛く

も、ある徒然のことなるに、例の友達打ち寄りて、競ひおくれを打ちけるに、對手の曲者石を撒き散らす。こは如何にと怒りて、腰の刀に手をかくる。朱三さらりと引抜けば、地〳〵、五六のやうなる相手もぬき持ち、白黒になつて、追うつまくつつ、鎬をけづり、切つつ切られつ、われはおくれになりしかば。▲シテ敵はじと思ひて、地かなはじとおもひつゝ、三六かけにかゞむ所を、つゞけ切に切り立てられて、われは其所にて四の二けり。四三をはなれて五二となつて、修羅道に落ちにけり。▲シテあゝら、もの〳〵し、いざ、うたう。あゝら、苦しや。かやうに、苦を受くる事、雙六の、地最期の一念悪鬼となつて、修羅道の苦しみなるを、助け給へや御僧よ、〳〵と、云ふかと思へば失せにけり

目—碁の目也

一聲—謠ぶし

おくれを打つ—不詳

時雙六の上にて口論の致され、對手を切り殺し、その身も當座に相果て申され候。卽ちその僧の標にて候。それにつき、不思議なる事の候。この石塔に袋をかけ候へば、雙六の目が、思ひのまゝに出ると申して、今において、かやうに袋を掛け申すことにて候。御僧も逆緣ながら、弔うて御通あれかしと存じ候。▲ワキ 懇に御敎へ、滿足申し候。さあらば、逆緣ながら弔うて通らうずるにて候。▲間 又御用候はゞ、おほせられ候へ。▲ワキ 賴みましよ。▲間 心得ました。▲ワキ謠 扨は雙六僧の舊跡かや。いざ、跡とひ申さんと、鉦から〳〵と打鳴らし、今宵はこゝに旅寢して、かの御跡をとふとかや、〳〵。▲シテ一聲 雙六のおくれを打つ、その心、半一つばかりのたのみなりけり。▲ワキ 不思議やな。これなる塚のかげよりも、まぼろしの如く見えたまふは、如何なる人にてましますぞ。▲シテ詞 これは雙六僧と申す雙六打の幽靈なるが、御弔ひのありがたさに、これまで現れ出でたるなり。▲ワキ 雙六僧の幽靈ならば、最期のありさま語りたまへ。跡をば弔ひ申すべし。▲シテ詞 さあらば、昔のありさま、語りて聞かせ申すべし。跡を弔うて給はり候へ。さて

遠近の云々―道行謡也曲にかゝる

でうす袋―未詳

十　雙六僧

三人

シテ　角帽子、水衣、大口、太刀佩く
ワキ　水衣、頭巾
アヒ　長袴、小さ刀

▲ワキ次第 我は貴く思へども、〳〵、人は何とか思ふらん。詞 これは東國方の者でござる。某諸國修行申さず候間、この度思ひ立ち、北國にかゝり、それよりまた西國修行いたさばやと存じ候。遠近のたづきも知らぬ修行者を、〳〵、たれか哀とおもふらん。彼方此方で鉢開き、知らぬ所に著きにけり。謡 やあ、これなる石塔を見候へば、でうす袋を數多かけ置かれて候。これは如何様仔細の候べし。所の人に尋ねばやと存じ候。所の人の渡り候か。▲間 所の者のお尋は、如何なる御用にて候ぞ。▲ワキ これなる石塔を見申せば、でうす袋を數多かけ置かれ候。いはれの無きことは候まじ。教へてたまはり候へ。▲間 御不審御尤にて候。あれは古、この所に雙六僧と申して、雙六打の候ひしが、ある

錦革—紫地に白く模様を染出せる革

甲の星—兜の鉢の粒狀の物

菊の座—冑の頂上八幡座のこと

あげまき—鎧の背につけたる總角結のこと我が名は上ぐと續けたり

いはゐの上—岩井の水とあるべきか

大づゝ—大筒は鎧の胴の事と云ふ

しゆくわい—手繇か籠手當のこと

口傳—口づから奥儀を傳授すること

求めて參りました。お目にかけましよ。いで、食(くら)はう〳〵。▲主 なう〳〵、怖(おそろ)しや〳〵。太郎冠者が鬼(おに)になつた〳〵。▲シテ いで、食(くら)はう〳〵。▲主 あゝ悲(かな)しや〳〵。▲シテ 取(と)つて嚙(か)まう〳〵。▲主 なう〳〵怖しや。許(ゆる)せ〳〵。▲シテ いで、くらはう。

緋縅―好き日と續けたり紅絲にて縅すこと
著脊長―鎧のこと
小櫻縅―紅白の絲を交へて縅し又は小櫻革（藍染の地に白く小き櫻花の模樣ある革）にて縅したる鎧
卯の花―卯の花縅は白絲を用ゐる
洗革―桃色に染めたる革
勝色―褐色、軍に勝つ意に續けたり

には仔細があるか。▲シテなか〳〵、仔細がござる。これを讀みますれば、鎧の仔細が知れます。よう聞かしましよ。▲主それなら讀うで聞かせい。▲シテ畏つてござる。鎧へ恐れでござる。床几にかけて讀みましよ。さらば讀みます。よう聞かせられ。語初春のよき緋縅の著脊長は、小櫻縅となりにけり。さて又夏は卯の花の、垣根の水に洗革。秋になりてのその色は、何時も軍に勝色の、紅葉にまがふ錦革、冬は雪げの空晴れて、甲の星も菊の座も、皆華やかにこそをどし毛の、馬の上にて、無手と組み、くみの上帯引締めて、思ふ敵をうち糸や、長くわが名はあげまきの、いはゐの上の塵とりて、大づつしゆくわい据ゑ幷べ、唄ひ、酒もり、舞遊び、弓は袋を出さずして、劍は箱に納むれば、治まる御代とぞなりにけり。祕すべし〳〵、口傳にあり。▲主尤も聞えた。その口傳にあると云ふは、どうしたことぢや。▲シテその事でござる。これなこの如く巻きまして、頭に頂けば甲、手にあてますれば籠手、腹に當つれば腹巻、臑に當つれば臑當でござる。▲主さては調法な物ぢや。又ざつくと著て、をどすものを求めて來たか。▲シテなか〳〵、

路次—途中
代り—代金

つくと著ておどすものも欲しうござる。▲アド それもなるほどある。賣つてやらう。それに待ちやれ。▲シテ 心得ました。▲アド これ〳〵、このなかにおどす物が入れてある。必ず路次で明けて見やるな。持つて歸り、賴うだ人の前で明けて見やれ。▲シテ 忝うござる。二色の代物は何程でござる。▲アド 萬疋でをりやる。▲シテ いかにも求めましよ。代りは明日三條の大黑屋で渡しましよ。▲アド なか〳〵。あれで受取らう。もはや お行きやるか。▲シテ なか〳〵。▲二人 さらば〳〵。▲アド ようをりやつた。▲シテ はあ。なう〳〵、嬉しや嬉しや。まんまと二色ながら求めた。まづ急いで歸り、御目にかけう。定めて待ちかねてござろ。これを見せたらば、御機嫌であらう。歸るほどにこれぢや。申し、賴うだ御方ござりますか。▲主 やあ、太郎冠者が戻つたと見えた。戻つたか〳〵。▲シテ ござりますか。唯今歸りました。▲主 やれ〳〵骨折や。何と鎧を求めて來たか。▲シテ なか〳〵。求めて參りました。急いで御目にかけましよ。▲主 早う見せい〳〵。▲シテ 畏つてござる。申し〳〵是が鎧でござる。▲主 何と、それが鎧ぢや。▲シテ なか〳〵。▲主 その書いた物を鎧と云ふ

心も素直に無い者でござる。見れば田舍者が、何やらわつぱと申す。ちと當つて見やうと存ずる。なう〳〵、これ〳〵。▲シテ やあ、こちの事か。何事でござる。▲アド なか〳〵。其方の事ぢやが、何やらわつぱと云うて尋ねらるゝが、何でをりやる。▲シテ 私は田舍者でござるが、鎧が求めたさに、この如くに呼ばはります。▲アド 何と、其方は、その鎧と云ふを見知つてをりやるか。▲シテ やら、此方には都人とも覺えぬ。夫を見知れば是を求むると申せども、存ぜぬ故にこの如くに呼ばはります。▲アド これは身共が誤つた。其方は仕合な人ぢや。身共は鎧屋の亭主ぢや。鎧が望なら賣つてやらう。それに待たしめ。▲シテ それは忝うござる。見せて下されい。▲アド 心得たく〳〵。やれ〳〵田舍者で、何も知らぬと見えた。これに鎧の注文がある。是を鎧ぢやと申して、賣つてやらうと存ずる。なう〳〵田舍衆居さしますか。▲シテ これに居ります。▲アド これ〳〵、是が鎧でをりやる。これを讀うで見れば、鎧の仔細が知れる。その上、是を頭に戴けば甲、胸に當つれば腹卷、こてに當つれば籠手當、臑に當つれば臑當でをりやる。▲シテ いかにも合點致しました。さて、ざ

腹卷—鎧の如くにして袖無き物

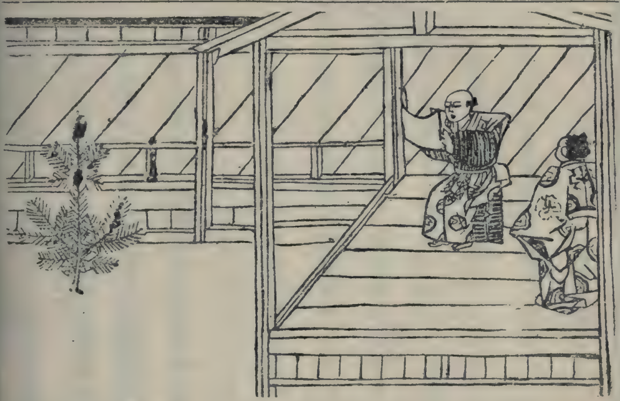
をどす物—鎧の緘（をどし）の事と人を嚇す事とを間違ふる也

南無三寶—これはしたりの意

はなかつたか。▲シテ御諚の通、夥しい事でござる。▲主それにつき、この度は鎧をくらべうと仰せらるゝが、身共が藏に鎧があるか。▲シテされば、御道具は殘らず預りましたが、鎧と申す物は存じませぬ。▲主汝が知らずは有るまい。何と都には有らうか。▲シテなか〳〵、都にはござりましよ。▲主その義なら、汝は都へ上り、鎧を求めて來い。▲シテ畏つてござる。▲主序に、ざつくと著てをどす物も買うて來い。▲シテ心得ました。▲主もはや行くか。▲シテかう參ります。▲主行たらば頓て戻れ。▲シテ畏つてござる。▲主えい。▲シテはあ。やれ〳〵、俄なことを仰せつけられた。まづ都へ上り、鎧を求めて參らうと存ずる。まづ、そろ〳〵參らう。都へ上つてござらば、これを序に致して、此所彼所を見物致さうと存ずる。やあ、何かと申すうちに、これが都でござる。南無三寶忘れた事がある。かの鎧と云ふ物が、どの樣なものやら、又何所許にあるも知らぬ。何と致さう。やあ、流石都ぢや。知らぬ物は呼ばはつて廻れば、調ふと見えました。私もこれから呼ばはらう。なう〳〵、其所許に鎧屋はないか。鎧買はう〳〵。▲アドこれは、都に隱れもない、

鎧―一名鎧腹巻

御道具競―道具を見せ合ふこと



九　鎧

三人　シテ　半上下、腰帯
主　長袴、小さ刀
アド　長袴、小さ刀

▲主 罷出でたる者は、この邊に住居致す者でござる。この間の、彼方此方に御道具競は、夥しい事でござる。それにつき、この度は鎧をくらべさせられうとある。身共が内に、鎧が有るか存ぜぬ。まづ太郎冠者に尋ねうと存ずる。やい〳〵太郎冠者在るかやい。▲シテ はあ、御前に居ります。▲主 念なう早かつた。汝喚び出すは別の事でない。このごろの、彼方此方に、御道具競は、夥しい事で

何の役に立たぬものぢや。何れも歸らせられ〳〵。▲四人 扨も〳〵、騙されたことかな。▲立 おのれ、これと盃がなるものか。▲シテ やい〳〵、これと盃がなるならせいでな。いらぬやい。▲シテ やあ〳〵、盃をせいでな。さうもをりやるまい。それなら、これは身共取つて歸つて、年取物にするわやい。

如才ー原本如在に作る

によつて、ならぬぞ。▲立 はてさて、それは聞えぬ。其所をわごりよに頼む。よいやうに申して、是非とも、御盃をさしてたもれ。▲シテ 身共も如才でない。ならうかと思うて申し上げたれど、おむづかるによつてならぬ。思ひ切りやれ。ならぬぞ。ふつつりとならぬ。▲立 やあ、わごりよは、若い者共が、これ程いろ〳〵と最前から頼むに、聞えぬ。此上は厭でも應でも、盃をせねばならぬ。若しならねば、目に物見せうぞ。▲シテ それは無理な事を云ふ。目に物見せだてしたと云うて、何程の事があらう。おいてくれ。▲立 悔むなよ。▲シテ 悔むことはないぞ。▲立 おのれ憎い奴の。たつた今思ひ知らせうぞ。さあさあ、いづれも、とかく埒が明かぬ。皆寄せさせられ。▲四人 心得ました。▲五人 えいとうえいとう〳〵。▲シテ おのれら何程の事があらう。▲五人 扨も〳〵、強い奴でござる。何とせうぞ。▲立 これ〳〵、身共は後から廻つて、あの御寮人を連れて參らうほどに、又いづれもは、も一度寄せさせられ。▲四人 心得ました。えいとう〳〵〳〵、▲シテ えいとう〳〵、えい〳〵、おう。▲四人 さても〳〵、強い奴でござる。▲立 はあ、これは騙された。俵ぢや。

人體―相當の人柄

聊爾―粗相

なか〳〵てもない―勿論盃はならぬの意

わ。▲立 なう〳〵何れも、米市御寮は承り及うだ美人ぢや。いざ盃を望みましよ。▲四人 一段ようござる。▲立 これ〳〵、御寮人のことは承り及うだ美人ぢや。盃を戴きたいと皆云はるゝ。どうぞ頼む。盃をさしてたもれ。▲シテ はてさて、わごりよ達は人體と見えたがこゝの途中で、その様な事がなるものか。それはならぬぞ。▲立 尤もさうでなりやれども、これはよい所で御目にかゝつた。どうでも盃が戴きたい。どうぞ好いやうに申して、さしてたもれ。▲シテ はてさて、聞き分もない。その様な聊爾なことがあるものか。それはならぬことぢや。さりながら身共はさう思へど、又お御寮の何と思召すも知らぬ。まづ伺うて見よ。とつとそちへ寄つて居りやれ。▲立 心得た〳〵。伺うて、なるやうにしてたもれ。▲シテ 必ずこちを見やるな。申し〳〵、あれに居られます若い衆が、こなたのこと聞き及び、是非とも御盃を戴きたいと申されます。はあ、御尤でござります。私もさやうに存じました。その通申しましよ。これ〳〵若い衆、伺うたれば、たとへ人が云ふとも、その様なことを取り次ぐものか、なか〳〵てもないと云うて、殊の外おむづかる

俵藤太云々ー藤原秀郷を俵（元は田原）藤太と云ふよりことはその秀句を用ゐたる也

とがある。若し人が咎めたらば、俵藤太のお娘御、米市御寮人の御里歸りぢやとおしやれ。▲シテ さても〳〵、まづは俵につき米市、面白うござります。それなら女共も、待ち兼ねて居りましよ。かう參りましよ。まづは御蔭で年を取ります。春は早々夫婦連で御禮に參りましよ。▲アド いかにも、早々御出やれ。さらば〳〵。▲シテ はあ。なう〳〵、嬉しや〳〵。まんまと二色ながら貰うた。まづ歸つて女共に見せて喜ばせう。まことに結構なお方ぢや。あの樣な人が無ければ、身共は立たぬ。はあ、大勢歲暮の禮に行く人が來るよ。▲立衆 何れもござるか。▲立衆四人 皆々これに居ります。▲立衆 いざ、歲暮の禮に參らう。▲四人 なか〳〵、參りましよ。▲立 なう〳〵、あれを見させられたか。人を負うて參る。何人ぢや。尋ねて見ましよ。▲四人 ようござろ。問はせられ。▲立 これ〳〵其處な人。▲シテ こちのことか。何事ぢや。▲立 其方の負ひまして居るは、どなたぢや。▲シテ 何と、この御方か。▲立 なか〳〵。▲シテ 是は俵藤太のお娘御、米市御寮の御里歸ぢや。▲立衆 夫ならちと用がある。待つてくれさしませ。▲シテ 用はあるまいが、待てなら待たう。さればこそ咎むる

でござります、定めて正月お小袖が、出來ましたでござりましよ、姥らは寒うてこそ居りますれ。春暖になりまして、お小袖を見に參りませうでこそござりますれと申して、御言傳を申しましてござります。▲アド それはようこそ言傳をしられた。それにつき思ひ付けた。いつもおごうが方から、其方の女房へ古著を遣すが、それは行たか。▲シテ いや、まだ是も參りませぬが、それはようござります。▲アド いや〳〵、よいと云ふ事はあるまい。云ひつけてやろ。これ〳〵、いつも遣る物忘れた。さあ〳〵取つて行かしめ。おごうが方から、著古したれど遣すと云うて、女房衆へやりやれ。▲シテ これは結構なお小袖を、忝うござります。女どもに見せて喜ばしましよ。さてこれを、どうして持つて參りましよ。後の俵と相應致さぬ持物でござる。▲アド まことに相應せぬが、やあ、致しやうがある。こちへおこしやれ。此俵に打ちかけてやらう。これ〳〵、ようをりやる。それでは俵もかくす、その儘人を負うた樣なわ。▲シテ やあ、人を負うたやうなと仰せられますが、時分柄でござる。若し道で人が咎めましたら、何と致しましよ。▲アド それはよいこ

おごう樣―女の尊稱也こゝは奥様のこと

しよ。▲アド又春、藏を開いたら、早々遣らうぞ。▲シテそれは愈忝うござります。それにつきまして、今日路次で、近附に逢ひましたれば、棒を言傳てました。棒にかけて參りましよ。▲アドいかにも、よかろ。▲シテ申し〳〵、これ程なものが、此方にも一つござればようござるが、片荷ずつて持たれませぬ。▲アドさうであらう。▲シテやあ、幸どれからぞ負うて參つたやら、負繩がござる。負うて參りましよ。▲アド一段よかろ。手をかけてやろ。さあ立て。▲シテはあ、丁度よいわ。▲アドまづ早う歸つて仕舞やれ。▲シテ每年々々御蔭でしまひます。忝うござります。もはや御暇申します。▲アドお行きやるか。ようをりやつた。▲シテはあ。なう〳〵、嬉しや〳〵。まんまとまづ合力米は貰うた。さりながら、いつもおごう樣から、女ども方へ、古著の御小袖を下さるゝ。これは忘れさせられたか、沙汰がない。これも序にお氣の附くやうに申して、貰うて參らう。申し〳〵、ござりますか。▲アドやあ、わごりよはまだ往なぬか。▲シテもはや歸りますが、女どもが、おごう樣へお言傳申しましたを、失念致しました。▲アドそれは何と云ふ言傳ぞ。▲シテまづ近い正月

晩じた―暮れた
ふせい―不精也 精を出さぬこと
半石の又半石―五斗の半分なり二斗五升也

定めてしまうて、歳暮の禮に出られたか。▲シテ いや、まだ仕舞ひましたやら、しまひませぬやらでござります。▲アド はて扨、今日は大晦日、もはや日も晩じたに、まだしまはぬとは。それも常々働がふせいなによつてぢや。▲シテ 私も隨分常にも稼ぎますれど、何と致しましたやら、この如くにしまひかねまして、迷惑致します。▲アド はて扨、それは苦苦しいことぢや。それにつき、いつも其方へ遣す合力米は行たか。▲シテ いや、まだ參りませぬ。▲アド 何と、まだ行かぬか。それなら云ひつけてやらう。▲シテ それは忝うござります。▲アド やい／＼、いつも誰へ遣す合力米はやつたか。何と、藏をしめ松飾をした。ちとでも出たはないか。何と、半石の又半石出たがあるか。それは少いなあ。なうなう、藏をはや締めて、飾をしたによつて、出たが無いと云ふが、半石の又半石あるが、これなりともまづ遣らうか。▲シテ それは忝うござる。それ程ござれば、ざつと年を、夫婦の者が取ります。▲アド それなら、遣らうほどに、まづそれに待ちやれ。これ／＼、これを遣る程に取つて行て、姥にも見しやれ。▲シテ 忝うござります。取つて歸り、喜ばしま

御合力―御加勢の意おめぐみ

八米市

七人　シテ　半上下、棒擧げ出る
アド　皆々長袴、小さ刀

▲シテ これは、この邊の者でござる、一日々々と暮す程に。今日ははや、大晦日になつてござる。世間を見ますれば、仕舞好うして、歳暮の禮などに歩く人もあるに、私は仕舞ふことは措いて、何を一色、年とり物を調へもいたさぬ。氣の毒な、しまひかねた事でござる。又こゝに誰殿と申して、私に御目をかけらるゝ御方がござる。何時もこれから定めて、年とり物を御合力なさるゝが、今に沙汰がない。これから參らねば、何とも年を取らうやうもない。只今から參つて、御氣の附くやうに申して、貰うて參らうと存ずる。その下心で、この棒を持つて參る。まづ急ぎ參らう。やれ〳〵誠に、來る年も〳〵、この如くにしまひかねて、迷惑な事でござる。まゐるほどに是ぢや。ものもう。御案内も。▲アド 表に案内とある。誰ぢや。▲シテ いや、私でござります。▲アド やあ、わごりよか。

やくたもない—埒も無い、つまらぬ

施を下されたれば、袈裟まで出ました。▲アド何のやくたもないこと。とつとゝござれ。
▲シテはあ、面目もござらぬ。なうなう、恥かしやく。

前―手前に同じ

はやかう參る。▲アド申し〱、それにつき、ちと用がござる。まづ待たせられ。▲シテ心得ました。▲アドやれ〱、いつも十疋の布施物を遣はします。これを忘れてやらぬにより、何かと云うて歸らるゝ。遣はさうと存ずる。申し〱。▲シテ何事でござる。▲アド忘れたことがござる。いつも進ぜます布施物を、はつたと忘れました。取つて歸らせられて下され。▲シテ忘れたと仰せらるゝは、これでござるか。▲アドなか〱。▲シテはて扨こなたは律義な。それを今日取らぬと申して、何と存じましよ。重ねてついでもござらう。もはや歸ります。▲アドいや〱、進ぜねば氣にかゝります。是非とも取つてござれ。▲シテいや〱、何程仰せられても、今日は取られぬ事がござる。▲アドそれはどうした事でござる。▲シテ最前から敎化を致さうの、袈裟が見えませぬのと申して歸つたは、この布施が欲しさにと思召す前もござる。どうあつても取られませぬ。▲アドいや〱、是非共に。▲シテいや〱、こなたへ預けます。▲アドいや、どうでも取つてござれ。はあ、申し〱、これ袈裟が出ました。▲シテはあ、扨もめでたい事がござる。▲アド何事でござる。▲シテ御布

錢の周―これも布施を諷する語

ふせ―補ふ意より布施をきかす

死に落つる。彼の十疋の布施物を二つに押し切り、大海へさらり〳〵と投げ、無有も無もなうして往ぬるに、何の往なれぬことかあらう。あゝよしない事を、くど〳〵思うたことかな。往なう〳〵とは思へど、又彼の十疋の布施物を取ると取らぬは、愚僧が身の上では大分の違ぢや。何とぞして取りたいが。やあ、思ひつけた。方便の以て取らう。申し〳〵ござるか。はて不思議な事かな。▲アドやあ、まだ歸らせられぬか。何ぞ見えませぬか。▲シテされば、不思議な事でござる。最前教化をいたす時、私は袈裟をかけて居ましたとも覺えます。又とつて下に置いたとも覺えますが、若し跡にはござりませぬか。▲アドされば、存じませぬ。尋ねませう。▲シテいや〳〵、尤も私の袈裟には印がござる。出たらば後から持たして下され。他所から歸つて、竿の端に掛けて置きましたれば、鼠がちやうど錢の周ほど食ひました。それを小僧が、十疋のふせ物を、あちらへふせやり、こちらへふせ起し致しました。これが印でござる。いつそ此穴をふせ繼がう、ふせ縫ひにいたさうと存じました。今につぎもいたさぬ。出ましたら後から持たして下され。も

遇ふ時は云々—出典未詳

參らぬ—酒を飲まぬ

こんり—嫌離歟

敎化と申すも、これまででござる。又寺へも御出なされ。重ねて敎化いたしましよ。合點が參つたの。▲アド なか〳〵、合點いたしました。▲シテ 合點が行けばようござる。さらばかう參らう。なう〳〵、不圖おもひ出した。或歌にもござる。遇ふ時は、語りつくすと思へども、別となれば殘る言の葉と、申して、遇ふ時には忘れて居て、必ず別になれば、何を云はうもの、いや、ものを遣らうものと思ふものぢや。何も忘れさせられた事はござらぬか。▲アド いや〳〵、何も忘れは致しませぬ。もはや御歸りなされますか。▲シテ さらばでござる。▲アド ちと御酒でも參つてござりませぬか。▲シテ はて扨こなたは、氣をつけさうなことには附けはせいで、身共がどこに酒を飲みます。▲アド まことに參らぬを忘れました。▲シテ もはや參る。▲アド ござりますか。ようござつた。▲シテ はあ、これは如何なこと。今のほどに手を執つて引き廻はす樣に云うても、合點しられぬ。何とせう。合點しました〳〵とあれば、何を合點した知らぬ。扨も是非もないことかな。いや〳〵、もはや思ひ切らう。まことに受けこひぬれば、こんりいたす。受けこはぬ時は、長く生

捨てるではない。唯世を厭ふと厭はぬ事ぢや。後世のことならば、身も命も惜まず、財寶も擲つて後世を願へと云ふ事でござる。又雲となり雨となる。これは世間にある事ぢや。或は只今までこれをあの人に何程やらうと思うたを、不圖惜いと思うてやらぬ心が出來る。その惜いと思ふ心の出來たところが、晴天に叢雲のかゝつたやうに、雲となり雨となりでござる。▲アド 尤でござります。▲シテ 何と、合點が行きましたか。▲アド なかなか。合點致しました。▲シテ 又不晴々々の時と申すは、晴れやらず、晴れやらぬ時と云ふことでござる。唯今も申すごとく、彼の遣るものは、さらり〳〵とはれやり、又取るものもさらり〳〵と取つて、とかく晴れやつたがようござる。又先の貰ふ者の身になつて見たがようござる。いつも、物を何歟くれらるゝが、今日は忘れられたか、但し惜いと思うてかと、心に千萬の罪を作る。すれば大きな科ぢや。その科を作る者の科ではござらぬ。いつも遣る物をやらぬによつて、とやかうと作る故、皆そのやらぬ者の科になります。とかく遣る物は、さらり〳〵と晴れやらしやれ。▲アド 畏つてござる。▲シテ まづ

不晴―布施をきかす

▲アド なかく〱。暇でござる。忝うござる。教化なされて下されませ。▲シテ それなら、まづ通りましよ。▲アド お通りなされませい。▲シテ 扨教化と申して、別して格別な事もござらぬ。まづ人間の果敢ないことを申さば、電光、朝露、石の火、風の前の燈火、朝顔の花などにも喩へおかれてござる。朝顔の花と申すものは、御存じでござらう、早朝に開き、日の出れば凋み、夕にははらりと落つる、果敢ない物でござる。▲アド なかく〱。左樣でござります。▲シテ まだ朝顔の花は、朝開け夕を待つ樂もござる。人間の果敢ないことを申さば、出る息、入る息を待たぬ世の中でござる。果敢ないことでござる。▲アド 最左樣でござります。▲シテ 又佛說にも、傳法せんと欲せば、供佛、施僧、捨身の專らとせよ。雲となり雨となる不晴々々の時と、說かせられた。かう申しては合點が參るまい。これを一々和げて申す時は、傳法せんと云ふは、よき法を傳へんと思はゞ、佛に佛具を供へ、施僧と申して、我等如きの貧僧に、何でも施すを施僧と申す。又捨身を專らにせよと云ふは、身を捨つると書いた字ぢや。さういうて、この身を淵河へ持つて行て、

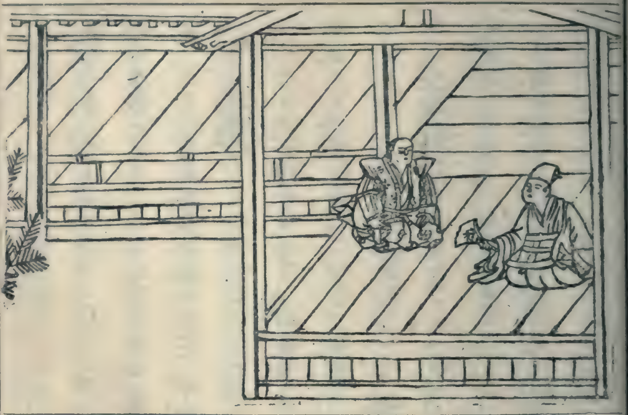
に客がござつて、佛前にたてましたれば、扨も見事な花ぢやと云うて、皆褒物でござつた。▲アド それは役に立ちまして、滿足に存じます。▲シテ さらや〳〵。佛說功德布施且息災延命。詞 やあ、あの花は庭前にござるか。またどれからぞ貰はせられたか。▲アド いや、私の庭前にござります。▲シテ それなら、あの花の種を貰うて植ゑましよ。▲アド いかにも進ぜましよ。▲シテ 必ず忘れさせらるゝな。▲アド 心得ました。▲シテ 經 南無きやらたんのふとらや〳〵。もはや勤をばしまひました。かう參ります。ちと寺へもお出なされ。▲アド 畏つてござる。參りましよ。▲シテ さらば〳〵。▲アド ようござりました。▲シテ これは如何なこと。お布施の沙汰がない。忘れられたものであらう。但し今日は遲う參つたによつて、くれられぬか知らぬ。いや〳〵、このやうな事は、必ず例になりたがるものぢや。敎化にこと寄せて取つて參らう。申し〳〵、ござるか。▲アド やあ、これはまだお歸りなされませぬか。▲シテ いや、もはや歸りますが、何時ぞはこなたに敎化を致さう〳〵と存じますれど、終に敎化致したこともござらぬ。何と、今日はお暇ではござらぬか。

非時—午後の食事

貧僧の重ね齋—諺

奇特—神妙

に思ふやうにならぬ世の中でござる。どちらぞを非時にすればようござるに、ちやうど貧僧の重ね齋と申すが、これでござる。參るほどにこれぢや。ものもう。案内もう。▲アド表に案内とある。どなたでござる。▲シテいや、私でござる。▲アドやあ、お住持様でござるか。ようこそお出なされました。今朝は待ち兼ねて居りました。▲シテさうでござらう。私も常齋のことなり、參らうと存ずる所に、さる初めてのお方から、是非とも齋に參つてくれいと仰せられて、餘儀無うこれへ參り、只今歸りました。定めて待ち兼ねてござらうず。遲なはつたれど、せめて、勤ばかりなりと致して歸らうと存じ、參りました。▲アドようこそお出なされました。御勤をなされて下され。まづかうお通りなされませ。▲シテ心得ました。通りましよ。申し〱、こなたには、何時參つても持佛堂を綺麗にして置かせらるゝ。奇特な事でござる。▲アドいや〱、さやうにもござりませぬ。▲シテさらば勤を始めましよ。如是我聞一時佛在須菩提王、三千大千世界。やあ、日外は見事な花を下されました。▲アドされば、進ぜましたが、御役に立ちましてござるか。▲シテ折節寺



七　布施ない

二人　シテ　頭巾、袈裟、衣、珠數持
　　　アド　長袴、小さ刀

▲シテ　これは、當寺の住僧でござる。今日は誰どのと申す方へ、常齋に參る筈でござる。參らうと存ずる所に、又さる初めてのお方から、參つてくれいと仰せられ、餘儀無うてこれへ參り、只今歸りました。常齋のことでござる。定めて待ち兼ねてござらう程に、只今からなりとも參り、勤ばかりなりと致して歸らうと存ずる。又これへ參れば、定めて鳥目十疋づつの布施物を下さるゝ。一つはこの下心もござり、まづ、そろ〳〵參らう。まこと

九品―極樂往生の等級にて上中下の三品に各上中下の三生あり上品上生が最上也

がうけばつたる―蹈け張りたるか強力の意なるべし

那なり。しかるべくは閻魔王、この罪人の、九品の淨土に送り給へ。それもならずは、地獄の釜をば蹴破るべし。おう、がうけばつたる罪人かな〳〵。▲シテこの上は力なし。▲二人この上は力なしとて、罪人の手を執つて、閻魔王の案内者にて、九品の淨土へ送り給ひ、それより地獄へ歸りしが、又立ち歸り、さるにても、あら名殘惜しの罪人や、〳〵とて、鬼は地獄にかへりけり。

八尾の地藏―初日山常光寺本尊小野篁作地藏菩薩

えんもじ―閻魔の頭字を女房詞にて書く

南瞻部洲―南閻浮提に同じ須彌山の南の國なり

みたむなかろ―見ともなからうにて容貌の醜き意

してくれうぞ。いかに罪人、急げ〳〵とこそ。やい〳〵、汝がその差し出す物は何ぢや。▲罪人 是は娑婆に隱れもない、八尾の地藏よりの御文でござる。見させられい。▲シテ さればその古、この閻魔も地藏と懇したによつて、その文をば用ゐたれど、今は地獄もがしんぢやによつて、用ゐる事はならぬ。今一責責めてくれうぞ。いかに罪人、地獄遠きにあらず、極樂遙なり。急げ〳〵とこそ。やい〳〵、汝は餘り文を差出すほどに、見てとらせう。まづ床几くれい。▲罪人 心得ました。▲シテ その文をおこせ、見やう。さあ〳〵、汝も是へ寄つて、とも〴〵に讀め。▲罪人 心得ました。▲シテ まづ言上書を見やう。えんもじ樣參る、地よりと書かれた。これはまだ古のことを忘れずに、書いておこされた。▲二人 謠 そも〳〵南瞻部洲、河内の國八尾の地藏の爲には旦那、その名を又九郎と申せし者のためには、この罪人は小舅なり。詞 扨は汝は又九郎が小舅か。それならば又九郎が女房も推量した。汝に似たらば、みたむなかろ。▲罪人 いや〳〵、私は似ませぬ。美しうござる。▲二人 小舅なり。われを信じて月詣で、佛供をそなへ歩を運べば、我が爲一の旦

八宗九宗―八宗は律倶舍成實法相三論華嚴天台眞言也禪を加へて九宗となる
ぞろめく―歩き行くこと
がしん―餓死

六　八尾地藏

二人　シテ　鬼頭巾、半袴、杖つき出る
　　　アド　頭巾、白水衣、半袴

▲シテ　地獄の主閻魔王〳〵、邏齋にいざや出うよ。詞　これは地獄の主閻魔大王なり。扨も、今は人間が利根になつて、八宗九宗に法を分け、彌陀の淨土へ、ぞろ〳〵とぞろめくにより、地獄のがしん、以ての外。それ故只今この閻魔王が、六道の辻へ罷出で、罪人が來つてあらば、地獄へ責め落してくれうと存ずる。謠　住みなれし、地獄の里を立ち出でて、〳〵、足に任せて行くほどに、〳〵、六道の辻に著きにけり。詞　急ぐ程に、これははや六道の辻でござる。まづこの所に待つて、罪人が來らば、一責責めて責め落さばやと存ずる。▲罪人　罪科もなき罪人を、〳〵、誰かは寄つて責めうよ。詞　これは河内の國八尾の近所に住居致した者でござる。某　不圖無常の風に誘はれ、只今冥土へ赴く。そろり〳〵と參らう。▲シテ　あら、いかう人臭い〳〵。されば罪人が來た。地獄へ責め落

る事ならぬぞ〳〵。▲アドいや〳〵、どうでも牛を取るぞ。やるまいぞ〳〵。

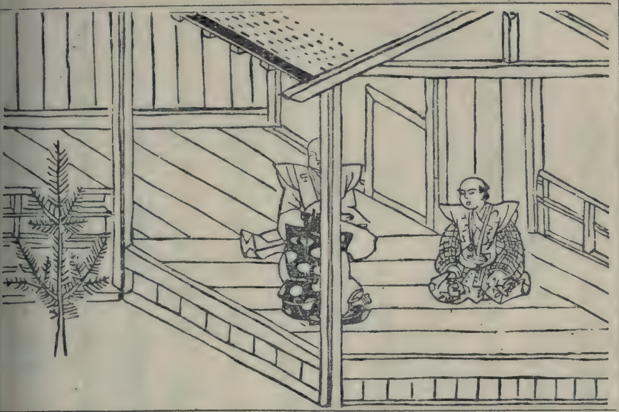
かけろく―賭祿也勝負事に何物かを賭けにする也

すれば、有るにきはまつたが、さりながら、犬とは違うた所があるが、知つて居やるか。
▲シテ なか〳〵、存じた。まづ顔が犬より細長うての。
▲アド いかにも。
▲シテ 尾がふつさりとして。
▲アド それ〳〵、これも合うた。扨はよう合うたが、有るが定か。確に佐渡には無いと聞いたが合點いかぬ。やあ思ひつけた。尋ねる事がある。これ〳〵。
▲シテ 何事ぞ。
▲アド どうでも、無いにきはまつた。何とかけろくにして、有るが定なら、身どもも國に牛を持つたほどに、これをそちへ遣らう。又無いならば、そなたも牛があらう、おこしやれ。
▲シテ いかにもさう致さう。違はないぞ。
▲アド 必ずその極めでをりやるぞ。
▲シテ さやうでをりやる。
▲アド それなら、問ふ事が一色あるわ。狐があるなら、狐の啼く聲は何と云うてなくぞ。
▲シテ はてさて狐は、ものと云うて啼くわ。
▲アド 何と。
▲シテ まづ、それに待ちやれ。はあ、何とやら云うて啼くが。
▲アド これ〳〵早うおしやれ。何と啼くぞ〳〵。
▲シテ はあ、思ひ出した。物と啼くわ。
▲アド 何と。
▲シテ 物と。
▲アド 何と。
▲シテ ちよくわいと啼くわ。
▲アド そりや違うたぞ。そちが牛を取るぞ、〳〵。
▲シテ あゝ許してくれ。牛は遣

ましよ。やい〱兩國の百姓ども。▲二人 はあ。▲奏 仰せ出さるゝは、毎年々々相變らず御年貢を納めますとあつて、上にも殊の外御機嫌ぢや。いよ〱又來年も、早々納めにのぼりませい。▲シテ はあ、畏つてござる。▲奏 又いつは下されねど、御通を下さるゝぞ。▲二人 はあ、有難うござります。▲奏 さあ〱、これへ寄つて飲め。身共が酌をするぞ。▲二人 これは慮外でござります。これは有難い仕合でござります。それならもはや御暇申します。又明年參りましよ。▲奏 なか〱。明年相變らず參りませい。▲二人 はあ、有難うござります。▲シテ さあ〱、をりやれ〱。いざ下らう。▲アド なう〱、何と當年はよい首尾でをりやるの。▲シテ なか〱。殘るところもない、よい仕合でをりやる。▲アド それにつき、わごりよに尋ぬる事があるわ。▲シテ 何事でをりやる。▲アド そなたの國の佐渡は、最もよい國なり。何不足もないが、狐が無いと云ふが、定か。▲シテ いや〱。それは虛言ぢや。なるほど居りやる。▲アド いや〱確か無いと聞いたが、有るが定か。▲シテ なか〱、有るわ。▲アド それなら狐は、どの樣な物ぢやの。▲シテ はて、狐は犬のやうな物ぢやわ。▲アド

さう。▲二人 さらば〳〵。▲シテ とは云うたが、身共の御館もこれでをりやる。▲アド はて扨わごりよは、戯言をいふ人ぢや。扨お奏者は決つてあるか。時ので上げさしますか。▲シテ いかにも、時のお奏者でをりやる。▲アド それなら、そなたから上げさしませ。▲シテ 心得てをりやる。ものもう〳〵。▲奏者 何者ぢや〳〵。▲シテ はあ、これは佐渡の國の御百姓でござる。毎年の如く御年貢を納めます。上へはお奏者の御心得をもつて、よろしう仰せ上げさせられ下されませ。▲奏 いかにも聞き届けた。お藏の前へ納めませい。▲シテ はあ、畏てござる。さら〳〵。なう〳〵越後の、居さしますか。▲アド なか〳〵、これに居ます。▲シテ 身共は上げた。そなたも上げさしませ。▲アド 心得た。さらば上げう。ものもう〳〵。▲奏 何ぢや〳〵。▲アド はあ、これは越後の國の御百姓でござる。いつもの如く、御年貢を納めます。▲奏 ようこそ持つて参つた。御藏の前へ納めませい。▲アド はあ、畏つてござる、さら〳〵。なう〳〵上げてをりやる。▲シテ それは一段のことでをりやる。▲奏 申し上げます。兩國の百姓、毎年の如く御年貢を納めます。あゝその通申し渡し

れに似合うた道連が參つた。言葉をかけ同道いたさう。なう〳〵、これ〳〵。▲シテやあ、こちの事か。何事でをりやる。▲アドなか〳〵、そなたの事ぢや。わごりよは、どれから何所へ行かします。▲シテ身共は、佐渡の國の百姓でをりやるが、都の地頭殿へ、御年貢を納めに上るわ。▲アドそれは一段の連ぢや。身共は越後の國の百姓ぢや。身共も都へ年貢を納めに上る。いざ、同道いたさう。▲シテそれは似合うた連ぢや。いざ同道致さう。まづ、さきへお行きやれ。▲アドそれなら、身共が先ぢや程に、參らうか。▲シテなか〳〵。行かしませ。▲アドさあ〳〵、をりやれ〳〵。▲シテなか〳〵。參る〳〵。▲アドなう〳〵、世間には似合うた連もある、似合はぬ連もあるが、そなたと身共のやうな連は有るまいぞ。▲シテいかにもその通でをりやる。あはれ御館も一つ所であれかしの。▲アドさうでをりやる。歸りにも又同道して下らうもの。やあ何かと云ふ内に、身共の御館はこれでをりやるわ。▲シテ扨はこれか。身共が御館はとつと上ぢや。▲アドそれなら、これで御暇申さう。下りには最前の所で待ち合うて、又同道して下らうぞ。▲シテなか〳〵、さやうに致



地頭―莊園の領主

五　佐渡狐

シテ　半上下、腰帶
三人　奏者　長袴、小さ刀
アド　半上下、腰帶

▲アド 罷出でたる者は、越後の國の百姓でござる。毎年都の地頭殿へ、御年貢を納めに上ります。只今もいつもの如く、上らうと存ずる。まづ急いで參らう。まことに、この如く相變らず上るは、めでたい事でござる。▲シテ これは佐渡の御百姓でござる。毎年都へ御年貢を納めに上ります。當年も上らうと存ずる。やれ〳〵いつも相變らず、この如くに上るは、めでたい事でござる。▲アド やあ、こ

よいかげんに突張をかやれ。▲冠者畏つてござる。▲シテ如何に悪心の深い祖父の腰なりとも、明王の索にかけて祈るなら、などか奇特の無かるべき。ほろおん〱〱。
▲三人ひやあり、ひやあり、ほつばい、ひやろ、ひい。

や〱。▲冠者 申し〱、殊の外御機嫌でござります。▲シテ いかにも、身共も滿足ぢや。▲おほぢ やい〱、太郎冠者。これは何時までかうして置くことぢや。▲シテ 何時までも、こなたの一生さやうでござります。▲おほぢ なう〱輕忽や〱。此樣にして一期居らるるものか。元の樣にして返せと云へ。太郎冠者。▲冠者 申し〱、只今語られたを御聞きなされましたか。▲シテ なるほど聞いた。餘り身どもが行力が強さに、祈り過ぎた。こんどは後から祈つて、よい加減にして進ぜう。▲冠者 申し〱、この度は後から祈つて、よい加減にせうと仰せられます。▲おほぢ 早う祈れ〱。▲シテ さらば祈らう。行者は加持に參らんと、役の行者のあとをつぎ、苛高珠數をおし揉んで、も一祈祈るなら、などか奇特のなかるべき。ぼろおん〱。橋の下の菖蒲は、誰が植ゑた菖蒲ぞ。ぼろおん〱。これは〱又祈り過ぎた。▲おほぢ やい〱、鄕の殿は、祖父を見舞には來いで、嬲りに來たと見えた。元のやうにして返せと云へ。あゝ悲しや〱。▲シテ これ〱太郎冠者、これはまた祈り過ぎたと云へ。某が行力が強さぢや。又前から祈らうほどに、汝は後から

奇特—靈驗

なと仰せられます。▲シテ さうであろ。あれは御苦勞にあろ。身どもが日頃の行力で、あの腰を祈り直して進じませうとおしやれ。▲冠者 畏つてござる。申し／＼祖父御樣、郷の殿の仰せられますは、こなたの御腰が屈ませられて、御苦勞に見えます。行力をもつて祈り直して進ぜましよと仰せられます。▲おほぢ 何と云ふぞ。この祖父が腰を、郷の殿が行力で、祈り直さうと云ふか。▲冠者 さやうでござります。▲おほぢ なにとぞ行力で直ることなら、祈つてくれさしめ。▲シテ 畏つてござる。追付祈りまして、よう致して進ぜましよ。それ山伏と云つぱ、山に起き臥すによつて山伏なり。兜巾と云つぱ、布切一尺ばかり黒く染め、襞を取りて戴くによつての兜巾なり。又この珠數は、苛高にては無うて、むざとした珠數玉を繋ぎ集め、いらたかと名づく。かほど貴き山伏が、一祈祈るものならば、などか奇特の無かるべき。ぼろおん／＼。いろはにほへと、ぼろおん／＼。何と／＼太郎冠者、奇特を見たか／＼。▲冠者 扨も／＼奇特千萬、驚き入りましてござる。▲おほぢ やい／＼太郎冠者、久しうて月星を拜うで、この樣な嬉しい事はない。あゝ嬉し

どち風が吹いて
しいかなる風の
吹廻して也

御無事でござるか。▲冠者 なか〳〵、御息災にござります。明暮こなたの事ばかり、仰せ出されますぞ。▲シテ さうであろ。まづ御目にかゝりたい。身共の參つた通をおしやれ。▲冠者 畏つてござる。その通申しましよ。それにござりませ。申し〳〵祖父御様、郷の殿の御見舞なされてござる。▲おほぢ 何と云ふぞ。今日はよい日和ぢやど云ふか。▲冠者 いやいや、さやうではござりませぬ。郷の殿の御見舞なされてござる。▲おほぢ 何と云ふぞ。郷の殿が見舞つた。身どもは、もはや年寄つたれば腰が痛い。床几をくれい。▲冠者 畏つてござる。お床几でござる。▲シテ 申し祖父御様、郷の殿が御見舞ひ申しました。▲おほぢ 何ぢや。郷の殿が見舞うた。わごりよはどち風が吹いて見舞はしました。あの、郷の殿は、飴が好きであつた。飴をとらせ。▲シテ まだ身どもが幼少の時のことを、忘れずに仰せられます。私も、毎年々々大峯葛城の山の役を相勤めますにより、一圓暇を得ませいで、御見舞も申しませぬ。やあ太郎冠者、見れば祖父御の腰が殊の外屈うだが、あれは何時もあれか。▲冠者 なか〳〵、何時とてもあの如くでござる。殊の外屈ませられて、御苦勞

郷の殿—山伏の末だ部屋住にて院號などなきを云ふとぞ

四 腰祈

三人　シテ　兜巾、篠懸、水衣、珠數持
　　　祖父　頭巾、腰帯
　　　冠者　牛上下、腰帯

▲シテ山伏 貝をも持たぬ山伏が、〳〵、みち〳〵うそを吹かうよ。詞 これは、出羽の國羽黒山より出でたる山伏でござる。某、大峯葛城山の役目を相勤め、只今本國へ罷下る。まづ急いで參らう。又こゝに身どもの祖父御を持つてござるが、久々見舞ひませぬ。此度は見舞はうと存ずる。總じて山伏と申すは、難行苦行をいたすによつて、行力さへ達すれば、忽ち飛ぶ鳥も祈り落す事でござる。やあ、はやこれぢや。まづ案内を乞はう。ものも。案内もう。▲冠者 表に案内とある。何方でござる。▲シテ いや、身共ぢや。▲冠者 やあ、郷の殿でござるか。ようこそお出なされました。ひさ〴〵御目にかゝりませぬが、御息災でおめでたうござります。▲シテ それ〳〵、わごりよも無事で一段ぢや。何と祖父御には

入相—鎌倉へ入ると云ふを鐘の縁にて入相と續けたり

建長寺—五山の一開山は大覺禪師

そくび—頸を卑しめて云ふ頸を取つて突かるゝ意に續けたり

はなをぞなをりける—未詳或は思ふ花をぞ手折りけるにて鼻を折ると言掛けたるか

子を尋ねうと存ずる。やい其處な奴。おのれ鎌倉へ行たが定ならば、こゝへ來て、樣子を云うて聞かせい。▲シテ畏つてござる。とてものことに、拍子にかゝつて申しましよ。謡まづ鎌倉につうと入相の鐘これなり。東門にあたりては、壽福寺の鐘これなり。諸行無常と響くなり。南門にあたりては、五大堂の鐘これなり。是生滅法とひゞくなり。扨西門は極樂寺、これ又生滅々爲の心、北門は建長寺、寂滅爲樂と響き渡れば、いづれも鐘の音聞きすまし、急いで上るか、また立ち歸り、子持が方への土產にせんと、紅皿一つ貰ひ持ちて、急いで上る心もなく、さもあらけなき主殿に、そくびを取つて撞鐘の、そくびを取つてつき鐘の、ひゞきにはなをぞなをりける。詞これも鐘の威德でござる。▲主何でもないこと、あつちへうせい。▲シテはあ。▲主えい。▲シテはあ。

れぢや。申し〳〵、頼うだお方ござりますか。太郎冠者歸りました。▲主やあ、太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者戻つたか〳〵。▲シテ唯今歸りました。▲主何と〳〵、かねの音を聞いて來たか。何程するぞ。▲シテされば、まづ私も五大堂へ參り、聞いて見ましたが、何とやら破鐘の音でござる。これはなるまいと存じ、壽福寺へ參り、聞いて見ましたが、是は殊の外固い音でござるほどに、これでも役に立つまいと存じ、極樂寺へ參り、聞いて見ましたが、これがなるほど冴えたよい鐘でござる程に、極樂寺の鐘になされたらようござらう。▲主これは〳〵苦々しいことかな。刀を黃金作りにして取らすほどに、鎌倉へ行て、黃金の値を聞いて來いと云ひ付けたに、おのれ撞鐘のことを誰が聞いて來いと云うた。▲シテそれなら黃金と、初めからおしやつたがようござる。▲主まだそのつれな事を云ひ居るか。あちへうせい〳〵。▲シテこれは如何なこと。身共の存じたとは格別違うた。▲主扨も〳〵、憎い奴でござる。彼奴が樣な奴は、せめて撞鐘の音なりと聞いて、うせたらようござろ。それも鎌倉へも行きも致さず、參つたと申すやら知れますまい。樣

かねのね—金の値と鐘の音と取違ふる也

五大堂—明王院又は大行寺と云ふ將軍賴經の祈願所

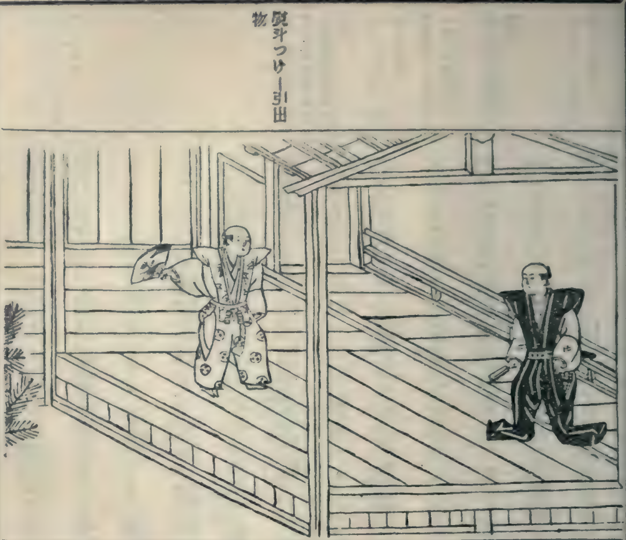
なりのよい—形の好き意

壽福寺—五山の一開山は榮西

極樂寺—開山は良觀

じやもふ—鐘の音の形容

思ふ程に、汝は大儀ながら鎌倉へ行て、かねのねを聞いて來い。▲シテこれはおめでたい事でござる。聞いて參りましよ。▲主その儀なら、はやう行て來い。▲シテ畏つてござる。▲主頓て戻れ。▲シテはあ。▲主えい。▲シテはあ。やれ〳〵、俄な事を仰せつけられた。まづ急いで鎌倉へ參り、鐘の音を聞いて參らうと存ずる。扨も〳〵、めでたい事でござる。御成人なされて、かやうに刀を作つて遣さるゝは、めでたい事でござる。やあ、何かと申すうちに、はや鎌倉に著いた。まづ、どれから先へ參つて聞かうぞ。まづ五大堂へ參らう。これぢや。扨も〳〵、なりのよい鐘かな。さらば撞いて見やう。くわん。これは破鐘ぢや。役立つまい。壽福寺へ參らう。はやこれぢや。いかさま、是もなりのよい鐘ぢや。さらば撞いて見やう。こん。はあ、これは餘り固い音ぢや。これではなるまい。さらば極樂寺へ參らう。何かと云ふうちにこれぢや。扨も〳〵、これはどれ〳〵より、なりのよい鐘ぢや。さらば撞いて見やう。じやもふもう〳〵。はあ、これがよい音ぢや。まづ急いで歸り、この通申さう。定めて賴うだ人の待ちかねてござらう。やあ、こ



三　鐘の音

二人　シテ　半袴、腰帯
　　　主　長袴、小さ刀

▲主 これは、相摸の國三浦に住居致す者でござる。某は世悴を數多持つてござるが、どれ〳〵も、殊の外成人いたしてござるほどに、元服をさせ、その上、熨斗つけに刀を拵へて取らせうと存ずる。まづ太郎冠者を喚び出し、申し付くることがある。やい〳〵、太郎冠者あるか。▲シテ はあ、お前に居ります。▲主 汝を喚び出すこと別の事でもない。汝が知る如く、世悴どもが殊の外成人した。此度名をもかへ、又熨斗つけに、刀を作つて取らさうと

しぎやな。人家も見ゆる晝中に、人かと思へば人でもなし、如何なるものぞ名を名乘れ。▲シテ これは、最前御僧に言葉を交したる蛸の幽靈なるが。御弔のありがたさに、これまで現れ出でて候。▲ワキ さては蛸の幽靈なるか。最期のありさま語り候へ。尙々後を弔ひ候べし。▲シテ さあらば最期のありさま語り申さん。後をとうて給はり候へ。詞 扨もわれこの浦に年久しく住んで、獵師の網を彼方此方遁れしに、去年の春は、大網を沖の方より置きまはし、遁れもやらで引き上げられ、削りたてたる俎の上に引き据ゑられて、後より、地 〱、庖丁を押當てらるれば、眼もくらみ息つまつて、うつぶしに押伏せられて、頭をはいてぞふしたりける、〱。▲シテ 而して起き上がれば、地 〱、或は四方へ張蛸の、照る日にさらされ、足手をけづられ、鹽にさゝれて隙もなき、苦みなるを、妙なるみのりの、庭に出て、佛果に至るありがたさよ。唯一聲ぞ、南無阿彌陀佛。只一聲ぞ、なまだことて、かきけすやうにぞ、失せにける。

心經―般若心經
あのくたこ―阿耨多羅三藐三菩提のもぢり
なまだこ―南無阿彌陀佛のもぢり

し事にて候へども、去年の春の頃、この所にて、蛸など御取りありたることはなく候か。▲間なか〳〵。去年の春のころ、この浦へ大蛸の上りたるを、この浦の者ども寄り合ひ、賞翫仕り候處に、その蛸を引き上げたる者共に祟をなして候間、これなる標を立て置き、弔ひ申し候が、何と思召し御尋にて候ぞ。▲ワキ尋ぬること、別のことにもなく候。某この所に著きて候處に、いづくとも知らず、愚僧に申すべきこと候と申すほどに、其方を見申して候へば、去年の春の頃みまかりたる蛸の幽靈なり、跡をとひてたべと申し、掻消すやうに失せて候間、こなたへ不審申すことにて候。▲間それは疑ふ所もなき、蛸の幽靈なるべし。御僧も逆縁ながら、弔うて御通りあれかしと存じ候。▲ワキさあらば逆縁ながら弔うて通らうずるにて候。▲間又御用のこと候はゞ、重ねて仰せられ候へ。▲ワキ賴みましよ。▲間心得ました。▲ワキ詞色扨も幽靈蛸の丞が、佛事は樣々多けれど、心經をもつて弔ひけり。あのくたこ三百三錢で買うて、佛にこそは手向けけれ、〳〵。なまだこ〳〵、なまんだこ。▲シテあゝらありがたの御弔やな。あらありがたや候。▲ワキふ

鉢を開き—託鉢することと
筑紫人空言す—此謠謠曲藍染川にも出づ
清水の浦—駿河

二　蛸

三人　シテ　頭巾、腰帶、扇持
ワキ　頭巾、水衣、半袴
アヒ　長袴、小さ刀

▲ワキ 次第 茶がはりもなき往來の、〳〵、行末何となるらん。詞 これは筑紫方より出でたる僧にて候。われいまだ都を見ず候程に、路次すがら鉢を開き、都へ上らばやと存じ候。謠 筑紫人、空言するとや思ふらん、〳〵。われはまことの修行にて、しみづのうらに著きにけり。詞 急ぐ程に、この所は淸水の浦と申すげに候。▲シテ なう〳〵、あれなる御僧に申すべきことの候。▲ワキ こなたのことにて候か、何事にて候ぞ。▲シテ これは、こぞの春みまかりたる蛸の幽靈なり。かまへて〳〵よく〳〵お弔ひあれと、かきけすやうに失せにけり〳〵。▲ワキ あまり不思議なる事にて候間、所の人に尋ねばやと存ずる。所の人の御入り候か。▲間 所の者と御尋は、如何やうの御事にて候ぞ。▲ワキ 近頃、聊爾なる申

面白こと―面白いことの誤なるべし

して退き居つた―しては巧に騙しての意

▲シテ なか／＼。この分でござる。▲酒 それなれば、是も面白うない。もはや面白ことはないか。▲シテ この次に、流鏑馬と云うて、馬に乘つて駈ける内に、的を射ることでござるが、なか／＼面白うござる。▲酒 さあ／＼、その面白い事が見たい。して見せい。▲シテ して見ませうか。これも相手が入る。こなたは先へ廻つて、馬場退け／＼と云うて、馬場な人を退けさせられ。身共が馬に乘つて、御馬が參る／＼と云うて駈けますぞ。▲酒 心得た。さあ／＼馬に乘れ。▲シテ これに竹がござる。竹馬に乘りませう。さあ乘りました。▲酒 馬場退け／＼。▲シテ 御馬が參る／＼。▲酒 馬場のけ／＼。やい／＼、それは何所へ取つて行く。▲シテ この樽か。▲酒 なか／＼。▲シテ 御馬が參る／＼。▲酒 これはさて、又して退き居つた。横著者、遣るまいぞ／＼。▲シテ 御馬が參る／＼。

山—山鉾

んだり。▲酒やい〳〵、その樽は何所へ取つて行くぞ。▲シテいや、眞中にあつて妨になる。退けて置かうと思ひます。▲酒いや〳〵、邪魔になれば己が退くる。こちへおこしやれ。何とこれはこの分か。▲シテなか〳〵、この分でござる。▲酒これはあまり面白うない。▲シテいや〳〵、この次に對馬祭が面白うござる。まづ山を作り、船に載せ、片端から押す。引く。囃子物には鼓、太鼓、鉦で囃し立つる。扨々面白いことでござる。▲酒それは面白かろ。さあ〳〵、して見せい。▲シテなるほど、して見せましよ。これにも對手が入ります。こなたは扇擴ろげて、ちやうさようさあと仰せられ。▲酒心得た。云はうぞ。▲シテ幸ぢや。此樽を山にして引きましよ。樽を巻いた繩がある。さあ〳〵囃させられ。引きますぞ。▲酒囃すぞ〳〵。ちやうさ、ようさ。▲シテえいとも〳〵なあ。▲ちやうさ、ようさあ。▲シテえいとも〳〵〳〵なあ、▲酒やい〳〵〳〵、それは何所へ取つて行く。▲シテこれは小路へ引き入れた所でござる。▲酒いや〳〵、どうやら樽を取つて去なうとする。面白うない。▲シテそれはこなたの氣が廻つてぢや。▲酒何と、これもこの通か。

對馬祭―津島町の牛頭天王の祭也例祭六月十五日神事船上にて催さる

はんま千鳥―濱千鳥の濱をはんまと云ふ山をやんまと云ふ類也

や〱。他所で取ればこそ、この十日餘見えなんだわ。▲シテ 扨はこの十日餘參らぬを、他所で取ると思召すか。▲酒 なか〱。▲シテ この間は頼うだ人の御供を致して、尾張の對馬祭を見物に參つた。▲酒 それは内々聞き及うだ祭ぢやが、何と面白い事か。▲シテ こなたはまだ見ずか。それは〱、見ると聞くとは違うた事でござる。面白いともどうとも、云はれた事ではござらぬ。まづ伊勢浦へ參れば、子供が集つて千鳥をふせるが、扨扨面白ござる。▲酒 それはどうした事ぢや。さあ〱、話して聞かしやれ。▲シテ いかにも話しましよ。とてものことに、その様子をして見せましよか。▲酒 それはよかろ。仕形でして見しやれ。▲シテ 如何にも、して見せませうが、相手が入ります。▲酒 それはむづかしいか。▲シテ いや、むづかしい事はござらぬ。扇をかざして、こちらを見ぬ様にして、はんま千鳥の友呼ぶ聲は、と仰せらるゝ分でござる。▲酒 それほどのことは云はう。さあさあ、早うして見しやれ。▲シテ 心得ました。さあ囃させられ。ふせますぞ。▲酒 はんま千鳥の友呼ぶ聲は。▲シテ ちり〱やちり〱。ちいりちりやちり〱と、ちりと

分限—富貴の意

きつしくな人—律義者

取つて行きやれ。▲シテ過分にこそござれ。何とよう詰りましたか。▲酒なか〳〵。▲シテ扨こなたは、愈仕合でござる。近年こなたの酒がようなつた。少でも入るならば、取りに遣らうと、何方でも、この沙汰ばかりでござる。▲酒それは身共も滿足ぢや。▲シテ是はこなたの、いよ〳〵分限にならせられう瑞相ぢや。▲酒やい〳〵、それは何所へ持つて行く。▲シテまことに、私はいつもの樣に通の合點いたした。さらば代りを渡しましよ。▲酒何と見えぬか。▲シテされば、不思議な事でござる。代りを持つて來ましたが、はあ、思ひ出しました。是へ參るとて、帶を仕直しましたが、棚の端に忘れて置いた。取つて參らう。▲酒やい〳〵、とりに行くなら、この樽を置いて取りに行け。▲シテはて氣遣はない。今の間に取つて來ます。▲酒いや〳〵、それでも遣る事はならぬ。こちへおこせい。▲シテはて扨、きつしくな人ぢや。▲酒きつしくなとは、そちは聞えぬ事ぢや。總じて代りがあれば、他所へ取りに行き、又代りがなければ、これへ取りに來る。どうした事ぢや。▲シテいや〳〵、終に他所で酒を取つた事はござらぬ。なぜにさうおしやるぞ。▲酒い

る。やあ、参るほどにこれでござる。ものも。内にござるか。▲酒や やあ、聞いたやうな聲ぢや。案内とは誰ぢや。▲シテ 私でござる。▲酒 やあ、太郎冠者、そちに逢ひたうをりやつた。▲シテ それは何ごとでござる。▲酒や 何事とは。唯今までの通の埒は何とするぞ。▲シテ されば〳〵。けふは持つて來う、明日は算用せうと存ずれど、私がすきと隙なしで、おそなはります。明日は急度算用いたさうぞ。▲酒 何時逢うても、何かと云うて埒が明かぬ。必ず明日の違はぬやうにめされ。▲シテ もはや違はござらぬ。持つて參らう。▲酒 いかにも頼むぞ。▲シテ 心得ました。扨、今日參るは別事でござらぬ。頼うだ人が俄に客がある。又いつもの樣な、よい酒を一樽詰めて下され。▲酒 扨も〳〵、こゝな者が言出す事は。今までの算用さへ濟まぬに、その上に又遣らるゝものか。▲シテ 身共も定めてさうおしやらうと思うて、今日のばかりは代りを持つて來ました。▲酒 何と、今日のは持つて來た。▲シテ なか〳〵。▲酒 それなら詰めて遣らうぞ。▲シテ よい酒を詰めて下され。▲酒 心得た。これ〳〵、これは隨分念を入れ詰めて置いた。餘所へ行く酒なれど、そちが急ぐさうな。

切つてない程に、いつものやうに通で取つて來い。▲シテその義でござる。只今までの通の面が濟みませぬと申して、それは〳〵酒をおこす事ではござらぬ。▲主それは尤なれども、追つ付け算用せうと云うて、取つて來てくれ。賴むぞ。▲シテいや〳〵、唯今まで何程か算用せう、濟まさうと云うて騙しましたによつて、もはや合點しませぬ。代りを遣されませ。▲主身共も手前に有り合せぬ。どうぞ、代りなしに取つて來てくれ。賴むぞ。▲シテそれほどに仰せらるゝ事でござる。なにとぞ致して、隨分取つて參りましよ。重ねては存じませぬぞ。▲主重ねてはその時のこと、まづ今日は早う取つて來てくれ。汝にも一つ飲ませうぞ。▲シテ畏つてござる。かう參ります。▲主頓て早う戻れ。▲シテはあ。▲主えい。▲シテはあ。扨も〳〵迷惑な事かな。さりながら、取りに參らずはなるまい。酒屋がおこすればよいが、何とあらうも知らぬ。まづそろり〳〵と參らう。さりながら、ものには取りえがある。酒屋の亭主がとつと話好きで、その上身共とは合口でござる。今日もなにとぞ、有る事無い事を取り集め話して、そのうちに隙を見て取つて退かうと存ず

對馬祭ー一名千鳥

代りー代金



卷之五

一 對馬祭

三人　シテ　半上下、腰帶、扇さす
　　　ワキ　長袴、小さ刀
　　　アド　長袴、小さ刀

▲主　これは、この邊に住居いたす者でござる。俄に客來ござる程に、太郎冠者に、いつもの酒屋へ酒を取りに遣さうと存ずる。やい／＼太郎冠者あるか。▲シテ　はあ、これに居ります。▲主　汝を喚び出すこと、別の事でない。俄に客がある。汝はいつもの酒屋へ行て、酒を一樽取つて來い。▲シテ　畏つてござる。代物を遣されませ。▲主　いや、代りは遣ひ

りくりく。これはくくくく、旨いことかなくくくく。▲えん扨もくくくく、いかう旨いものぢや。この様な旨い物をくれたほどに、暇を取らするぞ。婆婆へ帰り、三年が間諸鳥をさいて暮らせ。▲シテこれはありがたい事でござります。▲えん謡いでくくくく暇を取らせんとて、地くくくく、仰を委しく承りて帰りければ、閻魔王も名残を惜しみ、玉の冠を清頼に與へ給ひければ、婆婆に帰り、三年が間諸鳥をさして、鶴、雁、雉子、鴨、小鳥も慥に届くべしと、仰を委しく承りて帰りければ、閻魔王も名残を惜しみ、玉の冠を清頼に與へ給ひければ、忝くも頂戴いたし、くくくくて、二度婆婆へぞ帰りける。

死出の山—冥途の山

ましう—ませう

つてござる。▲おに 罪人の召して參り候。▲えん 如何に罪人。汝は娑婆にて明暮諸鳥をさし、大惡人にてある間、地獄へ落さうずるぞ。▲シテ 仰御尤に候へども、鳥をさし、鷹と申すものに食はせて養ひ候ほどに、餘り科にてはなく候。▲えん さては、鷹と云ふも、同じ鳥にてあるよな。▲シテ なか〳〵、さやうでござる。▲えん それならば、餘り汝が科でもない。▲シテ 御意の通、鷹が科でこそござれ、私の科ではござらぬ。極樂へやらせられて下されい。▲えん それならば、この閻魔王も、終に鳥と云ふ物の味を知らぬほどに、鳥と云ふ物が、死出の山に澤山にある程に、汝が持つた竿でさいて、閻魔王に振舞へ。それなら、汝が望のやうにして取らせうぞ。▲シテ それは何より安い事でござる。さらば、鳥をさいて進上申しましよ。謠 いで〳〵諸鳥を差さんとて、地 〳〵、死出の山路の南原より、鳥どもあまた飛び來るをば、見るより早く、中にて差いてぞ取つたりける。さらばこの鳥を燒鳥にして進ぜましう。さらば參りませ。▲えん どりや〳〵食うて見よ。めりよ〳〵めりよ。扨もいかう旨い事かな。▲シテ さらば眷屬達も參れ〳〵。▲おに 心得た〳〵。めり

なる小鳥を捕る人

興がつたなりー面白い風體

ふりすてて〳〵、足に任せて行く程に〳〵、六道に早く著きにけり。詞 これははや六道の辻に著いてござる。これより見計ひ、極樂へ參らばやと存ずる。▲おに はあ、いかう人臭い。さればこそ、罪人が來た。まづこの由申し上げう。如何に申し候。一段の罪人が參りて候。▲えん 急ぎ責め落し候へ。▲おに 畏つて候。如何に罪人。地獄遠きにあらず、極樂遙なり。急げ〳〵とこそ。やい〳〵、汝は常の罪人と變り、興がつたなり。娑婆では何と云うた者ぞ。▲シテ 某は、娑婆に隱ない清賴といふ餌差でござる。▲おに 餌差ならば、明暮殺生して罪が深からう。地獄へ責め落して呉れうぞ。▲シテ いや〳〵、某はさやうに罪の深い者ではござらぬ。極樂へやつて下されい。▲おに いや〳〵、まづ閻魔王へ伺はう。如何に申し候。▲えん 何事にてあるぞ。▲おに 罪人は、娑婆に隱れもない餌差にてあると申すほどに、一人殺生して罪が深くござあらうずる間、地獄へ落さうと申し候へば、さやうの者にてなきと申し候が、何と仕らうずるぞ。▲えん さあらば、その罪人の、此方へ呼び候へ。▲おに 畏つて候。こりや〳〵、閻魔王の召す。此方へ來り候へ。▲シテ 畏

餌差十王ー一名政賴
十王ー冥府の王十あり閻魔はその一也

淸賴ー政賴齊賴など書く後冷泉の朝の人出羽國司にて鷹飼の達人たり
餌差ー鷹の餌と



十　餌差十王

五人　シテ　白水衣、半袴、竿持
十王　狩衣、奴袴、
鬼　頭巾、半袴

▲えんま　次第　地獄の主閻魔王〳〵、六道にいざや出でうよ。やい〳〵、眷屬ども、居るか。▲三人鬼　はあ、これに居ります。▲えん　罪人が參つたら、地獄へ責め落し候へ。▲三人　畏つてござる。▲シテ　次第　罪も作らぬ罪人の〳〵、誰かは寄つて塞かうよ。詞　これは娑婆に隱れもない、淸賴と申す餌差でござる。われ壽命のほども、定りけるか、無常の風に誘はれ、只今冥土へ赴き候。謠　住みなれし、娑婆の名殘を

そのつれ―其樣な事
うせた―來た
うせぬか―行かぬか

らるゝ。暇がいる。見に參りましよ。やあ、これはこちの人、わごりよは坊主になるか。それは誰に問うてなるぞ。こゝな坊主も、よう髮を剃らうと思ふなあ。腹だちや〳〵。まづこの剃刀をこちへおこせ。▲シテ これは何と召さる。お內儀も合點ぢやと云はれた。▲女 まだそのつれを云ふか。妾を何とせうと思ふぞ。坊主になる。おのれはまづ何所からうせた。あちへうせぬか。去なぬか〳〵。腹だちや〳〵。▲シテ これは何とするぞ。身どもは無理に勸めはせぬ。內々望ぢやと云はれた。▲女 まだその樣な事云ふか。おのれ賣僧坊主め。やらぬぞ〳〵。▲シテ あゝ悲しや。許せ〳〵。▲女 やい、わ男、よう妾に合點もさせいで、坊主にならうと云うた。妾は何となれと思うて。腹だちや。▲亭 いや、最前の出家が、坊主は樂な者ぢや、なれと云うたによつて、剃らうかと思うて。▲女 まだそのつれなこと云ふか。おのれ何とせうぞ。腹立や〳〵。▲亭 もはや 思ひ止まるぞ。やれ許せ〳〵。▲女 あゝ腹だちや〳〵。どちへうせる。やるまいぞ。なう腹だちや〳〵。

い事でござる。さりながら、かやうのことは、とくと親類兄弟又は御内儀とも、よう相談召され。かりそめに、ふと出家しても、後悔することもあるものでござる。出家になれば、それ〴〵の法を勤め、經陀羅尼も覺えねばならず、身持がとつとむづかしうござる。さりながら、勤むべき事さへ勤むれば、外に心に苦勞はない。どれへなりとも參りたい方へは、心の儘に參り、とまりたいところにはとまる。何につけても、惜しい欲しいと思ふ貪慾を離れてからは、なか〴〵心に苦がなうて、この世からの佛でござる。▲亭 仰せられた通でござる。それ故、私も俄のことでもござらぬ。常々の望でござる。なるほど萬事心得て居ます。是非とも弟子にして下され。▲シテ 何と、篤と合點が參つたの。▲亭 なか〴〵、合點致しました。▲シテ それなら、剃刀をあてましよ。親類衆お内儀も同心でござるか。▲亭 なるほど、女どもも日頃に云ひ聞かせて置きました。身共次第でござる。▲シテ それならようござる。さらば用意なされ。▲亭 心得ました。月代を揉みましよ。▲女 こちの人は、最前拄杖を誂へた出家が、取りに參られた。表へ出られたが、何をして居

れ。▲亭これ〳〵、これでござる。▲シテ扨も〳〵、これはよう出來ました。身共の誂に少も違はないさうな。▲亭隨分念の入れました。それにつき、此方はいつぞや御目に掛つた時より、如何にしても殊勝に存ずる。何とこの拄杖について、一句持つて參らうか。▲シテこれは亭主奇特でござる。何と〳〵。▲亭如何なるかこれ白木の拄杖。▲シテ漆なければ塗ることもなし。▲亭善哉々々。▲シテ扨は花塗になさるゝか。▲亭この拄杖折れての後は如何に。▲シテ一念はつくとも二念をつかず。▲亭扨も〳〵、此方は愈殊勝千萬にござる。身共もかやうの職を致しますれど、常々出家の志でござる。まづ奥へ通らせられ。一飯も進ぜ、その上、愈ありがたい教化にも預りたうござる。まづ通らせられ。▲シテ如何にも、人を勸むるは、出家の役でござる。なるほど通りましよ。その拄杖もこれへ下され。心得ました。▲亭なう〳〵御出家、內々私も只今申す通、出家の望でござるほどに、此方の弟子になされて下され。とも〴〵に、國々修行いたしたうござる。▲シテ如何にも、身どもの弟子にいたして、只今髮を剃り、出家に致すは、何より易

邊土—片田舍
拄杖—禪僧などの持つ杖

九　拄杖

三人　シテ　頭巾、衣、腰帶
　　　アド　半上下、腰帶
　　　女　　箔小袖、ゆぼうし

▲シテ　罷出でたる者は、邊土に住居致す僧でござる。某、いつぞや都へ用事ありて上り、その次手に、拄杖を誂へ置きました。漸う頃日は出來時分でござる程に、とりに參らうと存ずる。まづ、そろ〳〵と參らう。やれ〳〵、出家ほど世に樂なものはござらぬ。今日も又、行先にどれになりとも逗留いたし、佛詣をして戻らうと存ずる。やあ、參る程に、彼の拄杖屋はこれでござる。ものもう。御亭主内にござるか。▲亭主　表に案内がある。どなたでござる。▲シテ　いや、身共でござる。▲亭　やあ、これはいつぞや、拄杖誂へさせられた御坊か。▲シテ　なか〳〵、さやうでござる。何ともはや出來ましたか。▲亭　如何にも、よう出來ました。それに待たせられ。見せましよ。▲シテ　心得ました。見せて下さ

しよ。御免されませ。▲主 許すぞ〳〵。呼べ〳〵。▲シテ やい〳〵〳〵、太郎冠者。▲主 はあ。▲シテ 居るか。▲主 はあ。▲シテ おのれは憎い奴の。今まで何をして居つた。何もはや御出なされた。又酒飲うで口をきいて居つたか。扨も〳〵憎い奴かな。先へうせい。やいやい、先へと云へば、むしやうに早ううせる。後からうせう。これは〳〵、後からと云へば、方量もなう後からうせる。とかくひつそうてうせう。憎い奴かな。何とせう知らぬ。▲主 これはいかな事。餘りなことぢや。のきをろ。扨も〳〵、憎い奴かな。おのれは、最前の云ひかへしに云ひ居るなあ。▲シテ 此方は許すと仰せられた。▲主 いかにも、許せばとて、今の樣なことぬかすものか。早ううせう。▲シテ 心得ました。やあ、又おどしてくれう。えへん〳〵。寂蓮童子、六萬菩薩、鎭り給へ〳〵。▲主 やあ、これは身共ぢや。罰當何としをる。▲シテ あゝ、許させられ〳〵。▲主 やるまいぞ〳〵。

のし切つて―遠慮なく思ひ切つて

如何様、知らぬ人が見たらばさう思ふであろ。▲シテ それにつきまして、ちと此方へ申し上げたい事がござります。▲主 それは何事ぢや。▲シテ まづ私も、後々はお取立に預りまして、立身いたしましたらば、定めて馬に乗ることもござりましよ。▲主 それ〳〵。▲シテ その時には、人も使ひまするでござろ。俄に使ひつけも致さいで、使ふも不調法にござろ。その時の爲でござる程に、只今此方を下人にして、いや、もはや おきましよ〳〵。御免されませ。▲主 いかにも聞き届けた。今度そちが立身のして、人を使ふ時の稽古に、今身共を内の者にして、使うて見たいと云ふ事か。▲シテ いや〳〵、左様ではござりませぬ。御免されませ〳〵。▲主 いや〳〵苦しうない。よかろ。許すぞ〳〵。さあ〳〵、呼うで見よ〳〵。▲シテ 何と、御免されますか。▲主 なか〳〵、苦しうない。許すぞ〳〵。▲シテ それなら呼うで見ましよ。やい〳〵、太郎冠者。▲主 はあ。▲シテ ござりますか。いや〳〵、如何にしても、呼ばるゝ事ではござりませぬ。もはやおきましよ。▲主 はてさて、ちつとも苦しうない。許すほどに、思ひ切つて呼うで見よ。▲シテ それなら、のし切つて呼びま

えへん／＼ー咳拂をして落馬せしむ

やい／＼。先へうせいと云へば、方量もなう早ううせをる。扨も／＼、憎い奴ぢや。おのれ歸つて何とするぞ。待てよ。▲シテ これは如何な事。さきへ行けば行くとおしやる。後から行けばさがるとおしやる。憎さも憎し、落してくれう。思付けた。えへん／＼、▲シテ 寂蓮童子、六萬菩薩、鎭り給へ、止動方覺々々々々。申し／＼、何となされました。痛みますか。それへ參りたうござれど、御馬を乘り鎭めて居ります。もはや鎭りました。御馬に召しませ。▲主 扨も／＼、惡い馬かな。したゝか腰をうつた。もはや乘るまい。徒歩で行かう。汝乘つて來い。▲シテ いや勿體ない。私は乘られますまい。其上私が乘りまして、此壺からお太刀を持つて、口の剛いこの馬には乘られますまい。此方召しませ。▲主 いや／＼、乘る事は厭ぢや。それなら是非に及ばぬ。その太刀や壺は身共が持たう。汝乘つて來い。▲シテ さやうにござらば、乘りましよか。▲主 さあ／＼、乘れ／＼。身共が持つて行くぞ。▲シテ 御免されませ。乘ります。▲主 乘れ／＼。ゆるすぞ。▲シテ 申し／＼、この如くにして參りますを、人が見ましては、此方を下人で、私が主かと存じましよ。▲主

ひつそうて―引添ひて也

で歸らう。扨も〳〵、結構なお方ぢや。殘らずお貸しなされて下さつた。よい伯父御ぢや。▲主 太郎冠者めは何をして居る知らぬ。遲い事かな。もはや何れも御出なされた。扨も〳〵、憎い奴かな。▲主 やい、其所な奴。おのれは今まで何をして居つた。各早御出なされて、身共ばかりぢや。扨も〳〵、憎い奴ぢや。▲シテ 此方は聞えませぬ。この樣樣の物を、色々と云うて借つて參つたに、まだ其樣なこと仰せらるゝか。聞えませぬ。▲主 何をぬかし居る。おのれは又酒がな食うて、口をきいて居つたものであろ。こちへおくしをろ。その壺も太刀も持つて、早ううせい。▲シテ 扨も〳〵、聞えぬこと云はるゝ。これほど色々の物を借つて參つたに、よう借つて來た、出かしとは云はいで、腹を立てらるゝ。▲主 やい〳〵其所な奴。おのれは其所に何をして居る。早ううせぬか。馬にひつそうてうせい。▲シテ あゝ、心得ました。▲主 これは如何なこと。ひつそうてと云へば、負はれかゝるやうにし居る。後からうせい。▲シテ 心得ました。▲主 これは〳〵、後からと云へば、何をして居るやら、はてる事ではない。先へうせう。▲シテ 心得ました。▲主 やい

とつて出る―跳ね出す也

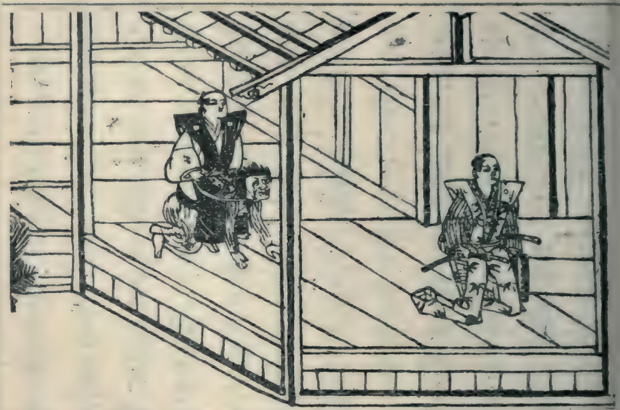
ざる。まだござります。▲をぢ それは何ぢや。▲シテ いづれも馬上でござります。とてものことに、御馬も借つて參れと申されました。▲をぢ なるほど尤ぢや。これも貸してやろ。こりや〳〵、この馬を貸してやる。引いて歸れ。▲シテ これは、久しう見ませぬ中に、逞しうなりました。定めて待ちかねて居られましよ。追つ付け歸りましよ。色々の物をお貸しなされて下されて、忝うござります。もはやかう參ります。▲をぢ やあ、その馬にはちと癖があるわ。▲シテ それは如何樣の癖でござる。▲をぢ されば、その馬の後で咳拂すれば、必ずとつて出るほどに、さう心得。▲シテ それは氣の毒にござる。私は承りました、致しますまいが、さりながら、道で人などが致したら、何共氣の毒でござる。▲をぢ 尤ぢや。さりながら、その時は馬の鎭る文がある。敎へてやらう。寂蓮童子、六萬菩薩、鎭り給へ、止動方覺々〳〵々々々と云へば、その儘鎭るわ。▲シテ 是は調法な事でござる。覺えましてござる。もはやかう參ります。▲をぢ 行くか。用に立てたら早く戻せ。▲シテ 畏つてござる。▲をぢ よう來た。▲シテ はあ。なう〳〵嬉しや〳〵。まんまと借り濟した。急い

重代―家傳の物

何かと申す中に、これぢや。ものもう。案内も。▲をぢ表に案内がある。どなたでござる。えい、太郎冠者か。ようこそ來たれ。只今は何と思うて來たぞ。▲シテその儀でござります。頼うだる方より、お使に參りました。今日、山一つあなたへ、各茶の湯の會がござる。是へ、頼うだ人も參られます。打節茶が切れて、ござりませぬ。此方の御茶を一袋わたしに入れて、お貸しなされて下されませいと、申しておこされました。▲をぢ如何にも安い事ぢや。幸挽かせておいた。貸してやらう。それに待て。▲シテそれは忝うござります。▲をぢこれ〳〵太郎冠者、わたしに入れて貸すほどに、損はぬ樣にして、役に立てたら戻しやれと云へ。▲シテ畏つてござる。まだござります。各太刀を持たせられます程に、お太刀もお貸しなされて下されませ。▲をぢ何と、各が太刀を持たせらるゝ。それなら持たせいではなるまい。貸してやろ。さりながら、この度は貸してやる。侍の、太刀を持たぬと云ふことはないことぢや。拵やれと云へ。▲シテ畏つてござる。▲をぢこりや〳〵、これは重代なれど貸すほどに、損はぬ樣にして戻しやれと云へ。▲シテ畏つてご

わたし—碾茶壺のこと

つき。汝は伯父御の方へ行て、借る物がある。借つて來い。▲シテ畏つてござる。何を借つて參りましよ。▲主あれへ參り云はうは、今日は山一つ彼方へ茶の湯に參ります。それにつき、手前に茶をきらしました。御無心ながら極上一袋わたしに入れて、お貸しなされて下されと云うて借つて來い。▲シテ畏つてござる。▲主又、各馬上でござる。御馬も貸して下されと云うて借つて來い。▲シテ心得ました。▲主まだある。何れも太刀を持たせらるゝ程に、御太刀も貸して下されと云うて借つて來い。▲シテ畏つてござる。さりながら、如何に伯父御ぢやと申して、その如く樣々の物を貸さうとは仰せられまい。▲主いやいや、苦しうない。追つ付け戻しましよと云うて借つて來い。▲シテ畏つてござる。▲主追つ付けはや御出なさるゝ程に、早う行て來い。▲シテ心得ました。▲主えい。▲シテはあ。やれ〳〵、これは急な事を仰せつけられた。さりながら、借りに參らずはなるまい。急いで參らう。まことに、扨伯父御ぢやと云うて、この如くに、樣々の物を貸さうとは仰せられまい。日頃頼うだ人が不嗜によつて、かやうの時、迷惑致さるゝことぢや。やあ、



八　止動方覺

四人　シテ　　半上下、腰帯
　　　主、伯父　二人長袴、小さ刀
　　　馬　　　輕衫、黒頭、ばせん

▲主　これはこの邊に隱れない者でござる。此中の方方に御參會は、夥しい事でござる。又今日は、山一つあなたへ茶の湯に參る。それにつき、太郎冠者を呼びいだし、申しつくることがござる。やいやい、太郎冠者、あるかやい。▲シテ　はあ、御前に居ります。▲主　念なう早かつた。汝を呼び出す事、別の事でない。今日は山一つ彼方に、各立ち寄り、茶の會がある。これへ參らねばならぬが、それに

なされ。▲シテ 心得たく〳〵。▲東色詞 尚々馬になさんとて、陳皮乾薑色々の、加薬を取りかへ〳〵塗りけれど、馬には更にならざりけり。東逃げ入る。▲シテ どう〳〵〳〵。▲冠者 申し、私でござる。▲シテ 太郎冠者か。▲冠者 なか〳〵。▲シテ 最前の奴は、たらしめぢや。逃すな。やれ逃ぐるわ。やるまいぞ〳〵。

たらしめ―詐偽師

駒―子馬の意

る。私も久々御奉公致しました。もはや御取立に預り、侍にもならうと存じます處に、馬になつてよいものでござるか。これは御免されませ。▲シテ はて扨、主の爲には命さへ棄つる。急いで馬になれ。惡うは使うまいぞ。▲冠者 さやうに御意なさるれば、是非もござらぬ。なりませうか。扨も〱迷惑な事かな。なう〱、其方もまた藝能こそ多いに、馬を人にしてこそよかろけれ、人を馬にすると云ふ事があるものか。身共が馬になつたらば、其方口取をするであらう。必ず重い物を負せてたもるな。馬屋に獨居たらば寂しからう。どれぞ腰元衆の中を一人馬にして、身共が側に置いてたもれ。そのうち駒でも出くれば、賴うだ人の爲でをりやる。賴むぞ。▲東 如何にも、氣遣召さるな。身共が惡うは致すまいぞ。▲シテ さあ〱、早う馬にせい。▲東 畏つてござる。これへ出やれ。▲東毛詞 いで〱馬になさんとて、まづ楊梅の皮を水にてとき、顔にぬれば、顔より馬にぞなつたりける。▲シテ はあ、まことに顔から馬になつたわ〱。さあ〱、皆どこも馬にして見せい。▲東 畏つてござる。今度は手足も皆馬に致しましよ。手綱を拵へ、乘る用意を

が鞠を遊ばさう。かゝりへ水を打たせておけ。▲冠者 はあ。▲シテ えい。▲冠者 新座の者でござる。▲シテ 彼奴めか。▲冠者 あれでござる。▲シテ とつと利根さうな奴ぢや。さりながら、見掛けと違うて鈍な奴がある。彼奴に何も藝はないか。問うて來い。▲冠者 畏つてござる。なう〳〵、其方に何も藝は無いかと仰せらるゝ。▲東 いや、私は何も藝はござらぬ。▲冠者 それは氣の毒ぢや。何なりとも藝があれば、抱へさせらるゝが、何も無いか。思ひ出して見やれ。▲東 いや〳〵、何もござらぬが、若しこれも藝になりましよか。▲冠者 何でをりやる。▲東 人を馬にすることをえてゐます。▲冠者 これは變つたことぢや。その通申さう。申しまするは、何も藝はござらぬが、人を馬にすることを得てゐると申します。▲シテ 何ぢや。人を馬にすると云ふか。▲冠者 なか〳〵。▲シテ これは珍しい藝ぢや。急いでして見せいと云うて、これへ出せ。▲冠者 畏つてござる。さあ〳〵これへ出て、急いで馬にして見しやれ。▲東 畏つてござる。どなたなりとも、お人を下されませ。▲シテ されば、誰を馬にせうぞ。誰彼と云うても人がない。太郎冠者馬になれ。▲冠者 これは迷惑なことでござ

い、戻つたか。▲冠者 只今歸りました、▲シテ 何と〳〵、新座の者を抱へて來たか。▲冠者 如何にも、抱へて參りました。▲シテ 出かした〳〵。どこ許に置いた。▲冠者 御門外に待たして置きました。▲シテ 初あることが終あると。彼奴が聞く樣にくわを云はう。汝は數多に答へ。▲冠者 畏つてござる。▲シテ やい〳〵、太郎冠者居るか。▲冠者 はあ。▲シテ 床几をくれい。▲冠者 はあ、お床几でござる。▲シテ 何と、今の聲を聞かうか。▲冠者 なか〳〵、承りましよ。▲シテ それならあれへ行て、頼うだもの只今廣間へ出られた。あれへ出て目見えをせい、お目に入つたら、當座に御見參であろ、又お目も參らずは、五三日も逗留があらうと云うて、汝が云ふ分でこれへ出せ。▲冠者 畏つてござる。なう〳〵、をりやるか。▲東 これに居ります。▲冠者 頼うだお方、只今廣間へ出られた。あれへ出て目見えをめされ。御目がまるたら、當座に御見參である。御目も參らずは、五三日も逗留が參らう。さあさあ、お出やれ。▲東 心得ました。▲シテ やい、太郎冠者、居るか、▲冠者 はあ。▲シテ 今日はよい天氣ぢやなあ。▲冠者 さやうでござります。▲シテ 暮がよかろ。暮に及うだら、若い衆

でたる者は、東國方の者でござる。この度思ひ立ち、都へ上り、こゝかしこをも見物致し、又よささうな所があらば、奉公をも致さうと存ずる。まづ、そろ〳〵と參らう。皆人の仰せらるゝは、若い時に旅をせねば、老いて物語が無いと仰せらるゝにより、俄に思ひ立つてござる。▲冠者 されば、これへよささうな者が參つた。なう〳〵、これ〳〵。▲東 こちの事か。何事でござるぞ。▲冠者 なるほど其方の事ぢや。近頃聊爾な申し事ぢやが、若し其方は奉公の望ではないか。▲東 なか〳〵、私は奉公が望で上方へ上ります。▲冠者 それは幸の事ぢや。某が賴うだお方は御大名ぢや。これへ肝入りて申し出さうぞ。▲東 それは忝うござる。御肝入られて下され。▲冠者 何と、只今でもをりやらうか。▲東 參ります。▲冠者 まことに。かりそめに詞を掛けて同道するは、よい緣でをりやろ。▲東 袖の振合ふも他生の緣とは、かやうのことでござらう。▲冠者 やあ、何かと云ふ中に、これぢや。まづそれに待たしませ。▲東 心得ました。▲冠者 申し、賴うだお方、ござりますか。▲シテ やあ、太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者、戻つたか〳〵。▲冠者 ござりますか〳〵。▲シテ え

七　人馬

三人　シテ　烏帽子、素襖、小さ刀
　　　アド　二人、半上下、腰帯

▲シテ この邊に隱れない大名。某の召使ふ者は只一人でござる。殊の外一人では不自由で、使ひ足らぬ。新座者を抱へうと存ずる。まづ、太郎冠者に申し付けう。やい〳〵太郎冠者、あるかやい。▲冠者 はあ、お前に居ります。▲シテ 念なう早かつた。汝呼び出すは、別の事でない。汝一人では人が使ひ足らぬほどに、今一人抱へうと思ふ程に、そちは上下の海道へ行て、よささうな者を抱へてこい。▲冠者 畏つてござる。▲シテ もはや行くか。▲冠者 かう參ります。▲シテ 軈て戻れ。▲冠者 はあ。▲シテ えい。▲冠者 はあ。やれ〳〵、俄な事を仰せつけられた。まづ街道へ參り、何者ぞよささうな者が通らば、抱へて參らう。まことに只今までは、某一人で殊の外苦勞を致したが、新座が參つたら、身共もちと休息いたさうと存ずる。參るほどに、これぢや。この所に待つて居やうと存ずる。▲東國 罷出

聞いてござる。此方も樂を舞うて見せさせられ。▲シテ ふうれいらしやてうらんすう。▲女 何と、舞うて見せう。さあ〳〵、舞はせられ〳〵。▲シテ 舞樂を奏して舞ひ遊ぶ。日本人無心自我唐國妻戀。▲女 なう〳〵、腹だちや〳〵。これほどにねんごろにして馳走するに、まだ唐の女の事云ふか、腹だちや〳〵。▲シテ らいれうちやるやそまかはん。▲女 何の、許せとは。もはや堪忍がならぬ。こゝには置かぬぞ。出てゆけ〳〵。腹だちや〳〵。

にやちやりさそ。▲女なか〳〵、參れ〳〵。▲シテすうらいかほちや。▲女何とおしやるぞ。受持つた程に、妾に肴をせい。小舞をまへとおしやるか。▲シテしやがとくりんらい。▲女なるほど舞ひましよ。とかく此方の機嫌さへよければ、嬉しうござる。▲女舞謠あはれ、一枝を花の袖に手折りて、月をもともに詠めばやの望は殘れり。この春の望殘れり。▲シテさらはにやまにはるちやそ。▲女また妾たべましよ。▲シテどんしやちやそ。▲女それならも一つたべましよ。過ぎましよか知らぬ。なう茶盞拜殿。此方のいつも機嫌のよい時は、唐人の小歌を唄はせらるゝ。妾もうけ持ちました肴に、小歌を唄はせられ。わけは知らねども、聞きましよ。▲シテちうらいどんまんきん。▲女それは、面白ござらう。謠はせられ〳〵。▲シテすうらんどんにこいてう、ぶゆがんなんつるほろけ、なんかんこいもんかんごい、せつぱ。せいやらてう、おたら。▲女扨も〳〵、わけは知らねど面白ことでござる。さあ〳〵、も一つ參れ。▲シテさらはにやしやりはらい。▲女いや〳〵、是非とも參れ〳〵。それなら妾がをさめましよ。なう〳〵茶盞拜殿。唐土には、樂を舞うて樂しむと

唐の東ー下三字刊本不明

おませうー差上げやう

さらば。ようをりやつた。▲女 はあ、忝うござる。なう〳〵、嬉しや〳〵。如何様の事ぞと思ひました程に、歸られたら、酒肴拵へておいて、馳走いたしましよ。何かと云ふ中に、歸りました。茶盞拜の戻られますを待ちましよ。▲シテ 唐の東□□□日本地に住めるなり。詞 これは、唐土茶盞拜と申す者でござる。我十ケ年以前に日本へ捕へれ、箱崎の浦に住居せり。日本人無心自我唐國妻戀々々。▲女 なう〳〵、腹立や〳〵。今までこそ知らなんだれ。それは妾も合點ぢや。これほど馳走するに、まだ唐の女が戀しいか。腹だちや〳〵。▲シテ 茶盞拜々々々。▲女 なう〳〵、それは尚合點ぢや。よい酒茶が飲みたいと云ふことであらう。今日は其方におませうと思うて、酒肴を調へておいた。まづ下にゐて、一つ飲ましませ〳〵。さあ、この盃で飲ましませ。▲シテ うらいりやうすうらん。▲女 さうでござる。一つ參れ。▲シテ はゝあふうれいらしや。▲女 如何にも、よい酒を調へて置きました。氣に入つたら、も一つ重ねさせられ。▲シテ ちんふんちやは。▲女 妾にさせらるゝか、戴きましよ。妾も一つ飲みました。又、此方へさしましよ。▲シテ さるま

みなきく——見
泣きくか

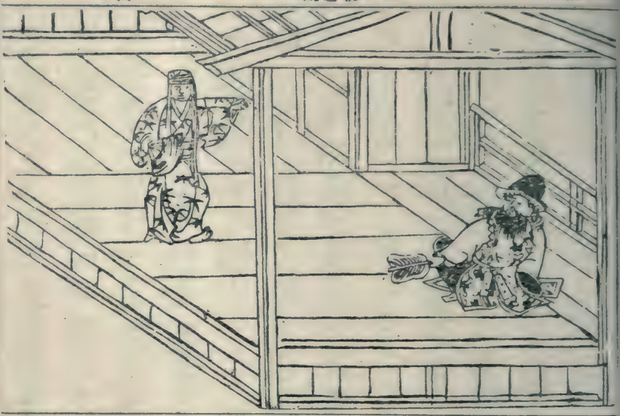
存じませぬ。樣子を云うて聞かしてくだされますなら、忝うござりましよ。▲もの何と、日本人無心自我唐國妻戀と云うて泣くか。▲女なかく、さやうでござる。▲ものこれは知れたことぢや。歌に直して見れば、日の本の人の心のなかりせば、我からこくの妻ぞ戀ひしきと、云ふことぢや。つねぐ、其方がつらう當るによつて、唐國の妻が戀しいと云ふことでをりやるわ。▲女なうく、腹立やく。妾が唐人ぢやと思うて、常々ねんごろに致しますに、まだ唐の女が戀しいとは。なう、腹立やく。▲ものこれく、その樣に腹を立ちやるな。只氣に入る樣にして、いよくねんごろにしやれ。腹を立つる心なら、云うて聞かすまいもの。▲女これは私が誤りました。それなら、腹を立てますまい。さりながら、まだござります。▲ものそれは、何事でをりやる。▲女泣きましたあとには、茶盞拜々々々と云うて、みなきくめされます。▲ものそれも、なるほど知れた事ぢや。常々よい茶酒も飮まいで、悲しいと云ふことぢや程に、隨分今から酒肴も調へ、馳走さしましよ。▲女なるほど、心得ました。もはや歸りましよ。▲ものお行きやるか。さらば

は、如何様のことやら。何とも合點が參りませぬ。それにつき、こゝに私の存じたお方に、物識がござる程に、今日はこれへ參り、この樣子を尋ねて參らうと存じます。まづ急いで參りましよ。まことに緣と申しながら、唐人と夫婦になると云ふは、不思議なことでござる。やあ、參る程にこれでござる。ものも。御宿にござりますか。▲ものしり　やあ、表に案内がある。何方でござる。やあ、わごりよか。これは何と思うてをりやつたぞ。▲女　されば、その事でござる。久しう御見舞申しませねども、又妾が用があれば參りましてござる。妾が男のちやさんはいを御存じでござりましよ。▲もの　成程存じたが、息災なか。▲女　如何にも、息災にはござりますが、つきましては、何とも合點の參らぬ事がござつて、此方へ尋ねに參りました。▲もの　それは何事でをりやる。▲女　さればでござる。唯明暮何やらよまひ言ばかり云うて、涙を流して泣き〳〵致されます。▲もの　して、そのよまひ言には何を云ふぞ。覺はないか。▲女　なるほど、覺えて居ります。日本人無心自我唐國妻戀と云うて、泣き〳〵召されます。よい事でござるやら、又惡い事でござるやら、

茶盞拜—原本茶盃拜とあり

緣につるれば云云—諺に緣につるれば唐土の物を食ふと云ふ遠遠の唐土に轉訛せしなりとぞ

よまひごと—獨ぶつ〳〵云ふこと



六　茶盞拜

三人　シテ　唐人輕衫、唐人笠、扇持
アド　女小袖、薄びなん
教手　長上下、小さ刀、扇持

▲女　妾は、この邊の者でござる。まことに緣につるれば唐の物でござる。妾が夫は茶盞拜と申して、唐人でござる。こゝ許に、親類とては無い人でござるによつて、朝夕妾が馳走いたし、隨分ねんごろに致します。何と致したことでござるやら、常常よまひごとばかりを云うて、涙をこぼし、泣き泣き致されます。妾も久々馴染みましたによつて、大方唐言葉も合點いたしますが、このよまひごと

いたづら者め。親をこの樣にして、何の祭よばうぞ。やるまいぞ〳〵。

書のこと。まづ一番に烏帽子を脱ぐべし。▲シテ 心得た。烏帽子脱いだ。さて何とある。▲女 その次に上下小袖脱ぐべし。▲シテ 何と、上下をぬぐか。なう〳〵嬉しや〳〵。早う脱がう。扨々窮屈にあつたが、嬉しや〳〵。さあその次を讀ましめ。▲女 さて、眞中へ出で力足を踏みて、相手あらば一番取るべし。▲シテ 心得た。相撲は身共が好きぢや。取らうとも〳〵。▲しうと やい〳〵、太郎冠者。聟殿は律義な人と聞いた。定めて誰ぞなぶつて、あの様に教へておこしたものであらう。さりながら、身共も相手にならずは、舅はもの知らずぢやと云はれう。一番取らう程に、笑ふな。▲冠者 畏つてござる。▲しうと さあ〳〵、是へ來て身拵させい。▲冠者 心得ました。▲しうと さあ〳〵、太郎冠者行司せい。▲冠者 畏つてござる。お手つ。▲二人 やあ〳〵〳〵。(組合ひ居る。)▲女 なう〳〵、悲しや〳〵。こちの人と父様と喧嘩が出來た。何とせうぞ。▲シテ やい〳〵、をな。足を取れ〳〵。▲女 心得ました。▲シテ 是は己が足ぢや。身共をこかしたら、内へよせぬぞ。▲女 心得ました。▲シテ おてつ。勝つたぞ〳〵。こちへをりやれ〳〵。▲女 なう〳〵父様、祭には來ませうぞ。▲しうと あの

いばらさかも木の樣な酒—荊棘逆茂木の如く刺すやうによくきく酒の意なるべし

庖丁—料理

者、盃を出せ。▲冠者 畏つてござる。▲しうと さらば、聟殿から參れ。▲シテ いや〳〵、まづ舅殿から參つて下され。▲しうと それなら、たべて進ぜう。太郎冠者、酌をせい。▲冠者 畏つてござる。▲しうと さらば、この盃を聟殿へさしましよ。▲シテ 戴きましよ。扨も〳〵、よい酒でござる。▲しうと 氣に入つたさうな。も一つ進ぜ。▲シテ それなら、も一つたべましよ。飲めば飲むほどよい酒でござる。そのまゝいばらさかも木の樣な酒でござる。祝うて三獻たべましよ。舅殿、をなも此中は、どうやら氣色がわるいと云うて、只梅漬ばかり食はれます。さらば、この盃を舅殿へさしましよ。もはや納になされ。▲しうと もはや參らぬか。それなら納めましよ。太郎冠者、とれ。やい〳〵太郎冠者、汝に言ひつけておいた物出せ。▲冠者 畏つてござる。▲しうと なう〳〵聟殿、この所の大法で、初めての聟殿には、庖丁の手元を見ます。聟殿にも一手なされ。▲シテ 如何にも心得ました。さればこそ、彼の作法はこれぢや。をなく〳〵、こゝへをりやれ〳〵。▲女 何事でござるぞ。▲シテ さあ〳〵、むづかしうなつた。今の書いた物讀うで見やれ。▲女 心得ました。何々、相撲の

ざるか。ようござりました。御出なされた通申しましよ。▲女 そのとほり申せ。▲冠者 申し申し、をな様の御出なされました。▲女 父様、参りました。▲しうと をなか。よう來た。▲女 けふはこちの人の参られました。▲しうと 聟殿のござつたか。太郎冠者、こちへ通らせられいと云へ。▲冠者 畏つてござる。申し〳〵、此方へお通りなされませと申されます。▲シテ 心得た。追つ付けそれへ参らう。身共は今まで袴を著たことが無いによつて、何とするものやら知らぬ。どう著るものぢやまで。これではこゝにも一つ餘つてある。こちらは何とする所ぞ。▲しうと やい〳〵、太郎冠者、聟殿は何をしてござる。早うござれと申せ。▲冠者 畏つてござる。申し〳〵、何をなされてござる。早う御出なされと申します。▲シテ 追つ付けそれへ参るとおしやれ。▲冠者 畏つてござる。早これへ御出なされうと仰せられます。▲シテ いや〳〵、これでもこれが餘る。どう著るものぢやぞ。初對面でござる。早々参ります筈でござるを、何かと致し、遲なはりました。その段は、をなに免じて御免なれ。▲しうと 少も苦しうござらぬ。好うこそ今日は御出なされた。やい〳〵、太郎冠

をな樣―女樣娘御の意

それなら女房衆に讀うで貰うて、この書いた通にすれば、聟入がざつと濟むぞ。▲シテ それは忝うござる。これへ下され。定めて、待ちかねて居られましよ。もはや參りましよ。▲をしへ お行きやるか。さらば。▲二人 さらば〳〵。▲をしへ ようおりやつた。▲シテ はあ。なう〳〵嬉しや〳〵。まんまと聟入の樣子を習うた。まづ歸つて女共に見せう。是ぢや。なう〳〵、女共ゐさしますか。▲女 やあ、こちの人が戻られた。こちの人歸らせられた。▲シテ なか〳〵。今戻つた。誰殿へ行て、聟入の次第を習うて來た。いざ、追つ付け聟入せう。即ち、このうちに書いてあるとおしやつたほどに、其方これを持ちて行て、先へ行たらば讀ましませ。▲女 心得ました。これへおこさしやれ。妾が案内者の爲、さきへ參りましよ。▲シテ それ〳〵、行かしませ〳〵。なう〳〵、聟入といふものは、人が見たがるもので、垣からも窓からも、目ばかりぢやと云ふ。晴がましいことであらう。▲女 如何にもさうでござる。はや是でござる。此方のござつた樣子を申しましよ。それにござれ。▲シテ 心得た。さうおしやれ。▲女 ものも。父樣内にござるか。▲冠者 やあ、をな樣でご

女共―妻のこと

いや、それは常の折見舞ふ。聟入ではをりない。何と、聟入の次第が習ひたいか。▲シテ なかく、習ひたうござる。教へて下され。▲をしへて 如何にも教へてやらう。さりながら、身共も久しうなる事ぢやによつて、中では覺えぬ。聟入の書いた物がある。見てやらう。それに待ちやれ。▲シテ 畏つてござる。見て下され。▲をしへて やれ〳〵、まことに世には鈍な者がござる。あの樣な者は、色々になぶつてやりましよ。こゝに相撲の書がござる。これを持たしてやつて、笑草に致させうと存ずる。なう〳〵をりやるか。これが卽ち身共が聟入した時の書物ぢや。其方は、大昔、中昔、當世樣と云うて、三段にあるが、どれが習ひたうをりやるぞ。▲シテ されば、どれがようござりましよぞ。私の存じまするは、大昔は餘り古うござらうず。又、中昔も、はや昔でござる。いづれもの、只當世樣々々々と仰せらるゝ程に、當世樣が習ひたうござる。▲をしへ 其方は聟入すれば、分別までが上つた。卽ちこれが身共の聟入した當世樣ぢや。この中に書いてある。其方は物を書くか。▲シテ いや、私は書きませぬが、女共が鳥の足形の樣な事致して、心覺いたします。▲をしへ

きらびやか—美しきこと

路次—途中

の存じた御方に、誰殿と申してござる。これは節々聟入をなされて、萬事巧者にござる程に、これへ參り、聟入の樣子を習うて參らうと存ずる。急いで參らう。やれ〳〵、聟入の樣子を、敎へて下さるればよいが、內にさへござつたらば、習うて參らう。參る程に、これぢや。まづ案內を乞はう。ものも。案內も。▲をしへて表に案內とあるが、何方でござる。▲シテいや、私でござる。▲をしへてようこそをりやつたれ。此間は久しう見えなんだ。けふはきらびやかな出立ぢやが、どれへ行かしますぞ。▲シテ此方の目にも、さう見えますか。今日は吉日でござるによつて、聟入を致します。▲をしへてそれはめでたい事でをりやる。▲シテそれにつきまして、聟入には殊の外作法があつて、むづかしいと申す。此方には節々聟入をなされて、樣子を御存じであらうと存じて、習ひに參りました。聟入の次第を、敎へて下され。▲をしへてはあ。扨わごりよは粗相な事おしやる。身共が何時その如くに、節々聟入をした事があるぞ。▲シテ此方に路次で御目に懸つて　どれへござるといへば、舅の方へ行く〳〵と仰せらるゝ。これは聟入ではござらぬか。▲をしへていや

料理聟—一名庖丁聟

借り調へ—衣類を也

五　料理聟

シテ　上下、烏帽子、ちひさ刀
アド　薄びなん、肩ざし
四人　男　シテ同斷
教手　長上下、小さ刀

▲しうと　罷出でたる者は、この邊に住居致す者でござる。今日は最上吉日でござれば、聟殿のお出なされうとあるほどに、太郎冠者を呼び出し、申し付けうと存ずる。やい〳〵太郎冠者、あるかやい。▲冠者　はあ、御前に居ります。▲しうと　念なう早かつた。汝を呼び出すこと、別の事でない。今日は最上吉日なれば、聟殿追つ付け御出なさるゝ筈ぢや。どこも綺麗に掃除をしておけ。▲冠者　畏つてござる。▲しうと　御出なされたらば、此方へ申せ。▲冠者　心得ました。▲シテ聟　是は舅にいとしがらるゝ花聟でござる。今日は最上吉日でござる程に、聟入を致さうと存じて、方々で借り調へ、これ程に迄いでたちてござる。それにつき、聟入には殊の外辭儀作法があつて、むづかしいものぢやと申す。こゝに私

るわ〳〵。▲シテもはやならぬぞ〳〵。▲二人やるまいぞ〳〵。勝つたぞ〳〵。

べうべう――犬の啼聲

祈りをれ。▲アドこゝろえました。南無きやらやくたんのう、とらやく〳〵。▲ちゃもはや知れましたく。此方の勝でござるく。▲アドなかく、身共が勝ちましたく。▲シテ何ぢや。某も祈らぬ中に、勝つたとは。▲ちゃそれなら祈らせられ。▲シテ祈らいでわ。それ山伏と云つぱ、山に起き伏すによつて山伏なり。兜巾と云つぱ、布切をもつて眞黒に染め、襞をとつて頭に戴くにより、兜巾と名づく。又この珠數は、苛高ではなうて、めつたな珠數玉をつなぎ集め、いらたかと名づく。かほど尊き山伏が、一祈いのるなら、などか奇特のなかるべき。ぼろおんく。いろはにほへと。ぼろおん〳〵。▲犬べうべうく。▲ちゃはあ、愈知れました。山伏の負でござるぞく。▲シテいやく、まだ知れぬ。こんどは相祈にするぞ。▲ちゃ又相祈と云はれます。祈らせられ。▲アド心得ました。南無きやらたんのう、とらやく〳〵。▲シテ如何に悪心の深い犬なりとも、今一祈いのるなら、などか奇特のなかるべき。ぼろおん〳〵〳〵。▲犬べう〳〵〳〵。▲アドやれやれ山伏が逃げるわ。勝つたく。あれ留め。▲ちゃこの傘を持たしましよ。やれ、逃げ

しなだれ—人によりかゝること

ぞ。▲ちや されば、こゝに人食犬がござる。これを互に祈り合せられて、どちらへなりと、懐いた方を勝に致さうと存ずる。何とござらう。▲シテ それなら、あれも祈るか、問うて來い。▲ちや 心得ました。なう〳〵、御坊。とかくこの如くに兩方云ひ合うては、埒が明きませぬによつて、身共が只今申した通、聞かせられたが、互に祈らせられ。▲アド なるほど、これで樣子を聞きました。さりながら、山伏はよう物を祈る者でござるが、身共は、遂に何も祈つたことがござらぬ。これはなりますまい。▲ちや 尤でござる。さりながら、こゝに幸の事がござる。何ぞ經の文に、虎と云ふ事はござらぬか。あの犬が、虎と云へば尾を振つてしなだれかゝりますが、何ぞ虎といふ文はござらぬか。▲アド されば、虎と云ふことは思ひつきました。經に虎といふことがござる。それなら祈りましよ。その犬を連れてござれ。▲ちや 心得ました。なう〳〵、出家も祈らうと云はれます。犬を引いて參ろか。▲シテ あれも祈らうと云うなら、連れて來い。▲ちや 心得ました。さあ〳〵、御坊から祈らせられ。▲アド 心得ました。お山伏から祈らせられぬか▲シテ まづ、おのれから

とりさへて下され〳〵。▲ちや これ〳〵、これは何と召さる。まづ待ちやれ。持たす筈ならば持たさう。この肩箱を、身共に預けさせられ。▲シテ それなら、汝に預ける。きつと持たせ。▲ちや 心得ました。なう〳〵御出家。何と、此方には、若し山伏の肩箱を持たせられた作法がござるか。▲アド 思ひも寄らぬことでござる。山伏は山伏、出家は出家でござる。あの人に従ふ筈はござらぬ。持つ事はならぬと云うて下され。▲ちや 心得ました。その通申しましよ。これ〳〵、お山伏、只今の通申したれば、思ひも寄らぬこと、持つことはならぬと申されますわ。▲シテ はてさて、憎いことぬかす。この山伏と云ふは、天下の御祈禱をするにより、貴人も下馬をなさるゝ。何ぞや、坊主の分として慮外な奴ぢや。是非ともに持たせ。▲ちや 尤でござる。さりながら、この如くに、互に威勢争の樣に。何かと云合せられては、埒が明きせぬ。身共の存ずるは、何ぞ勝負をなされて、そのかちまけによつて、肩箱を持たすか、又此方が負けたらば、あの傘持つものかに致さうか。是は何とござらう。▲シテ あの坊主と勝負せい。して、その勝負には何をかする

過怠―科（とが）

▲ちや　さあ〳〵、一つ參れ。▲アド　心得ました。扨も〳〵、よい茶でござる。扨、何方にも御息災にござるか。▲ちや　なか〳〵、どれ〳〵も息災にござる。▲アド　それはめでたい事でござる。▲シテ　貝をも持たぬ山伏が〳〵、道々うそを吹かうよ。詞　これは、出羽の國羽黒山より出でたる山伏。この度大峯葛城役を勤め、只今かけ出でてござる。まづ、本國へ下らう。それ、山伏と申すは、野に伏し山に伏し、岩根を枕とし、難行苦行する故に、行力さへ協へば、目の前で飛ぶ鳥をも、祈り落すことでござる。やあ、殊の外喉が渇く、こゝに茶屋がある。茶をたべう。茶屋々々、茶をくれい。▲ちや　心得ました。さあ〳〵參れ。▲シテ　扨も〳〵、ぬるや〳〵。これはぬるうて飲まれぬ。▲ちや　心得ました。さあ〳〵參れ。▲シテ　熱やの〳〵。これは熱うて飲まれぬ。茶屋をして食ふ奴が、茶のぬるい熱いを知らぬか。▲アド　これ〳〵、茶屋殿。よい加減にして進ぜられ。▲ちや　心得ました。▲シテ　やあ、おのれ憎い奴の。忌々しい坊主の分として高腰を掛け、このかけ出の山伏に一禮もせぬ。憎い奴の。過怠に、この肩箱を泊まで持たすぞ。▲アド　あゝ悲しや。茶屋殿々々〳〵、



四　犬山伏

シテ　頭巾、篠懸、水衣、半袴
四人　僧　半袴、腰帯、頭巾
茶屋　長袴

▲アド 愚僧は、この邊に住居いたす者でござる。今日はさる方へ常齋に參り、只今罷歸る。まづ、急いで參らう。やれ〳〵、佛の御蔭は忝いことでござる。何方へ參つても、御馳走に逢ふ事でござる。やあ、殊の外喉が渇く。こゝに幸存じた茶屋がある。茶をたべましよ。茶屋殿か。今日も出させられたよ。▲ちや なか〳〵、出ました。まづ腰を掛けて、茶を參れ。▲アド 一つ下されませう。

てよやとて、朸だめの三つ伏せに、押し伏せられて。▲シテ縄だめ柱だめに。地焙つつ、踏んづ、捻ぢつ、引かれつ。その古の尺八竹の、今に冥土の苦患となるを、助け給へや御僧よ。尚も輪廻の妄執は、この年までも、數寄のさからぬ。姥竹の戀ひしさは、われながらうつ頬憎くやと、かき消す様にぞ失せにける。

きの小尺八を用ゐること

良安寺—宇治萬福寺門前に虚無僧の祖良安の墓あり

しゆつつう—未詳

あの良安寺の尺八の書にも、兩頭を切斷してより此かた、尺八寸の內、古今に通ず、吹き起す無常心の一曲、三千里外に知音は絕すと作られたり。▲ワキ げに〳〵、是は理なり。昔語の樂阿彌陀佛に、言葉を交すも尺八故、古今に通ず心よなう。▲シテ 詞 おう、なか〳〵のこと。われもまた、坂東方の人に馴れ申すも尺八故。▲ワキ おう。▲シテ 面白や。面白けれど尺八の、地 〳〵、わが吹くは喧しゝとて、三千里の外知音は隔つまじ。まづわれは差措くなり。御尺八を吹き給へ。▲ワキ 同じくは連れ尺八。▲シテ いや〳〵、それは樂阿彌が、御尺八をよごすなりと、地 云ふ聲の下よりも、大尺八を取出し、とらあろら、りい、りい、とらあろ、らあらろ、ふう。▲シテ あら昔戀しや。暇申して歸るなり。▲ワキ あら痛しの御事や。最期を語りおはしませ。▲シテ いで〳〵さらば語らん、〳〵。もとより樂阿彌は、しゆつつうなる面さしにて、彼所の旅人、此所の茶屋、あそこの門にさしよせ〳〵、機嫌も知らず、尺八を吹き鳴らして、樂阿彌に代り一錢、尺八吹には何も吳れねば、腹だちや〳〵と、あそこゝにて惡口すれば、尺八吹は圖なしなり、不祥なり、あ

つき込め—埋葬すること
雙調切—尺八の調子の名
大尺八—長さ二尺五寸
小尺八—一尺二寸
四笛—一尺八寸
半笛—上羽調子と云ふ大尺八に對して半分の長

じ。教へて給はり候へ。▲間 されば、其事にて候。あれは古、此所に、樂阿彌と申す尺八吹の、久しく尺八を吹死に致され候により、所の者共痛しう存じ、土中につき込め、印に植ゑたる松にて候。御僧も逆緣ながら、弔うて御通りあれかしと存じ候。やあ、見申せば御僧も、尺八を遊ばすやらん。腰にさゝれて候よ。▲ワキ いや〱、これは犬嚇までにて候へども、逆緣ながら弔うて通らうずるにて候。▲間 又御用あらば、重ねて御申し候へ。▲ワキ 頼みましよ。▲間 心得ました。▲ワキ 謠 扨は、是なるは、樂阿彌陀佛の舊跡かや。いざや跡とひ申さんと、我も持つたる尺八を、懷よりも取出し、この尺八を吹きしむる、〱。
▲シテ一セイ 尺八の、あら面白の音いろやな。お主を見れば雙調切なり。▲ワキ 不思議やな。まどろむ枕の上を見れば、詞 大尺八、小尺八、四笛、半笛、兩笛を差し、われ等の笛を面白がるは、如何なる人にてましますぞ。▲シテ 詞 これは古、尺八を吹死にせし、樂阿彌といへる者なるが、御尺八の面白さに、これまで顯れ出でて候。▲ワキ これは不思議の御事かな。昔語の樂阿彌陀佛に、言葉を交すは不審なり。▲シテ 詞 何をか不審し給ふらん、

三 樂阿彌

三人　シテ　島厚板頭巾、小帯
　　　ワキ　水衣、半袴
　　　アヒ　長袴、小さ刀

邏齋—行脚

別保—河藝郡上野の舊名也大別保又は別府と云ふ

▲ワキ次第 邏齋に出づる門わきに、〱、犬の伏せるぞ悲しき。詞 これは東國方の者でござる。某未だ太神宮へ參らず候間、此度思ひ立ち、伊勢太神宮へと志し候。謠 旅衣尙萎れゆく往來の、〱、ふすまなきぞ悲しき。足に任せて行く程に、〱、これぞ名に負ふ伊勢の國、別保に早く著きにけり。詞 急ぎ候ほどに、これは早、別保の松原に著いてござる。これなる松を見れば、札を打ち短尺をつけ、尺八の樣なるものを、數多かけられて候。如何樣いはれの無いことは、ござあるまい。所の人に尋ねばやと存ずる。所の人の渡り候か。▲間 所の者と御尋ねは、如何樣なる御用にて候ぞ。▲ワキ 是なる松を見申せば、札を打ち短尺をつけ、尺八の樣なる物を、數多かけられて候。いはれない事は候ま

郎冠者、行司をせい。▲冠者畏つてござる。御手つ。▲二人やあ〱〱。シテ負くる。▲冠者これ申し〱、何となされました。太郎冠者でござる。何となされました〱。▲シテ扨も早い相撲ぢや。やつと云うて手合をすると否や、はつし〱と打つて來たれば、眼がくらくらとした。何と云ふ手ぢや。問うて來い。▲冠者畏つてござる。なう〱、唯今の手は何といふ手ぢやと仰せらるゝわ。▲取手これは坂東方にはやる、鼻取相撲でござる。弱い鼻は根から引き抜きます。強い鼻は捻ぢ歪めます。殿樣の鼻は思ひの外強い鼻で、御仕合ぢやと仰せられ。

臑が流れう―よろめくこと

知れませぬ。是非御對手を下されと申します。▲シテ何と、勝負が知れぬ。これも尤ぢや。それならば誰と取らせうぞ。風呂を焚く道雲と取らせうか。▲冠者いや、あれは年寄りまして、え取りますまい。▲シテもはや臑が流れうなあ。やあ、汝取れ。▲冠者いや、私は終に取つた事がござらぬ。▲シテやあ弱い奴ぢや。相撲は見たし、對手は無し。是非に及ばぬ。身共が取らうか。取るか問うて來い。▲冠者畏つてござる。なう〳〵、相撲取も數多あれども、折節方々へ遣された。それ故、頼うだ人の御取りなされうと申せらるゝが、取りやるか。▲取手なか〳〵。御對手に嫌ひはござらぬ。取りませうと仰せられ。▲冠者心得た。お對手に嫌ひは無い。取りませうと申します。▲シテ何と、取らう。扨は彼奴が相撲も知れた。身共に勝つたらば、誰が扶持をせう。勿論負けたらば、尚扶持をせまい。是非に及ばぬ。取らずはなるまい。身拵して出よと云へ。▲冠者畏つてござる。さあ〳〵、身拵して出やれ。▲取手心得ました。▲シテやい〳〵太郎冠者、身拵せい。身拵が好くは出よと云へ。▲冠者畏つてござる。さあ〳〵、拵がよくは出やれ。▲取手心得ました。▲シテ太

問うて來い。▲冠者それは路次で尋ねましたれば、かやうのものも、藝になりませうかと申します。▲シテ何ぢや。▲冠者弓、鞠、庖丁、碁、雙六、馬の伏せ起し、やつと參つたを覺えて居ると申します。▲シテあの彼奴が。▲冠者なか〳〵。▲シテそれは萬能の奴ぢや。さりながら、その中に何ぞ得て居る藝はないか。問うて來い。▲冠者畏つてござる。なう〳〵、其方の藝の内に、何ぞ得て居る事はないかと仰せらるゝわ。▲取手中にも相撲を得てとると仰せられ。▲冠者心得た。中にも相撲を得てとると申します。▲シテ何と、相撲を得てとる。▲冠者なか〳〵。▲シテ彼奴は身共に生れ合うた奴ぢや。それなら相撲を見やうほどに、これへ出てとれと云へ。▲冠者畏つてござる。なう〳〵、相撲を見やうと仰せらるゝ。出てとりやれ。▲取手いかにも、とりませうほどに、御對手を下されと仰せられ。▲冠者心得た。いかにも取りませう程に、御對手を下されと申します。▲シテはてさて、獨出て取れと云へ。▲冠者畏つてござる。獨取れと仰せらるゝ。▲取手いや、獨取りましては。勝負が知れませせぬ。御對手を下されとおしやれ。▲冠者心得た。獨取りましては、勝負が

奥―奥州

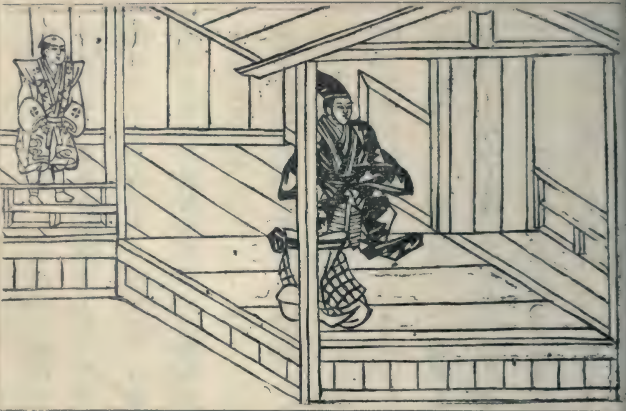
かゝり―蹴鞠の場

ござる。御床几でござる。▲シテ何と、今の聲を聞かうな。▲冠者なか〳〵、承りましよ。▲シテそれならあれへ行て云はうは、賴うだ人只今廣間へ出られた、あれへ出て、目見えをしやれ、御目に入つたら、その儘御見參であろ。又御氣に入らずは、逗留があらうと云うて、これは汝が言分にして、彼奴に深う思はせ。▲冠者畏つてござる。なう〳〵居りやるか。▲取手なか〳〵、これに居ります。▲冠者賴うだ御方、只今廣間へ出させられた。あれへ出て、目見えをしやれ。御目が參つたら、當分に御見參であろ。又御氣に入らずは、逗留のあることがあらう。さう心得て出やれ。▲取手心得ました。▲シテやい〳〵、太郎冠者、あるかやい。▲冠者はあ。▲シテ侍衆に只居られうより、矢の根を磨かれと云へ。▲冠者はあ。▲シテ又中間共には、このごろ、奥から引かせた百匹ばかりの馬の、湯洗をさせい。▲冠者はあ。▲シテ今日は天氣がよい。若い衆の鞠をなされう程に、かゝりへ水を打たせておけ。▲冠者はあ。新座の者でござる。▲シテ彼奴か。▲冠者なか〳〵。▲シテとつと利根さうな奴ぢや。さりながら、見たと違うて鈍な奴もあるものぢや。何ぞあれに藝はないか

は忝うござる。御肝入られて下され。▲冠者 その義なら、只今同道いたさう。さあ〳〵、をりやれ〳〵。▲取手 參ります。▲冠者 なう〳〵、何と其方に藝はないか。▲取手 されば、かやうの物も藝になりませうか。▲冠者 何でをりやる。▲取手 弓、鞠、庖丁、碁、双六、馬の伏せ起し、やつと參つたを覺えました。▲冠者 扨も〳〵、萬能の人ぢや。その通り申したらば、御氣に入るであらう。さあ〳〵、早うをりやれ。やあ、何かと申すうちにこれぢや。其方を同道した通り申さう。それに待ちやれ。▲取手 心得ました。▲冠者 頼うだ御方、ござりますか。太郎冠者が歸りました。▲シテ やあ、太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者、もどつたか〳〵。▲冠者 ござりますか〳〵。▲シテ 戻つたか。▲冠者 只今歸りました。▲シテ やれ〳〵、骨折や〳〵。何と新座の者、抱へて來たか。▲冠者 なるほど抱へて參りました。▲シテ 何所許に居るぞ。▲冠者 御門外に待たせ置きました。▲シテ それなら、ものは初からが大事ぢや。彼奴が聞かうやうに、くわを云はうほどに、汝は色々に答へ。▲冠者 畏つてござる。▲シテ やい〳〵太郎冠者、居るか。▲冠者 はあ。▲シテ 床几を持つて來い。▲冠者 畏つて

ら、汝は街道へ行て、よささうな者が來たらば、言葉をかけて抱へて來い。▲冠者 畏つてござる。もはやかう參ります。▲シテ 行たらば、頓て戻れ、▲冠者 はあ。▲シテ えい。▲冠者 はあ。やれ〳〵、急なことを申しつけられた。まづ街道へ參り、よからう者が參つたら、抱へて參らうと存ずる。まことに只今までは、某一人で、殊の外苦勞致してござるが、新座の者が參つたらば、樂を致すでござらう。參るほどに是が街道ぢや。まづ、この所に、待つて居やうと存ずる。▲取手 罷出でたる者は、東國方の者でござる。某今に上方を見物いたさぬほどに、此度都へ上り、見物いたし、また好ささうな所もあらば、奉公いたさうと存ずる。まづそろ〳〵參らう。まことに人々の仰せらるゝは、若い時旅をせねば、老いての物語がないと、申さるゝによつて、俄に思ひ立つてござる。▲冠者 やあ、似合しい者が參つた。言葉をかけて見やう。なう〳〵、これ〳〵。▲取手 こちの事か。何事でござる。▲冠者 其方はどれから何所へ行く人ぞ。▲取手 私は奉公が望で、都へ上ります。▲冠者 それは幸ぢや。身共の頼うだ人は大名ぢや。これへ肝入つて出してやろ。▲取手 夫

程がようござろ。それは御分別次第でござる。▲シテ それならば、何程抱へうぞ。ものほど置かう。▲冠者 何程でござる。▲シテ 千人ほど抱へう。▲冠者 これは餘り大勢でござる。置所がござるまい。▲シテ それは、あの廣い野山へ追ひ放しておかうまで。▲冠者 いや〱、人間が野山に居りましては、御奉公は致しませぬ。▲シテ それならば、もそつと減さう。▲冠者 ようござりましよ。▲シテ もそつと減して、ものほど置かう。▲冠者 何程でござる。▲シテ 五百置かう。▲冠者 これは減りも減りましてござるが、それでも、堪忍が續きますまい。▲シテ 堪忍といふは、食み物の事か。▲冠者 なか〱、さやうでござる。▲シテ それこそ、深山な水を食ましておけ。▲冠者 いや〱、水などたべまして、御奉公は勤めませぬ。▲シテ その義なら、これも減さう。▲冠者 ようござりましよ。▲シテ 大名の、せか〱減すも見苦しい。くわつと減して、ものほど置かう。▲冠者 何程でござる。▲シテ 二人おかう。▲冠者 とてものことに、も一人お減しなされませ。▲シテ いや、汝ともに二人ぢや。▲冠者 すれば、新座只一人でござるか。▲シテ なか〱、さうぢや。▲冠者 これがようござろ。▲シテ それな



二　鼻取相撲

三人　シテ　素襖、烏帽子、小さ刀
　　　アド二人　半袴、腰帯

▲シテ 八幡大名。かやうにくわは申せども、召使ふ者は只一人。一人では人が使ひ足らぬ。新座ものを大分抱へうと存ずる。まづ、太郎冠者を呼び出し、申しつけう。やい〳〵太郎冠者、あるか。▲冠者 はあ、御前に居ります。▲シテ 念なう早かつた。汝呼び出すは別の事でない。そち一人では人が使ひ足らぬ。新座の者を数多抱へうと思ふが、何とあらう。▲冠者 これは一段とようござりましよ。▲シテ その義なら、何程抱へてよかろ ▲冠者 されば、何

畏つてござる。かうもござりましよか。▲奏者何としたぞ。▲アド盃は空と土との間のもの、富士をつきずの法にこそ飲め。▲奏者これも一段でかした。やい〳〵、重ね〴〵歌が出來た。これへ寄り、三盃づつ飲うで、その後は、洛中を舞下りにせい。お暇下さるよぞ。▲二人はあ、ありがたうござる。▲奏者さあ〳〵、身共が酌をしてやろ。飲め〳〵。▲二人扨も〳〵、忝いことかな。▲奏者もはや御暇遣さる。また來年參りませい。▲二人はあ、忝うござります。もはや御暇申します。▲シテ何と〳〵、めでたい事ではないか。▲アドなか〳〵、その通ぢや。▲シテいざ、めでたう和歌をあげて歸らう。▲アド一段よかろ。▲シテ謠松の酒屋や梅壺の。▲アド柳の酒こそすぐれたれ。▲シテ年々に、つき重ねたる舞の袖。▲二人かへす袂やねすらん。やらんめでたや。抑〳〵酒は百藥の長として、壽命を延ぶ。その上酒に十德あり。旅行に慈悲あり。寒氣に衣あり。水山に便あり。さて又餠は萬民に用ひられ、白金黄金所領もち、白金黄金所領の上に、たゞかねもちこそめでたけれ。

富士をつきずの法にこそ飲め—富士を盃臺にする意と云ふ
松の酒屋—松の榮えを酒に掛く
梅壺—酒の壺をきかす
柳の酒—柳樽の意か
やらん—やんらの誤歟
酒は百藥の長—漢書の食貨志の語
酒は十德—百藥長、壽命延、旅行食有、寒氣衣有、推參便有、愁拂玉箒、位無而貴人交、勞助、萬人和合、獨居成友の十を云ふとぞ本文慈悲或は食（じき）か水山も亦推參とすべきが如し
所領もち、かねもち—共に持に餠をきかす

年のうちに云々―古今集の年の内に春は來にけり一年を去年とや云はん今年とや云はんとあるをもぢりたる也

は氣の毒でござる。何と致さうぞ。かうも云はれましよか。▲奏者 何と。▲アド 年のうちに餅は搗きけり一年を、去年とや食はん今年とや食はん。▲奏者 これも一段でかした。この通申し上げう。兩國の者ども、只今の通詠みましてござる。はあ〳〵。やい〳〵、仰せ出さるゝは、御笑草になされうと思召し、仰せ出だされた處に、殊の外でかしたとあつて、御機嫌ぢや。いつは下されねど、この度は御通を下さるゝ。これへ寄つてたべませい。▲シテ はあ、それは忝うござる。なう〳〵、嬉しや。心がくわつと廣うなつたわ。▲アド 身共も、心持がくわくらくわつとした。▲奏者 やい〳〵、御前近くで、何をわつぱと云ふ。只今わつぱと云うた過怠に、も一首づつ、何ぞ大きな歌を詠めと仰せ出された。急いで詠め。▲シテ それ〳〵、わごりよが、餘りわつぱと云うたによつて。▲アド いや〳〵、其方がわつぱと云うた。▲奏者 やい〳〵、論は無用。急いで詠みませい。▲シテ これは迷惑でござる。何と致さう。かうも申されましよか。▲奏者 何と。▲シテ 大空にはびこるほどの餅もがな、生けるを一期かぶり食はん。▲奏者 一段とでかした。今一人の者も詠め〳〵。▲アド

百姓ども、此の如く、はあ〳〵。やい〳〵、兩國の百姓ども、それへ出ませい。▲二人はあ。▲奏者申し上げたれば、仰せ出さるゝは、去年持つて參る御年貢を、今年持つて參ること、曲事に思召す。さりながら、上堂はいつもお正月と祝ひましたとあつて、殊の外、御機嫌ぢや。折節、御歌の會に持つて參つたほどに、汝等が差上物に添へて、去年今年を折り入れ、歌を一首づつ詠めと仰せ出された。急いで詠みませい。▲シテこれは迷惑でござる。賤しい百姓でござれば、歌とやらは、遂に詠うだ事がござらぬ。御許されませ。▲奏者いや〳〵、仰せ出された事を、飜す事はならぬ。急いで詠みませい。▲シテ畏つてござる。▲アドあれが畏りましたら、私は心得ました。▲奏者さあ〳〵、早う詠め〳〵。▲シテ畏りました。かうもござりましよか。▲奏者何と。▲シテ飲み伏せる宵のまぎれに年ひとつ、打越酒の二年醉かな。▲奏者これは一段とでかした。さあ〳〵、汝も詠め。▲アド扨は、歌と云ふはあの樣なことでござるか。詠みましよ。飲み伏せる宵の紛に年ひとつ。▲奏者やい〳〵、夫はあの者が詠うだ歌ぢや。汝が捧物によそへて詠め。▲アドはあ、それ

かひに、加賀の菊酒を御年貢に持つて上ります。當年は木目峠の大雪に支へられ、遲なはつてござる。さりながら、上堂は、いつもお正月ぢやと申します。上へは、お奏者のお心得をもつて、宜しう仰せ上げられ下されませ。▲奏者 如何にも聞届けた。その通申し上げう。御藏の前へ納めませい。▲シテ 畏つてござる。▲シテ さら〳〵。なう〳〵、ゐさしますか。▲アド これに居るわ。▲シテ さあ〳〵、上げてをりやれ。▲アド 其方のは濟んだか。▲シテ なか〳〵。▲アド さらば、身共も上げて參らう。物もう〳〵。▲奏者 何者ぢや〳〵。▲アド はあ、これは越前のお百姓でござる。御年貢として、大晦日さかひに、圓餅を差上げます。當年は木芽峠の大雪に支へられ、遲なはつてござる。さりながら、上堂はいつもお正月と承つてござる故、只今持つて上りました。上へは、宜しう仰せ上げさせられて下されませ。▲奏者 その通申し上げてやろ。御藏の前へ納めませい。▲アド 畏つてござる。さら〳〵。なう〳〵、加賀の、をりやる。▲シテ これに居るわ。何と、上げてをりやつたか。▲アド なか〳〵。首尾よう上げた。▲シテ それはめでたうをりやる。▲奏者 兩國の

一段の一層好いとの意

申すほどに、只今持つて上らうと存ずる。まづ急いで參らう。やれ〳〵、毎年々々相變らず御年貢納むるは、めでたい事でござる。▲アドやあ、これへ一段の連が參つた。言葉を掛けて同道いたさう。なう〳〵、これ〳〵。▲シテこちの事か。何事でをりやる。▲アド其方は、どれから何所へ行く人ぞ。▲シテ身どもは、加賀の國の百姓ぢや。御年貢を納めに、上へのぼるわ。▲アドそれは幸ぢや。身共は、越前の百姓ぢや。御年貢に圓餅を持つて上るわ。いざ同道いたさうか。▲シテなか〳〵、同道いたさう。さあ〳〵、其方から先へ行かしめ。▲アド參らうか。さあ〳〵、をりやれ〳〵。▲シテ參るぞ〳〵。何と、其方の御年貢は圓餅ぢやの。▲アドなか〳〵、さやうでをりやる。わごりよの年貢は何ぞ。▲シテ身共の年貢は、加賀の菊酒でをりやるわ。やあ、何かと云ふ中に、身共の御館はこれぢや。わごりよの御館はどこぞ。▲アド扨も思ひ合うた。身共の御館も、これでをりやるわ。▲シテ扨は、さやうか。それなら、身共から上げるぞ。▲アトなか〳〵、上げさしませ。▲シテ物もう〳〵。▲奏者何者ぢや〳〵。▲シテはあ、これは加賀の國のお百姓でござる。毎年大晦日さ

木目峠—木芽とも木理とも書く越前葉原の北にあり

卷之四

餅酒

三人
シテ　素襖、半袴
奏者　長袴、小さ刀
アド　素襖、半袴

▲アドワキ　罷出でたる者は、越前の國のお百姓でござる。毎年大晦日さかひに、御年貢として、越前の圓餅を差し上げます。當年も持つて上らうと存ずるところに、木目峠の大雪に支へられ、おそなはつてござる。さりながら、上堂は、何時も正月ぢやと申すほどに、只今持つて上らうと存ずる。まづ、急いで參らう。道行　やれ〳〵、かやうに相變らず持つて上るは、めでたい事でござる。▲シテ　これは加賀の國のお百姓でござる。毎年大晦日さかひに、御年貢として、加賀の菊酒を持つて上る。當年も上らうと存ずるところに、木目峠の大雪に支へられ、遲なはつた。さりながら、上堂は、何時もお正月ぢやと

明王の索―不動明王の縛の索

いろはにほへと。ぼろおん〱〱。▲二人 はあ、いよ〱見えました〱。▲アド 勝ちました〱。▲シテ いや〱、今のでは知れぬ。今度は相祈にせうと云へ。▲ちや 心得ました。なう〱、今度は相祈にせうと云はれます。祈らせられい。▲アド 身共が勝ちましたに、無理をいはれます。是非に及ばぬ。祈りましよ。▲アド 謹上さんぐう。さいはい〱。▲シテ いかに悪心の深い大黒なりと、明王の索に掛けて祈るなら、などか奇特のなかるべき。ぼろおん〱。橋の下の菖蒲は、ぼろおん〱〱。▲アド さあ勝つたぞ〱。山伏が逃ぐるわ。やるまいぞ〱〱。

外宮─豐受大神宮
内宮─皇太神宮
末社─本社より分れたる神社
雨の宮─不詳
風の宮─風神社又日祈（ひのみ）神社
月讀─神宮の北三里に在り祭神二座
日よみ─不詳
齋宮─多氣郷に齋宮祭址あり

ましてござれ。▲ちゃ 心得ました。▲ちゃ さおく、此方から祈らせられ。▲シテ まづ、彼奴から祈れと云へ。▲ちゃ 心得ました。これく、禰宜殿、此方から祈らせられ。▲アド 心得ました。祈りましよ。▲おろし それ、天照御神と申し奉るは、伊勢山田が原に、神とゞまりましまして、外宮の宮が四十末社、内宮が八十末社、兩宮合せて百二十末社の御神、中にも荒神と齋はれ給ふが、雨の宮に風の宮、月讀日よみ、北よ、齋宮、鈴鹿の御社、總じて日本國中の神祇驚し奉る。只今の大黒殿、我等が方へ、影向なさるゝ様に守らせ給へ。謹上さんぐう、再拜々々々々々々。再拜々々。▲ちゃ はあ、見えました。此方の勝でござる。▲アド 如何にも、勝ちました〳〵。▲シテ まだ某も祈らぬさきに、勝つたとは。▲ちゃ それなら祈らせられ。▲シテ 祈らいでわ。それ、山伏といつぱ、山に寢臥をする故に、山伏と申す。兜巾と申すは、布切少しを眞黑に染め、襞をとつて戴くによつて、頭巾なり。又この珠數は、いらたかではなうて、むざとした珠數玉つなぎ、苛高と名づく。かほど尊き山伏が、一祈いのるなら、などか奇特の無かるべき。ぼろおんく〳〵〳〵。

事でござる。どうでも持つことはならぬと云うて下されい。▲ちや　これは尤でござる。又その通申しましよ。なうなう、只今の通申したれば、此方に、天下の御祈禱めさるれば、あの方にも、神前で御祈念いたす、これ以て、同じ事でござる、持つ事はならぬと云はれます。▲シテ　いやいや、どうでも持たさねばならぬ。其所をのけ。▲ちや　まづ、待たせられいれい。その如くに、互にいひ合られても、埒が明かぬ。身共の存ずるは、某が作の大黒を持ちました。これを兩人祈り合せられい、どれへなりとも、影向なされたお方を、勝にいたして、肩箱をもたすか。又此方が負けたらば、幣を持つものかに致さう。これは何とござらう。▲シテ　何と、禰宜めと身共と勝負せい。これはかたはら痛い事ぢや。總じて此山伏は、祈りつけてゐる。何なりとも持つて來い。祈るぞ。▲ちや　心得ました。それなら、禰宜殿にその通申さう。これこれ、禰宜殿。只今身共が了簡の、祈り合の事、聞かせられたか。▲アド　なるほど、これで段々聞きつけました。それなら、身共が勝ちましたら、この幣を泊まで持たしましよ。▲ちや　さやうでござる。▲アド　まづ、お大黒様を連れ

影向―其姿を現ずること

取りさへて－作戯して也

宮雀－伊勢の神都の案内者

この肩箱持て。▲アド なう〳〵、茶屋殿。取りさへて下されい〳〵。▲ちや これは何とした事でござる。持たすはずなら持たしましよ。まづこの肩箱を、身共が預りましよ。▲シテ それなら汝に預ける、早う持たせ。▲ちや なう〳〵、禰宜殿。此方は、山伏の肩箱を持たせらるゝ作法がござるか。▲アド 思ひもよらぬことでござる。禰宜は禰宜、山伏は山伏、銘々の立場々々でござる、持つことはならぬと云うてくだされい。▲ちや 心得ました。これこれ、山伏殿。その通申したれば、禰宜は禰宜、山伏は山伏とわかつてござる。存じもよらぬ。持つ事はならぬと云はれます。▲シテ 憎い奴の。宮雀の分として、このかけ出の山伏に、一禮もし居らぬのみならず、高腰を掛けて陰言を云ひをる。總じてこのかけ出の山伏には、貴人尊人も、下馬をなさるゝ。殊に天下の御祈禱もする山伏ぢや。持たさねばならぬ。過怠に、泊まで持てと云へ。▲ちや 心得ました。なう〳〵、禰宜殿。今のを聞かせられたか。▲アド なか〳〵、これで一々聞きました。異な事を云はれます。あの人が天下の御祈禱をめさるれば、又此方には、神前で天下の御祈念の致す。これ以て同じ

貝をも云々—曲がかり

過怠—科(とが)

るか。▲アド さやうでござる。▲ちや まづ、茶を一つ參れ。▲アド 如何にも、一つ下されうか。▲ちや まづ、腰掛けさせられ。▲アド 心得ました。▲ちや さあ〳〵、參れ〳〵。▲アド 畏つてござる。▲シテ 貝をもたぬ山伏が〳〵、道々うそを吹かうよ。詞 これは出羽の國より出でたる山伏。大峯の役を相勤め、只今本國へ歸る。まづ急いで參らう。總じて山伏と申すは、野にふし山に臥し、難行苦行いたすによつて、行力さへ叶へば、空を飛ぶ鳥も、祈り落すことでござる。やあ、殊の外喉が渇く。これに茶屋がある。やい〳〵茶屋、茶をくれ。▲ちや 心得ました。さあ〳〵、參れ〳〵。▲シテ 扨も〳〵、熱や〳〵。熱うて飲まれぬ。▲ちや 心得ました。うめました。▲シテ ぬるや〳〵。ぬるうて飲まれぬ。海道に出で、茶屋をして食ふ奴が、ぬるい熱いを知らぬか。▲アド これ〳〵、茶屋殿。好い加減にして進ぜられ。▲ちや 心得ました。▲シテ もはや飲むまい。しまへ。▲ちや 心得ました。▲アド 扨も〳〵、我儘者でござる。▲ちや されば〳〵。この街道にゐますれば、あの樣な者は、何程もある事でござる。▲アド さうでござろ。▲シテ おのれは、憎い奴の。陰言ぬかす過怠に、泊まで



十　禰宜山伏

四人

シテ　兜巾、篠懸、肩箱擔げ
大黒　牛袴、袋擔げ、槌持つ
茶屋　長袴、小さ刀
アド　（原本禰宜の裝束を脫す）

▲アドこれは、伊勢の御師でござる。毎年今時分は、國々旦那廻りを致す。當年も廻らうと存ずる。まことに、太神宮のお蔭ほど、ありがたい事はござらぬ。かやうに國々廻れば、何方にても、御馳走にあふ事でござる。やあ、殊の外喉が渇く。この所に、身共の存じた茶屋がある。これへ參り、茶をたべう。やあ、茶屋殿出させられた。▲ちややあ、禰宜殿、又いつもの如く、旦那めぐりなさる

らう。▲奏扨も〳〵、又出かした。上より仰せ出さるゝは、重ね〴〵歌を出かしたとあつて、御機嫌ぢや。いつは下されねど、この度は御通りを下さるゝ。三盃づつたべませい。▲三人はあ、これはありがたうござります。▲奏やい〳〵、この土器破つたに付けて、めでたい和歌をあげ、舞ひ下りにせい。御暇下さるゝぞ。▲三人はあ。これはありがたうござります。又明年參りましよ ▲シテさあ〳〵、いざ和歌をあげ歸らう。▲三人謠やら〳〵、めでたや〳〵な。治まる御代のしるしとて、國々よりも捧ぐる貢、幾久しさもかぎらじな〳〵。わかは納めて歸りけり。

尾張―終りを掛く
美濃―實のを掛く
通じ―用達の類か

その通申し上げう。はあ、三國の百姓、此の如く詠みましてござる。はあ〱。やい〱。
▲三人 はあ。▲奏 仰せ出ださるゝは、御笑草と思召し、仰せつけられた處に、殊の外出かしたとあつて、御感ぢや。さうあれば、銘々が名を申せと仰せ出された。急いで申しませい。▲あはぢ 私はつうじでござる。▲奏 何ぢや、通じぢや。▲あはぢ 通じを致しまする者でござれば、卽ち名を通じと申します。▲奏 又、汝は何と云ふぞ。▲をはり 私が名は、まかぢでござる。▲奏 はて、異な名をついた。今一人の者は何と云ふぞ。▲シテ これへ參らう。▲奏 いや〱、それで申せ。▲シテ いや、私が名を、これへ參らうと申します。▲奏 はて扨、いづれも面白い名をつけた。それにつき、最前の歌をでかしたとあつて、今度は、汝等が名を折り入れて、三人して、一首詠めと仰せ出された。急いで詠みませい。▲シテ 其方が可笑しい名を付ゆゑぢや。▲あはぢ いや〱、わごりよがむづかしい名をついたによつてぢや。▲奏 なう〱、論は無用。急いで詠みませい。▲あはぢ 畏つてござる。かうも申されましよか。▲奏 何と。▲あはぢ 淡路より多くの寶通じ船。▲をはり 眞楫が漕いで。▲シテ これへ參

神妙―感心

みつ葉さし―三葉の芽を出す事

▲あはぢ 如何にも、さやうに思ふことでをりやる。やあ、程なう身共の御館はこれぢや。わごりよ達の御館は何所ぞ。▲をはり 身共が御館も、これでをりやる。▲あはぢ 其方は何所ぞ。▲シテ これは、思ひ合うた事ぢや。身共の御館もこれぢやわ。▲をはり 扨はさやうか。さあ〳〵、淡路から上げさしませ。▲あはぢ 心得た。▲奏者 三人ともに、それへよつて待ちませい。▲三人 はあ、畏つてござる。▲奏 申し上げます。三國の百姓ども、かくのごとく。はあ〳〵。やい〳〵、百姓ども。仰せ出ださるゝは、美濃尾張は國ならびぢやが、淡路は遙國を隔てたれど、同じ日の同じ時に參る事、神妙に思召す。さうあれば、折節御歌の會に參り合せた程に、三人して、歌一首詠めと仰せらるゝ。急いでよみませい。▲三人 いや、私共は卑しい百姓でござれば、歌とやらは、終に詠うだ事がござりませぬ。これは御許されませ。▲奏 いや〳〵、仰せ出だされた事を、飜す事はならぬ。急いで詠みませい。▲三人 はあ、畏つてござる。かうもござりましよか。▲奏 何と。▲あはぢ 淡路より、蒔種き初めてみつ葉さし。▲をはり 花咲き尾張。▲シテ 美濃なるは稻。▲奏 これは、一段出かした

わつぱと云うて―物騒がしく話し合ふことと

御館―上堂のこと領主のやかた也

つて上るわ。▲あはぢ それはよい連ぢや。身共は、淡路の國のお百姓ぢやが、只今、其方の如く御年貢を納めに上る。幸の連ぢや。いざ、同道致さう。▲をはり なか〳〵、同道して上らう。其方が先ぢや。先へ行かしませ。▲あはぢ それなら、先へ參らうか。さあ〳〵、をりやれ〳〵。▲をはり 參る〳〵。▲あはぢ なう〳〵、其方と身共は、似合つたよい連ぢやの。▲をはり なか〳〵。互に百姓で、よい連でをりやる。▲シテ 罷出でたるものは、美濃の國のお百姓でござる。毎年上堂へ、御年貢を持つて上る。當年も持つて上らうと存ずる。▲あはぢ なう〳〵、これへわつぱと云うて參る。定めて身共等がやうな者さうな。同道致さう。▲をはり 一段よかろ。▲あはぢ なう〳〵、其方は、どれからどこへ行くぞ。▲シテ 身共は、美濃の國のお百姓でをりやる。上堂へ御年貢を持つて上るわ。▲をはり それは幸ぢや。われ等も納めに上る。いざ、同道致さうか。▲シテ なか〳〵、同道致さう。わごりよ達が先ぢや。先へ行かしめ。▲あはぢ 心得てをりやる。さあ〳〵、をりやれ〳〵。▲二人 參る〳〵。▲シテ なう〳〵、この如く同道するからは、あはれ、御館も一つであれかしの。

三人百姓―一名
三人夫

九　三人百姓

四人
シテ　半上下、腰帯
奏者　長上下、小さ刀
アド　半上下、腰帯

▲あはぢ　罷出でたる者は、淡路の國の御百姓でござる。毎年上堂へ、御年貢を納めに上る。當年も上らうと存ずる。やれ〳〵この如くに、毎年々々相變らず持つて上るは、めでたい事でござる。やあ、今日は殊の外寂しい。まづ、この所に待つて、好ささうな連が參つたら、同道して上らうと存ずる。▲をはり　これへ罷出でたる者は、尾張の國の御百姓でござる。毎年上堂へ、御年貢を持つて上る。只今も持つて上らうと存ずる。▲あはぢ　やあ、これへよささうな連が參つた。詞をかけて同道致さうと存ずる。なう〳〵、これ〳〵。▲をはり　こちの事か。何事でをりやるぞ。▲あはぢ　なか〳〵、其方の事ぢや。わごりよは、どれからどれへ行く人ぞ。▲をはり　身共は、尾張のお百姓でをりやるが、上堂へ御年貢を持

る樹也

木まぶり―木守り也菓物を取りたる枝にわざと幾つか殘しおく也

しないたり―失敗したるを自ら嘆息する也

あり。うたてや。わがうそのふかれぬ口をかきむしり、頭を柿の串ざしにあらねども、拾ひ入れたる澁柿を、かたげて宿にかへりけり〳〵。扨も〳〵。しないたり〳〵。

うそ―口笛

聊爾―粗忽

かへせ合柹云々―此謠上卷柹賣の末段に相似たり合柹は醂した

ほど甘うござる。▲アド いや〳〵、何とも合點が行かぬ。澁かろ。それなら、わごりよ食うて見しやれ。▲シテ 如何にも、食うて見せましよ。▲アド 何と〳〵、澁いか〳〵。▲シテ いや〳〵旨いことでござる。さあ〳〵、買はせられ〳〵。▲アド いゝや、何とも合點がいかぬ。やあ、思ひ出した。澁柹を食うては、うそが吹かれぬと云ふ程に、それならうそを吹いて見しやれ。▲シテ うそをふくとは、どういたすぞ。▲アド これ〳〵、この樣に吹くわ。▲シテ 心得た。なるほど、吹いて見せましよ。▲アド そりやこそ、うそが吹かれぬ。おのれは橫著者ぢや、澁柹を賣りつけうとした。いざ、打擲致しましよ。▲皆 ようござろ。▲シテ これは何としやる。聊爾をしやるな。▲皆 何の、おのれ憎い奴の。柹も皆踏み潰してのけ。▲皆 やあ、思ふまゝ打擲致した。さあ〳〵、いざ、ござれ〳〵。▲シテ あゝ悲しや〳〵。扨も〳〵、きつい事爲居つた。賣ることはさておき、柹まで踏み潰し居つた。やれ卑怯者、はや去ぬるか。戻れ〳〵。やれ返せ〳〵。謠 かへせ合柹〳〵と、云へども〳〵、取殘さるゝ木まぶりの、古の人丸、柹本にやすらひて、歌を案じて、そらうそをふかせ給ひし例も

大路—橋寺の脇の所

なるほど—十分

八 合柿

六人　シテ　牛上下、籠持出る
　　　アド　長袴、小さ刀

▲アドこれは、この邊に住居する者でござる。今日は、宇治邊へ慰に參らうと存ずる。いづれもござるか。▲四人なか〳〵、これに居ます。▲アド何と今日は、宇治邊へ慰に參らうと存ずるが、御出なされまいか。▲四人これは、一段と好うござろ。參りましよ。▲アドそれならば、いざ、追つ付け參らう。さあ〳〵、ござれ〳〵。▲四人參ります。▲アド何と、時分でござる程に、大路へ參り、柿を食べましよ。▲四人いかにもようござろ。▲シテ罷出でたる者は、宇治の大路に住む柿賣でござる。今日も、都へ柿を賣りに參らうと存ずる。まことに、今日は一段の日和でござる。仕合を致さうと存ずる。▲アドやあ、これへ柿賣が參つた。買ひましよ。なう〳〵、この柿は賣るでをりやるか。▲シテなか〳〵賣ります。▲アドそれならば、買うて食べうか。何と、その柿は澁うはないか。▲シテいや〳〵、なる

はあ、扨も〱、かずが多(おほ)なつて、めでたい〱。

ませよ、ましよ—ませう

煎じもの—茶のこと

陳皮—蜜柑の皮

祭が渡る—行列の通ること

の茶を賣ることでござる。今日は賣りに參らうと存ずる。はあ、これははや稽古がはじまつた。さらば、茶賣りませよ。いづれも御苦勞でござります。例年の通り茶を賣りに參りました。さらば、茶をたてて進ぜましよ。さらば茶を參れ〳〵。はあ、どれも參らぬ。身どもたべう。▲アドやい〳〵、太郎冠者、茶屋に、まづ囃子物の中は、茶を賣るなと云へ。▲冠者畏つてござる。これ〳〵茶屋、まづ、茶を賣るなと仰せらるゝ。▲シテ何ぢや。茶を賣るな。わごりよは異な事を云ふ。この茶屋は昔より樣子あつて、代々うり來つたに、賣るなとはどうした事ぢや。▲アドいや、これ〳〵茶屋、賣るなではない。囃子物の邪魔になるほどに、邪魔にならね樣にうれと云ふことぢや。▲シテそれなれば、聞えました。なるほど賣りやうがござる。賣りましよ。柏子踏み煎じものを、せんじ物。聲の出候せんじもの召せ〳〵。▲皆々さぎの橋をわたした。かさゝぎのはしを渡したりや。さうよの。▲シテおせんじもの〳〵。陳皮、乾薑、甘草加へて、煎じ〳〵たるせんじもの召せ。▲皆さぎの橋をわたした。鵲のはしを渡したりや。さうよの。▲シテはあ、はや、祭が渡る。

しぐれの雨に云云—曲にかゝる

洛中住居—刊本かくあり洛中に住居すると讀むべきか

申し、ござりますか。▲アド 太郎冠者か。戻つたか。▲冠者 只今歸りました。誰殿へ參りましたれば、何れもこれへ御出なされうとあつて、寄合うてござります。早これへ御出なされましよ。▲立 いづれもござるか。▲立衆 なか〳〵、これに居ります。▲立 いざ、誰殿へ參りましよ。ござれ〳〵。▲立衆 心得ました。▲五人 御當めでたうござる。▲アド 何れも御大義に御出なされた。扨もはや、祇園會も近日でござる。今日は、囃子物の相談きはめ、稽古いたさうと存ずる。それ故、呼びに進ぜました。當年は何と申して囃しましよ。▲五人 されば、何と申したらようござらうぞ。▲アド 身共の存ずるは、とかく當年は、鷺の橋を渡した。鵲の橋を渡したと云うて囃させられ。私が、時雨の雨に濡れじとてと申してから、囃させられ。▲五人 これは一段ようござろ。▲アド さらば、囃して見ましよ。▲アド しぐれの雨にぬれじとて。地五人共 さぎのはしを渡した。かさゝぎの橋を渡したりや。さうよの。▲アド 時雨の雨にぬれじとて。地 鷺のはしを渡した。かさゝぎの橋をわたしたりや。さうよの。▲シテ これは洛中住居茶屋でござる。身共に昔より、代々樣子があつて、祇園會

けの事ぢや程に、今日は各呼び寄せ、囃子物の相談をきはめ、稽古も致さうと思ふほどに、汝は各へ行て、呼うで來い。▲冠者 畏つてござる。▲アド 行たらば、只今の通ぢや。追つ付け御出なされと云うて、呼うでまゐれ。▲冠者 心得ました。▲アド 早う行て來い。▲冠者 畏つてござる。やれ〳〵、まことに祇園會も追つ付けでござる。まづ、どなたから呼うで參らうぞ。まづ、誰殿が近い。これへ參らう。參る程にこれぢや。ものもう。案内も。▲立頭 やあ、表に案内とある。どなたでござる。▲冠者 私でござります。▲立 太郎冠者か。何と思うて來た。▲冠者 頼うだ人申しますは、祇園會も近日でござります。今日は囃子物の相談いたしたうござる程に、只今御出なされて下されませと、申されます。▲立 如何にも、さうであろ。今日は、いづれもそれへ參らうとあつて、早これへ寄つてござる。追つ付けそれへ參らうと申せ。▲冠者 畏つてござる。それならおさきへ參り、さやうに申しませう。▲立 なか〳〵。先へ歸れ。▲冠者 畏つてござる。なう〳〵、嬉しや。各へ參らうかと存じたれば、足を助かつた。まづ歸つてこの通申さう。早これぢや。申し



煎じ物賣―一名
煎じ物

七　煎じ物賣

八人　シテ　頭巾、羽織、編笠、茶道具
　　　冠者　半袴、上下、腰帶
　　　立衆　長袴、小さ刀

▲アド これは下京に住居する者でござる。當年は、某の、祇園會の當番にあたつてござる。もはや餘日もござらぬ程に、今日は各呼びに遣し、囃子物の相談いたし、稽古も致さうと存ずる。まづ、太郎冠者を呼び出し、申し付けう。やい／＼、太郎冠者あるかやい。▲冠者 はあ、お前に。▲アド 早かつた。汝呼び出すこと、別の事でない。當年は祇園會の當番に當つた。それにつき、もはや追つ付

ぬりごめたぎやう―塗籠は納戸の如き部屋也、内に籠りて留守を使ふこと、室内旅行

すれば、ほどなく火焰と燃え上つて、身はやけうるしとなりたるぞや〳〵。▲シテ又ある時は布にまかれ、捻木を入れて、ひたねぢに捻つめられて、あら心うるし刷毛の、ばけ損はゞ如何ならんと、風呂の小陰に入りにけり。塗籠他行と云ふこと〳〵も、この時よりぞ始まりける。

のりのうるし―法のしるしをもぢる
えにち―えにし、縁
閻浮―この世
われ都に云々―以下漆につきて秀句を用ゐたり
しよく―未詳

のこれへお出なされたを、草の蔭より見て、逢ひたいと思うて、幻にがな見えられたものでござらう。この上は、たゞ成佛いたされまする様に、平六殿の後を弔うて下されませ。▲アド 如何にも、はや悔んでもかへらぬことぢや。この上は、一遍の回向なりと致さう。▲女 それは忝うござります。御弔ひなされて下され。▲アド 心得てをりやる。其方もこれへ寄つて念佛を申しやれ。▲アド 謡 旅人は鉦鼓をならし、女房と。▲二人 念佛申し、平六がなき後いざや弔はん／＼。▲シテ ありがたや、のりのうるしのえにちあれば、ふたゝび閻浮にかへるなり。▲アド ふしぎやな、平六の姿形、影の如くに見えけるは、念佛の功力かや。ありがたや。▲シテ 詞 われ平六が幽靈なるが、御弔のありがたさに、これまで顯れ出でて候。▲アド さては平六が幽靈なるかや。都にて見し時よりは衰へはてたる無殘さよ。▲シテ 詞 われ都にありし時は花漆、今は年長け蠟色の、漆の罰やあたりたるかや。▲アド しよくのありさま懺悔せよ。▲シテ いで／＼さらば語り申さんと、恥しながら餓鬼道の、／＼、ぬしとなつて、青漆のごとくなる淵にのぞんで、漆漉に水を入れて呑まんと

構へて—決して

氣の毒な—困つた

ならば、細工も上手であらう程に、はやるであらう。其時はこちの身代の妨ぢやと思うて、こなたは七日以前に果てられたと申したほどに、そちへはいつてゐさしませ。構へて逢はしますことはならぬぞ。▲シテ何と云ふぞ。師匠が下られた。懐かしや〳〵。久しう逢はぬ。どれ〳〵、行て逢はう。▲女いや〳〵、其方は死なれましたと云うて置いたに、今逢はすれば、妾が僞者になる。是非ともあはしますなら、妾に暇をたもれ。▲シテ何と云ふぞ。ひまをくれ。▲女なか〳〵。▲シテそれは氣の毒なことを云ふなあ。何とせうぞ。それなら何とぞ陰からなりとも、逢ひたいがなあ。▲女されば、何とせうぞ。一段の事がある。妾はあれへ行て、平六の幽靈ぢやと云はうほどに、こなたは幽靈のこしらへをして出さしませ。▲シテそれは一段ぢや。その體をして出やうほどに、そなたはあれへ行て、よい樣におしやれ。▲女心得ました。▲シテ追つ付け拵へて出うぞ。▲女なう〳〵。それにござりますか。▲アドなか〳〵、是に居ます。今のは平六ではござらぬか。▲女さればば〳〵、私も平六殿の聲かと思うて見に參りましたれば、影も形も見えませぬ。此方

空しうなられました―死せること

をふりすてて、かやうに田舎へ下ると申すは、何とも迷惑な事でござる。やあ、何かと申す中に、是がはや北之莊でござる。此邊ぢやと聞いた。定めて是であらう。まづ案内乞う。物もう。案内も。▲女 やあ、表に案内がある。どなたでござる。▲アド いや、身共は都に住む、平六の師匠でござるが、何と、平六はいよ〳〵息災にござるか。身共も都で細工ははやらず、何と致さうと存ずる所に、平六が、隙ならば下るやうにと云うて、便いたされたによつて、只今遙々と下つてをりやる。其通いうてたもれ。▲女 はて扨、遙々をようこそお下りなされました。いとしや〳〵。此方の事を常々申し出だされましたに、此七日以前に、空しうなられました。▲アド 是は如何な事。身共は平六を頼にして下つたに、扨も〳〵、力落した事でござる。何と致さうぞ。▲女 はて、もはや是非もない事でござる。妾も何と致さうと存じ、心許なうござる。▲シテ 女ども〳〵、漆漉はどこに置いた。女ども女ども。▲女 なう〳〵、これは如何な事。まづそちへ行かしませ〳〵。▲シテ 何事ぢや〳〵 ▲女 いや、都から、其方の師匠ぢやと云うて、身代稼に是へ下られたが、其方の師匠

塗師平六—一名塗師

すきと—丸で、全く

北之莊—福井の舊名

隙—仕事無く不景氣の意



六　塗師平六

三人　シテ　頭巾、羽織、半袴、はけ持
　　　女　箔小袖、ゆばうし
　　　アド　半上下、腰帯

▲アド　罷出でたる者は、この邊に住居する者でござる。某は、塗師細工を致し、世を渡る者でござるが、身共の細工は當世にあはぬと申して、すきとはやりませぬ。又身共の弟子が、越前の北之莊と申す所に、塗師細工いたし、殊の外はやると申す。こゝ許が隙なら、下る樣にと申して、便いたしてござる程に、この度思ひ立ち、下らうと存ずる。まづ急いで參らう。やれ〳〵、久々住み慣れた故郷

比丘人—びくにんは比丘尼をはねたるなるべし
方丈—住持長老などのこと
眠藏—納戸の如き室

つと參りまして、もはや御納になされて下されませ、▲シテいや〳〵、もはやたべまい。酒に醉うた。▲アドどうでも參りまして、ようござりましよ。▲シテ飮それならもはや納めておかうか。さらばとらしませ。▲アド畏つてござる。申し〳〵、最前の舞は、短うて見足りませぬ。も一つ長い事をおまひなされて、見せさせられませ。▲シテそれなら、一つ舞うたも、二つ舞うたも同じ事ぢや。舞はうか。▲アド忝うござります。▲シテ舞やら〳〵、珍しや〳〵。地昔が今に至るまで、比丘人の烏帽子子を取ることは、これぞ初めの祝言なる。▲シテさりながら方丈、地〳〵、寺も庵も、おあしもめゝも、多くもちたれば、始終の旦那に頼みたのまるゝ、唯今の引出物、めゝ五十石、おあし百貫、比丘貞に取らせ、これまでなりとて方丈は、〳〵、眠藏にくつすと這入りけり。

沙汰をすなよ—人に言ひ觸らすな也

一天四海云々—謠曲土車の文句

岩あ木に云々—謠曲紅葉狩の文句

えてゐるとおしやるか。それなら酒に醉うた上ぢや。舞はうか。▲アド それは忝うござります。▲シテ 恥しけれど舞はう。小舞 かまくらの上臈は、すゞだけのつめたに、おりものの手おほひ、うつの宮がさをきりゝと召されて、をりやらしませ、ゐやらしまして、あさいはひさしませ。なう〳〵、恥しや〳〵。構へて〳〵あん太郎、沙汰をすなよ〳〵。▲アド 扨も〳〵、しをらしい面白い事でござります。さらばこの盃を、憚ながら進じましよ。▲シテ これへ給もれ。も一つ飲まうか。なう〳〵、あん太郎も子供の時から舞を舞うた程に、肴に一つ舞はしやれ。▲アド 畏つてござる。やい〳〵、あん太郎。舞を御肴にまへ。▲子 畏つてござる。小舞 一天四海波を打ち治めたまへば、國も動かぬあらかねの、土の車のわれ等まで、道せばからぬ大君の、みかげのくになるを、ひとりせかせ給ふか。▲シテ やれ〳〵、あんにや、よう舞うたなあ。扨も〳〵、面白いことかな。さあ〳〵、もそつと謠はせませ。▲二人 岩あ木にあらざれば、心弱くもたちかへる。所は山路の菊の酒、などかは苦しかるべき。▲シテ なう〳〵、謠はいつ聞いても面白い。▲アド その上を、もそ

参すぞ―参らすぞ、上げるぞ

皆比丘尼とも仰せらるゝ程に、比丘のびくの字を取つて、びく貞と付けう。▲アド これはよい名乗でございます、▲シテ 今からあれが名を、あん太郎びく貞と云ふほどに、さう心得。▲アド よう聞いたか。御禮申せ。▲子 忝うございます。▲シテ なう〳〵、またこの祝儀に、おあし百貫參すぞ。これを元手にして、かず多さしませ。▲二人 はあ、これはかさね〴〵忝うございります。▲シテ めでたい〳〵。祝うて、先のあん太郎が、持たせの竹筒を廣めさしませ。▲アド 畏つてござる。さらば一つ參りまして、あん太郎におさしなされて下されませ。▲シテ それなら飲うで差さうか。これをあん太郎に差さう。子飲む。▲アド これは、憚ながら進ぜませい。▲シテ も一つたべうか。めでたう謠はしませ。▲二人 ざゝんざあ、濱松の音はざゝんざあ。▲シテ さらば、これをそこへ差さう。▲アド 申し〳〵、私も受けちました。久しうお寮様の舞を見ませぬ。一つ舞うて、お見せなされて下されませ、▲シテ いや〳〵、おれうは舞とやらは、舞うた事がをりやらぬ。知り候はぬ。▲アド いや〳〵、私が、お若い時分に見まして存じて居ります。是非ともお舞ひなされませう。▲シテ よう覺

めゝ―米のこと

名乘―實名

ります。▲シテ さりながら、人の家によつて付く字があるものぢやが、其方の家には何をつくぞ。▲アド 私の家には、下に太郎をつけます。▲シテ 下に太郎〳〵。なう〳〵、よい名があるわ。このお寮を、皆お庵〳〵と仰せらるゝほどに、おあんのあん字を取つて、あん太郎と付けう。▲アド 扨も〳〵、よい名でござります。やい〳〵、そちが名は、今日からあん太郎と云ふぞ。▲子 これは忝うござります。▲シテ 何と、氣に入つたか。▲アド 申し申し、これはあん太郎が持たせてござります。▲シテ ようこそ呉れさしました。めでたい今の祝儀に、お寮がことぢやほどに、めゝ五十石參らすぞ。▲アド これは忝うござります。やい〳〵御禮申しませ。▲子 忝うござります。▲アド とてもの儀でござります、名乘もお付けなされて下さりませ。▲シテ いや〳〵、それは又他所へ頼ましめ。▲アド いや、序に、是非ともお付けなされて下されませ。▲シテ それ程におしやる、つけても見やうが、これも通字の、何と云うて付く字があるものぢや。そちの家には何をつくぞ。▲アド されば、私の家には下に貞を付けます。▲シテ 下に貞〳〵。なう〳〵、よい名乘がある。このお寮を

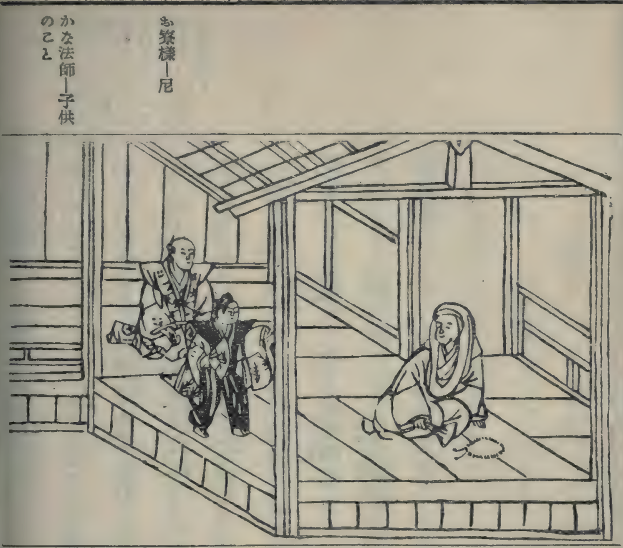
烏帽子親―元服せさする役

法師が御見舞申しました。▲シテ何と、かな法師が見舞うた。それはどこにゐるぞ。▲アド表に居ります。▲シテ表におくと云ふことがあるものか。こちへ呼ばしめ。▲アド畏つてござる。なう〳〵、かな法師、あれへ出させませ。▲子畏つてござる。▲アドかな法師、出ましてござる。▲シテこれがかな法師か。わごりよ、よう來たの。扨も〳〵、久しう見ぬ中に、大な者になつたわ。なう〳〵、あれは今に、かな法師と云ふか。▲アドさればでござります。今に名を付け替へてとらせませぬ。それにつきまして、今日は、かな法師が、お前を烏帽子親に賴みまして、名を付けて貰ひましたいと申す願でござります。付けて取らしてくだされませ。▲シテはて扨、むざとしたことをおしやる人の。名を付けると云ふは、めでたい殿達のめさる事ぢや。その上、とつとむづかしいものぢやと聞いた。妾は知り候はぬよ。▲アドいや、お前樣の御果報にあやかりまして、仕合致したいと申す望でござります。是非とも付けさせられて下されませ。▲シテ何と、かな法師が願ぢや。▲アド左樣でござります。▲シテそれならば、何とぞ付けても見やうか。▲アドそれは忝うござ

御寮様—原本「ろりろ様」義によりて改む

竹筒—酒入れ

かつた。わごりよを呼び出すこと、別のことでない。そちも殊のほか成人致したに、名をつけもせぬ。今日は幸、吉日ぢや程に、お寮様へ連れて行て、名をつけて貰はうと思ふが、何とあらう。▲子それは忝うござる。さりながら、遅うても苦しうない事でござる。▲アドいやいや、今日は日もよい。同道致さう。竹筒を用意しやれ。▲子畏つてござる。用意いたしました。▲アドさあさあ、をりやれ。▲子参ります。▲アド只今から、わごりよもお寮様にあやかつて、仕合めされ。▲子さやうでござる。▲アドやあ、参る程にこれぢや。案内云はうほどに、それに待たしめ。▲子畏つてござる。▲アドものもう。お寮様、お宿にござりますか。▲シテおれうが方へ、ものもうは誰そ。▲アドいや、私でござります。▲シテわごりよか。なうなう珍しやなうなう。まづこちへ通らしめ。▲アド畏つてござる。▲シテなうなう、今日は何と思うてをりやつた。▲アドさればでござります。まづ、ひさびさ御見舞申しませぬによつて参りました。御無事にござりまして、おめでたうござります。▲シテそれそれ、其方も息災でめでたうをりやる。▲シテさやうでござります。今日はかな



五　比丘貞

三人　シテ　大綿帽子、面かけ、扇持
子　半上下、腰帯
アド　長袴、小さ刀

▲アド親 罷出でたる者は、この邊に住居する者でござる。某、悴を一人持つてござるが、殊のほか成人致してござれど、名を付け替へてとらせませぬ。けふは幸、吉日でござる程に、身共に御目を掛けらるゝお寮様に、めでたい富貴なお方がござる。これへ連れて參り、名を付けて貰はうと存ずる。まづ、呼び出して申しつけう。なう〱、かな法師をりやるか。▲子 はあ、これにをります。▲アド 早

打物―刀

阿間の了願―太平記住吉合戰の條に見えたる楠正行の兵、一丈許の鎗を使ひし事見ゆ、阿間を尼に言掛く

三百人地〳〵、おもひ〳〵の出立に、こゝろ〴〵の打物抜き持ち、佛前の庭まで亂れ入り、えい、とう〳〵〳〵。▲住　おまへの勢はこれをみて地〳〵、ちうき阿彌、かくや上人、我も〳〵とかゝり給へば。▲シテ　若市は小鎗をぬいて地〳〵、昔の阿間の了願にも劣るまじと、こゝや彼所をつきまはれば、さしもに猛き御坊たちも、つきまくられてぞ逃げたりける〳〵。▲住　上人腹をするかねて、〳〵、手棒をふりあげ、かゝり給へば。▲シテ　若市はこれをみて、地〳〵、もの〳〵しやと云ふまゝに、上人とむづと組んで、一ふり三ふり振ると見えしが、上人を振轉ばかし、とつて押へ、剃刀ぬいて、帽子をかさとかき落し、さし上げて歸り給へば、尼の寺中はよろこんで、じつくちくと踊りつれて〳〵、我が寮々にぞ　りける。

長道具―鑓長刀の類

ころ〳〵に―以下謡がかり

ぢや。思ふまゝ、打擲してやつた。まづ寺へ歸らう。▲且那 それはまことか。何と、まことぢや。これは知らせずはなるまい。申し〳〵お住持樣、內にござりますか。▲住 やあ。ようござつたれ。何と思うてござつた。▲且 こなたには、ゆるりとしてござる。樣子を聞かせられぬか。▲住 いや、何事も存ぜぬ。何事でござる。▲且 此方は、若市を打擲なされたか。▲住 なか〳〵。身共の花壇の花を盜みましたによつて、その花を打ち折つて捨て、思う樣、打擲して歸しました。▲且 されば、それを殊の外腹を立てて、尼どもを大勢語うて、追つ付け、長道具で押し寄せて參る。▲住 それはまことでござるか。▲且 なか〳〵▲住 それならば、油斷してはなりますまい。用意致さう。▲且 拵へて進ぜう。まづ、襷をかけさせられ。これを用心に著させられ。この棒で防がせられ。▲住 これでようござる。此方もそれで、後詰して下され。▲且 心得ました。これに控へて居ます。慥に思はせられ。▲シテ ころ〳〵に、日中鬨を作りかけ、鉦鼓をならしかねを打つて、上人の御坊へ押し寄せたり。▲住詞 その時上人高き所にはしり上り、寄手の勢を見わたせば、尼方の勢は

ないものを隱すと云ふか、合點がいかぬ。見しやれ。▲シテいや、見せます物ではござらぬ。▲住どうでも見しやれ。▲シテいや〱、見せますまい。▲住やあ、この花は見知りがある。隱した事こそ道理なれ。これは身共が花壇の花ぢや。なぜに盜んで來た。▲シテいや、これは此方の庭の花ではござらぬ。餘所で貰うて參つた。旦那衆へ持つて參る。御寺の花ではござらぬ。▲住まだその樣にあらがふか。誰が荒すぞと思うたれば、憎い奴の。何とせうぞ。▲シテいや、それは此方の花ではない。こちへおこさせられ。餘所へ持つて參らねばなりませぬ。▲住おのれは憎い奴の。身共が花を盜みながら、どこへ、そちにやらうぞ。見れば腹が立つ。打ち折つてくれう。扨も〱、腹の立つことかな。▲シテやあ、これは、身共が節々貰うて來た花を打ち折つたか。扨も〱、腹の立つことかな。やい坊主、おのれ堪忍がならぬ。たつた今、目に物見せうぞ。▲住其方が分で、目に物見せだては、おいてくれ。▲シテ悔むなよ。▲住悔む事ではないぞ。▲シテおのれ、待て。思ひ知らせうぞ。▲住扨も〱、嬉しや〱。此中、誰が花を荒すかと思うたれば、若市め

常齋―いつも定まつて呼ばるゝ食事の饗應

四　若市

七人　シテ　無地熨斗目、花の帽
旦那　長袴、小さ刀
住持　頭巾、衣、珠數持

▲ワキ住持　これは、この邊に住む愚僧でござる。今日はさる方へ常齋に參つて、只今罷歸る。まづ、そろ〱と歸らう。やれ〱、まことに、佛の御蔭はありがたい事でござる。何方へ參つても、御馳走なされることでござる。▲シテ若市　私は、この邊に住む若市と申す者でござる。さる御出入致すお方から、花をくれいと仰せられたによつて、この花を調へ、只今持つて參ります。是を進ぜたらば、定めて喜ばせらるゝ事でござろ。▲住　やあ若市、此中は久しう逢はぬ。これはどちへをりやるぞ。▲シテ　まことに、この間は御見舞も申しませぬ。只今は、ちとお出入いたします、旦那衆へ參ります。▲住　まづ、其方も無事で一段ぢや。その只今隱したは何でをりやる。▲シテ　いや、何でもござらぬ。▲住　何でも

将來がようあるまい—後生が惡かろうの意

打ちこかす。なう〳〵いちや。こゝへ負はれさしませ〳〵。いとしや〳〵。▲住やい〳〵、師匠をこの樣にしをつて、將來がようあるまい。いたづらものめ。やるまいぞ〳〵。

輕忽—輕々しき意

事も無し、何卒逢うて、語りたい〳〵と思うて。持病はうそでをりやる。眞實はわごりよを頼ましたは、身共が逢うて語らう爲ぢや。さあ〳〵、まづその水も棄てておかしめ。こゝへをりやれ〳〵。▲女なう〳〵、輕忽なことを云はします。人も見聞くものぢや。譯もないこと云はしますな。妾は其所へ行く事は、厭でござる。此方は先へ歸らせられ。▲シテはて扨、まづ何か云ひたいこともあるに、こゝへをりやれ。▲住門前のいちやを清水へ遣してござる。餘り遲うござる。見に參らう。何をしてゐる知らぬ。これは如何なこと。新發意か。おのれは持病の、脚氣のと云ひをつて、こゝへうせて、その體は何事ぢや。▲女いや、妾が遲いと云うて、只今これへ見にござりました。▲住いや〳〵、とかくこれは合點がいかぬ。二人ともに、身共の方へ、今より入れる事はならぬぞ。▲女いや、それは御住持樣聞えませぬ。あの人にとがはござらぬ。▲住やあ、おのれいちやめ。贔屓をしをつて。憎い奴の。▲女これは何とめされ。住持でも堪忍がならぬぞ。▲住これは〳〵、いたづらものども、何としをる〳〵。▲シテわごりよの樣な人は、かうしておいたがよい。

みに參られます。身共に參れとは思ひ寄らぬことでござる。やあ、何かと申すうちにこれぢや。扨も〳〵、いつ見てもきれいな水でござる。いづれもの茶の水になさるゝが、尤ぢや。▲シテ やあ、御住持の、水を汲んで來いと云はれたを、何かと申して、いちやを遣してござる。定めて、もはや清水へ參つたでござろ。是も、いちやと身共とは、日頃人知らず、よい中でござるによつて、私の、後から清水へ參り、何事もゆる〳〵と物語も致さうと存じ、いちやを指圖いたした。嬉しや。まづ急いであれへ參り、いちやに逢はう。やれ〳〵、この樣な事を住持は知らいで、身共が拗ねて參らぬが、憎い奴ぢやと思うてゐらるゝでござろ。やあ、參る程にこれぢや。いちやはどこもとに居る知らぬまで。さればこそ、あれに何やら物寂しさうに、只一人小歌節で水を汲んでゐる。なうなう、これ〳〵いちや。これにゐさしますか。▲女 やあ、こなたは、御住持樣の、こゝへ水汲に行けと仰せられたれば、持病が起つたとやら云うて、引込うでござると聞いたが、何しにこれへござつた。▲シテ 其方は、何しにとは聞えぬ。此中は、久しうしみ〳〵と話す

てをりやれ。▲シテ いや、私は重ねて參りましよ。この度はどうでもえ參りますまい。とかくいちやを遣されませ。▲住 ようをりやる。身共が云ふ事を、何かとおしやる。わごりよが樣な者は、そちへ引込うでゐやれ。▲シテ 心得ました。なう〳〵、嬉しや〳〵。まんまと拔けすました。いちやと申すも、ちとした心あつての事でござる。▲住 扨も〳〵、憎い事でござる。是非に及ばぬ。いちやを遣らずはなるまい。なう〳〵、いちやはをりやるか。▲女 妾を呼ばせられますは、何事でござる。▲住 わごりよを呼び出すは別事でない。俄に客がある。それにつき、其方は、大儀ながら清水へ行て、茶の水を汲んで來てたもれ。▲女 何事でござると存じました。易い御用でこそござりますれ。なる程參りましよ。▲住 それは滿足ぢや。まづそれに待ちやれ。▲住 これ〳〵、いちや。この桶をやる程に、早う行て汲んでをりやれ。▲女 心得ました。おつつけ歸りましよ。御氣遣なされますな。▲住 いかにも、早う歸りやれ。▲女 扨も〳〵、俄な事を云ひつけられた。まづ清水へ參り、水を汲んで歸らずはなるまい。やれ〳〵、合點の參らぬ事でござる。いつも新發意の汲

水汲新發意―一名御茶の水

申し入れ―招待のこと

新發意―新に僧になりたる人

門前のいちや―寺の境内に住める女也

三　水汲新發意

三人　シテ　頭巾、十德
住持　頭巾、衣、袈裟、珠數持
女　縫小袖、ゆばうし

▲アド住持 これは、當寺の住持でござる。今日は旦那衆を四五人申し入れ、相談致す事がござる。それにつき、茶には水が第一でござる程に、淸水へ水を汲みに遣らうと存ずる。まづ新發意を呼び出し、申しつけう。なう〳〵、新發意、居さしますか。▲シテ はあ、これに居ります。▲住 早かつた。其方を呼び出すは、別の事でない。今日は、追付けて旦那衆をよぶ筈ぢや。それにつき、茶には水が第一ぢや程に、其方は淸水へ行て、水を汲んでをりやれ。▲シテ それは、畏つたと申す筈でござりますが、私、頃日持病の脚氣が起りまして、なか〳〵水などを汲みには、え參りますまい。門前のいちやを遣されい。▲住 いや〳〵、あれは女の事なり、殊にかれこれとして日も暮るれば、如何ぢや。わごりよ行

井手―井堰
怪我に―過失也故意ならずの意
こちの人―我が夫
をなー女也、ここは妻をさして云ふ

そこな者、惣別この井手は、どこへとる爲の井手ぢや。▲シテ これは地下中へとる井手ぢやわ。▲アド されば、その地下中へ取る井手を、そちが一人して取るか。▲シテ 此様な時は、取勝ぢや。▲アド やあ、取勝なら身どもも取らう。▲シテ やあ、これは、なぜに水を掛くる。▲アド はて、怪我にかゝつた。堪忍せい。▲シテ 怪我なら、そりや怪我よ。▲アド 身共は怪我ぢや。こりや、態とかくるか。そりや怪我よ。▲シテ そりや怪我よ。やあ、これは砂をかけたか。おのれ負ける事ではないぞ。▲アド やあ、それは泥ではないか。▲シテ どこへ。逃す事ではないぞ。▲アド これはく、もはや堪忍がならぬぞ。▲女いづる なうく、悲しやく。父様とこちの人と喧嘩が出來たが。何とせうぞ。人はないか。とりさへて下されく。▲シテ やあ、をなか。足をとれく。▲女 心得ました。▲シテ 勝つたぞく。いとしやく、をな、こちへをりやれく。▲女 なうく父様、祭にはきませうぞや。▲アド 何の、祭に呼ばうぞ。いたづら者め。やるまいぞく。

地下中—在所中

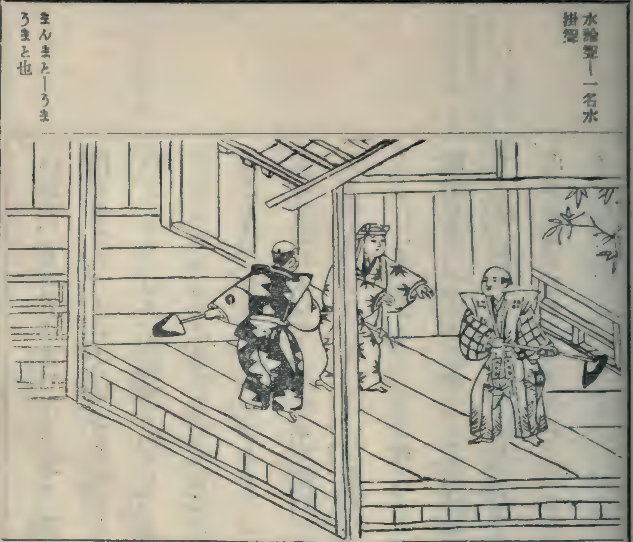
吟味—取抑の意

身がち—身勝手

うべは地下中の寄合があつたと云ふが、何の寄合であつたぞ。▲シテ誠に、此方は見えませなんだが、別の事でもござらぬ。この如くに降らぬによつて、雨乞の寄合でござる。地下中が口々に、雨乞には踊を踊らうの、いや相撲をとらうと、口々に云うて、ちやつと埒が明きませなんだ。その時庄屋殿おしやるは、とかく何かと云はうより、踊がよかろと云うて、遂に踊にきはまりましたわ。▲アドそれは庄屋殿、よい覺ぢや。とつと前もこの様にふらぬことがあつて、踊を踊つたれば、そのまゝ降つてをりやるわ。▲シテさうでござろ。それで、地下の若い者共が、踊らうと云うて、踊の稽古するやら、浴衣を拵へる。それは〳〵、賑かにござる。▲アドやい〳〵、それは何とするぞ。▲シテ是は、田へ水をとる。▲アドこの中、誰がするかと思へば、わごりよがするか。そちが爲に、身共は舅おやと云うて、親同然ぢや。よその者がせうと、吟味もせう者が、其樣な事をするものか。▲シテなう、そこな人、それならこなたの爲には、身共は聟ぢや。聟子と云うて、子同然の者の田を、そなたが身がちな、そちへばかり水をとるものか。▲アドやい〳〵、

畔道かぎつて—畔路を界にして我田のみ目立ちてよく出來たり

いたが、身どもの水口をとめて、隣の田へ水をとる。さても〳〵、憎いことかな。隣の田と申すも、よそではござらぬ。おれが聟の田ぢや。扨聞えぬことかな。まづ水を仕掛けましよ。はあ、水が來るわ〳〵。まんまとよい。とかくこのやうな年は、親子でも油斷がならぬ。こゝに番をしてゐましよ。▲シテ聟 罷出でたる者は、この邊の百姓でござる。まことに、今年は世の中がようて、田が殊の外よう出來ました。さりながら、久しう雨が降らぬによつて、田に水が無い。それ故、節々田へ見舞はねばならぬ。又唯今も見舞ひましよ。やれ〳〵、今一雨降れば十分の世の中ぢやが、ふらぬことかな。なにとぞ降らしたい事でござる。參る程に、身共の田ぢや。扨々、よう出來た。人の田と違うて、畔道かぎつてよう出來た。これは如何なこと、水をよう仕掛けておいたが、水口を塞いで、隣へ水をとる。鄰の田も、よそ外でもござらぬ。舅の誰が田ぢや。扨も〳〵、聞えぬ事を爲らるゝ。▲アド やあ、こりや、お出やつたよ。▲シテ なか〳〵、見舞ひました。▲アド 何と降らぬことではないか。▲シテ されば〳〵、降らぬことでござる。▲アド やあ、ゆ



二　水論聟

シテ　半上下、鋤持

三人　舅　半上下、鍬擔げ持

女　縫小袖、ゆばうし

▲アド舅　これは、この邊の百姓でござる。當年は殊の外田がよう出來て、この樣な嬉しい事はござらぬ。さりながら、此中打ち續き、天氣ようござるによつて、田に水がござらぬ。それ故、毎日々々田へ見舞ふ事でござる。やれ〳〵、降らぬことかな。なにとぞ一雨降らしたいことでござる。やあ、參るほどに身共が田はこれぢや。扨も〳〵、好う出來た。やあ、これは、まんまと水を仕掛けてお

しわい人―吝嗇なる人

月は一つ云々―謠曲松風の文句を取りて謠ふ「よるの車に月を載せてうしとも思はぬ汐路かなや」の憂しを主とかへたり

謠はう。▲二人 つはものの交、頼ある中の酒宴かな。扨もく、面白い事かなく。▲主 両人の者共を留守においてござる。何として居る存ぜぬ。急いで歸らう。これは如何なこと。さかもりの音がする。謠をうたふ。あの如くに縛つておいても、まだ酒を飲みをる。悪い奴かな。▲シテ やいく、あれを見よ。頼うだ人の影が盃の中へうつる。不思議なことの。身共の存ずるは、しわい人ぢやによつて、この様に縛つておいても、まだ酒を盗んで飲むかと思はるゝ執心が、これへ映るものであろ。▲太 さうであろ。▲シテ いざ、この様子を謠にうたはう。▲太 一段よかろ。▲シテ 月は一つ、かげは二つ。▲二人 みつ汐のよるのさかづきに主をのせて、主とも思はぬ内のものかな。▲主 何ぢや。主とも思はぬ。がつきめ。やるまいぞ。▲太 あゝ、許させられく。▲主 おのれ、まだそこに居るかく。▲シテ あゝ許させられく。▲主 やるまいぞく。

心持ばかり—少しにても也
番匠屋—大工のこと、此歌三人片輪にも出づ

一段よかろ。▲二人ざゝんざあ。濱松の音はざゝんざあ。▲シテ扨も〳〵、面白い。さあさあ、又身共たべう。もはや一息には飲まれぬ。下に置かう。やい〳〵太郎冠者、受けもつた。肴に何ぞ小舞をまへ。▲太いや、このなりでは舞はれぬ。▲シテどうなりと心持ばかり舞へ。▲太それなら何もなぐさみぢや。舞はう。小舞番匠屋の娘子の、召したりや〳〵帷子、肩に鉋箱、腰に小鑿、小手斧、さい槌や鋸、忘れたりや墨さし。すそに鉋屑、ふきや散らした。はつとちらした。おかたに名殘がをしけれどよ、うら濱の手ぐり舟が急ぐ程にの、やがて來うぞ。ほい。▲シテえいやあ。▲二人ざゝんざあ。濱松の音はざゝんざあ。▲シテさあ〳〵、またわごりよ飲め〳〵。まづゆるりと飲ましめ。▲太やい〳〵次郎冠者、身共も受け持つた。肴に舞をまへ。▲シテそれなら、今のかへしに舞はうか。▲太よかろ。舞へ〳〵。▲シテ小舞十七八は竿にほした細布、とりよりやいとし。たぐりよりやいとし。糸より細い腰をしむればい、三つ拍子ありて、たんと倚いとし。▲太えい、やあ〳〵。扨も扨も、面白い事かな。もはやいかう醉うたわ。▲シテさあ〳〵、まづ盃を眞中に置いて

氣の毒―迷惑の意

これ〳〵。これは如何なこと。はやどちやらござつた。▲シテ やい〳〵、これは何とも迷惑な事ぢやな。▲太 されば〳〵、皆これは、汝が酒を飲うだ故ぢや。▲シテ それは汝も同じ事ぢや。やあ、何と思ふぞ。この樣にしてゐれば、いつもより、取り分け、酒が飲みたいなあ。▲太 なか〳〵。身共もその通ぢや。なにとぞ蓋をあけ、くみさへしたら飲まうが、やあ、見れば、そちが手先が叶ふわ。蓋をとれ。▲シテ まことに身共は、まだ手先は叶ふ。蓋をとらうか。さあ、まんまと蓋をとつたわ。くまうか。これに盃がある。酌んで、まづ身共が飲まう。これは如何なこと。飲まうと思うても口がとゞかぬ。氣の毒な。何とせうなあ。▲太 やあ、思ひ付けた。まづそれは身共に飲ませ。▲シテ 心得た。さあ飲め〳〵。▲太 飲うだわ〳〵。扨も〳〵、この體で飲めば、いつ〳〵より別して旨い事ぢや。どうぞしてそちにも飲ましたいが。思ひつけた。又酒を酌んで、身共に持たせ。▲シテ 心得た。さあ〳〵持て。▲太 持つたぞ〳〵。これへ寄つて飲め。▲シテ まことに、これでは飲まるゝわ。飲むぞ〳〵。扨も〳〵、旨い事かな。又そちに差さう。まづ、ちと下にゐて謠はう。▲太

がつきめ—餓鬼めと罵る詞

よいなり—なりは風體のこと

▲主 如何にもよかろ。使うて見せい。▲シテ 畏つてござる。まづ、この棒と申す物が、かう持つて出ますから、はや心得がござる。先から打つて參るを、かう致してとめます。扨、向の者が引きます。直に取直し、かう致して、これで胸をつきます。▲主 尤もよい手ぢや。▲シテ また、夜道と申すが、無用心なものでござる。その時には、後から打つて參るも知れませぬによつて、とかく後を用心致して、この如くにして參れば、まづ、後の分に氣遣はござらぬ。▲主 太郎冠者、ぬかるな。▲太 心得ました。がつきめ。▲シテ これは何とする。▲主 おのれは憎い奴の。よう留守には酒を盜うで飲みをる。かうして置いたがよい。▲太 扨も〳〵、よいなりの。▲シテ そちは聞えぬ者ぢや。よう騙した。▲主 どつこい。おのれもやる事ではないぞ。▲太 私は何も存じませぬ〳〵。▲主 おのれも、一緒になつて酒を飲みをつて、存じませぬとは。さあまづ、これでよい。そのなりで二人共によう留守をせい。▲二人 これでは留守はなりますまい。盜人がはいつたら、どうもなりますまい。解いておかせられ。▲主 いや〳〵、そのなりで防げ。よう留守せい。▲二人 申し〳〵。

お方に―お方においての意

色意見いたせど、聞きませぬ。身共の存じますは、彼奴が、このごろ棒を稽古致して使ひます程に、只今これへ呼び出し、棒を使はして見させられ。隙を見て、棒縛になされましたら好うござりましよ。▲主これはよい事を思ひ寄つた。それなら、兩人して捕へ、棒縛に致さう、呼び出せ。▲太畏つてござる。▲主必ずぬかるな。▲太心得ました。やいやい、次郎冠者、召すわ。▲シテ何と召すか。心得た。はあ、お前に居ります。▲主早かつた。汝呼び出すこと、別の事でない。今日はさる方へ用事有りて參る。よう留守をせい。▲シテ畏つてござる。御留守は氣遣なされますな。たとへ五人や七人盜人が參つたと申して、私一人しても防ぎますぞ。▲主それは頼もしい。それにつき、このごろ聞けば、汝は棒を使ふと聞いた。いつの間に稽古した。ちと見たい程に、使うて見せい。▲シテいや、それは思ひもよりませぬ。棒をつかふことは存じませぬ。▲太いや、これ〱隱すな。頼うだお方に、よう御存じぢや。▲シテ扨は、汝が申し上げたものであらう。私も、使ひますと申す程の事ではござりませぬ。此中ちと稽古致しました。使うて御目に掛けましよ。

卷之三

一 棒縛

三人　主　長袴、小さ刀
　　　シテ　半袴、腰帶
　　　アド　半袴、腰帶

▲主 罷出でたる者は、この邊に住居致す者でござる。某、今日はさる方へ用事あつて參る。それにつき、身共の使ふ兩人の者共が、留守になれば、酒を盜うで食ふ。惡いことでござる。今日は思案の致した事がござる　酒をえ飲まぬやうに、致し樣がござる。やいやい、太郎冠者あるか。▲太 はあ、お前に居ります。▲主 汝を呼び出すこと、別の事でない。今日はさる方へ參る程に、よう留守せい。▲太 畏つてござる。▲主 それにつき、留守になれば、次郎冠者が酒を盜うで飲むと聞いた。なにとぞして、飲まぬ樣に意見のせうと思ふが、何とあらう。▲太 さればでござる。御留守になれば、酒をたべます。私が色

▲立衆 心得た。なう〳〵、只今の、太郎冠者が云うたを、聞かせられたか ▲主 なかなか。聞きました。最早これでようござる。▲立衆 とてもならば、その體をなされ。拵へて、進ぜう。▲シテ 如何に罪人。地獄遠きにあらず、極樂遙なり。急げ〳〵とこそ。▲主 やあ、また打擲し居つた。罰當りめ。何とせう。▲シテ あゝ、許させられ〳〵。▲主 やるまいぞ〳〵やるまいぞ。

勞でござります。此方には、何のお役でござる。▲立衆 身共は、鼓ぢや。扨、當屋殿には何の役でござる。▲主 いや私は、何やらまだ見ませぬ。▲立衆 それなら、見て進ぜう。どれ〳〵、おこさせられ。はあ、當屋罪人。▲シテ 鬼はこれに候。▲立衆 さあ〳〵、もはや餘日もない。太郎冠者、拵へて稽古せい。▲シテ 畏つてござる。▲シテ 如何に罪人。急げ〳〵とこそ。▲主 おのれは憎い奴の。身共を序に打擲するか。▲立衆 まづ堪忍なされ。これはどうした事ぞ。▲主 扨も〳〵、憎い奴でござる。よい序と思ひ、打擲いたし居る。憎い奴でござる。▲立衆 尤でござる。云ひつけましよ。まづ待たせられ。やい〳〵太郎冠者、なぜに打擲するぞ。▲シテ いや、もはや責めますまい。▲立衆 それはなぜに。▲シテ 何所の國か、罪人が鬼を打擲すると云ふ事は、無いことでござる。責めますまい。▲立衆 それも尤ぢや。さりながら、杖の當らぬ樣にせい。▲シテ それは、責むる勢に、當るまいものでもござらぬ。とかくあの樣に睨まるれば、責らめれませぬ。こゝに風流の面がござる。これ被て責めましよ。賴うだ人にも、罪人の體になつて、責められさせいと云うて下され。

たくんだり―たくむは計畫の意

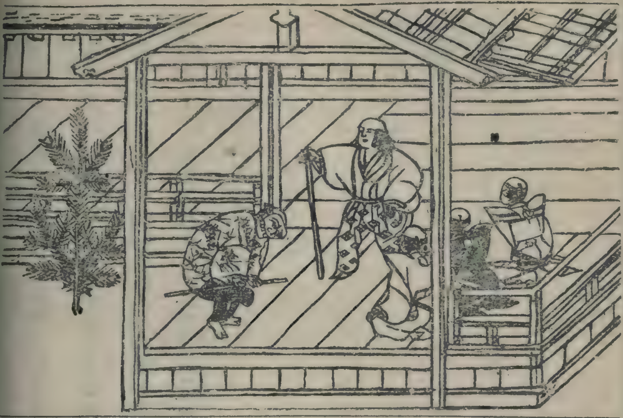
賴う人―賴うだ人の誤寫なるべし

囃し立てたらば、一つは賑かに珍しうござりましよか。何とござろ。▲立衆 扨も〳〵、たくんだり〳〵。これは一段よかろ。これに極めましよ。▲主 いや〳〵、これは惡かろ。めでたい神事に、罪人の、鬼のと云ふ事はなりますまい。無用でござる。▲シテ 申し〳〵、とかくこの樣な珍しい山は、惡うござろ。橋辨慶が珍しう、ようござろ。▲主 おのれは憎い奴の。又其所へ出居つて、あつちへ引込うで居れ〳〵。▲主 とかくこれは惡うござろ。無用になされ。尤も、鬼にはなりてもござらうが、罪人にはなりてがござるまい。▲立衆 それは、いつもの樣に、鬮取に致しましよ。やい〳〵、太郎冠者、さあ〳〵鬮を拵へて來い。▲シテ 畏つてござる。さらば、御取りなされませい。▲立衆 まづ賴う人へ持つて行け▲シテ 畏つてござる。さらば、御取りなされませ。▲立衆 こなたもお取りなされませ。▲シテ 申し〳〵、これは一つ餘りました。▲立衆 それは、汝取れ。▲主 いや〳〵、彼奴には取らしますまい。▲立衆 いつも當屋から、人が一人づつ出ます。汝取れ〳〵。▲シテ それなら取りましよ。扨、此方には何のお役でござります。▲立衆 身共は、笛の役ぢや。▲シテ これは御苦

とつとも申しますまい―賞讃すまじの意

▲立衆 それなら、身共の存じ寄りを申して見ましよ。まづ、山は致して、その山より、郭巨が、黄金の釜を掘り出した所を、致しては何とござろ。▲主 これは一段ようござろ。珍しい山でござる。これに致さう。▲シテ これは如何なこと。又これに極りさうな。申し申し、これは好うござりますまい。これをよかろと仰せらるゝは、合點が參りませぬ。釜といふ物は、家々にあるものでござる。それを掘り出したと云うて、とつとも申しますまい。これは無用でござる。▲立衆 まことに、あれが云へば、これは好うない山ぢや。いらぬものに致さう。▲主 やあ、又差出居る。おのれを賴うで、評議なさるゝか。あつちへはいつて居ろ。▲主 いや〳〵、この山がようござろ。▲立衆 これはようござるまい。とかく、太郎冠者が才覺者ぢや。やい〳〵太郎冠者、こゝへ出よ。▲シテ 何事でござります。▲立衆 そちは才覺な者ぢや。何ぞ思ひ寄りがあるか。云うて見よ。▲シテ それなら、申して見ましよ。まづ、私の存じまするは、山を拵へ、その裾を野にいたし、其所へ罪人を出し、それを、鬼が、山へ上れ〳〵と、責むる所を致して、囃子物には、鼓、太鼓、鉦、笛、

又、汝は何時も、ものにさし出てわるい。差出な。▲シテ畏つてござる。▲立衆何れもござるか。いざ、今日は誰殿へ、山の相談に參らう。▲立衆いかにも參りましよ。さあ〱、ござれ〱。▲シテやあ、はやこれへお出でなされた。御苦勞でござります。▲立衆御當めでたうござる。▲主何れも、御苦勞に御出でござる。扨、祇園會も近日の事でござる。今日は、山の相談極めませうと存じ、呼びに進ずる處でござつた。どれからなりとも、思ひ寄らせられた山を云うて御覽ぜ。▲立衆いや〱、まづ御亭主から、思ひ寄りを仰せられ。▲主それなら、身共の存じ寄りを、申して見ましよ。私の存じますは、まづ山は山でござる。その山に五條の橋をいたし、判官殿の、千人切をなさるゝ樣子を致しては、何とござろ。▲立衆これは、一段とようござろ。よい山でござる。▲シテ申し〱、この山は毎年出る山で、すなはち町の名も、橋辨慶の町と申します。覺のないことでござる。▲立衆まことに、是は太郎冠者が申す通でござる。毎年ある山ぢや。▲主やあ、又差出居るよ。▲主如何樣、これは彼奴が云ふ如く、ある山でござる。又、何れもの思ひ寄りを云うて御覽ぜ。



十鬮罪人

七人　主　長袴、小さ刀
　　　冠者　半上下、腰帯
　　　立衆　皆々、長袴、小さ刀

▲主 これは、此邊の者でござる。當年は、某が祇園會の當番に當つてござる。もはや餘日もござらぬ程に、今日は各呼びに遣し、山の相談を致さうと存ずる。やい〳〵、太郎冠者、あるかい。▲シテ はあ、お前に居ります。▲主 念なう早かつた。汝呼び出すは別儀でない。祇園會も近日ぢやほどに、今日は各呼びに遣し、山の相談極めうと思ふ程に、汝は各呼うで參れ。▲シテ 畏つてござる。▲主

の用にも立たぬ奴に、布施をわりてやらうぞ。遣ることはならぬ。▲尼ならぬと云うて堪忍せうか。厭でも應でも取らねばならぬ。おこしやれ〳〵。▲シテおのれ物を云はして置くによつて、憎い奴の。おのれが様な奴は、かうして置いたがよい。▲尼なう〳〵、痛や〳〵。腹だちや〳〵。何所へ長老お行きやる。やる事ではないぞ。お布施を半分おこしやれ。やるまいぞ〳〵。

ほえた―泣くこと

つれ―つれな事とも云ふ無理の意

ります。ありがたい御談議でござりました。▲シテ 扨、愚僧も、用事もござる程に、早速上りましよ。御暇申さう。▲アド これは、餘り早々でござる。まづ、御酒でも參つてござりませ。▲シテ いや〱、御酒はたべますまい。扨、物は、何となされた。▲アド 物とは、お布施のことでござるか。▲シテ それ〱、そのお布施のこと。▲アド それは、はや持たして上しました。▲シテ はや先へ上せられたか。それは過分にござる。もはやかう上ります。▲アド ござりますか。▲シテ なか〱。▲アド ようござりました。▲シテ 扨も〱、尼めは憎い奴かな。どちへうせた知らぬ。▲尼 なう〱、長老樣。只今のお談議は、扨も〱、何時よりありがたうござりました。▲シテ おのれは憎い奴の。談議の中、泣けかしと思ふ時は泣かいで、今ほえたと云うて、何の役にたつものぢや。▲尼 いや私は、ありがたうて、涙がこぼれましてござる。▲シテ 何を云ひ居る。居眠つてばかり居つて、またそのつれを云ひ居るか。▲尼 やあ、これは、何と召さる。此方は、折角これまで妾を連れて來て、打擲めさるか。お布施を半分割ぢや。さあ〱、受取りましよ。▲シテ おのれふせつて居つて、何

四恩―諸說區々たり天地の恩國王の恩父母の恩衆生の恩などを云ふ

郭巨―後漢の時河内の人二十四孝の一人

隨喜―佛を信仰すること

扨、今日の談議は、四恩と申す沙汰でござる。四恩と申すは、天地の恩、父母の恩、國土の恩、これを四恩と申す。惣じて人間は、まづ第一、父母に孝を盡し奉らねば、天地佛神の御心にも叶はず。ましてその身の一生の間、心に叶ふ事ないものでござる。既に唐土に、郭巨と申すは、一人の親を養はんとて、我が子を土に埋まんと、打立つる鍬の下より、黄金の釜を掘り出し、それより親を歡樂に養ひ、その家も富貴に榮えたと申す。夫婦の人は、餘り忝さのまゝ、涙をこぼし、天道を三度禮拜致されてござる。まことにかやうの事も、偏に親孝行ゆゑ、天理に叶ひ、乃ち天道より與へ給ふ黄金の釜でござる。忝い事でござる。惣じて、人間五十年、僅か夢の中、今日あつて明日ないことでござる。必ず〳〵、うか〳〵と暮さずとも、唯眞實に、來世は助け給へと、心から隨喜の涙をこぼし、佛を頼ませられ。申しても〳〵、この世は僅ぢや。夢の中の眠を醒し、後世菩提を願はせられ。今日の說法これまでなり。願以此功德普及於一切我等與衆生皆俱成。▲シテ まづ、談議をしまひました。▲アド 扨も〳〵、忝うござります。御苦勞でござ

高座―一段高き席

今歸つた。▲アド これに居ります。▲シテ 定めて、待ち兼ねてござらう。いざ追付けまゐらう。▲アド それは御苦勞に忝うござる。まづお先へござりませ。▲シテ それなら參らうか。さあ〳〵。▲アド 參ります。▲シテ まことに、こなたは若いが奇特でござる。さりながら、かやうの善い功德をなさるれば、せふ善德と申して、定は、此方のためになる事でござる。▲アド 常々さやうに承りましてござる。申し〳〵、なにかと申す中に、程なうこれでござります。まづこれへお通りなされて下されませ。見苦しい所へ、恥しうござります。▲シテ いや〳〵、左樣にはござらぬ。綺麗にしてござる。やあ、尼は參つたかしらぬ。▲アド それならば、御草臥でもござりましよが、追つ付け、御談議をなされて下され。在所の者共も、待ち兼ねて居ります。▲シテ なるほど始めましよ。高座を飾つて下され。▲アド 畏つてござる。▲尼 やあ、漸う御談議の始まる時分ぢや。參りましよ。▲シテ 何れも奇特に參詣なされた。愚僧は、都さる寺の者でござる。今日、この家の施主賴まれ、一座の談議を致すことでござる。親の第三年とあつて、談議を致さるゝ、奇特なことでござる。

見え隱れ―見えつ隱れつ跡を追ふ意

ようござりました―よくも出になつた也

でござりますか。何と思召して、御出なされました。▲シテ されば、只今來たは別義でない。身共は、さる田舍より頼みに來た、一座の談議を述べに下る。それにつき、其方はいつも、身共が談議を聞いては、殊勝に思うて、涙をこぼし〳〵おしやる。先へ參つても、首尾のよいようにと思ふことぢや。其方は身共が後から、見え隱れに下つて、談議の時參りになつて、いつもの樣に、涙をこぼし泣いてたもれ。頼むぞ。▲尼 それは何より易い事でござります。こなたの事でござる程に、何方へなりとも下りましよ。▲シテ それは近頃滿足ぢや。首尾よう仕舞へば、大分布施を取ることぢや。わごりよにも、半分は配分して遣ろぞ。▲尼 それなら、いよ〳〵下りましよ。私はこなたの御談議聞きますれば、何時でも、涙がこぼれてありがたうござる。▲シテ それ〳〵、その如くに、先へ行ても泣いてたもれ。▲尼 心得ました。▲シテ いざ、追付けまゐる。其方もちと後からをりやれ。▲尼 畏つてござる。ようござりました。▲シテ さらばでをりやる。やれ〳〵、まんまと尼が合點致した。定めて、田舍人が待ち兼ねて居よ。急いで參らう。田舍の、居りやるか。唯

五百疋—廿五文を一疋といふ

忝うござりましよ。▲シテそれは、何より易い事でござる。出家の役でござる。參らう。さりながら、若し身共がえ參らずは、どれなりとも、外の長老衆を下す爲ぢやが、物は何程なさるゝ。▲アド物とは何でござります。▲シテはて、物は。▲アドあゝ、合點致しました。お布施の事でござるか。▲シテなか〳〵、そのこと。▲アドそれは、五百疋致しましよ。▲シテそれならば、身共が參らう。▲アドそれは忝うござります。▲シテ追付け參らう。さりながら、此方も只今上つて、草臥れてあらう。少それで休息めされ。▲アド畏つてござる。▲シテ後ほど御目に懸からう。やれ〳〵、一段の事でござる。五百疋の布施物を取るわ。大分の事ぢや。急いで參らう。さりながら、身共は、談議が下手でござるによつて、たま〳〵談議しても、參りがない。されどもこゝに、私の談議を聞いては、殊勝なと申して、涙をこぼし泣く尼がござる。これを賴み、連れて下り、談議の時泣かさうと存ずる。内に居やうか存ぜぬ。參るほどに、これでござる。ものも。尼は内にをりやるか。▲尼表にものもうがある。何方でござる。▲シテいや、身共でをりやる、▲尼やあ、長老樣

九 泣尼

三人
シテ 尼 頭巾、袈裟、衣、珠數持
アド 熨斗目、わたばうし
アド 半袴、腰帶

▲アド 罷出でたる者は、遙田舍に住居致す者でござる。某、親の第三年に當つてござる。近日の事でござる程に、今日は都へ上り、よささうな長老衆を賴み、同道致して下り、一座の談議を述べて貰はうと存ずる。まづ急いで上らう。やれ〳〵、都へ上つてござらば、これを次手にして、こゝかしこを見物致さうと存ずる。やあ、參る程に、これが都ぢや。こゝもとには寺方も見えぬ。寺町へ參り、賴みましよ。これぢや。これに寺がござる。まづ案内申さう。ものもう。案内もう。▲シテ長老 表に案内がある。どなたでござる。▲アド いや、私でござります。遙田舍の者でござる。某、親の第三年に當りましたによつて、一座の談議を述べて貰ひたう存じ、參りました。御下りなされて下されうば、

慮外―失禮也恐縮の意

ゆづり葉の君―讓る意を兼ぬ

るゝぞ。▲二人 はあ、これはありがたうござります。▲奏 さあ〳〵、これへ寄つて飮め。▲シテ 立をしてやろ。▲二人 これは慮外でござります。▲奏 さあ〳〵、めでたい和歌をうたうて、立ちませい。▲シテ 畏つてござります。▲アド 謠 やら〳〵、めでたや、めだたやな。君の御壽命松もろともに、千年の鶴の齡なれや。▲シテ 尙もめでたや〳〵な。金銀米錢御家督までも、ゆづり葉の君の。▲二人 ゆづり葉の君に、榮ゆる御代こそめでたけれ。

どへども―といへども

十返―松は百年に一度花開くと云ふその十回即ち千年の長命也

召されぬ程に、松とゆづり葉のめでたい仔細があらば、語れと仰せ出された。急いで語りませい。▲シテ畏つてござる。私のゆづり葉には、めでたい仔細がござる。語りましよ。▲奏急いで語れ〳〵。▲シテ語それ、ゆづり葉のめでたいと申す御事は、諸木は雪霜に侵され、色も變り、葉も落つとへども、ゆづり葉は色も變らず、青々として常磐なるものなれば、年の初の、松楪と飾られ、何ほうめでたきものにて候。▲奏ようこそ申上げました。さあ〳〵、松のめでたい事も申し上げい。▲アド畏つてござる。申し上げましよ。▲奏急いで申せ。▲アド語扨も松のめでたいと申す御事は、一寸伸ぶれば色長へにして、千年萬年の齡を保ち、君も松諸共に、老いては若やぎ〳〵、十返の翁たるべし。何ほうめでたき物にて候。▲奏ようこそ申し上げた。はあ、兩國の百姓、かくの如く申し上げます。はあ。やい〳〵。▲二人はあ。▲奏仰せ出さるゝは、兩人ともにめでたい仔細申し上げまして、殊の外御機嫌ぢや。さうあれば、いつは下されねど、この度御通を下さる。三盃づゝ飲うで、その後、何にても、めでたい和歌を上げて立ちませい。御暇下さ

神妙―奇特也感心の意

の御館もこれぢや。それなら、身共から上げて參らう。▲アド如何にも、上げさしませ。▲シテ心得た。物もう〳〵。▲奏何者ぢや〳〵。▲シテはあ、これは丹波の國の御百姓でござる。毎年御嘉例で、楪を差し上げます。今日も持つて參りましてござる。上堂へ、宜しうお取合たのみ上げます。▲奏ようこそ持つて參りました。御藏の前に置きませ。▲シテ畏つてござる。やあ、えい。なう北山の、居さしますか。▲アドなか〳〵、これに居るわ。▲シテさあ〳〵、上げてをりやれ。▲アド心得た。物もう〳〵。▲奏何者ぢや〳〵。▲アドはあ、これは北山邊の御百姓でござる。毎年の御嘉例で、門松を差し上げます。すなはち只今持つて參りました。上へは、宜しう御取合たのみ上げまず。▲奏ようこそ持つて參りました。御藏の前へ置きませい。▲アド畏つてござる。やあ、えい。なう〳〵、嬉しや〳〵、まづ上げたわ。▲シテ上げさしましたか。一段ぢや。▲奏はあ、兩國の百姓かくの如く、はあ〳〵。やい、兩國の百姓ども。▲二人はあ。▲奏仰せ出ださるゝは、兩國の者ども、國を隔てたるに、同じ日の同じ時に參ること、神妙に思召す。さうあれば、終に上にも聞

御館ー領主のやかた也

の國の御百姓でござる。毎年上堂へ、嘉例で、楪を持つて上る。漸う時分でござる。持つて上らうと存ずる。やれ〳〵、この如くに、毎年々々持つて上るも、めでたい事でござる。▲アドやあ、これへ好ささうな連が參つた。詞を懸け同道致さう。なう〳〵、これ〳〵。▲シテやあ、こちの事でござるか。何事ぞ。▲アドなか〳〵、其方のことぢや。わごりよは、どれからどこへ行く人ぞ。▲シテされば、身共は丹波の國の御百姓ぢや。上堂へ毎年々々、歳暮の御祝儀に、楪を持つて上るわ。▲アドそれは、幸の連ぢや。身共は、北山邊の百姓ぢや。其方のおしやる如く、身共も北山の御百姓でをりやるが、上堂へ、嘉例で門松を持つて上る。一段の連ぢや。いざ、同道致さう。▲シテなるほど、同道致さう。さらば、先へ御行きや。▲アドそれなら、先へ參らう。さあ〳〵、をりやれ〳〵。▲シテ心得た。▲アドなう〳〵、かりそめに詞をかけて、この如く同道するは、好い縁であらうの。▲シテなか〳〵。袖の振合も他生の縁と云ふが、この樣なことであらう。▲アドやあ、何かといふ内に、身共の御館はこれぢやわ。▲シテ扨も〳〵、云ひ合せた樣なことぢや。身共

嘉例―吉例に同



八　松ゆづり葉

三人　シテ　半上下
　　　アド　半上下
　　　奏者　長袴、松楪擔げ出る

▲奏者 これは今日の奏者でござる。何事も御取次申さうと存ずる。▲アド 罷出でたる者は、北山邊の御百姓でござる。毎年上堂へ、嘉例で門松を持つて參る。當年も持つて參らうと存ずる。まづ、急いで參らう。やれ〳〵、この如く相變らず持つて參るは、めでたう存ずる。やあ、今日は道連もござない。この所に待つて、好さそうな連があらば、同道して參らう。▲シテ これへ出でたる者は、丹波

これ〱、さうではない。何事も堪忍して戻つてたもれ〱。賴むぞ。▲女 いや〱、何ほどいうても、戻る事ではない。あゝ腹立。やるまいぞ〱。▲シテ あゝ、許せ〱。

託宣—神の告げ

てうよふ云々—曲にかゝるてうよふは珍事ちうようなどいふちうようと同じく災難の義見るべし

わ男—男を卑しめて云ふ

陰ながら様子を聞けば、わごりよに厭き果てて、家出をして、此頃は石神へ、毎日々々神樂をあげ、其方がいとまをくれる様にと、祈らるゝと聞いたわ。▲シテ扨は、さやうでござりますか。それなら、私も石神へ參りあひまして、なにとぞ中直り致し、連れて歸りましよ。▲アドそれなら、すこしも早う行かしませ。▲シテ心得ました。かう參ります。▲アドお行きやるか。ようをりやつた。▲シテはあ、やれ〳〵一段のことでござる。石神へ毎日まゐるならば、致しやうがござる。身どもがすなはち石神になつて、託宣を下さうと存ずる。參るほどに、これでござる。まづ、參らぬ先に身拵いたさう。▲女又、今日も石神へ參り、祈誓申さうと存じます。この如くに、毎日々々參詣いたします程に、定めて、首尾よう男が暇くれるでござろ。やあ、參るほどに、これでござる。さらば、今日も又神樂をあげましよ。▲シテてうよふ災難除いて、息災延命に守らせ給へ。遙の沖にも石のあるもの。蛭子の御前の腰掛の石。▲女やあ、これは、わ男ではないか。おのれは憎い奴の。さては神の贋をして、又妾をだまさうと思ふか。あゝ腹立や〳〵。▲シテあゝ、

女共ー妻

愈只今の通頼みまする。もはやかう參ります。▲アドお行きやるか。▲二人さらば〳〵さらば。▲女扨も〳〵久々馴染みました中を、この如くに別れますは、情ない事でござるまづ〳〵、里へ歸りましよ。▲シテ罷出でたる者は、この邊の者でござる。某が女共は。方々祈禱など致す神子でござる。私がちと酒をたべ、何かと申してござれば、暇を乞ひ、親里へ歸りてござる。定めて、あれが媒人めされた方へ、參らぬ事はござるまい。誰殿へ參り、樣子を尋ねうと存ずる。まことに、女と申す者は愚なものでござる。身共が聊にたべ醉ひ、何かと申したを、まことと存じ、歸つてござる。愚痴な者でござる。やあ、參る程にこれぢや。ものもう。案内も。▲アド表に案内がある。どなたでござる。▲シテ私でござります。▲アドやあ、好うこそござつたれ。何と思うての御出ぞ。▲シテされば、只今參るは、別の事でござらぬ。私が女共と、一つ二つ言ひごと致してござれば、それを腹立て、出て參つてござる。定めて、此方へ參らぬことはござるまい。樣子を御存じならば、仰せられて下され。▲アドはてさて、それは氣の毒なことぢや。これへは見えぬが、

ふつ〳〵ーふつつりと也断然の意

扨も〳〵縁とは申しながら、あのやうな男を持つは、迷惑な事でござる。ひさ〴〵馴染うで歸ると申すも、氣の毒でござる。やあ、參る程に、これでござる。ものも。案内も。▲アド 表に案内とある。どなたでござる。▲女 いや、妾でござります。▲アド やあ。ようこそ御出やつたれ。何と思うてをりやつたぞ。▲女 されば、その事でござる。私の男は、明暮大酒をたべ、醉狂ばかり致し、その上に妾を打擲いたします。ふつつりと厭き果てましたに由つて、暇を乞ひ捨てに致し、出て參りました。定めて、これへ尋ねに參ることがござろ。參つたら、なるほどこれへ參つたが、もはやわごりよにあき果てて、暇を呉れる樣にと云うて、石神へ毎日〳〵、神樂あげに參ると仰せられて下され。この上は、何方が中直しなされても、あの男はふつ〳〵厭でござります。▲アド はて扨、それはまづ氣の毒ぢや。さりながら、其方の言分を聞けば尤ぢや。定めてこれへ參ることがあらう。見えたらば、その通いはう程に、心安く思やれ。▲女 忝うござります。くれ〴〵賴みます。此樣に出て參る妾が心を、御推量なされて下され。よい心ではござりませぬ。



七　石神

三人　シテ　頭巾、半上下、腰帯
女　箔小袖
アド　長袴、小さ刀

▲女　妾は、この邊の、誰と申す者の女房でござる。こちの男は、常々大酒をたべ、醉狂を致し、又しても〳〵、妾を打擲致します。何とも氣の毒にござる。厭き果てましたによつて、暇を乞ひ捨てにいたし、出て參つてござる。これより親里へ歸らうと思ひます。さりながら、妾が嫁入致して參る時の、肝入られた人がござる。これへ參り、この樣子を申し、それより親里へ歸らうと存じます。

人らしき意錆びを言掛く

熊坂の入道―長範のこと

若族すき―若衆好みの意歟

代女、若族共こそ一手はとれ。如何に勢ひたまふとも、さまでの事はあらじものをと、皆一度にぞ笑ひけるく。▲シテ年寄どもはこれを聞き、く、熊坂の入道六十三、齋藤別當實盛も、六十に餘つて打死す。その外老武者の、くうたる所がたこになるとて、或は六十或は七十、いづれも劣らぬ老武者ども、鋒先を揃へてかゝりけり。▲三位若衆の中より下知をなし、地く、流石にこれはおやかたたちなり、構へてくあやまちすなと、抱き取りく制すれば、思の外なる若族すきしくして、みな家々にぞ歸りける。

長道具ー長具足也長刀鑓の類

腰に梓の弓を張りー腰の屈めること

翁さびたるー老

て盃させて進ぜたいが、先程より、この邊の若い衆が數多出られて、盃の最中ぢやほどに、その中へはなるまい。お歸りやれ。▲シテ その中でも、盃のならぬ事はあるまい。是非とも盃さしてたもれ。▲やど はて、聞分の無い。どうでも今はならぬ。お歸りやれ。▲シテ おのれ憎い奴の。これ程に云ふに、ならぬといふ。それなら、目に物見せう。▲やど それは誰が。▲シテ おれが。▲やど やあ、目に物見せだて、おいてくれ。▲シテ 悔むな。おのれ、たつた今目に物見せうぞ。なう〳〵、腹立や〳〵。▲やど やあ、殊の外祖父が腹立てて歸つた。何ほどのことがあらう。やあ〳〵、何といふ。祖父が腹を立てて、大勢祖父ども語らひ、寄せて來ると云ふか。これは油斷がならぬ。これ〳〵、三位殿、若い衆、最前から、祖父が參つた樣子を聞かせられたか。▲立衆 なか〳〵、これで一々聞きました。長道具で押し寄せ參るか。夫なら油斷はなるまい。いづれも用意めされ。ぬからせらるゝな。▲立衆 心得ました。心得た〳〵。▲シテ節四人 老武者は、腰に梓の弓を張り、翁さびたる鑓長刀を、擔げつれてぞ押し寄せたる。▲三位 若衆の勢はこれをみて、地〳〵、昔は知らず當

參つて—盃を受けて也

て、盃をさせうと申されます。こちへ通らせられ。▲立衆 それは、まづ滿足いたした。通りましよ。さあ〳〵、皆々ござれ〳〵。▲やど さらば、お稚兒樣から參つて、若い衆へさゝせられ。▲稚兒 三位、これを飮まうか。▲三位 いかにも、參つて若いしゆへ遣され。▲やど さあ〳〵、若い衆、お稚兒樣の盃ぢや。戴かせられ。▲立衆 扨も〳〵、是は忝い。さ、ちと謠ひましよ。▲謠 ざゝんざあ、濱松の音はざゝんざあ。いざ、此盃をお稚兒樣へ戻しましよ。お稚兒樣へ申します。受け持ちました。肴に舞を一つ舞はせられ。▲稚兒 三位、舞はうか。▲三位 如何にも、舞はせられ。▲稚兒 やんまかやせ、〳〵。▲シテ祖父 これは、この邊に住む年寄でござる。承れば、この宿へ美しい稚兒が宿とられたと申す。あれへ參り盃を戴かうと存ずる。やあ、參る程にこれぢや。ものもう。案内も。▲やど 又表に案内がある。どなたでござる。▲シテ 身共は、この邊に住む祖父でござる。聞けば、此方へ旅のお稚兒の宿取らせられたと聞いた。老の思出ぢや。盃をさして下され。此方を頼みますぞ。▲やど 尤も此方の事でござる。年寄つて、その樣におしやることぢや程に、取り持つ

なるやうに—盃の出來るやうに也

受けとり—引受くる意

申す程に、皆々同道いたし參り、盃を望いたさうと存ずる。皆々ござるか。▲立衆 なかなか、これに居ます。いざ、同道致し參りましよか。▲立衆 さあ〳〵、ござれ〳〵。何かと申す内に、これぢや。ものもう。案内も。▲やど 表に案内がある。どなたでござる。やあ、いづれも何と思うてお出なされた。▲立衆 その事でござる。夜前これへ旅の稚兒の著かれたと申し、若い衆が聞き及うで、盃をしたいと申されます程に、なにとぞ好い樣に云うて、盃をさしてたもれ。頼みますぞ。▲やど 如何にもその通申して、隨分なるやうに致さう。それに待たしめ。▲立衆 心得ました。▲やど 三位殿、それにござるか。定めてお草臥なされう。さうあれば、この邊の若い衆が、お稚兒の事聞き及うで、盃をいたしたいと云うて參られた。此方、よい樣に云うて、盃をさして下され。▲三位 これは思ひも寄らぬ事でござる。さりながら、この邊の若い衆なら、某が受けとりました。盃を致させませう。こちへ通させられ。▲やど それは、近頃過分にござる。こちへ通しましよ。なう〳〵、若い衆、ござるか。▲立衆 これに居ます。▲やど その通申してござれば、三位殿が受けとつ

次第―謡ぶし
人目を包む―包むは忍ぶ也
住みなれし云々―道行謡
曾我―伊豆
藤澤―相撲

六老武者

十一人

シテ　祖父頭巾
三位　頭巾、十德、半袴
ちご　がづらかけ、半袴
立衆　長袴、小さ刀

▲三位、稚兒　次第　人目を包む旅なれば、〱、まだ夜の中に出でうよ。▲三位　これは相摸の國の者でござる。これなる稚兒は、さる仔細あつて、人目を包み、都へ御伴申し候。住みなれし、まづ曾我よりも立ち出でて〱、藤澤の宿には著きもせで、そばなる宿に著きにけり。▲三位　詞　急ぐ程に、これははや、藤澤の宿に著いてござる。漸う日も暮れかゝりました。宿を借らばやと存ずる。ものもう。案内も。▲やど　やあ、表で案内とある。どなたでござる。▲三位　これは旅の者でござる。一夜の宿を貸して下され。▲やど　安いことでござる。貸しましよ程に、奥へ通らせられ。▲三位　心得ました。▲立衆　これはこの邊に住居する者でござる。夜前この宿へ、さる稚兒の宿を取られたと申す。承れば、殊の外美しいと

風流―一種の囃子也

何ぢや、暇をくれ。如何にもそちに暇はやるとも。頼うだ人の手前、變がへはならぬ。何所へなりと出てゆけ。暇をやるぞ〱。▲女 扨も〱、是非ない事でござる。あの樣な男に、殘り多い事はなけれど、一人あるかな法師が、不憫にござる。▲シテ やあ、漸う神事の渡る時分ぢや。急いで拵致さう。▲立衆皆々 謠 色々の〱、祇園ばやしに吹く風の、笛をふき鼓うち、風流の品ぞおもしろや〱。▲シテ 我はまた、能無しゆゑに太鼓を負ひ、これほど汗をかくものを、目あきあらば見てとれ。この目きゝあらば見てとれ。▲女 謠 今日の風流のその中に、一骨折りて見えたるは、太鼓を負へるお方なり。いかなる人にてあるやらん。▲シテ 我能なしと云はれしが、能者になれば今はまた、さこそ悔しう候はん。▲女 何悔しうもあるべきぞ。元の如くに契るべし。▲シテ それはまことか。▲女 なか〱に。▲シテ 負うたる太鼓の。地 負うたる太鼓をうちつれて、ゆくやこの太鼓〱。同道してこそ歸りけれ。

平に―どうぞの意

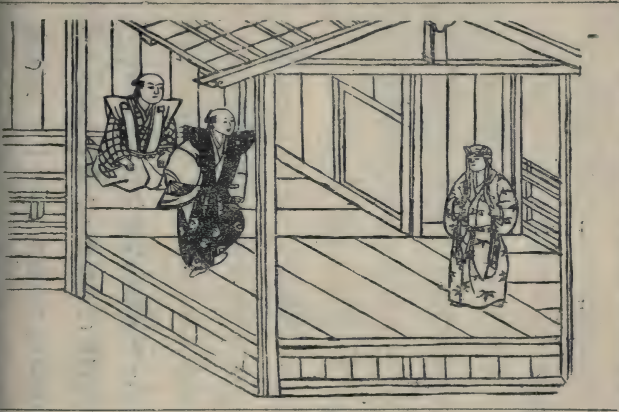
こちの人―そこな人共に我が夫を指す

太鼓持とは何とも迷惑にござる。餘の役を言ひ付けられて下され。▲立衆 尤なれど、何をするも奉公。主の爲ぢや。平に太鼓を持て。▲シテ いや〳〵、どうでも持つことはなりませぬ。▲アド 何事を云ふぞ。身共が言ひ付くることを何かと云ふ。さあ〳〵、いづれも、いざ、稽古致しましよ。身拵なされ。こちへござれ〳〵。▲女 なう、腹だちや〳〵。それはまことか。こちの人は何所に居らるゝ知らぬ。なうそこな人、聞けば、わごりよはよい年をして、小供の様に、太鼓持役をすると云ふ事があるものか。人にも知られた者が、その様な外聞わるい役をして、皆人の笑物であらう。その役は、断いうて止めさしませ〳〵。▲シテ されば、身共もさう思うて、色々辭退すれど、却つて頼うだ人が、腹立てらるゝによつて、是非なう請合つた。もはや變がへする事はならぬ。▲女 ならぬと云ふ事があるものか。外に何なりと役の無いことはあるまい。好さゝうな役と、換へさしませ〳〵。▲シテ いや〳〵、只今では、断いふ事もならぬ。もはや役々が極つた。是非ない事でをりやる。▲女 何と、どうでも換へることがならずは、妾に暇をたもれ。▲シテ

山〜山鉾也

て、呼うで來い。▲シテ畏つてござる。▲シテはやう行てこい。▲シテはあ。▲立衆なう〳〵、いづれもござるか。▲立衆なか〳〵、これに居ります。▲立衆今日は、いざ、誰殿へ山の相談に參らう。▲立衆なか〳〵、參りましよ。▲立衆やあ、はやこれでござる。御當めでたうござる。▲シテやあ、はやこれへお出なされた。呼びにまはりませうと存じたれば、はやお出なされた。さつと足を助かつた。▲アド各はやくお出、御大儀にござる。扨、祇園會も近日になりました。今日は山の役人を極めうと存じ、呼びに進ずる所でござつた。ようこそお出なされた。何と、此方には、何役をなされますぞ。▲立一私は、笛の役人になりましよ。▲アド又、此方は何役をなさるよ。▲立衆二私は、鼓の役を致しましよ。▲アド大方、これで役人は極りました。さりながら、太鼓持つ役人がござらぬ。誰に致さう。▲立衆されば、誰がようござらうぞ。▲アドやあ、幸太郎冠者が隙でゐます。あれを太鼓持に致しましよ。▲立衆これが一段ようござろ。▲シテこれは、何とも迷惑でござる。私も久々御奉公つとめて、いづれも御存じの者でござる。何卒、似合はしき役もござりましよに、

祇園會—祇園神社(八坂神社)の祭禮也六月七日同十四日に行はる



五　祇園

八人
シテ　半上下
當屋　五人、長袴、小さ刀
女　ゆばうし
當戸　半袴、烏帽子、羯鼓持

▲アド　罷出でたる者は、この邊の者でござる。某、當年は祇園會の當番に當つてござる。もはや近日の事でござる。各呼び寄せ、役人をきはめ、稽古致さうと存ずる。やいやい、太郎冠者。あるかやい。▲シテ　はあ、お前に居ります。▲アド　早かつた。汝を呼び出すこと、別の事でない。祇園會も近日の事ぢや。各呼びに遣し、今日は役人を極め、稽古をも致さうと思ふほどに、汝はいづれもへ行

場にて、布一尺も、え賣らで、さのみ人の聞くに、物ないうそ。わ女。▲女なう〳〵、腹立や〳〵。何所へうせる。どうでも、何も取り返さねば、去ぬることではないぞ。およ腹立や〳〵。やるまいぞ〳〵。

たゝう紙―畳み紙也はなかみの事
はいは―白粉の事と云ふ
はたを―縁を
わ女―女を卑しめて云ふ
かうに―やうにの誤なるべし
ひいとつ―ひとつを吃る
能―はたらき
夕まどひ―宵の中より睡ること

地白帷子の、肩のくわつと裂けたを、胸にしやんと結んで、旅笠の破れたを、はたをきつととらへて、霜月師走の〱、畷の風に吹かれて、寒さは寒し、彼方へは、ひらり、しやらり、此方へは、ひらり、しやらりと、凍えはてたありさまを、今において此男、ちつとも忘れ候はぬぞ、わ女。▲女 なう〱、腹立や〱。妾に恥を掻かせ居る。申し〱、私が手道具持つて参りましたは、まことでござれど、あのかうに申せば、是非もござらぬ。それなら、今まで織つた月機日機の算用せい、去なうと云うて下され。▲アド 心得た。その通いはう。これ〱、太郎。それならば、今までの、月機日機の算用しておこしやれ去なうと云ふわ。▲シテ 又あれがさう申しますか。夫もひいとつもない事でござる。是も謡で申して、き、きかしましよ。▲アド 如何にもよかろ。謡で云うて聞かせい。▲シテ 心得ました。

謡 それ虚言やいつはり、わ上臈が能には、朝寝、晝寝、夕まどひ、たま〱起きて、物鈍い麻績みだてはすれども、筒麻や、綜麻や、麻桛を、酒手の質にかいやり、織る事更になければ、著る事、まして候はず。一年に一度立つ、河内の國に聞えたる、近江堂の市

こはき―憫こはき

こんぎれ―狐の啼聲のコンより紺切と掛く

さいめぎれ―賽目より貲布（さよみ）切と言掛く「さいめ」は「さよみ」「さいみ」の音轉にて葛布也

太郎。それなら、なるほど去なう程に、嫁入して來た時、持つて來た手道具をかやせ、去なうと云ふわ。▲シテ 彼奴がさう申しますか。そ、それは、みいな虚言でござざります。ない事でござる。此方に申して、き、きかしましよ。わ、私は、ど、吃で、ものが、ゆひにくうござります。謠節で云へば、申しようござる。謠で申しましよ。聞いてく、くだされませ。

▲アド 如何にも、謠節でいうて聞かせ。聞かうぞ。▲シテ 心得ました。謠 こゝにふしぎの男一人あり。その名をあん太郎と申す。かれ一人の妻を持つ。女はこはき故離別する。彼がさられしちようはうには、著ても來ざりし衣裳の類、きたると人に訴訟する。我は元より吃にて、言葉のさだか聞えねば、拍子にかゝり、謠節に、委細の事を申すなり。それ無いことで候ぞ。わ上臈が手具足、狐のなくがこんぎれ、博打のさいめぎれ、褐や、淺黃や、榛の木染に柹染。彼等これらを取り集め、十二の品で縫うたる小包一つ持たせうて、中に入れた物とては、扇で折つたたゝう紙に、はいはなんど押し入れ、赤土器の樣なる、まあこれほどの鏡を、中にとうと押し入れ、市立の賣物か、小脇にきつと挾うで

在所の前へ―村の人々に對して

かな法師―子供の事

追ひ詰められて、在所の前へ、面目もないとは思はぬか。その上、山へも行かず、又刈田があれど、刈らぬと云はるゝ。なぜに働かぬぞ。▲シテどもり 彼奴がさう申しま、ますか。そ、それは皆虚言でござります。山へも参りまする。た、田もか、刈りました。もはやあの女にあ、あき果てました。暇をやる程に、で、出て去ねと云うて下されませ。▲アド 又そちがいふを聞けば、尤ぢや。それなら、其通いうてやらうぞ。これ〳〵女房衆、其方のおしやる通いうたれば、もはやわごりよに厭き果てた程に、暇をやるほどに、出て去ねと云ふわ。▲女 何と。妾に出て去ねと申しますか。なう〳〵、腹立や〳〵。兎角あいつが様な奴は、打ち殺して呉れましよ。のいて下されい。▲アド いや〳〵、まづ待ちやれ〳〵。藁で造つても男は男ぢや。さうはなるまい。暇をやると云ふからは、出て行かずはなるまいぞ。▲女 如何にも出て参りましよ。あの様な男は、藪を蹴ても、五人や三人は蹴出しますれど、一人あるかな法師が不憫にござる。それなら出て参りましよ程に、妾がよめりして参つた時の、手道具がござる。それを返せ、去なうと云うて下され。▲アド やい〳〵、

取りさへて―仲裁して

四　どもり

三人　シテ　半上下、腰帯、扇持
　　　女　ゆばうし、棒つく
　　　アド　長袴、小さ刀

▲女 あら腹立や〳〵。打殺して呉れう。何所へ失せる。やるまいぞ〳〵。▲シテ あゝ悲しや。取りさへて下され、〳〵。▲アド これは、何うした事ぢや。まづ待ちやれ〳〵。これこれ女房衆。またしても〳〵、男を追走らかして、何とした事ぞ。▲女 されば〳〵、此方の前へも、面目もござりませぬ。あの男めが、山へ行けと申せど、山へも参りませず、田を刈れと申せど、刈りにも参りませぬ。とかくあの様な役に立たぬ男は、打殺しましよ。退いて下され。▲アド いや〳〵、さうはなるまい。まづ、身共が意見のせう程に、身共次第にして待ちやれ。▲女 それなら、山へも参るか、田も刈るか、問うて下されませ。▲アド 心得た。意見してやらう。これ〳〵、太郎。そちは、又しても〳〵、この如く女に

ば、如何にもお暇遣されうず。さうあれば、名殘に相撲を御覽なされうとある程に、これへ出て御取りやれ。▲日 畏つてござる。お相手を下され。▲通 心得た。さあうれいちやんは。▲下官 るすんさんきうろ。▲シテ すいれんしや、きんらんとん。▲通 はるまちやりさそふ。これ〳〵、仰せ出さるゝは、下官ども皆々負けたに出つて、帝王の殊の外御機嫌がわるい。さうあれば、この度は自身相撲を取らうと仰せらるゝ。さう心得ておゐやれ。▲日 畏つてござる。御相手に嫌はござりませぬ。取りましよ。▲通 身拵なさるゝ程に、それへ寄つて待ちやれ。▲日 心得ました。▲シテ けいらんいちやなみこらい。▲通 かるらいてうすんきん。なう〳〵。仰せ出ださるゝは、わごりよが穢れた身で取りつくことを、殊の外御嫌ひなさるゝ。身に荒薦を卷いて取らうと仰せらるゝ。その間待ちやれ。▲日 畏つてござる。

こゝにて薦に、兩の手はいる樣に切りあけ、下官二人舞臺先へ引張り居る。王、樂に合せて薦の穴へ兩手入そと、薦をくる〳〵身に纏ひ帶するなり。又眞中へ出て、かまへ居る。通詞、行司する。二人手合してとり、日本人、王の手をとり、引廻し打ちこかしはいるなり。下官共皆々寄り、王を抱きかゝへ、唐言葉にてやかましく云うて、かゝへはいるなり。

唐人相撲―一名
唐相撲

三 唐人相撲

八人

シテ　唐冠、狩衣、團扇持
通詞　唐人頭巾、半袴、團扇持
下官　皆々笠、頭巾、
日本人　半上下、腰帯

▲日本人 罷出でたるものは、日本の相撲取でござる。某、入唐致し、久々帝王に奉公致してござる。故郷なつかしうござるほどに、この度奏聞申し、御暇を申し請け、都へ上らうと存ずる。如何に奏聞申し候。▲通詞 奏聞申さんとは、如何様なるものぞ。▲日 さん候。これは日本の相撲取でござる。久々君に奉公勤めてござる。この度、御暇申し請け、都へ上りたう存じます。この由、奏聞なされ下され候へ。▲通 様子段々聞届けた。幸今日は、君、此所へ御幸ある間、奏聞申さうずる程に、暫くそれに相待ち候へ。▲日 畏つて候。▲通 日本しやくわ、歸朝々々。▲シテ王 今少面勢うらいさうせん。▲通 ちやるまそはんにや。なう／＼、日本人、居りやるか。▲日 これに居ります。▲通 御暇のこと奏聞申したれ

編笠—阿彌陀の語を導く

の花笠蓮の葉笠を、さしはりて行く程に、これぞまことに極樂世界、〱の編笠や、南無阿彌笠の、ほのかに見えてぞ失せにけり。

上氣―のぼせ、紙の掛詞

御法を―得を會下に掛く

づくと、五條邊のあばら屋に、けさのまゝにて待ち居つゝ、かの祐善を弔はん〳〵。▲シテ かさぎぬの、すけの五月雨降る雨に、夜の御法を受くるばがりぞ。▲ワキ 不思議やな。さも破れたる人家よりも、影の如く見え給ふは、如何なる人にてましますぞ。▲シテ 詞 是は祐善が幽靈なるが、御弔ひのありがたさに、これまで顯れ出でて候。▲ワキ 謠 扨は祐善が幽靈なるかや。最期のありさま語り給へ。尙々跡を弔はん。▲シテ 詞 いでいで、さらば語り申さんと、お前にさしかゝより、地 〳〵、祐善がからかさは、〳〵、日本一の下手なりと、名をもらし、はなれやすし、いやとて召す人なかりしかば、彼所へさしかけ、此所へさしかけ、お傘召されよ、かさ召されよと、叫べども呼ばはれども、人は答へず。はるながら、月笠も早く、たけかさの骨折や、腹だちやとて、上氣の如くに狂ひ廻るは、只醉狂や。顏は朱笠の、赤きは猿の山王祭か。さはらばひやせと惡口すれば、かれがかしらを、大わりだめや、茶杓撓に、轆轤をはなせとありしかば、命をすてにはい取り笠にて、地獄の底にすみ笠なりしを、今ありがたき御法を會下傘、弘誓の舟にはんぼをあげて、蓮

時雨をはらさばや—雨の霽れ上るを待つ意

かまへて云々—入りにけり迄曲がかり

夕の竹—云ふを夕に掛く、竹は傘の縁語

ざる。俄に時雨が降り來つて候。これなる宿に立ち寄り、時雨をはらさばやと存ずる。▲シテ なう〳〵、御僧。何とてそのやどりに立ち寄らせ給ふぞ。▲ワキ 唯今の時雨をはらさん爲に、立ち寄つて候。扨、これなる宿は、如何なる人の宿にて候ぞ。▲シテ 詞 これは祐善が宿とて、雨もたまらぬ所なり。かまへて、よく〳〵御弔ひあれと、地 夕の竹のかさ〳〵と、藪の內にぞ入りにけり〳〵。▲ワキ 詞 あまり不思議なることにて候間、所の人に尋ねばやと存ずる。所の人の渡り候か。▲間 所の者と御尋は、如何樣の御事にて候ぞ。▲ワキ これなる宿を見れば、如何樣やうありげに見えて候。謂の無き事は候まじ。敎へてたまはり候へ。▲間 さん候。あれは、古此所に祐善と申す傘はりの、久しう傘を貼り死にしられ候。すなはちこれなるが、祐善が宿にて候。お僧も逆緣ながら、弔うてお通り候へ。▲ワキ さあらば、逆緣ながら、弔うて通らうずるにて候。▲間 又御用候はば、重ねて仰せられ候へ。▲ワキ 賴みましよ。▲間 心得ました。▲ワキ 謠 扨は、これなるは祐善がやどりかや。いざや跡とひ申さんと、永き日ぐらしつく〳〵と、永き日ぐらしつく

祐善—祐勝とも書けり通圓と同じく幽霊能に擬したる作

次第—謡ぶし

會下傘—會下僧とて禪僧の修行中の者の携ふる傘也

住みなれし云々—道行の謡

はる〴〵と—傘を貼るより遥々と言掛く道行の謡

後瀬の山—小濱の南

油の小路—傘の縁に油と續く



二 祐善

三人　シテ　頭巾、熨斗目、傘持
　　　ワキ　水衣、頭巾、半袴
　　　アヒ　長袴、小さ刀

▲ワキ 次第 我が荒増の末とげて〳〵、會下傘や友となるらん。詞 これは、若狭の國轆轤谷の者でござる。某、世を味氣なう存じ、かやうの姿となつてござる。又これより都へ上らばやと存じ候。住みなれし、我が會下傘をはる〴〵と〳〵、後に緣の青葉山、後瀬の山の椎の笠、張畠峠打過ぎて、都の内にさしかゝより、甍の軒につきにけり。詞 急ぐほどに、これははや、都五條油の小路に著いてご

ながら、いづれもの煉らせられては、煉り損ひがあらう。某煉つて進ぜう。▲アド それは、尚以ての事ぢや。急いで煉つて呉れさしめ。▲シテ 謡 いで〳〵藥煉をねらんとて、地 〳〵、くすね皮を大きに拵へ、この松脂をとり入れて、いかにもねばくあやかれとて、ねりつれてこそ歸りける。天下を治むる弓の弦、家を治むる弓の弦に、引くためしも久しき松脂かな。▲ワキ 詞 やに〳〵〳〵や。

松の精—松樹の精靈

藥煉—松脂と油とを煉り合はせたる物弓の弦に塗る料

でもござらぬ。松拍子も近日でござる。それにつき、今日は相談をいたし、何とぞ當年は、めでたい事を囃さうと存ずるが、何とござろ。▲立衆 それが一段好うござろ。何と云うて囃しましよの。▲アド されば、私の存ずるは、とかく松ほどめでたい物はござらぬほどに、松やに〳〵、やに。松やに〳〵や、と云うて、囃しましよ。▲立衆 これは一段ようござろ。さあ〳〵、囃して見ましよ。▲アド 松やに〳〵や。▲立衆 松やに〳〵や。▲アド に、松やに〳〵や。▲立衆 松やに〳〵や。▲シテ やに〳〵〳〵や。▲立衆 松やに〳〵や。▲シテ やに〳〵やにや。▲アド これは興がつたなりぢやが、汝は何者ぢやぞ。▲シテ 某は千年めでたい松の精ぢやが、いづれもが松を祝うて囃さるゝによつて、當年はいつ〳〵よりめでたう存じ、顯れ出でであるぞとよ。▲アド 扨も奇特なことかな。いづれも聞かせられたか。▲立衆 なるほど聞きました。この様なめでたい事はござるまい。▲アド あまりめでたい事でござるほどに、あの松脂を、藥煉に煉りましよ。▲立衆 一段好うござらう。▲アド やい〳〵、近頃めでたい。この上は藥煉を煉らうが、煉られてくれうか。▲シテ 易い事でござる。さり

へ参らう。何かと云ふ中に、是ぢや。物もう。案内も。▲立衆 やあ、表に案内とある。何方でござる。▲冠者 いや、私でござります。▲立衆 やあ、太郎冠者か。何と思うて來たぞ。▲冠者 されば、其事でござる。頼うだ人申されますは、當年は松拍子の當番でござる。夫につき、今日はその稽古をも致したうござる程に、御出なされませいと申して、私をおこされました。▲立衆 如何にもさうであらう。夫へ参らうとあつて、各これへ寄つてござる程に、追付け同道して参らう。汝は先へまゐれ。▲冠者 畏つてござる。やれ〳〵嬉しや〳〵。残らず参らうかと存じたれば、さつと足を助かつた。まづ歸つて此通申さう。申し〳〵、ござりますか。誰殿へ参りましてござれば、各寄り合つてござつて、はやこれへお出なされます。▲アド それは一段ぢや。▲冠者 やあ、はやこれへ御出でござる。▲立衆 御當めでたう存ずる。さあ〳〵、何れもござれ。當屋へ参らう。▲立衆 なか〳〵、参りましよ。はやこれでござる。今日はめでたうござる。▲アド いづれも、ようこそ御出なされた。まづゆるりとござれ。▲立衆 心得ました。▲アド 扨、いづれも呼びに進ずるは、別の事

松の精―一名松脂

松拍子―正月三日より十五日迄に行はれたる一種の歌舞

巻之二

一 松の精

シテ　頭巾、半袴

八人　主　皆々長袴、小さ刀

冠者　半上下、腰帯

▲アド　これはこの邊の者でござる。當年は某、松拍子の當番に當つてござる。各を呼び寄せ、今日は松拍子の稽古致さうと存ずる。やいやい、太郎冠者あるかやい。▲冠者　はあ、お前に居ります。▲アド　汝を呼び出す事、別の事でない。某、當年は松拍子の當屋に當つた。近日の事ぢや程に、今日はその稽古をも致し、又相談を極めませう程に、御出なされと云うて呼うで來い。▲冠者　畏つてござる。▲アド　早う行てこい。▲冠者　はあ。▲アド　えい。▲冠者　はあ、やれやれめでたい事でござる。まづ何方から先へ參らうぞ。やあ、まづ誰殿から先

▲アド　南無阿彌陀佛〳〵。▲シテ　やあ、最前の坊主はあれぢや。おのれやる事ではないぞ。長刀おこせ。▲女　扨はあの坊主がしたか。やるまいぞ。▲アド　あゝ悲しや。こゝへ宿を取合さずは。なう悲しや〳〵。▲シテ　おのれ坊主め。どこまでも追つ懸け、打殺してくれうぞ。やらぬぞ〳〵。▲アド　やれ、出合へ〳〵。悲しや〳〵。▲二人　やるまいぞ〳〵。

さら／＼—戸を開く樣子
手も淺い—輕傷のこと
女ども—妻のこと
自然の事—萬一の場合

ならば留守なりとも貸しましよ。こちへ通らせられ。さら／＼。さあ通らせられ。▲アド 嬉しうこそござれ。まづ、落著きました。ゆるりと寛ぎましよ。▲女 一飯の、拵へて進ぜう。ゆるりとござれ。▲シテ 扨も／＼坊主めに騙された。きついこと仕居つた事かな。されども手も淺い。どうぞして宿へ歸らう。定めて最早遙かに逃げ居つたであらう。憎いことかな。往なれうか知らぬ。きつう痛むが。はあ嬉しや。やう／＼とこれぢや。女どもこゝをあけ。歸つた。早う開け／＼。▲女 こちの人の戻られたさうな。さら／＼。これはどうしたことぞ。手を負うてをりやつたか。相手は誰ぢやぞ／＼。何者がしたぞ。おしやれいの／＼。▲シテ まづ、女どもかゝへてくれ、下に居たい。▲女 心得た。何と、手は痛むか。何としたことぞ。▲シテ 扨も／＼不仕合なことぢや。坊主めに出逢つたが、騙された。されども手は淺い。死ぬる事ではあるまい。氣遣するな。▲女 いや／＼、自然の事があれば惡い。祈禱にもなる。幸出家に宿貸して、奥の間にぢや。念佛を勸めて貰ひましよ。なう／＼、御出家、こちの人が手を負うて戻られました。念佛を勸めて下され。

夜とともー終夜

ふえをかいてー喉吭(のどぶえ)をかき切つて

足を計りにー足の續くだけ

脱いで進じては、丸裸になります。許して下され。その御恩には、私は肩を打ち、按摩を取ることを得てゐます。こなたにも、定めて肩がつかへましよ程に、肩をうつて進ぜましよ。▲シテ何といふ。肩を打つてくれう。▲アドなか〱。▲シテそれはよからう。如何にも肩がつかへて悪い。見れば貧僧さうな。許してやろ。さあ〱、こゝへよつて肩をうて。▲アド畏つてござる。許してさへ下さるゝなら、夜とともなりと打ちましよ。▲シテこれへ寄つて、はやう打て。長刀も下に置かう。▲アドようござりましよ。さらば打ちます。▲シテ扨も〱、そちは上手ぢや。よい氣味ぢやぞ〱。▲アドやあ、よい時分でござる。この剃刀で、ふえをかいて、この谷へつき落しましよ。こはものぢやが。▲アドなうなう、恐しや〱。まんまと仕濟した。足を計りに參り、宿を取らう。これ〱、こゝを開けてたもれ。旅の出家ぢや。宿かしてくりやれ、▲女誰ぢや。こちの人は留守ぢやによつて、宿かすことはならぬ。▲アド尤でをりやる。さりながら、出家のことなり、殊に夜に入りて行く先も知らぬ。慈悲にならう。貸してたもれ。▲女何と、御出家か。それ

鉢を開いて—託鉢し施しを受くること

妄語—出家の禁戒也

はや日も暮れかゝる。もはや泊りたいが、この邊に宿もなし、今すこし參つたら泊がござらう。片時も早く參らう。▲シテやあ、これへ坊主が來た。剝いでくれう。やい〳〵、おのれ、やることではないぞ。そのおのれが著てゐる物も、路銀も皆おこせ。▲アドそれは何とも迷惑でござる。私は貧僧で何も持ちませぬ。みち〳〵、鉢を開いて通ります。許して下され。▲シテいや〳〵、少しなりとも、金銀のない事はあるまい。是非なくば、著てゐる物脱いでおこせ。▲アドそれは何とも氣の毒でござる。出家のことでござる。慈悲にもなりましよ。勘忍して下され。▲シテどうでも許すことはならぬ。まづ、その衣から脱いでおこせ。おこさぬと、この長刀で打ち切つてくれうぞ。▲アドあゝ、あぶなうござる。進ぜましよ〳〵。さらば取らせられ。▲シテ取らいでならうか。▲アド扨も〳〵、迷惑な事でござる。何といたさう。やあ、兎角騙すに手なしでござる。かやうのところでは、妄語申しても苦しうない。妄語申したばかつて、これに剃刀を持ち合せました。隙を見て、切つてくれうと存ずる。申し〳〵、私は出家の何もない者でござる。著てゐる物を

十　手負山賊

三人　シテ　山賊頭巾、袖なし羽織、半袴
　　　アト　頭巾、衣の下に半袴
　　　女　ゆばうし

▲シテ（舞臺中にて名乘る。）某はこの邊に隱れもない山賊でござる。まことに、若き時分より、親の意見も聞き入れず。唯明暮この年迄、ありたきまゝに身を持ち、勿論商賣も覺えぬ故、この海道に出で、山賊をいたし、渡世を送る。けふもこれに待つてゐて。何者でも通れかし、丸剝にしてくれうと存ずる。まづこれに忍んでゐるよ。▲アド罷出でたる者は、東國方の者でござる。某、いまだ都を見物いたさぬ。この度思ひ立ち、こゝ彼所を見物いたし、それより西國修行致さうと存ずる。まづ急いで參らう。やれ〳〵、皆人の仰せらるゝは、若い時旅をせねば、老いて後、物語もないと仰せらるゝによつて、俄に思ひ立つてござる。やあ、なにかといふうちに、こゝは何所ぢや。何と、美濃國赤坂ぢや。これは

風の文句起伏我手枕より―刊本かくあれど起伏分かて枕より也

ち勝り、起臥我手枕より、後より戀のせめくれば、せん方枕にふし沈む事ぞかなしき。

▲初アド謠いかにや〳〵、祖父御よ。これこそおことの尋ぬる乙御前よ。よく〳〵寄つて見給へとよ。▲シテおう、したり〳〵。謠とくにも出させ給ふならば、かやうに恥をばさらさじものを。あゝらうらめし。地とは思へども、たま〳〵逢ふは乙御前か。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。▲シテなう〳〵、いとし乙御前や、こちへをりやれ〳〵。

天目―茶の湯に用ゐる茶碗
推參―無禮の意
口はすげびて―すげむは齒の脱けたること
すてても置かれず云々―謠曲松

郎が、地藏講でなかつたか。▲後アド なか〳〵、地藏講でござつた。▲シテ それ、兵部三郎には、娘が二人あるわ。▲初アド なか〳〵、ござる。▼シテ 姊にやゝと云うてあるわ。▲初アド さては、やゝがことでござろか。▲シテ いゝや、そのやゝではない。その妹に乙と云うてあるわ。▲後アド あゝ、扨はその乙がことでござるわ。▲シテ なか〳〵。その乙が表に髪を結うてゐたが、この祖父が參つたれば、なう、祖父はやう參つて、地藏の名號でも、唱やらいでのと、云うた顔を見たれば、頤に天目ほどな靨が、五六十もいつたによつて、祖父もこらへかね、乙が尻をふつつりと抓つたれば、其時、乙が、物と云うての。▲初アド 何と。▲シテ 物と。謠 推參の祖父めや、地〳〵。極めて色は黑うして、口はすげびて目は腐り、老いぼれたるか祖父とて、▲シテ かゞみにても、うてかし。地 紅皿にてもうたずして、この枕をおつとつて、祖父が顔を丁と打つ。うたれて目はまくらとなりたれど、只戀しきはおとごぜと、足摺してぞ泣きゐたる。▲初アド 身共は乙を連れて參りましよ。▲後アド なか〳〵。連れてござれ。▲シテ 謠 すてても置かれず。地 とれば面影に立

染殿の后―清和天皇の御母

戀よ戀われ中空になすな戀―この文句謠曲戀重荷の中にもあり

集り給ひ、苦しからぬ御事なり。御文を遣され候へと申さるゝ。上人大きに喜び、御玉章を遣さるゝ。その時の御歌に、初春の初子の今日の玉箒、手にとるからにゆらぐ玉の緒と、ゆらめかして遣されければ、御息所御覽じて、すなはち御返歌なさるゝ。御歌に、極樂の玉の臺の蓮葉に、われをいざなへゆらぐ玉の緒と、これも一ゆらめかし、ゆらめかして御返歌ありしかば、上人悅び給ひ、御返歌を見て、いよ〳〵御心も解け、尊き御身とならせ給ふ。又柿本の紀僧正は、染殿の后を戀ひかね、加茂の御手洗川に身を投げ、青き鬼となつて、その本望を遂げらるゝ。謠ふし 祖父もこの戀叶はずは、何如なる井の中、溝の底へも身を投げて、青き鬼とは、えならずとも、青き蛙とならばやと、思ひ定めて候。戀よ戀、われ中空になすな戀。こひ風が、きては袂にかいもつれての、袖の重さよ。あゝ、南無阿彌佛陀〳〵。▲初アド 申し〳〵、もはや隱させらるゝな。はや御色に出でました。ありやうに仰せられ。▲シテ 何と、色に出た。ありやうに云へ。▲後アド なか〳〵、さやうでござる。▲シテ それなら、ありやうに云はう。それ、先月の廿四日は、辻の兵部三

中うち—中おち

京極御息所—藤原時平の女也此段太平記卷卅七參照

數多抱へさせらるゝと、聞いた程に、この祖父御も、弓の者になりとも、鐵砲の者になり、出うと思ふですわ。▲初アド御恨、御尤でござる。聞けばこの頃、祖父御には、戀をなさるゝと申すが、まことでござるか。▲シテ何と、祖父に鯉をくれう。鯉をくれうなら、魚頭や中うちは、わごりよたちが、よい齒で食うて、身ばかりくれさしませ。▲後アド如何にも、鯉も進じませう。承れば、戀をなさるゝと申すが、まことでござるか。▲シテ何と、祖父が戀をする。なう〳〵、輕忽や〳〵。この百年に及うだ祖父なれば、こひやら鮒やら知り候はぬ。▲初アドいや〳〵、隱させらるゝな。今日參りますも、樣子聞き、何とぞ致し、叶へて進じませうと存じて參りました。有りやうに仰せられませ。▲シテ何と、叶へてやろ。▲二人なか〳〵、さやうでござる。▲シテそれは嬉しうをりやる。さりながら、この祖父は、戀はせねども、昔、戀をした物語がある。語つて聞かさう。ようきかしめ。▲二人心得ました。▲シテ語扨も古、京極の御息所日吉詣の打節、御車の御簾吹き上げし隙より、志賀寺の上人は、只一目御覽じて、靜心なき戀とならせ給ふ。御弟子達

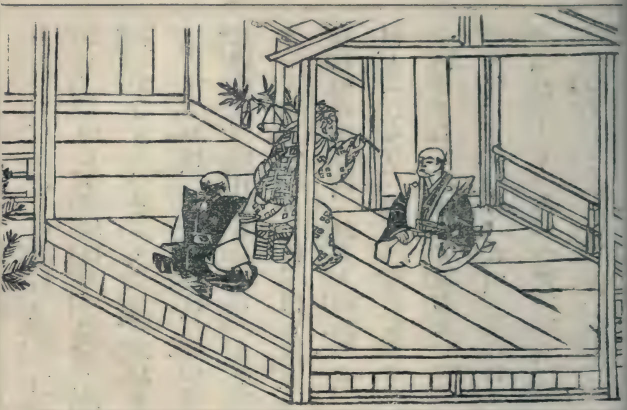
枕の後より―古今集誹諧歌に枕よりあとより戀のせめくればせむかたなみぞ床中に居る

どち風が吹いて―どういふ風の吹廻して

▲初アド 參る程に、これでござる。それに待たせられし。祖父御を呼び出しましよ。▲後アド 心得ました。▲初アド なう〳〵、祖父御。孫どもが見舞に參りましたぞや。▲シテ 謠 枕物にや狂ふらん、地 〳〵。ねるも寢られず起きもせず。ことわりや、枕の後より戀のせめくれば、やすからざりし身の狂亂は、木枕なりけり。▲シテ ありや笹のはりまくら。地 まくらのぬしぞ戀しかりける。乙御前ぞ戀しかりける。逢ふ夜は君の手枕、こぬ夜はおのが袖枕、枕あまりに床廣し。寄れまくら。こちよれ枕。枕さへうとむか。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。▲二人 これ〳〵祖父御。孫どもが御見舞申しました。▲シテ 何とおしやる。孫達が見舞に來たとおしやるか。まづ、床几をくれさしませ。▲初アド 畏つてござる。まづ、これにお腰をかけさせられませ。▲シテ なう〳〵、わごりよたちは、今日はどち風が吹いて、見舞にをりやつたぞ。▲初アド 御恨、御尤でござる。節々御見舞申したうござれども、かれこれと仕り、えお見舞も申しませぬ。▲シテ かれこれと云ふ事があるものか。この祖父は、兩人の孫には見棄てらるよ。聞けば、このごろは、大名衆に、人を

りながら、なにとぞ取持ち、叶へて進ぜうと存ずる。参る程に、これでござる。案内申さう。ものもう。案内も。▲後アド 表に案内がある。誰そ。どなたでござる。▲初アド いや、私でござる。▲後アド よう御出なされた。只今は、何と思召し、御出なされてござる。▲初アド されば、只今参るは、別の事でもござらぬ。此方にも聞かせられたか存ぜぬ。祖父御には、頃日懲をなさるゝと申すが、何と、まことでござるか。▲後アド されば、私もさやうに承りました。何とも氣の毒な事でござる。▲初アド その通でござる。それにつき私の存ずるは、此方と相談致し、何とぞならう事ならば、叶へて進ぜうと存ずるが、何とござらう。▲後アド 身共もさやうに存じてござる。仰せらるゝ通、あれへ参り、様子を聞きまして、叶へて進ぜませう。▲初アド なか〳〵、その通でござる。それなら、いざ参りましよ。▲後アド まづ、こなた先へござれ。▲初アド 参らうか。さあ〳〵、ござれ〳〵。▲二人 なう〳〵、あれへ参つたら、様子を聞きまして、なる事でさへござらば、一つは孝行の爲でもござるほどに、取持つて叶へましよ。▲後アド なか〳〵、さやうでござる。

枕物狂─能の物狂物に擬したる作也



九　枕物狂

シテ　頭巾、祖父の面、腰帶、笹に枕付持

四人　アド　長袴

乙　ゆばうし、面かけ出る

▲初アド　ワキ正面にて名のる　これは此邊に住居いたす者でござる。某祖父御を持つてござるが、承れば、頃日戀をなさるゝと聞いた。何とも年寄られて、氣の毒な事でござる。それにつき、こゝに某の樣な孫に、誰と申すがござる。今日は、是へ參つて相談致し、何とぞならう事ならば、叶へて進ぜうと存ずる。まづあれへ參らう。やれ〳〵、誠に年寄つて、かやうのことは、何とも氣の毒な事でござる。さ

三世南方軍荼利夜叉西方大威德北方金剛夜叉中央大聖不動明王
獨鈷—眞言の僧侶の執る物にて銅製の器也

取つて護摩に焼き給へば、その行法や積りけん、西方大威德のめされたる牛が、比叡の山響けと、三聲までほえ、殘り六番を惟仁の方に勝ち給へば、惟仁御代を御持ちありしとかや。こゝを以て、古人の言葉に、慧亮腦を打てば、次帝位にそなはる言葉は、此時よりの言葉ぞかし。されば、繪にかける牛だにも、人の心を憐みて、比叡の山響けと三聲まで吼ゆるに、いはんや汝は、生れたる牛の皮剝がれめが、今一聲ほえぬものならば、勝負にまくると云ひ、汝にはなるゝと云ひ、主をも持たぬ某に、主をもたすと云ひ、こゝは安否の境なり。心があらば今一聲、答へてくれい横座よ。そりや嘶いた。取つて歸るぞ。▲アド やれ、まづ待て〳〵。牛は取つて行くとも、せめてその綱は返せ〳〵。
▲シテ いや〳〵、ならぬぞ〳〵。

扨も云々―この語り曾我物語卷一第二條參照

競―競馬の事

紀僧正―眞濟と稱す

五大尊―五大明王也卽ち東方降

共も、大事の勝負ぢやによつて、ぬかつてはならぬ。さあ〳〵、も一聲ぢや。呼うでみやれ。▲シテ合點の參らぬことでござる。此中私の側を離れましたによつて、忘れたものでござらう。今一聲が大事のところでござる。ちと待つて下され。宣命を含めましよ。▲アド如何やうともしやれ。啼きはせまい。▲シテ語扨も文德天皇に、二人の皇子おはします。御名をば惟喬惟仁と申しける。御門崩御の後、嫡々にてましませば、惟喬こそ位に卽き給ふべきに、惟仁御代を御持ちあるべきこと、思ひもよらぬ御沙汰なり。然れども、繼母の御計の事なれば、既に勝負に極りぬ。その時の勝負には、十番の相撲、十番の競にてありしよな。いゝや、かやうの大事の御勝負に、御祈禱なくては叶はじと、惟喬の御祈禱人は、柿本の紀僧正、惟仁の御祈禱人は、天台山の慧亮和尚なり。僧正東寺に壇を飾り、肝膽碎き祈り給へば、比なき紀僧正にてましますにより、十番の相撲に、續けて四番、惟喬の御方に勝ち給ふ。惟仁の公卿大臣手に汗握り、比叡山へ頻に御使ありしかば、其時慧亮和尚、五大尊の引立て申し、獨鈷をもつて、なづきをくだき、腦を

むざとした—とりとめなき意

地下の會所—在所寄合

譜代—家來の意

私にくだされ。▲アド わごりよは、むざとしたこと云ふ。牛によつて、似た牛もあらう。其方が牛ぢやと云ふには、何ぞ覺があるか。▲シテ 如何にも、覺がござる。この牛の生れました時、私は、地下の會所にゐましたが、牛が馬屋で、子を生んだと云うて、牛の子を引いて來た。みな〳〵、めでたいことぢやと云うて、そのまゝ、某が横座につけました。それでおれが名を横座と申します。私に懐きまして、身どもの横座よと申して呼べば、答へます。これが證據でござる。▲アド 尤も聞き分けた。それなれば是非に及ばぬ。身共も大分の金銀の出して求めたれども、其方が呼うでみて、答へたらば、この牛をわごりよにやらうぞ。呼うで見やれ。▲シテ 心得ました。さりながら、一聲では、え聞かぬことでござらう。三聲呼びましよ。▲アド それなら、三聲呼うでみやれ。若し答へずは、わごりよを、某が譜代にしてやらうぞ。▲シテ ともかくもでござる。さらば、呼うで見ませう。▲アド さあ〳〵、呼うで見やれ。▲シテ 横座よ。▲アド そりや一つ。▲シテ 横座よ▲アド それ二つ。▲シテ その樣に、せはしなう仰せられてはなりませぬ。▲アド いや〳〵、身

うらかかた—かの字一字衍か占方也
辰巳—東南

ぬ。それ故、うらかかたに占はせてござれば、辰巳の方にあると申す。辰巳の方には、身どもの存じたお方がござる。今日はこれへ参り、たづねうと存ずる。まづ、そろ〳〵参らう。やあ、これは何所へござります。▲アド 扨もよい所で逢うた。わごりよの所へ行くわ。▲シテ それは、何と思召し、お出でなされます。▲アド その事でをりやる。此中、身共は牛を求めた。よい牛か悪いか、其方に目明して貰はうと思うて参るわ。▲シテ 扨は、さやうでござるか。私はまた、こなたの方へ参ります。▲アド それはどうした事ぞ。▲シテ その事でござる。私が牛を、此中盗まれて、見えませぬ。方々尋ねますれども、知れませぬ。占方に占うて貰ひましたれば、辰巳の方にあると申す。私の方より辰巳は、こなたの方でござるによつて、様子尋ねませうと存じて、只今参るところでござる。まづ、こなたの求めさせられた牛は、これでござるか。▲アド なか〳〵、これでをりやる。見てたもれ。▲シテ 心得ました。惣じて、牛の目明と申すは、さま〴〵ござる。見所があつて、よい牛悪いが知れます。やあ、ようみれば、この牛は、私の失うた牛でござる。これは

目明―目利也鑑定也



八　横座

三人　シテ　牛上下、腰帯
　　　アド　長袴、小さ刀、牛引出る

▲アド（ワキ正面にて名乗る）これは、此邊に住居する者でござる。某、頃日牛を求めてござるが、身どもは牛の善惡を存ぜぬ。こゝに、身共の存じた伯樂がござる。これへ引いて參り、目明させうと存ずる。まづ、そろ〳〵參らう。總じて牛と申すは、見掛と違うて、役に立たぬ牛があるものでござる。さやうの事は、私も存ぜぬ。▲シテ　罷出でたる者は、この邊に住む伯樂でござる。此中私の牛を、何者やら盗んで參つた。あなた此方と尋ぬれども知れませ

せり居つた。おのれ何とせう。横著者、やい、起上らぬか〱。▲次いや〱、もはやたべまい。▲主たべまいとは。身共ぢやが。▲次頼うだ人が。許させられ。▲主やるまいぞ〱。やあ、おのれ、まだふせつて居るか。悪い奴の。起きをらぬか〱。▲シテあゝ、酔うたわ〱。もそつと謡はう。ざゝんざあ。▲主やあ、おのれ、まだ、ざゝんざあ。憎い奴の。何とせうぞ。▲シテ頼うだお方、お許されませ。あゝ悲しや。今から飲みますまい〱。▲主何の、飲むまい　やるまいぞ〱。▲シテ許させられ〱。

うせた—行つた

よい氣味ぢや。醉うたわ〳〵。其所へ戻すぞ。もはや取らしませ。▲シテもはや飲まぬか〳〵。▲次如何なこと。ならぬぞ〳〵。納めに、も一つ飲ましませ。▲シテそれなら、も一つ飲うで納めに致さう。まだ一つあるわ。これでは大分ぢや。過ぎるであらう。はあ、うまし〳〵。いかう醉うたわ。次郎冠者、取るぞ〳〵。▲次あ、よう取りやれ〳〵。▲シテ身共もいかう醉うた。さらば、ちと横にならう。▲次何といふ。寢るか〳〵。頼うだ人の留守を言ひ付けられた。寢てはなるまいぞ。やあ、太郎冠者。はや寢たか。音がせぬ。よいとはおしやるまい。はあ、太郎冠者が寢たれば、どうやら身共も眠りかくる。これは堪忍がならぬ。寢やう。▲主太郎冠者、次郎冠者、留守に置いてござる。この度は酒を飲まぬ樣に、別々に致しておいた。いつもとは違ひ、留守をして居るでござらう。まづ、歸らうと存ずる。これは如何な事。壁に穴をあけて、あれからこれへ。これは何ぢや。扨も〳〵、何ともならぬ奴の。樋を仕掛けて、酒を飲みをつたと見えた。太郎冠者、次郎冠者、どちへうせた。これは扨、ふせつて居るか。次郎冠者めも、正體もなう醉うて、ふ

つはものの交云云—謠曲羅生門にあり

又花の春は云々—謠曲熊野の文句

皆になつたぞ—皆無になること

さうか。受けて居るぞ。これ〱、最早あるわ〱。▲シテ何と、飲むか〱。うまい事か。▲次何とも云はるゝ事ではない。覺はない、好い氣味ぢや。一息にはいかぬ。下におかう。いざ、ちつと謠はうまいか。▲シテ一段よかろ。▲二人ざゝんざあ、濱松の音は、ざゝんざあ。▲次さらば、上げうか。さあ飲うだ。これを其所へ差すぞ〱。▲シテ如何にも戴いた。一つたべう。さあ〱、もそつと謠ばしめ。▲二人兵の交、頼ある中の酒宴かな。▲シテあら面白〱。さあ、又そこへだすぞ。▲次いや〱、も一つ重ねて飲ましませ。▲シテいや、大盃ぢや。それでは過ぎる。▲次是非とも飲ましめ。▲シテそれなら、も一つ飲うでやろ。受けもつた。もそつと謠はう。▲二人又花の春は清水の、たゞたのめ、頼しき春もちゞの花ざかり。▲次扨も〱、面白いことぢや。飲うだ〱。▲シテさあ飲うだ。差すぞ〱。▲次戴いた。さあ〱、注いでたもれ。▲シテさらば、つぐぞ〱。▲次おう、あるわ。溢れる〱。つよい酌ぢや。もはや上りかぬるわ。▲シテどうぞして、はやうあげさしませ。大方酒が皆になつたぞ。▲次それなら上げるぞ。さあ飲うだわ。はあ、扨も〱

冠者は、何として居るぞ知らぬ。次郎冠者々々々々、そこに居るか。▲次やあ、太郎冠者か。何と寂しい留守ではないか。▲シテされば〳〵、寂しい事ぢや。身共は、今日も他所へ行かるゝなら、汝と酒を飲まうと思うて、調へて置いたわ。▲次夫は羨しい事ぢや。定めて、最早飲うだであろ。▲シテいや〳〵、一人は飲まれぬ。身共も飲み、そちにも飲ましたいなあ。▲次それは過分な。どうぞ飲む樣に、思案のして見さしめ。▲シテされば、何卒この塀に穴をあけて、差出す樣にしたいが。やあ、こゝに幸な事があるぞ。鼠があけたか、穴がある。是から仕樣があるぞ。さあ〳〵、飲め〳〵。此竹の先をもて。是から樋をかけて、酒を流すぞ。▲次是は出來た。又思案もあるものぢや。まづ、わごりよ飲うで差さしませ。▲シテ夫なら、身共一つ飲うでさすぞ。さあ〳〵、是からさすぞ。酒を流すぞ。受けて居さしませ。▲次心得た。受けて居るぞ。はあ、酒は來るわ〳〵。おう、ちやうどある。おかしませ。飲むぞ〳〵。扨も〳〵かうして飲めば、とりわけ、いつもより旨いわ。さらば、此盃をそこへ差すぞ。▲シテいや〳〵、序にも一つ飲ましめ。又注ぐぞ〳〵。▲次さうも致

みだりにいたす―刊本かくあれど或は亂拂致すの誤か

いかう―甚だ

居ります。▲主 そちを呼び出す事、別の事でない。今日はさる方へ行く程に、よう留守せい。▲次 畏つてござる。兩人共に、よう留守を致しましよ。▲主 いや〳〵、今日は存ずる仔細がある程に、汝は奥の間に一人居て、留守をせい。▲次 これは何とも心得ませぬ。兩人一所に居りまして、留守を致しましよ。▲主 いや〳〵、それはならぬ。太郎冠者は次の間、汝は奥の間に居て、よう留守せい。▲次 畏つてござる。▲主 さあ〳〵、身どもが居るうちに、兩方へはいれ。▲二人 心得ました。▲主 まづ、下にどうと居よ。▲二人 畏つてござる。▲主 よう留守をせい。頓て戻らうぞ。▲二人 頓てお歸りなされませ。▲主 やあ、一段と爲濟した。まづ急いで參らう。▲シテ 扨も〳〵合點の參らぬ事ぢや。終にこの樣な事は、今までない事ぢや。まことに思ひ付けた。留守なれば、兩人酒を飲み、みだりにいたす氣遣さに、この樣に、云ひ付けられたと見えた。是非もない事ぢやまで。▲次 扨も〳〵、いかう淋しいことかな。いつ餘所へ行かるゝとても、兩人一所に留守をするに、けふは何と思うて、この樣に別に置かるゝ知らぬ。太郎冠者は、何として居るぞ知らぬ。▲シテ 次郎

亂舞—らつぷとも云ふ餘興的の歌舞

七樋の酒

三人　主　長袴、小さ刀
　　　二人　半上下、腰帶

▲主（ワキ正面にて名乘る。）これは、この邊の者でござる。某、今日さる方へ用事ありて參る。それにつき、身共の留守になれば、兩人ののさ者どもが、酒をたべ、亂舞など致すと申す。これでは何とも留守が心もとなうござる。今日は、身共がきつと思案をめぐらし、致しやうがござる。まづ呼び出して申し付けう。やい〳〵、太郎冠者あるか。▲シテ はあ、御前に居ります。▲主 早かつた。汝を呼び出すこと、別の事でない。今日は、さる方へ用事あつて行く。よう留守をせい。▲シテ 畏つてござる。御留守は御氣遣なされますな。▲主 それにつき、今日は、身共の存ずる仔細がある程に、汝はこの次の間に、一人留守をせい。▲シテ 畏つてござる　▲主 又、次郎冠者にも云ひ付ける事がある。呼び出せ。▲シテ 心得ました。なう〳〵、次郎冠者召す。▲次 何ぢや 召すか。▲シテ なか〳〵。▲次 心得た。御前に

雁首―太く長くの意にてめでたしと也、原本鳫くい

げて歸らう。▲アド かりがねの、翼や文字を習ふらん。▲シテ 歸雁つらをや亂すらん。▲二人 謡絣あり三段。やら〳〵、めでたや〳〵な。何れの詩歌を聞き合すれど、雁かりがね〳〵と云ふも同じ名の、かりがねと云ふも同じ名なれば、雁首になるこそめでたけれ。

雁門―山名又塞名

蘇武―漢武帝の時匈奴に使し節を守りて降らざること十九年後昭帝の時還るを得たり

平沙の落雁―瀟湘八景の一

御通―通は酒の字の誤寫歟

洛中―都中

舞下り―舞ひ興じて國に下る也

時は、歸雁行をや亂らんと云ふ、この詩の心を思召し、さては野に敵籠れり、急ぎ搜せとありしかば、とある所に、敵籠りゐたるを搜し出し、討取り平げ給ふも、ひとつに雁の威德なり。又秦の始皇殿には、雁門なくては住み難し。蘇武が胡國にありし時、雁に文をことづくる。それより文を雁書といひ、使を雁使と名づくるなり。歸雁、素雁、平沙の落雁とこそ申せ、やはか、歸雁金、そ雁金とは候まじ。▲奏者 兩人ともによう申し上げた。それに待て。兩國の百姓かくの如く、はあ〳〵。やい〳〵、唯今の段々申し上げれば、仰せ出さるゝは、奇特にめでたい仔細ども申し上げたとあつて、殊の外御機嫌ぢや。いつは下されねども、この度は御通を下さるゝほどに、三杯づゝ食べて、その後、洛中を舞ひ下りにせいと仰せ出されたわ。▲二人 はあ、それはありがたい仕合でござります。▲奏者 さあ〳〵、これへ寄つて飲め〳〵。▲二人 これは慮外でござります。▲奏者 最早暇下さるゝ。下りませい。▲二人 畏つてござる。又明年參りましよ。▲シテ なう〳〵、何とよい仕合ではないか。▲アド されば〳〵、思ひもよらぬ仕合ぢや。いざ、めでたう和歌をあ

薄墨に云々―後拾遺集に「薄墨に書く玉章と見ゆる哉霞める空に歸るかりがね」

ある詩に―白樂天の作

雁青云々―原本鴈精天に天ち一行に作る

兵者云々―孫子に鳥起者伏也とあり

い、▲アド 畏つてござる。さら〳〵。▲奏者 やい〳〵、兩國の百姓ども、それへ出ませい。▲二人 はあ ▲奏者 汝等が年貢を見れば、どれ〳〵も皆雁さうなが、一人はかりと云ふ、又一人はかりがねと云ふは、どうした事ぢや。▲アド さればでござります。私のかりがねには、仔細がござります。申し上げましよ。▲奏者 なか〳〵、仔細があらば、急いで申し上げ。▲アド 畏つてござる。語 扨も、住吉の神主國基の御歌に、薄墨にかく玉章もみゆるかな。仙洞これを聞召し、それより住吉の神主を、薄ずみの神主と名づけ給ふ。又ある詩に曰く、風白浪を翻へせば花千片、雁青天に點じ字一行。月は都、花は越路やまさるらん、秋來て春はかへるかりがね。その外、雲井のかりがね、上の空のかりがねと申して、なんぼうめでたきものにて候。▲奏者 ようこそ申し上げた。さあ〳〵、汝も申し上げい。▲シテ 私は雁をかりと申し上げましたれば、申し上ぐる仔細はござりませぬ。さりながら、雁につけまして、めでたい仔細がござる。申し上げましよ。語 扨も、八幡太郎義家、安部の貞任を追伐のため、東へ下り給ふ。武藏野を御通ありし時、雁一群翼を亂す。兵者野に伏す

何かと云ふ内に、身共の御館はこれぢや。▲アド 扨は、さうか。身共の御館も爰ぢや。▲シテ これは思合うた事ぢや。何と、お奏者は極つてあるか。但、時のお奏者でをりやるか。▲アド なか〳〵。時ので申すわ。▲シテ それなら、身共から上げうか。▲アド 如何にも、上げさしませ。▲シテ 心得てをりやる。ものもう。やあ、まだ奥にござるさうな。物もう。▲奏者 何者ぢや〳〵。▲シテ はあ、私は、大和の國の御百姓でござる。毎年の如く、初雁を御年貢に差上げます。上へは、お奏者の御心得を以て、宜しう仰上げられて下されませい。▲奏者 ようこそ持つて參つた。御藏の前へ納めませい。▲シテ 畏つてござる。さら〳〵〳〵。なう〳〵、河内の、をりやるか。▲アド なか〳〵、これに居るわ。▲シテ 身共は上げた。其方も上げてをりやれ。▲アド 心得てをりやる。物もう〳〵。▲奏者 何者ぢや〳〵。▲アド はあ、私は、河内の國の御百姓でござる。毎年御年貢に初雁を。▲奏者 何と云ふわ。最前大和の者が上げたわ。▲アド はあ、さやうでござるか。扨は出しぬかれた。何としやう。申し〳〵、私のはかりがねでござります、▲奏者 何と云ふ。かりがねぢや。御藏の前へ納めませ

名代にさゝれて—在所の代理人に指定せらるゝ也

致さう。なう〳〵、これ〳〵。▲シテ こちの事か。何事ぞ。▲アド なか〳〵、其方の事ぢや。わごりよはどれからどこへ行くぞ。▲シテ 身共は大和の國の御百姓でをりやる。上堂へ御年貢を持つて上るわ。▲アド それは幸の道連ぢや。身共は、河内の國の御百姓ぢやが、其方の如く、御年貢を持つて上る。よい連ぢや。いざ、同道して上らう。▲シテ なか〳〵似合うた連ぢや。同道致さう。さあ、其方が先ぢや。先へおいきやれ。▲アド 先とおしやるほどに、參らうか。▲シテ なか〳〵。▲アド さあ〳〵、をりやれ〳〵。▲二人 なう〳〵、假初に言葉を掛けて、わごりよも百姓、身共も百姓、よい連でをりやるの。▲シテ 其方のおしやる如く、これほどよい連はあるまいぞ。あはれ、御館もひとつであれかし。下りにも同道致さうもの。▲アド さうでをりやる。やあ、其方の御年貢は何でをりやるぞ。▲シテ されば、身共も、所の名代にさゝれて參る。何やら知らぬ。まづ其方の御年貢は何ぞ。▲アド 身共は、毎年初雁を御年貢に上げるわ。▲シテ それはめでたい事でをりやるの。さあ〳〵、をりやれ〳〵。身共の御館も、やがてでをりやるわ。▲アド 某の上堂も近うをりやる。▲シテ

奏者―取次役なり奏の字武家の世に僭して用ゐたり

上堂―領主の館

六　雁かりがね

三人　シテ　半上下、腰帯
　　　アド　半上下、腰帯
　　　奏者　長袴、小さ刀

▲奏者（ワキ正面で名乘る。）某は、今日の御奏者でござる。何事も、御取次致さうと存ずる。▲アド 罷出でたる者は、河内の國の御百姓でござる。毎年上堂へ、年貢に初雁を差上げます。當年も相變らず、差上げませうと存ずる。まづ急いで上らう。やれ〳〵、この如くに私も息災で、毎年々々御年貢を納むるは、めでたい事でござるが、今日はさびしい。この所に待つて、よい道連があらば、同道して參らうと存ずる。▲シテ これへ出でたる者は、大和の國の御百姓でござる。毎年上堂へ、御年貢に初雁を差上げます。當年も、相變らず持つて上らうと存ずる。まづそろ〳〵參らう。まことにこの如く、相變らず御年貢を納むるは、めでたい事でござる。▲アド やあ、これへ一段の者が參つた。言葉をかけ、同道

平等院—天台宗にて三井寺に屬す

埋火の云々—頼政辭世の歌「埋木の花咲く事もなかりしにみのなる果はあはれなりけり」のもぢり

ちやちかくれ—たちかくれのもぢり

地 これまでと思ひて、平等院の縁の下、是なる砂の上に、團扇を打敷き、衣ぬぎすて、座を組んで、さすが名を得し通圓が。▲シテ 埋火の燃立つ事もなかりしに、湯のなき時は泡も立てられず。地 後とひ給へ、御僧よ。かりそめながら是とても、他生の種の縁に、今うちはの砂の草のかげに、歸るとてうせにけり。後ちやちかくれ失せにけり。

戀しや」をもぢる

お茶方の―「うたかたの」のもぢり

まほし―まぼろしか

名乘もあへず―以下總て曲にかかる

ば、法體の身として、柄杓を腰に差し、まほしの如く見えたまふは、いかなる人にてましますぞ。▲シテ これは古此所にて、茶をたて死にせし、通圓といふ茶屋なり。▲ワキ詞 扨は通圓の幽靈なるかや。最期のありさま語り給へ。後を弔ひ申すべし。▲シテ詞 さあらば、その時のありさま語り申さん。後をとうて給り候へ。▲シテ詞 さるほどに、宇治橋の供養、今を半と見えしところに、都の道者と打ち見えて、通圓が茶を飲み盡さんと、名乘もあへず三百人、地 〳〵、口あきを廣げ、茶を飲まんと、群れ入る旅人に、大茶をたてんと、茶杓を押つ取り、挽屑どもを、ちやちやつと打ち入れて、浮きぬ沈みぬ、たてかけたり。▲シテ 通圓下部を下知していはく、地 水の逆巻く所をば、砂ありと知るべし。弱きものには柄杓をとらせ、強きに水を擔はせよ。流れんものには茶筅の持たせ、互に力を合すべしと、只一人の下知によつて、さばかりの大場なれども、一騎も殘らず、たてかけ〳〵、ほさきを揃へて、こゝを最後とたてかけたり。さるほどに、入り亂れ、我も我もと飲みければ、通圓が頼みつる、茶碗火入もうち破れば。▲シテ これまでと思ひて。

道登始めて作る

通圓—元宇治の百姓にて古川通圓と云ひ代々續けりと云ふ

逆緣—始より弔はんと思ふを順緣と云ひ事の序に弔ふを逆緣と云ふ

おもひよるべの云々—以下曲がかり

大場云々—頼政の「紅波楯を流し白刃骨を碎く世を宇治川の網代の波あら閻浮

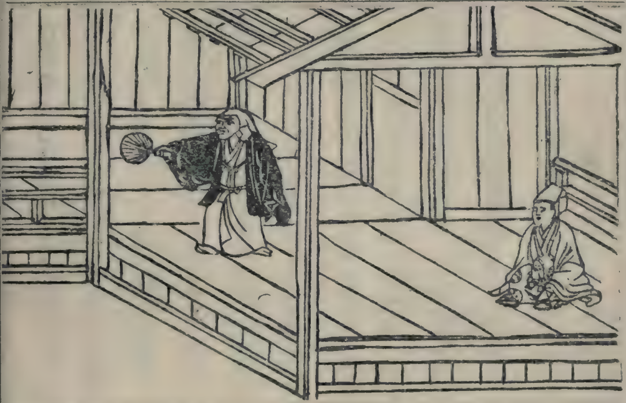
を見れば、茶湯を手向け置かれて候。いか樣、いはれのない事はござあるまい。所の人に尋ね申さばやと存じ候。所の人の御座候か。▲間 所の者と御尋ねは、如何樣なる御事にて候ぞ。▲ワキ これは、坂東方の者にて候。この所初て一見仕り、これなる茶屋を見れば、茶湯を手向け、由ありげに見えて候。いはれの無いことは候まじ。敎へて給はり候へ。▲間 さん候。あれは、古通圓と申す茶屋坊主のござ候が、茶を立死にいたされ候。所の者痛しう存じ、今に、命日には茶湯を手向け、弔ひ申し候。御僧も、逆緣ながら弔うて、お通りあれかしと存じ候。▲ワキ 懇に御物語、滿足申し候。さらば立越え、弔うて通らうずるにて候。▲間 また御用もあらば、重ねて御申し候へ。▲ワキ 頼み申さうずるにて候。▲間 心得ました。▲ワキ おもひよるべの茶屋の內〳〵、筵も古きこの床に、破れ衣を片敷きて、夢の契を待たうよ〳〵。▲シテ 大場たて飮まし、客人胸につつむ、よを宇治川の水くみて、あら昆布戀ひしや。お茶方の、あはれはかなき湯の中に、地 鑵子の鉉のあつきにも。▲シテ にゆる茶の湯はおもしろや。▲ワキ ふしぎやな。まどろむ枕の上を見れ

通圓―謡曲賴政をもぢりたる作也

次第―謡ぶし

大水の云々―道行の文句曲がかり也空也上人の歌を引けり「大水の先（或は山川の末）に流るる橡殼もみ（實に身を掛く）を捨ててこそ浮む瀨もあれ」

宇治橋―宇治川架す大化年間



五　通圓

三人　シテ　沙門頭巾、十徳、面かけ、團扇持
　　　ワキ　水衣、布頭巾、半袴、珠數持
　　　アヒ　長袴、小さ刀

▲ワキ次第　ほろりとしたる往來の〳〵、茶替のなきぞ悲しき。詞　これは、坂東方の者でござる。某未だ宇治の里を見ず候程に、この度おもひ立ち、宇治の里へと心ざし候。大水の先に流るゝ橡殼も〳〵、身を捨ててこそ浮むなれ。我も身をすて浮まんと、漸う急ぎ行く程に、宇治橋の橋のはし柱の、擬寶珠のもとに著きにけり。詞　急ぐほどに、これは早宇治の里に著いてござる。これなる茶屋

ほろおん ▲シテ ほよん〳〵。

印—呪文を唱へて指を色々の形に組み合すこと祈禱の法也

明王—不動明王

さつく—索也繩のこと

と云つぱ、眞黑に染めたる布を、襞を折り頭に戴く故に、兜巾と申す。又此珠數は、むざとしたる珠數玉を繋ぎて、苛高の珠數と名づく。かほど尊き山伏が、一祈いのるものならば、などか奇特のなからん。ぼろおん〳〵〳〵。いろはにほへと、ぼろおん〳〵。▲太 ほほん。▲シテ なう〳〵、今の聞きやつたか。何やら鳥の鳴く眞似をした。何と思ひ當る事はないか。▲兄 されば、此中山へ參りました時、梟の巣落し致したと申しましたが、若し梟が憑きましたか存じませぬ。▲シテ それ〳〵、今のは梟の鳴く聲、はや氣遣しやるな。梟の嫌ふ烏の印がある。これを結びかけ祈つてやろ。▲兄 それは忝うござります。▲シテ 如何に惡心なる梟なり共、今一祈祈るなら、などか奇特のなかるべき。ぼろおん〳〵〳〵。橋の下の菖蒲は、ぼろおん〳〵、誰が植ゑた菖蒲ぞ。ぼろおん〳〵。▲太 ほゝん。▲兄 ほゝん。▲シテ これは如何な事。又兄にうつり居つた。扨も〳〵氣の毒な事かな。待ておのれ。▲シテ 如何に、あなたへ移り、こなたへ移る梟なりとも、明王のさつくにて祈るなら、などか奇特のなかるべき。ぼろおん〳〵〳〵。ちりぬるをわか。ぼろおん〳〵

を澄ます所に云云を云ふを例とす

ほうけましてー失神すること

別行の仔細ー特別の修行祈禱をなせること

一加持してー加持は祈禱也

別義でもござりませぬ。私の弟の太郎を御存じでござりますか。▲シテ なか〱、存じたが、何とした。▲兄 此中、山へ柴を刈りにやりましたれば、殊の外ほうけまして、只うつかりとなりました。御大義ながら、おいでなされまして、御祈禱なされ下されますならば、忝うござりましよ。▲シテ それは氣の毒な。不憫なことぢや。この間は別行の仔細あつて、何方へも參らねども、そなたが事ぢや、行てやらうまで。▲兄 それは忝うござります。かうござつて下されませ。▲シテ なう〱、何と太郎は、只うつかりと計して、物も云はぬか。▲兄 さやうでござる。時々、鳥の鳴く樣な事ばかり申します。▲シテ それは不憫な事ぢや。▲兄 何かと申しますうちに、これでござる。まづ、かうお通りなされませ。▲シテ 心得た。何と太郎は何所許にゐるぞ。▲兄 奥に居ります。連れて參りましよ。▲シテ 連れてをりやれ。▲兄 畏つてござる。これでござります。▲シテ これは殊の外うつかりとした體ぢや。まづ脈をとつて見やう。これは殊の外な邪氣ぢや。一加持してやろ。▲兄 忝うござります。▲シテ それ〱、山伏と申すは、山に寝起をする故に山伏と名づく。兜巾

梟山伏—一名梟

先達—山伏。

ふしぎの窓の前—この句曲にかゝる謡曲にては九識の窓の前十乘の床のほとりに瑜伽の法水をたゝへ三密の月

四 梟山伏

三人 シテ 頭巾、篠懸、水衣、半袴
冠者 下ばかり長袴
兄 半上下、腰帯

▲兄 ワキ正面にて名乘る。 罷出でたる者は、この邊に住居する者でござる。某弟を一人持つてござるが、此中山へ柴刈にやつてござれば、何と致したやら、唯うつかりとなり、鳥の鳴く樣なことを、時々申す。何とも氣の毒な事でござる。それにつき、爰に私に目を懸けらるゝ先達がござる。今日はこれへ參り、樣子を申して、物の憑いたことならば、祈りのけて貰はうと存ずる。まづ急ぎ參らう。扨も〳〵、氣の毒な事でござる。參る程にこれぢや。案内申さう。如何にこの内へ、案内申し候。▲シテ ふしぎの窓の前、十帖の床のほとりに、ゆがの法水をたゝへ、三日の月を澄す所に、案内申さんと云ふは誰そ。▲兄 私でござります。▲シテ やあ、わごりよは、何と思うておでやつたぞ。▲兄 唯今參りますは、

盗人に償―盗人に償錢とも盗人に償うつとも云ふ

五百八十年七廻―長命の祝言

かることをや申すらん。▲二人 それ世のつねのならひには、ぬす人をとらへては、斬るこそ法と聞くものを、此盗人は、さはなくて、連歌に好ける徳により。▲シテ 太刀。▲アド かたな。▲二人 たびにけり。これかや。ことのたとへにも、盗人に償と云ふことは、かゝることをや申すらん〳〵。▲シテ なう〳〵、其方と身どもが命は、五百八十年。▲アド 七廻。▲シテ 近頃めでたい。こちへをりやれ〳〵。▲アド 心得た〳〵。

おますぞ—進ずるぞ
斟酌—辭退
げにや云々—申すちん迄謡ぶし

まで。何ぞ取りに參つたかと、思召す御心中が恥しうござる。▲亭 さあ〳〵、一つづつ飲ましませ。もう取らうか。▲二人 なか〳〵。最早下されますまい。▲亭 それならとるぞ。▲二人 なか〳〵。▲亭 この太刀は、持ち古したれど、わごりよにおますぞ。▲シテ それは、思ひも寄りませぬ事でござる。斟酌申しませう。▲亭 いや〳〵、身共が、心得があつてのことぢや。取つてをりやれ。▲シテ それなら戴きましよ。辱うござる。▲亭 これ〳〵、この刀は重代なれど、そなたにやるぞ。▲アド これは、私にまで辱うござる。戴きましよ。▲亭 なう〳〵、かやうに致すは、重ねておでやらば、表から案内云うておでやれ。夜中に裏からおでやれば、氣遣致す程に。▲シテ 如何にも、畏つてござる。最早兩人が參らぬからは、別に參るものもござるまい。お氣遣なされますな。▲亭 定めて窮屈にあらう程に、身共ははいるぞ。ゆるりと休んで歸りやれ。▲シテ 心得ました。▲シテ 扨も〳〵、これは思の外なことぢや。これと申すも、天神の御納受であらう。この樣なめでたい時には、謡をうたうて歸らう。▲アド よからう。▲シテ げにや和歌の言葉にも、鬼神までも納受とは。▲アド か

天神も云々―稱美する也、菅公は歌の神なればいふ

酒を一つ申さう―申さうは進ぜうの意

した。さあ〳〵、出て云はしませ。▲アド 其方おしやれ。▲亭 急いで申せ。▲アド 時雨の音を盗む松風と致しましたが、まだ楊枝一本取りは致しませぬ。▲亭 はあ、これは、盗人の中でも、優しいことぢや。某も好きぢやほどに、第三の致さう。▲二人 それは一段ようござりましよ。定めて出來ませう。▲亭 闇の頃月をあはれと忍び出でとしたわ。▲シテ 天神もなりますまい。扨も出來ました。▲亭 さあ〳〵、四句目つけたらば、句柄によつて助けてやらう。▲アド 早う云はしめ。▲シテ かうも云はれましよか。▲亭 何と。▲シテ 覺むべき夢ぞゆるせ鐘の音。▲亭 これは一段出來た。最早許すぞ。歸れ〳〵。▲シテ 辱うござる。ちと其所をのいて下され。▲亭 心得た。やあ、誰ぞと思うたれば、わごりよ達か。それならそれとおしやらいで。▲シテ 私はまゐるまいと申したれど、こゝな人が、無理に連れて參りました。鋸まで持つて參られました。▲亭 扨々、なか〳〵のことぢや。唯今の間窮屈にあらう。酒を一つ申さう。▲シテ いや〳〵、たべたうござらぬ。唯歸して下され。▲亭 いや、是非とも申さう。下に居りやれ。さらば一つ參れ。▲シテ 扨々辱い。殊にお酌

脇—第一句が發句にて第二句が脇也以下第三第四と云ふ

致さうか。がうもあらうか。▲アド何と。▲シテ梢散り顯れやせん下紅葉と、致した。▲アド一段と出來た。さりながら、ちと差合がある。▲シテいや〳〵、發句に差合はあるまい。▲アド今宵これへ來たにつけて、顯れやせんか、差合ぢや。▲シテいや、顯れやせぬぢや。▲アドこれはよう直つた。さらば脇を致さう。▲シテよかろ。▲アド時雨の音を盜む松風。▲シテ一段出來てをりやる。▲亭主やあ、座敷が賑かな。誰ぞあるか。やあ、盜人がはいつたぞ。表へ人を廻せ。爰は身共が防ぐぞ。▲シテ申し〳〵、盜人ではござらぬ。▲亭何者ぢや。▲シテいや、お座敷を見物に參りました。▲亭夜中に見物とは。唯一打にしてくれうぞ。さりながら、何やら最前、聲高に云うたは何事ぢや。▲シテさあ〳〵、其方いはしませ。▲アド此方おしやれ。▲シテその事でござる。まづお座敷を見物に參つた所に、これに懷紙がござつた程に、それに添へ發句を致してござる。▲亭それは優しい。何とした。▲シテまづ懷紙を見ますれば、水に見て月の上なる木の葉かなと、ござつた程に、梢散り顯れやせん下紅葉と、致しましたれば、こゝに一人小盜人がござります、脇を致しま

懐紙―連歌を認めたる也
移徙―引越

うかと存じて、鋸を用意致した。まづ縄節を切らう。まづ縄を切りほどいた。さらば、垣を破らう。▲二人 めり〳〵〳〵。扨も〳〵夥しう鳴つた事かな。されども、誰も聞かぬと見えて、出合ふ者もない。まづ心安い。さ、垣を潛らう。▲アド 一段よからう。▲シテ 嬉しや、潛りました。これに戸が立ててある。この戸をあくれば座敷ぢや。いざ開けう。さら〳〵。これは火が點してある。誰ぞ人があるか。人も無いさうな。扨は有明を置かれたと見えた。まづ心安い。さらば、はいらう。さあ〳〵、ござれ〳〵。これ〳〵、見させられ。見事さうな道具が竝べてある。風呂、釜、茶入、茶碗、どれもよい物さうな。▲アド これは、どれを一色とつても、大分の物であらう。▲シテ その通ぢや。やあ、これに懐紙が掛けてある。何日の懐紙ぢや。十月朔日とあるは、移徙の連歌さうな。▲アド 何としてある。見さしめ。▲シテ 水に見て月の上なる木の葉かなとあるわ。さらば、これに添へ發句致さう。▲アド 一段よからう。この様な所で、遂に連歌をしたことがない。まづ下にどうと居さしませ。▲シテ さらば、此方めされ。▲アド いや〳〵、まづ此方めされ。▲シテ それなら身共

仕合いたしたら―又こちらが仕合よくなりたる曉には

れは一段の事を思ひ立たせられた。内々、身共も、さやうに存じてござる。▲シテ 扨はさやうでござるか。それなれば、二人の分別が合うてござる。又誰殿は、兩人ともに見知つて居られます程に、自然見え當りたりとも、別の事もござるまい。▲アド さうでござる。最早日も暮れかゝります。いざ、そろ〳〵參らう。▲シテ なか〳〵。よい時分ぢや。この樣なことは、宵からつけたがよいと云ふ。いざ、參らう。▲シテ なう〳〵、只今何ぞ取つて參りたとまゝよ。仕合いたしたら、また返しましよ。▲アド なか〳〵、さやうでござる。▲シテ 何かと云ふ中に、これでござる。これは頃日普請致されたか、結構になりました。これでは、なか〳〵、表からはいられますまい。いざ、裏へ廻りましよ。▲アド ようござろ。▲シテ これ〳〵、まだ半造作ぢや。塀の手があはぬ。いざ、此塀を越しましよ。此方も越させられ。▲アド 心得ました。先へ越させられ。▲シテ 越されうか知らぬ。さらば越して見ませう。嬉しや、まんまと越した。▲アド さらば、身共も越しましよ。嬉しや〳〵、越しました。▲シテ やあ、これに葦垣がある。破りましよ。これ〳〵、この樣なものも入ら

かいしき―食器の中に敷く物

預りて―盗むことをわざと預ると云へり

らぬ。やあ、參るほどにこれでござる。ものもう。案内も。▲アド やあ、表に案内とある。
どなたでござる。▲シテ いや、私でござる。▲アド やれ〳〵、ようこそお出なされた。定
めて近日の當番につき、お出でござらう。▲シテ なか〳〵、その通でござる。何と、此方
には、何ぞ用意をなされたか。▲アド いや、私は只今まで、何も調へも致さぬ。若しかい
しきが、いらうかと存じ、用意致しました。▲シテ いや〳〵、それでは埒が明きますまい。
身共は又、若し杉楊枝がいらうかと存じ、調へました。▲アド さては身共同前でござる。こ
の分では、なか〳〵、當を營むことはなりますまい。▲シテ されば、私もさやうに存じて、
今日は此方と相談に參つた。いかにねんごろな中ぢやと申して、云ひにくい談合のござ
る。▲アド これは、なんと改つた事でござる。何なりとも、遠慮なう仰せられ。▲シテ それ
ならば申しましよ。何の誰殿は、隱れもない分限者でござるとの。▲アド なか〳〵、さや
うに申します。▲シテ 身共の存ずるは、とかくこの樣に申しては、なりますまい程に、今
夜あれへ忍び入り、何ぞ一色預りて參り、當を營まうと存ずるが、何とござらう。▲アド こ

初心講—連歌を稽古する寄合



三　盜人連歌

三人　シテ　半上下、腰帶
　　　亭主　長袴、小さ刀
　　　アド　半上下、腰帶

▲シテ（脇正面にて名乘る。）これは、この邊に住居する者でござる。某頃日若い衆と、初心講を結んでござるが、近き中に、身共の當番でござる。手前貧しい某が事なれば、何を一色調へも致さぬ。又身共一人でもござらぬ。こゝに誰と申して、懇致す人に、合當がござる。今日はそれへ參り、相談致して見やうと存ずる。まことに手前何ともならぬ身代で、いらぬことでござれども、好の道なれば是非もござ

同じか無用にせい—同じ事ならいつそよせとの意

おれ—汝

まゐつの—「まゐつたの」なるべし

▲シテ やい〳〵、太郎冠者。▲冠者 何事でござる。▲シテ 同じか無用にせいと云へ。▲冠者 畏つてござる。なう〳〵、それなら取らうと仰せらるゝ。身拵してお出やれ。同じくは無用にしやれ。▲取手 いや〳〵、是非とも取りましよ。▲冠者 また私の行司致じましよ。お手つ。▲二人 やあ〳〵〳〵。お手つ。参つたの。シテ負ける。▲シテ 相撲の書、何の役に立たぬものぢや。やあ、おれはまだこゝにをるか。▲冠者 いや、私は太郎冠者でござる。▲シテ 何の太郎冠者。お手つ。まゐつの。小股とり打ちこかし、樂屋へ入るなり。

はらせらるゝ——打擲せらるゝ

ざる。お手つ。▲二人やあ〳〵。▲シテやあ〳〵。さあ〳〵、勝つたぞ〳〵。▲冠者お勝ちなされました、〳〵。▲取手これ、なう〳〵、太郎冠者どの〳〵。▲冠者呼びます。行て参りましよ。▲シテいてこい。なるまいと云へ。▲冠者何事でをりやる。▲取手相撲の手は、数多ござれども、只今の様に、拳をもつて、はらせらるゝ手は、何と申す手ぢや。問うて下され。▲冠者心得てをりやる。申しますは、相撲の手は数多ござるが、只今の様に、拳をもつて、はらせらるゝ手は、何と申す手ぢやと申します。▲シテあれへ行て云はうは、相撲の手は、砕けば百手にも二百手にも取る。中にも只今の手は、都方にはやる、はつてはり廻すはり相撲、どうなりとも取りたい様に取れと云へ。▲冠者畏つてござる。なうなう、只今仰せられたを、お聞きやつたか。▲取手なか〳〵、これで一々聞きました。その義なら、今一番取りましよと仰せられ。▲冠者心得た。その通申してござれば、さやうでござるなら、今一番とりませうと申します。▲シテ何と、今一番取らうと云ふか。さては、負腹を立て居ると見えた。是非に及ばぬ。取らうほどにこれへ出せ。▲冠者畏つてござる。

くら／＼とした―眩むこと

坂東方―關東地方

ずでいどう―投げ付くること

やつと云うて手合をすると否や、はつし／＼と打つてきたれば、眼がくら／＼とした。何といふ手ぢや。問うて來い。▲冠者 畏つてござる。なう／＼、今の手は何と云ふ手ぢやと仰せらるゝわ。▲取手 只今の手は、坂東方にはやる、目隱と申す手ぢやと仰せられ。▲冠者 心得た。只今の手は、坂東方にはやる、目隱と申す手ぢやと申します。▲シテ 何ぢや、目隱と云ふか。▲冠者 なか／＼。▲シテ いつぞや、伯父者人から來た相撲の書があらう。取つて來い。▲冠者 畏つてござる。相撲の書でござる。▲シテ これが書か。書いたものは調法ぢや。なに／＼、相撲の／＼、これは何ぢや。▲冠者 私も讀めませぬ。▲シテ 相撲の書のことでがなあらう。▲冠者 さやうでござりましよ。▲シテ 何々、相撲の書の事。一つ、目隱、ちやうと打つ、その時顔をひくべし。やい／＼、今の時顔を引けばよいもの。▲冠者 さやうでござる。▲シテ 一つ、右をもつて左へ廻し、左を以つて右へ廻し、小股にかけて、ずでいどう。やい／＼、も一番取らうと云へ。▲冠者 畏つてござる。なう／＼、も一番取らうと仰せらるゝよ。お出やれ。▲取手 心得ました。▲シテ 太郎冠者、行司せい。▲冠者 畏つてご

臑が流れうーよろめくこと

▲シテ もはや、臑が流れうなあ。やあ、汝とれ。▲冠者 いや、私は終にとつた事がござらぬ。

▲シテ やあ、弱い奴ぢや。相撲は見たし、相手はなし。是非に及ばぬ、身共が とらうが。

取るか問うてこい。▲冠者 畏つてござる。なうく、相撲取も数多あれども、折節方々へ

遣された。それゆゑ、頼うだ人の御取りなされうと、仰せらるゝが、とりやろか。▲取手 な

かく、お相手に嫌はござらぬ、取りましよと仰せられ。▲冠者 心得た。お相手に嫌はな

い、取りましよと申します。▲シテ 何と、取らう。さては彼奴が相撲も知れた。身共に勝

つたらば、誰か扶持をせう。勿論負けたらば、尚扶持をせまい。是非に及ばぬ、とらず

はなるまい。身拵して出よといへ。▲冠者 畏つてござる。さあく、身拵して出やれ。▲取手

心得ました。▲シテ やいく、太郎冠者、身拵せい。身拵がよくは出よと云へ。▲冠者 畏つ

てござる。さあく、拵がよくは出やれ。▲取手 心得ました。▲シテ 太郎冠者、行司をせ

い。▲冠者 畏つてござる。御手つつ。▲二人 やあくく。シテ負ける。▲冠者 これ、申しく、何

となされました。太郎冠者でござる。何となされましたくく。▲シテ さても早い相撲ぢや。

得てゐる—手に入つてゐる、得意ある

が。▲冠者 なか〳〵。▲シテ それは萬能の奴ぢや。さりながら、その中に何ぞ、得てゐる藝はないか、問うて來い。▲冠者 畏つてござる。なう〳〵、其方の藝のうちに、何ぞ得てゐる事はないかと仰せらるゝわ。▲取手 中にも、相撲をえて取ると仰せられ。▲冠者 心得た。中にも、相撲をえて取ると申します。▲シテ 何と、相撲を、えて取る。▲冠者 なか〳〵。▲シテ 彼奴は、身共に生れ合うた奴ぢや。それなら相撲を見やう程に、是へ出て取れと云へ。▲冠者 畏つてござる。なう〳〵、相撲を見やうと仰せらるゝ、出て取りやれ。▲取手 如何にも、取りましよ程に、御相手を下されと仰せられ。▲冠者 心得た。如何にも取りましよほどに、御相手を下されと申します。▲シテ はてさて、獨出てとれと云へ。▲冠者 畏つてござる。獨とれと仰せらるゝ。▲取手 いや、獨取りましては、勝負が知れませぬ。御相手を下されとおしやれ。▲冠者 心得た。獨とりましては、勝負が知れませぬ。是非御相手を下されと申します。▲シテ 何と、勝負が知れぬ。これも尤ぢや。それならば、誰と取らせうぞ。風呂をたく道雲と取らせうか。▲冠者 いや、あれは年寄りまして、え取りますまい。

逗留—滞り
奥—奥州
かゝり—蹴鞠の庭
利根—怜悧
路次—途中

又御氣に入らずは、逗留があらうと云うて、これは汝が言分にして、彼奴に深う思はせ。▲冠者 畏つてござる。なう〳〵、をりやるか。▲取手 なか〳〵、これに居ります。▲冠者 頼うだお方、只今廣間へ出させられた。あれへ出て目見えをしやれ。御目が參つたら、當分に御見參であろ。又御氣に入らずは、逗留のある事があらう。さう心得て出やれ。▲取手 心得ました。▲シテ やい〳〵、太郎冠者、あるかやい。▲冠者 はあ。▲シテ 侍衆に、ただ居られうより、矢の根を磨かれと云へ。▲冠者 はあ。▲シテ また中間共には、頃日奥から引かせた、百匹ばかりの馬の湯洗をさせい。▲冠者 はあ。▲シテ 今日は天氣がよい。若い衆の鞠をなされうほどに、かゝりへ水をうたせておけ。▲冠者 はあ、新座の者でござる。▲シテ 彼奴か。▲冠者 なか〳〵。▲シテ とつと利根さうな奴ぢや。さりながら、見たと違うて、鈍な奴もあるものぢや。何ぞあれに、藝は無いか、問うて來い。▲冠者 それは路次で尋ねましたれば、かやうなものも、藝になりましよかと申します。▲シテ 何ぢや。▲冠者 弓、鞠、庖丁、碁、双六、馬の伏せ起し、やつと參つたを覺えて居ると申します。▲シテ あの、彼奴

鞠―蹴鞠
庖丁―料理
双六―碁の類也賽の數によりて石を送り勝負を決す
やつと參つた―相撲などの勝負事
萬能―多くの藝能を心得ること

▲取手 弓、鞠、庖丁、碁、双六、馬の伏せ起し、やつと參つたを覺えました。▲冠者 さても
さても萬能の人ぢや。その通申したらば、お氣に入るであらう。さあ〱、早うをりやれ。
やあ、何かと申すうちに、これぢや。其方を同道した通申さう。それに待ちやれ。▲取手 心得ました。▲冠者 賴うだお方、ござりますか。太郎冠者が歸りました。▲シテ やあ、太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者、戻つたか〱。▲冠者 ござりまする〱。▲シテ 戻つたか。
▲冠者 只今歸りました。▲シテ やれ〱、骨折や〱。何と、新座の者抱へて來たか。▲冠者 なるほど、抱へて參りました。▲シテ どこもとに居るぞ。▲冠者 御門外に待たせておきました。▲シテ それなら、物は初からが大事ぢや。彼奴が聞く樣に、過を云はうほどに、汝は色々に答へ。▲冠者 畏つてござる。▲シテ やい〱、太郎冠者居るか。▲冠者 はあ。▲シテ 床几を持つて來い。▲冠者 畏つてござる。お床几でござる。▲シテ 何と、今の聲を聞かうなあ。
▲冠者 なか〱、承りましよ。▲シテ それなら、あれへ行て云はうは、賴うだ人、只今廣間へ出られた。あれへ出て目見えをしやれ、お目に入つたら、そのまゝ御見參であろ、

肝入つて―世話をして

よからう者が參つたら、抱へて參らうと存ずる。まことに、只今までは、某一人で、殊の外苦勞いたしてござるが、新座のものが參つたらば、樂を致すでござらう。參る程にこれが街道ぢや。まづこの所に待つて居やうと存ずる。▲取手 罷出でたる者は、東國方の者でござる。某、今に上方を見物致さぬ程に、この度都へ上り、見物いたし、また好ささうな所もあらば、奉公致さうと存ずる。まづ、そろ〱參らう。まことに人々の仰せらるゝは、若い時旅をせねば、老いての物語が無いと申さるゝによつて、俄に思ひ立つてござる。▲冠者 やあ、似合しい者が參つた。言葉をかけて見やう。なう〱、これ〱。▲取手 こちのことか。何事でござる。▲冠者 そなたは、どれからどこへ行く人ぞ。▲取手 私は奉公が望で、都へ上ります。▲冠者 それは幸ぢや。身共の頼うだ人は大名ぢや。これへ肝入つて出してやろ。▲取手 それは忝うござる。御肝入られて下され。▲冠者 その義なら、只今同道いたさう。さあ〱、をりやれ〱。▲取手 參ります。▲冠者 なう〱、何と其方に藝は無いか。▲取手 されば、かやうのものも藝になりましよか。▲冠者 何でをりやる。

くわつと―ずつと
勝手―勝手元の所

程置いてよかろ。▲冠者 されば、何程がようござりましよぞ。▲シテ やあ、千人ほどおかう。▲冠者 それは大分の人でござる。置所がござるまい。▲シテ いや、廣い野山へ、追ひ放して置かうまで。▲冠者 なか〳〵、野山において奉公はいたしませぬ。▲シテ それなら、くわつと減さう。物ほど置かう。▲冠者 何程でござる。▲シテ 五十ほど置かう。▲冠者 それでも、勝手の堪忍がつゞきますまい。▲シテ 堪忍と云ふは、食物のことか。▲冠者 なか〳〵、さやうでござる。▲シテ 深山にある水を飲ましておけ。▲冠者 いや〳〵、水など食べましては、御奉公は致しませぬ。▲シテ それなら、これも、もそつと減さう。づんと減して二人おかう。▲冠者 とてものことに、も一人減したら好うござろ。▲シテ いや〳〵、汝ともに二人ぢや。▲冠者 すれば、新座者は一人でござる。▲シテ なか〳〵、さうぢや。▲冠者 これが一段ようござりましよ。▲シテ その義なら、汝は上下の街道へ行て、好ささうな者が來たらば、抱へて來い。▲冠者 畏つてござる。▲シテ もはや行くか。▲冠者 かう參ります。▲シテ やがて戻れ。▲冠者 はあ。▲シテ えい。▲冠者 はあ。やれ〳〵、急な事を申しつけられた。まづ街道へ參り、

新座の者―新参者



二文相撲

三人　シテ　素襖、烏帽子、小さ刀
　　　二人　半上下、腰帯

▲シテ　舞中にて名乗る。八幡大名です。かやうに過は申せども、使ふ者は只一人。一人にては人が使ひ足らぬほどに、新座の者を大分抱へうと存ずる。まづ、太郎冠者を呼び出して申しつけう。やい〳〵、太郎冠者居るか。▲冠者　はあ。▲シテ　居たか。▲冠者　御前に居ります。▲シテ　念なう早かつた。汝を呼び出すこと、別の事でない。汝一人では、人が使ひ足らぬ。新座の奉公人を大分抱へうと思ふが、何と好かろか。▲冠者　これは、なか〳〵好うございましよ。▲シテ　何

はいるまい。つうと内へ持ちこめ。げにもさあり、やよ、げにもさうよの、〳〵。

三本の柱云々ー曲がかり　げにも云々ー囃詞也

ひ出した。しやうがあるぞ。身共次第にしやれ。（こゝにて柱を×かくのごとく置きて、）さあ〳〵、この角々を、これへ寄つて擔ぎやれ。それでは一人して、二本づゝになるわ。▲二人 まことにさうぢや。いざ擔げて參らう。▲太郎 これはよいわ。なう〳〵、何と思やるぞ。これは頼うだ人が、われ〳〵が智慧を試さうと思うて、云ひ付けられたものであらう。▲二人 さうでをりやろ。▲太郎 何と、めでたい折柄ぢや。いざ、とてものことに、囃子物して歸らう。▲二人 一段よかろ。「何と云うて囃す。▲太郎 とかく知れた通に、三本の柱を三人の者どもが、二本づつ、持つたり〳〵や持つたりと、云うて囃さう。▲二人 これは一段よからう。さあさあ、囃しやれ、〳〵。▲三人 三本の柱を三人の者共が、二本づゝ持つたり。これ〳〵御覽候へ。げにもさあり、やよ、げにもさうよの、〳〵。▲シテ これはいかなこと。三人の者共が、智慧を見やうと思うて、云ひ付けたれば、囃物して歸つた。出ずばなるまい。▲シテ 詞 如何にや〳〵、太郎冠者、三人ともによう聞け。三本の柱を三人の者共に、二本づゝ持てとは、智慧のほどを見んため。▲三人 持つたりや、〳〵。げにもさあり。▲シテ 何かの事

わごりよだち―そなたたち

身共次第―自分の考通りに任せよとなり

ちへをりやれ、〳〵。▲二人 心得た。▲太郎 何と思はしますぞ。頼うだ御方は、御身代はよし、御子息達は持たせられ、この如くに、材木の出る山まである事なれば、果報な、めでたい御方ではないか。▲二人 なか〳〵、おしやる通でをりやる。▲太郎 やあ、何かと申すうちに、これが山ぢや。何所もとに材木があるぞ。▲次郎 されば、何所にあるぞ。三郎冠者も見さしませ。▲三郎 心得てをりやる。▲太郎 やあ、是にあるわ。▲二人 まことに爰にあるわ。▲太郎 さあ〳〵、擔げて歸らう。わごりよだちも持たしませ。▲二人 心得てをりやる。▲太郎 やあ、まづ待たしませ、〳〵。▲二人 何事ぢや。▲太郎 いや〳〵、ちと樣子がある。下に置きやれ。▲二人 心得た。▲太郎 まことに失念したことがある。頼うだ人の仰せらるゝは、三本ある柱を、三人の者どもに、一人して二本づゝ持つて來いと、仰せられたではないか。▲二人 まことにさうでをりやる。うつかりと心得た。どうしたものであらう。▲次郎 しやうがあるぞ。身共次第にしやれ。さあ〳〵、これへ寄つて擔ぎやれ〳〵。▲太郎 いやいや、これではない。まづ下に置きやれ。何としたらば、二本づゝ持たれうぞ。やあ、思

頼うだ人—原本「頼う人」に作る

▲太郎—此形の重複せるは、詞と詞との間に所作あればなるべし

畏つてござる。なう〳〵、次郎冠者、三郎冠者、をりやるか。▲二人 なか〳〵、これに居るわ。何事ぞ。▲太郎 頼うだ人の召すわ。をりやれ。▲二人 心得た。▲三人 三人ともに、御前に詰めましてござる。▲シテ 念なう早かつた。汝等を呼び出すこと、別の事でない。汝等も、この間は、精をいだして働いたによつて、某の普請が、思ふ樣に出來すまして、これほど嬉しい事はない。嘸汝等も、この間は草臥れたであらう。▲太郎 御意なされます通、思召すまゝに御普請が出來まして、われ〳〵も喜ばしう存じます。▲シテ まづはめでたいなあ。▲三人 左樣でござります。▲シテ それにつき、又銀藏を建てうと思うて、木を見立てて、山に三本伐らせて置いたほどに、汝等三人行て取つて來い。▲三人 畏つてござる。▲シテ 山へ行たらば、三本ある木を、汝等三人して、一本宛持つて來い。▲三人 畏つてござる。▲シテ 最早行くか。▲三人 參ります。▲シテ 行たらば早う取つて來い。▲三人 はあ。▲シテ えい。▲三人 はあ。▲太郎 なう〳〵。何と思やるぞ。頼うだ御方は、何事もわつさりとして、御奉公が致しよいの。▲太郎 いざ山へいて、材木を取つて來う。▲二人 なか〳〵、參らう。▲太郎 こ

狂言記拾遺

巻之一

一　三本柱

シテ　素袍、烏帽子、小さ刀
四人　冠者　半上下、腰帯
二人　半上下、腰帯

▲シテ大名　眞中にて名乘る。　此邊に隱れない大名。某、頃日、思ふまゝに普請の致して、悉く出來すました。これほど嬉しいことはござらぬ。それにつき、まだ銀藏を建てうと思うて、材木を見立てて、山に三本伐らせて置いた。のさ者共を呼び出し、今日は、取りに遣さうと存ずる。やい〳〵、太郎冠者、あるかやい。▲太郎　はあ、御前に居ります。▲シテ　汝を呼び出すこと、別の事でない。ちと云ひ付くる事がある。次郎冠者、三郎冠者も呼べ。▲太郎

のさ者―のさばり者我儘者也

巻之三

巻之四

巻之五

狂言記外篇

卷之一

卷之二

卷之四

卷之五

狂言記下 目錄

狂言記拾遺

卷之一

卷之二

卷之三

狂言記 下

